

読谷村民話資料集 2

喜名の民話

沖縄県 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編

あいせつ

読谷村長 山内徳信

このたび読谷村民話資料第二集が発刊されました。これは第一集「伊良皆の民話」につづくもので、字喜名で採話した一一三話を集録したものであります。

民話は、私達沖縄の先祖が、何代も語り伝えてきた民衆の文化遺産であります。この本の中に採録されている民話（昔話）を読む時、われわれは先祖の素朴で純真な心や、説話、教訓、社会の規律、規範に触れ、郷愁にもにた沖縄の心に接することができるのであります。それは、遠い祖先との対話の回復であり、あすに生きる人間のともしびとなり、勇気ともなるのであります。同時に、ふるさとへの愛着の情を抱かせるものであります。

人間教育の中で、ふるさとを教えることは大変重要なことで、このような民話集が、家庭教育、学校教育、社会教育の中で素材として活用され、子供達や青少年の心の糧となり、新しい文化創造への基になりますよう期待するものであります。

古きを伝え得るのはお年寄りであります。老人の昔を語る話しの中に、新しい文化への土台があるのです。お年寄りの皆さんが話者として語つて下さったおかげで、こんな立派な本ができたのであります。世はまさに地方の時代と云われており、次ぎ次ぎと発刊されていく民話集が「読谷ルネッサンス」を造りあげ、地方文化発展の起因になることを願うものであります。村民の歩いたあとが道になり、その道が文化となります。村民は道を拓き、文化を創造するために、今後も歩み続けることが大切であります。

最後に、今度の民話集発刊に当り、御指導を賜りました沖国大の遠藤庄治先生をはじめ、読谷ゆうがおの会の皆さん、歴史民俗資料館を中心に教育委員会の皆さん等、関係者の民俗学に対する情熱と深い理解と努力の結晶によつて出来あがつたものであります。心から敬意と感謝の意を表し挨拶と致します。

あいさつ

教育長 新崎盛繁

先人が遺してくれた文化財を大切に保存し、之を次代へ伝承していくことは、現代に生きる者へ課された務めであります。先人たちは永い歴史といろいろな環境の中で當々と育み受継いで参りました。現代は、生活様も大きく変わり、物質文明のあたりでともすれば人間性までが失われようとしている世相でありますが、我が村では村立歴史民俗資料館を中心に村民のあたたかい支えによつて多くの有形無形の文化財が守られ人々との心のきずなを深くして いますことは誠に慶びに堪えません。

ここに読谷村民話資料集第二集「喜名の民話」が発刊されるに当り、翻字等でご苦労いただいた「ゆうがおの会」の各位に深く感謝と敬意を表する次第であります。本書は昭和五十一年十月に字喜名の方々の協力で得られた百十三話が集録されました。採話に当つてご尽力いただいた字行政担当者をはじめ、古老の話者の方々、村内外の口承文芸民話グループ、御指導いただいた沖国大の遠藤庄治先生に改めて感謝を申し上げます。

現代社会は、めまぐるしく變つて人々の心もマスコミの刺戟の洪水におし流されようとしております。人間性の回復が求められ、主体的能動的に自らを確立することが望まれております。その為には、「心の安らぎと落ち着きを見いだすことができる場がなければなりません。あたたかい心のつながりのある人間関係、生活の場をもつことは現代人への強い要求であります。近年真に心のふれあえる場、人間として生きぬく基盤としての「ふるさと」をとり戻すことが叫ばれ人間同志の心のつながり連帯感が求められております。伝統や民話が人間味あふれる素材として純真な心が、親と子、老人と若者との心のふれあいによつて美しい夢となり人々の「魂」を育んでくれることを思うと、本書が広くふるさとへの心の接点として活かされることを望んでやみません。

序

館長名嘉真宜勝

読谷村は、那覇市より北へ三五キロメートルの距離にあり、本島の中央部で東支那海へ突出した半島を成す地域である。人口二六、六〇一人（男一三、一五四、女一三、四四七）、戸数六、〇一一戸（昭和五五年三月末現在）、面積三四・四七平方キロメートルで、二二字より成る。

喜名部落は、人口二、〇二三人（男九九四、女一、〇二九）、戸数四二二戸（昭和五五年一月末現在）である。喜名は、古くは「きなわ」（『おもろさうし』一六二三年編）と表記され、その後、喜那（『琉球国高究帳』一六七三年以前）と漢字が当てられ、そして現在使用している「喜名」の漢字が用いられるようになつたのは『琉球國由來記』（一七一三年）や、『中山伝信録』（一七一九年）の頃からである。現今行政上の読み方は「キナ」であるが、方音では「チナー」である。部落の発祥については、現在の喜名部落は次の三村ミツマチから出来あがつたという。元喜名ヒヂラ、ニシンダ、シムチシムチの三ヶ村で、元喜名は東方の米軍基地内で喜名部落の発祥地だと言われている。史蹟としては、喜名焼窯跡（十七世紀頃）、喜名觀音堂、土帝君、喜名番所等がある。

本報告書に掲載した翻字話数は一一三話であるが、それは採集総話数一八七話の過半数を占めている。それらの民話資料は、いずれも九〇分録音テープ十一本に収録され保存されている。採集総話数一八七話というのは、現在喜名における民話のすべてではない。ほんの拾数分の一である。話者（伝承者）的な人々を既婚者とすると、喜名の既婚者は約千人で、一人で二、三話の民話資料を保有しているものとすると、凡そ一千ないし三千話の民話が存在することになり、採集調査だけでもかなりの領域が残されており、地域の若い学徒のなお一層の関心を訴えるものである。くり返えすようであるが、このような本が出ることによつて地域の人々が安堵する」とを一番恐れている。民話は日一日と消失して行くものであるということを今一度想起してもらいたい。

過日、筆者が読谷高等学校に在職していた頃、郷土研究に志す生徒と読谷の民話と民俗を求め歩いたことがある。それらの資料の一部は機関誌や学園祭等で発表したことがあるが、大方は未発表である。喜名部落に関する民話資料が二一話ある。内訳は、伝説一四、昔話七話である。次にその一つを紹介してみる。

カマルー坂^ば 「昔、あるところにカマルーという若い女が住んでいた。この女は大変美しく、しかも働き者で、いつも深い山奥にたきぎを取りに行っていた。ある日、そこでふと若い男に出会った。じつはこの男はうすバカで、カマルーを見るようになつてからだんだん好きになり、ある日、このうすバカな男は美しいカマルーに妻になつてくれとせがんだ。すると、この男がバカであると分るカマルーは、「あなたがクバガサを作つてくれたら妻になつてあげましょ」と返答をした。この男は、カマルーの言葉を本気に思い無心にクバガサを作つた。その頃カマルーは、あのうすバカの男と結婚の約束をしていたことなど遠の昔に忘れていた。そうしてある日、この男はカマルーがいつも通る坂でクバガサを手に持つて待つていた。「クバガサを作つて来たから、約束どおり結婚しよう。」と言つた。するとカマルーは、このうすバカが作れるはずがないと思つていたクバガサを作つて來たのでびっくりし、あわてて前の約束を弁解した。ところがカマルーを信じきっているこの男、ぜんぜんうそということを本気にしない。バカでもしつこく言えば分るもの、この男激怒した。カマルーが許してくれと頼んでも受け入れてくれない。反対に殺してやると、カマを持つて追つて來た。カマルーは死にもぐるいで逃げ出したが、いつもたきぎをとる時に通る坂でこの男につかりカマで殺された。その時以来、この坂は「カマルー坂^ば」と呼ばれ、恐れられている。」（宮平洋子・照屋恵子・昭和四七年二月、採集。話者両親）。この伝説に出てくるカマルー坂は、喜名の東方、エークビリから福地原に下りて行くところにあり、現在は米軍弾薬基地となつていている。

以上を記して序とする。

昭和五五年三月三日

目 次

あいさつ 読谷村長山内徳信
序 読谷村教育長新崎盛繁
序 館長名嘉真宜勝

第一編 翻字資料

（動物昔話）

1 クラーとカンジュヤー	松田	ウト	1	12 鬼餅由来	松田	ウト	16
2 クラーとカーラカンジュヤー	阿嘉	ヨシ	2	13 鬼餅由来	翁長	ウト	18
3 クラーとカーラピンピナー	松田	ナエ	3	14 クスクエー由来	松田	ミヨ	20
4 クラーとカンジュヤー	松田	ミヨ	5	15 クスクエー由来	金子	マツ	22
5 親不孝なアタビチャー	金子	マツ	7	16 豚小マジムン	玉城	ヨシ	24
6 紺屋鳥	松田	栄清	8	17 美女に化けた豚	松田	栄清	25
7 猿の赤尻	松田	ナエ	9	18 狸の話	松田	ウト	27
8 米喰えークラーの酒発見	松田	栄清	10	19 キジムナー友達	松田	栄清	27
9 十二支由来	松田	栄清	12	20 キジムナー友達	松田	ウト	29
10 蟻と鳥	松田	ウト	14	21 キジムナー友達	吉田新太郎	ミヨ	30
（本格昔話）				22 ハブの昇天	松田	ミヨ	32
11 萱蒲節句由来	松田	ウト	15	23 ものの言う牛	吉田新太郎	ミヨ	34
24 アカマターとハマウリ	渡嘉敷兼求		46	24 アカマターとハマウリ	吉田新太郎	ミヨ	34

25	カマンタとアカマター	松田	ウト	49
26	アカマターにだまされた女	松田	ミヨ	50
27	二月三日浜下り由来	松田	栄清	52
28	ショウジョウにさらわれた女	渡嘉敷兼求	54	
29	子育て幽霊	宇江城ヤス	57	
30	後生戻い	渡嘉敷兼求	59	
31	炭焼長者	松田	ナエ	60
32	トーカチ由来	宇根	良誘	62
33	子供の寿命	松田	ナエ	65
34	火の神報恩	松田	ミヨ	68
35	真玉橋の人柱	松田	ナエ	72
36	夫婦の赤い糸	宇根	良誘	75
37	お盆の由来	宇根	良誘	78
38	継子の麦搗き	松田	ウト	81
39	継子と二葉草	松田	ウト	82
40	継子の機織りと二葉草	松田	ウト	83
41	菊酒由来	宇根	良誘	85
42	若水由来	松田	マツ	88
43	猿長者	金子	マツ	89
44	大年の宝	吉田	ツル	91

45	トウシトウイタ飯	玉城	ヨシ	93
46	男の友情	翁長	ウト	94
	（笑話）			
47	渡嘉敷ペーク(1)	渡嘉敷兼求	96	
48	渡嘉敷ペーク(2)	渡嘉敷兼求	99	
49	渡嘉敷ペーク(3)	渡嘉敷兼求	102	
50	蛸か化物か	松田	ミヨ	105
51	姥捨山	比嘉	ウト	107
52	モーイ親方と煙草	松田	ミヨ	109
53	モーイ親方と龜	松田	ウト	110
54	モーイ親方とかせかけ着物	松田	ウト	112
55	モーイ親方と殿様の難題	松田	ミヨ	113
56	話に葉なし	松田	ミヨ	116
57	「ウー」という言葉の使い分け	松田	栄清	118
58	屁ひり嫁	松田	ウト	120
59	山原と団龜	吉田	ツル	121
60	唐船ドーエ	比嘉	正貞	122
	（伝説）			
61	人間の始まり	松田	ウト	125
62	稻作の始まり	松田	ウト	126

63 嘉津宇岳の由来	吉田新太郎	127																
64 楚辺クラガーの由来	比嘉 ウト	129																
65 美人の生まれる井戸	吉田新太郎	130																
66 屋良ムルチ（鰻退治）	松田 ウト	132																
67 屋良ムルチの生贊	吉田 ツル	133																
68 普天間権現	松田 ミヨ	134																
69 シバサシ由来	金子 マツ	138																
70 マンサンスージの話	金子 マツ	139																
71 打ち紙由来	宇根 良誘	140																
72 念仏者の始まり	渡嘉敷兼求	143																
73 お茶一杯	松田 ウト	148																
74 「サングワナー」の始まり	松田 栄清	148																
75 尚巴志と喜名	松田 ナエ	154																
76 喜名觀音堂の由来	松田 栄清	161																
77 アカヌクーの話	松田 栄清	165																
78 察度王の話	松田 栄清	168																
79 平田・屋比久と尚巴志王	松田 栄清	177																
80 阿麻和利の話	吉田 ツル	177																
81 チョーフグン親方	松田 栄清	186																
82 幸地親方の話	渡嘉敷兼求	192																
195	192	186	177	168	165	161	154	148	148	143	140	139	138	134	133	132	130	129

83 殷元良と自了	吉田新太郎	198
84 ウンタマギルーとアンダクエーボージャー	松田 ミヨ	203
85 吉屋チルー	謝花 良仁	204
86 坊主御主の国めぐり	松田 栄清	206
87 坊主御主と粟	高良 政信	212
88 坊主御主とタカハンジャ一	比嘉 正貞	213
89 坊主御主と夕顔	吉田新太郎	215
90 坊主御主の相撲	松田 ウト	216
91 坊主御主の話	吉田 ツル	218
92 坊主御主の話	吉田新太郎	219
93 坊主御主とカンダバーズーネー	吉田新太郎	220
94 坊主御主と城間仲	吉田新太郎	222
95 城間仲	比嘉 ウト	224
96 坊主御主と翁長真鶴	比嘉 正貞	226
97 美女翁長マジルと喜名親方	渡嘉敷兼求	230
98 翁長真鶴	松田 ミヨ	234
99 翁長マジルの話	吉田 ツル	237
100 トンドンモーシー	松田 ウト	240
101 死刑になつた捷(I)	比嘉 正貞	241
102 死刑になつた捷(II)	比嘉 正貞	244

103 多幸山フェーレーと喜名タカハンジャー・比嘉	正貞	247
104 多幸山フェーレーとタカハンジャー・比嘉	正貞	250
105 多幸山フェーレーと喜名番所	松田 ナエ	251
106 喜名番所と多幸山フェーレー・喜友名正謹	253	
107 多幸山フェーレー	松田 ナエ	254
108 久良波首里殿内	比嘉 正貞	255
109 久良波首里殿内	松田 ミヨ	256
110 比屋根岬のマジムン	花城 景孝	258
111 煙草の歌	松田 ウト	259
〈歌謡〉		
112 新築祝の歌	小橋川恭蒲	260
113 新築祝の歌	吉田新太郎	261

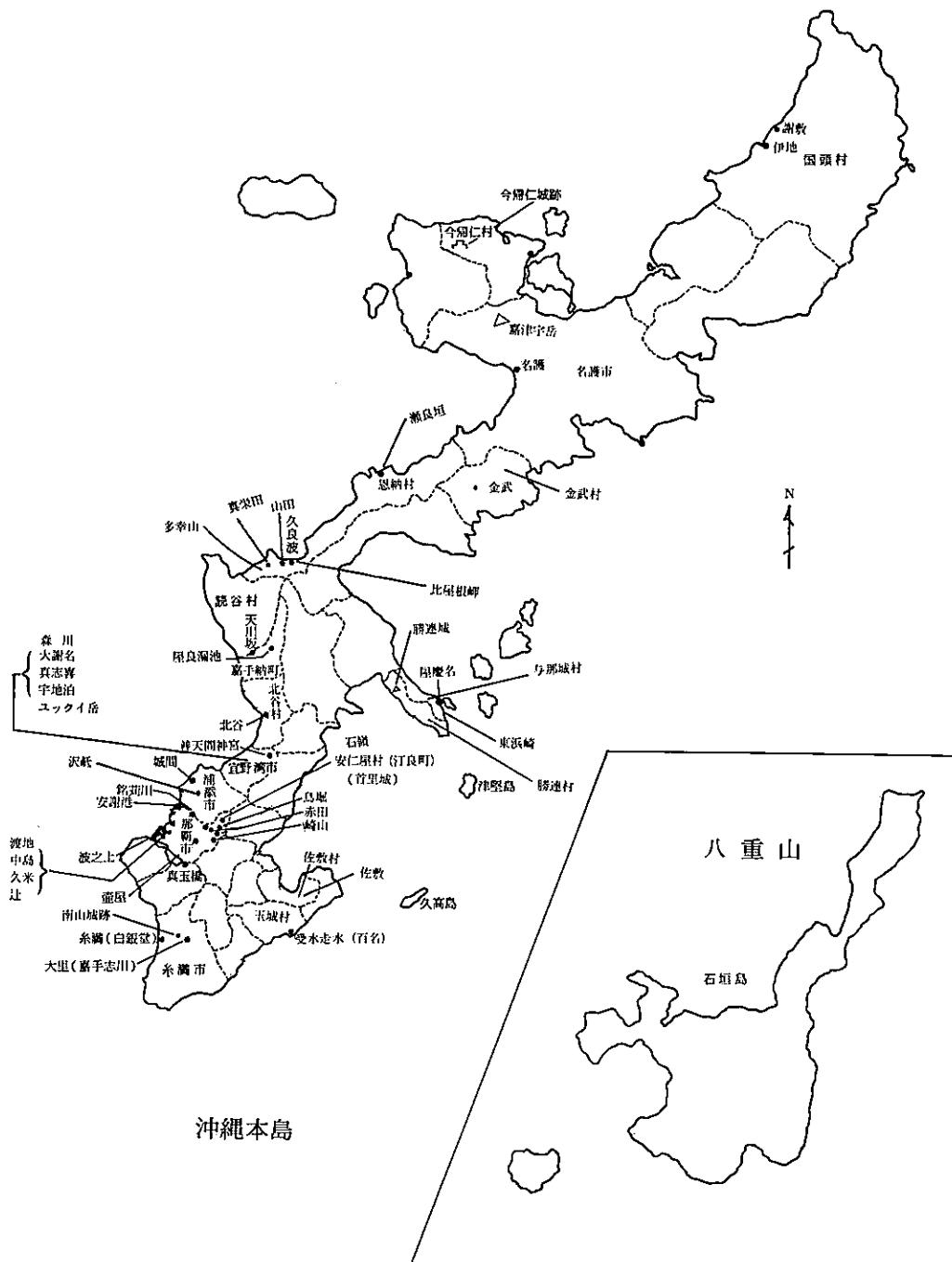
第二編 解説・資料

話者別一覧表		
話型別梗概一覧表		
喜名の民話	遠 藤 庄 治	276
喜名の民俗素描	276	263
参考文献・翻字者 調査者名簿	名嘉真 宜 勝	316
編集後記	326	
写真・図版目次	327	
喜名番所風景	普天間権現	137
伝説地名地図(沖縄県)	芭蕉の木	137
伝説地名地図(読谷村)	森川	176
喜名民俗地図	尚巴志の墓	185
屋良漏池	平田子の墓	191
	紫微鑾駕	202
	勝連城跡	191
	中城城跡	191
	自了筆の絵	191
133 赤犬子歌碑	164	168
168	168	168
185 屋比久子の墓	185	185
262	185	185



写真(1) 喜名畠所風景 1853年ペリー提督来島のおり隨行の画家ハイネ氏によって描かれたもの
(外間政幸英沢「ペリー提督、沖縄訪問記」昭和50年2月138頁より引用)

【喜名の民話集】伝説地名地図



【喜名の民話集】地名地図（読谷村全図）

縮尺 1 : 30,000

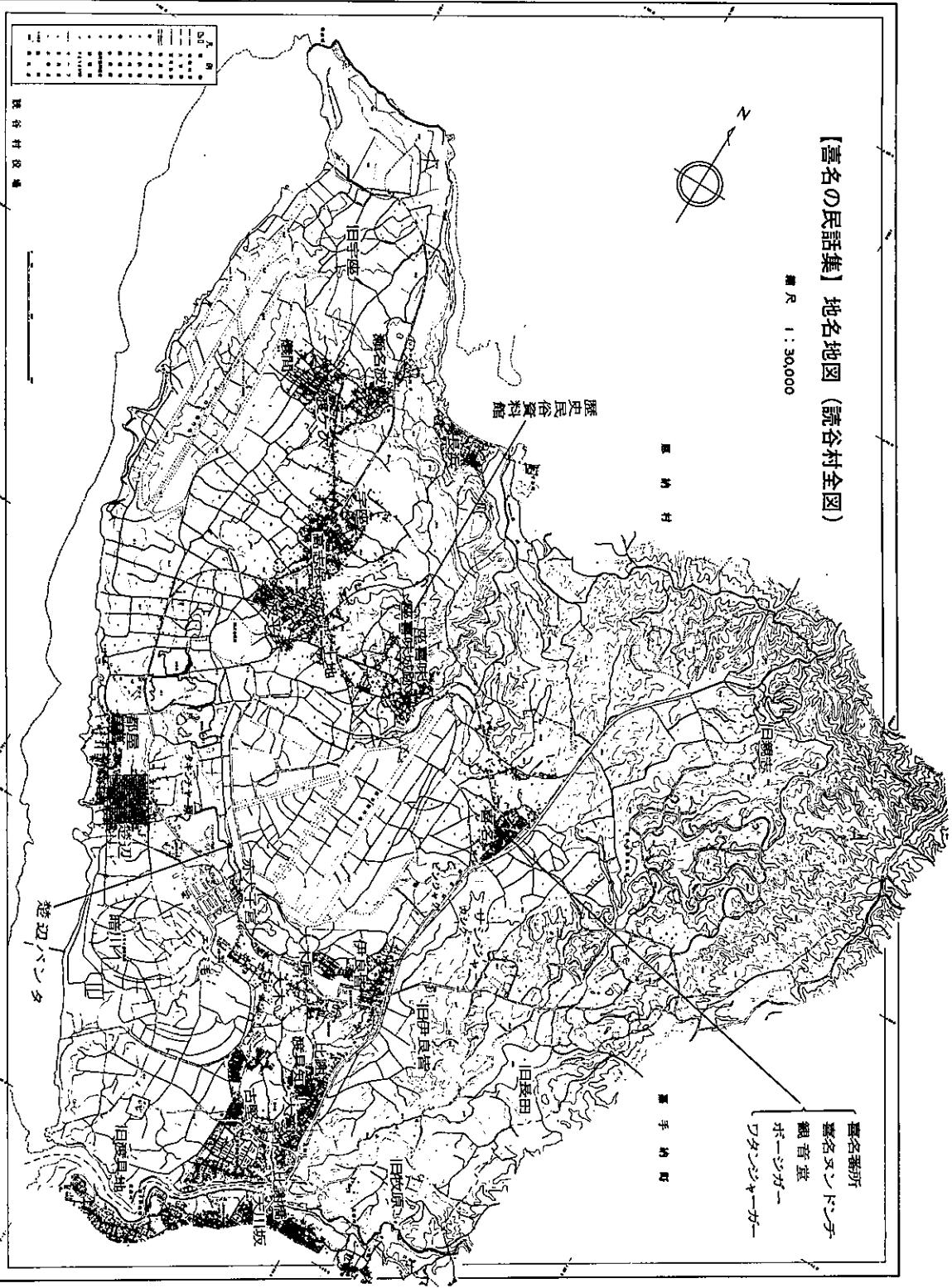


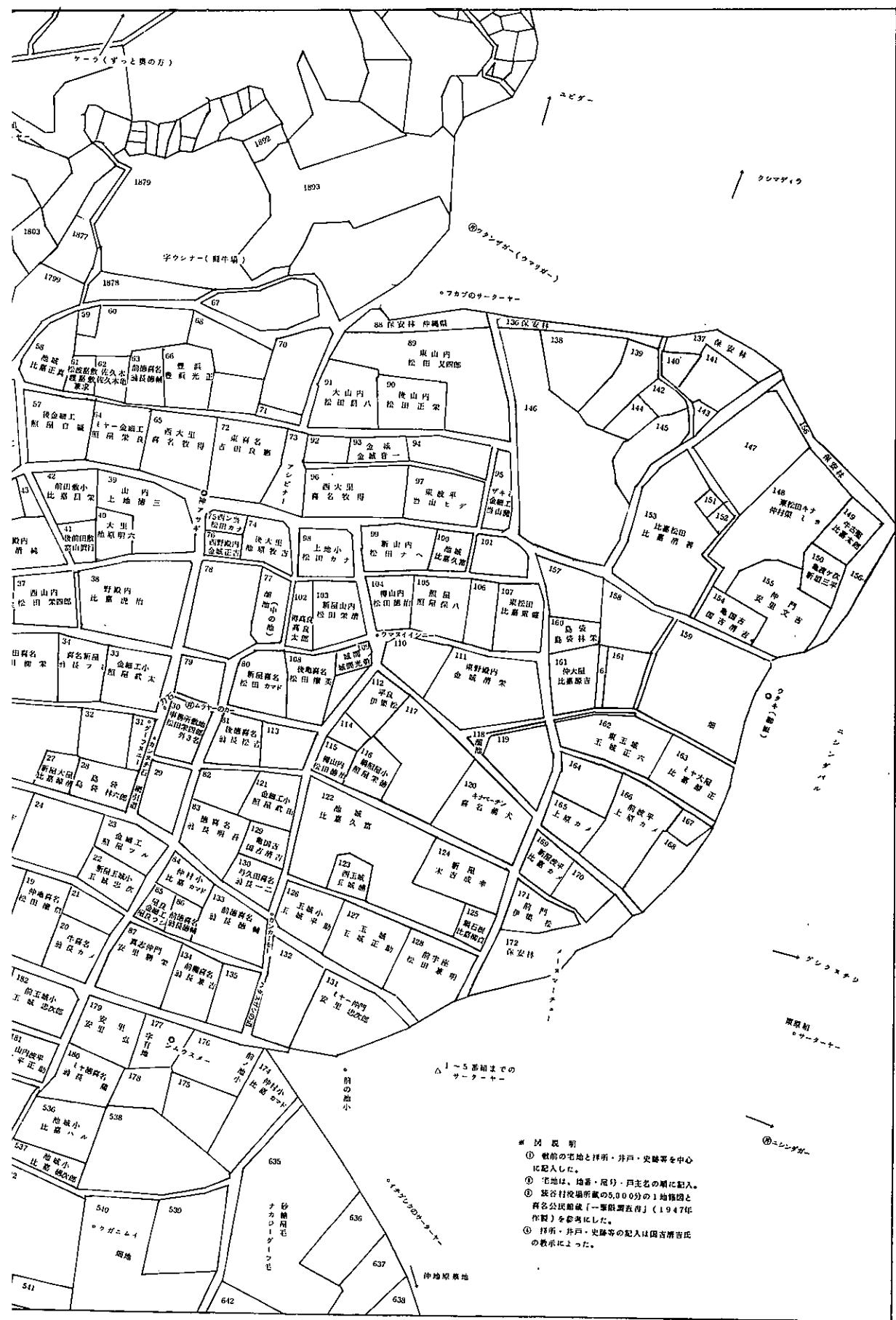
風納村

日隈

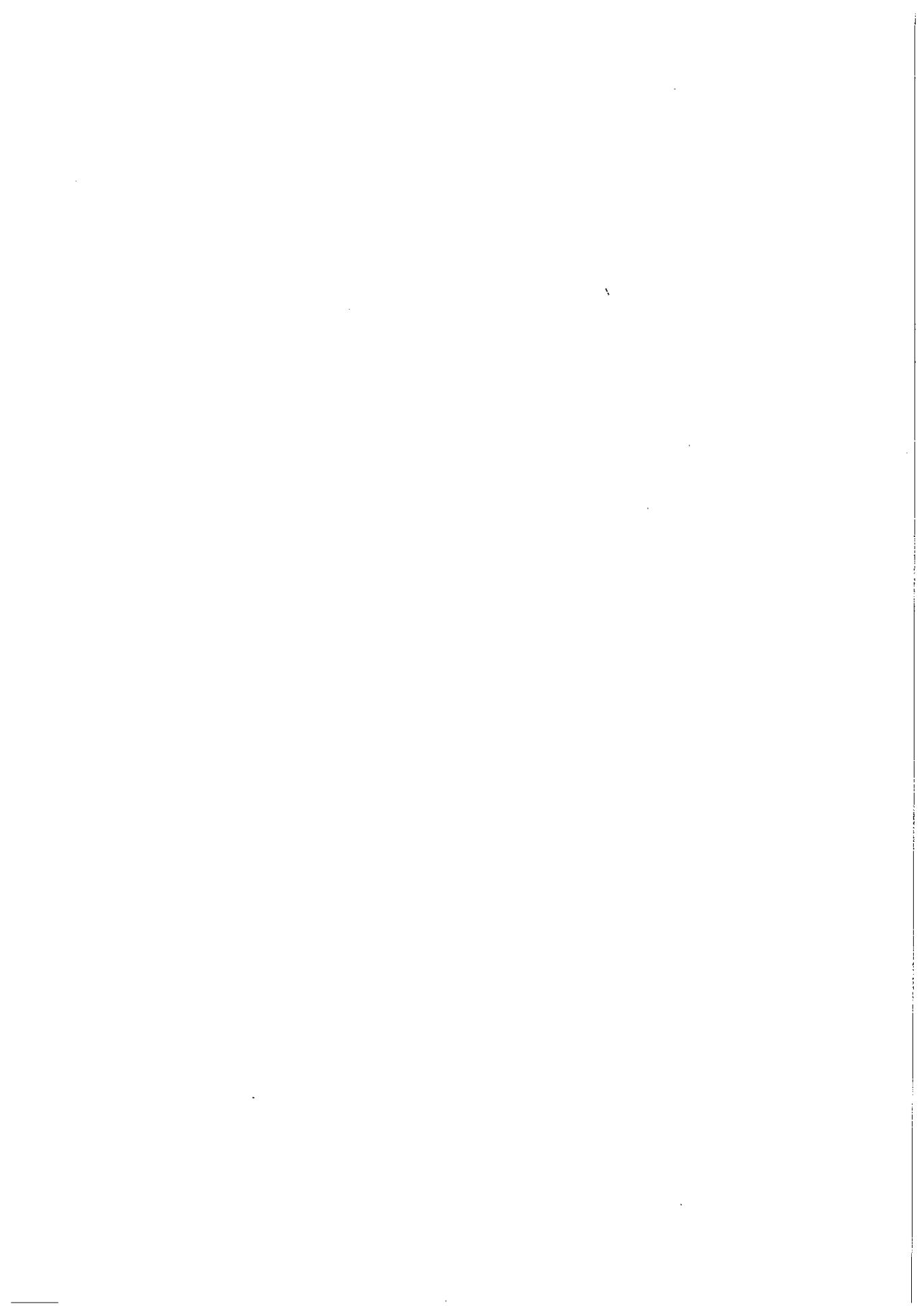
喜手納町

喜名署所
喜名ヌンドンチ
靴音堂
ボーンガーブ
ワターンシャーカー









第一編 翻字資料



一、翻字対象話の選定基準

- ①昔話（動物昔話、本格昔話、笑話）、伝説を翻字対象とした。
- ②聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
- ③類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
- ④方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。

二、翻字について

- ①語りに忠実に翻字することを原則とした。
- ②語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
- ③話者が、くり返し話している部分や、聞き手に念をおしている部分も翻字した。
- ④話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により、適宜句読点を打つた。また、話の展開に従つて適宜段落を設けた。
- ⑤語り手自身が、訂正したところや、補足的に説明しているところはそのまま翻字し、△で示した。

三、方言表記について

- ①表記は漢字仮名混り文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。
 - ②民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。また、漢字で表記できる場合でも敢て片仮名表記した語彙もある。
 - ③引き音（のばす音）はーで表わした。但し、①引き音に助詞（へは、しが、もの、へを、へに等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表わした。②引き音に送り仮名が含まれている場合は、送り仮名の部分を大文字で表わした。
- 例①片足かたづあうたびてーん（片足は授かつた） 例②連つれおていちえーぐとう（連れてきたんだ）

四、対訳について

- ①方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。但し、共通語翻字は対訳しなかった。
- ②対訳は方言翻字に忠実に行ない、できるだけ意訳をさけた。また、勝手な付加や削除はしなかつた。
- ③難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ④対訳上、補足説明の必要な箇所には（）を付して補なつた。
- ⑤方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

五、本文について

①上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

②話の初めには題名、話者名、話者の生年月日、翻字者名を明記し、話の終りに採訪年月日、調査団名、採訪者名、を明記した。

題名は「日本昔話名集」（柳田國男監修）、「日本昔話集成」（関敬吾著）によつたのもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

③語りの中の会話部分（文脈上、会話と判断される部分も含む）や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかつた。

④歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

六、注記について

①人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で補える分については省略した。

②難解語句、意味不明な語句等は注記したうえ、できるだけ翻字者の判断を示しておいた。

③地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。

④語りの中の歌については、注記してできるだけ解釈をほどこした。

⑤注記は、できるだけ読谷村喜名の民俗を中心にして行なつたが、中には文献を参考にしたものもある。参考文献はまとめて示した。

注記は編集者（名嘉真・知花）が担当した。

クラーとカンジュヤー

話者 松田ウト（明治三四年七月）〇日生

翻字 知花孝子

今、けー亡すくとう、来んりちしちやぐとう、雀小
や、フクター着ちよーていん、親ぬ顔あ見でいわるや
るんち、雀やフクター着ちよーしぇーやー。雀小やう
ぬ服着ちよーてい、雀小や行ぢえーるふーじ。

あんさぐとう、また、カーラカンジュヤーや、私ね
ー美着物着ちからる親ぬ前かい行ちゆるんち言ちやく
とう。親ぬ亡しがたーなでいからカンジュヤーや來く
とう、雀んかいややー、「いやー、倉ぬ米くわていて
ていよー。いやー川あがちし物お食よー」んりち親
ぬ遺言やみしえーたんり。

あんしょ、カンジュヤーや美着物着ちよーしぇーや
ー、美さしえーやー。雀小やまたフクター着ち来るむ
ん、ちょーどうフクターとう同むん、なんじゅ美さー
ねーんしえー。

今すぐに死ぬかも知れないから（家に）来るよう
にいわれて、雀は、フクター（ボロ着）を着ていても、
親の顔は見なくてはと、ボロを着たままで飛んで帰つ
た。

それから、また、カーラカンジュヤー（川蟬）は、
私は綺麗な着物を着てから親の前には行くんだと言つ
た。（川蟬はおしゃれな鳥として知られている）それ
で、親が死にそうになつてから川蟬はやつて來た。（
すると親が）雀に、「お前は（親孝行だから）米倉で
育ちなさい。お前（川蟬）は（親不孝だから）川端を
歩いて食べなさい」と親は遺言を残したそうだ。

それで、川蟬は美しい小鳥だが、雀はボロを着て急
いで來たために、ちょうどボロを着ているのと同じに
見え、あまり美しくない小鳥になつてしまつた。

2 クラ一とカラカンジユヤ一

話者 阿嘉ヨシ(大正元年九月一〇日生)

翻字 阿波根初美

アンマーがやー、あぬ、死にがたー、けー亡しがたーなたくとう、くぬ、カラカンジユヤーとうクラ一とう居しがやー、くぬカラ一や、アンマーが亡しがたーねー、しぐ蓑笠ふーじー着ちやーにへあれー蓑笠んかい似ちょーせーやー、うり着やーに、しぐ走えーし親ぬにぬの一間にあーてい。

くぬカラカンジユヤーでいせー、またハイカラしハイカラし行ちゆる間あ、お母さのーもー亡くなつたそうだ。これで、カラカンジユヤーや親ぬ不孝、カラ一や親ぬ孝行んでい。うぬふーじー理由。

へあのクラーと言うのはちよつと蓑笠つけたよーでしょー、あんぐとうーやぐとうるあん言ちやる苦どー。あれー間にあーたんでいぐとう。

お母さんがねー、あの、死にそう、亡くなりそうになつたので、この、カラカンジユヤー(川蟬)とクラー(雀)とが居るがね、このクラーの方は、お母さんが亡くなりそうになつたとき、すぐに蓑笠のようなのを着てへあれは蓑笠に似ているでしょー、それを着けて、すぐに走つていつて親の死に目にあつた。

このカラカンジユヤーというのは、またハイカラをしてハイカラして行く間には、お母さんはもう亡くなつたそうだ。それで、カラカンジユヤーは親不孝者、クラーは親孝行者というそうだ。そのようなわけだよ。

へあのクラーというのは蓑笠をつけているようでしょー。あんぐとうーやぐとうるあん言ちやる苦どー。(親の死に目に)間にあつたそだだから。

クラーとカーラビンピナー

著者 松田ナエ（明治三十一年四月二二日生）

翻字 神谷初子

うぬ、カーラビンピナーんでいぬ美らー。あぬー、
「水汲り来よー」んでいねー潮汲りち、反対に、今度
お「潮汲り来よー」んでいねー水汲りち。

あんすぐとうなー、自分ぬ病氣するばー、くれーな

ー、「私が言ちきーしぇー、むる反対どうそーてーる
むん、川端んかい埋みりよーんでい言ねー、えー、陸
地んかい立派埋すりよーんでい言ねー川端んかい、う
りがー埋すいくと、川端んかい埋すりよーんでい言
ねー、陸地んかい埋するはじやくと。」んち。

うぬ人おなー、うりが正直守とーんでー思ん、川端
んかい埋すりよー。んでい言みそーちゃぐと。生ちち
よーにんちょーあんし反対に、「水汲り来」んでいね
ー潮汲りち、何どーにんでーむる反対にしぇーるむん
なーうぬ人お失ないるむんでいち、川端んかい埋すり
わるやるんち、川端んかい埋すたんでい。

あの、カーラビンピナーという美しい鳥だがね、（
親が）「水汲んで来なさい」と言えば潮水を汲んで來
て、今度は反対に、「潮水汲んで來い」と言えば水を
汲んできた。

そんな時に、親が病氣になつてしまつた。（親は）

「この子は私が言いつけることは全部反対のことをし
ていたから、（死んだら）川端に埋めてと言えば（陸
地に埋めるし）陸地に立派に埋めてと言えば川端に彼

は埋めるかも知れないから、（反対に）川端に埋めて
欲しいと言えば、陸地に埋めてくれる筈だ」と思った。

それで、親は今度も反対のことをすると思つて「川
端に埋めてね」と言つた。（カーラビンピナーはまた、
親が）生きている間は「水汲んでこい」と言われたら
潮を汲んできて、何でも反対のことをしてきた。もう
この人（親）を失うかも知れないから、言う通りに川
端に埋めたそうだ。

あんさぐとう、雨ぬ降りわん、川なりわん、ピンピ
ンし鳴ち歩つちやんでい。

クラー小やまた、はじめーまた話やちょーどう同む
んやさ。あぬ、けー亡ちしーにん、うぬクラー小や美
らすがいし、ハイカラし行ちゆるえーかにん、へ美や
さ、またうれー行ちゆるえーかねーなーミーワトウ
イン見だん。

あんしまたクラーやなー、亡しがたーなたぐとう、
フクターや着ち走なてい行ぢやんでい。あんすぐとう、
きれいな鳥でない、へ私達毎日来くとう私にんいつ
ペー褒みーき

あんさぐとう、親ぬ孝ひちゃーに、なーうぬ人ぬ
いやーやなー、私ミーウトウイ見だんてーぐとう。ク
ラーや米倉ぬ米食てい、いつペー御馳走しーよー。ん
ち。へ米倉いうたら米の所やろう、とー、うまやさく

外からちやーピンピンし、あれーカーラピンピナー

すると、雨が降つて川のようになると（川蟬の子
は、親が雨に流されないかと）ピンピン鳴いて歩いた
そうだ。

クラー小（雀）はまた、初めの方は（川蟬と）ちょ
うど同じだがね。あの（親が）死んだ時に、そのクラ
ー（カーラピンピンのこと、クラーは話者の語り違い）
はきれいな服装をし、ハイカラして行く間に、へまた
それがとつても美しいのね、そうこうして行く間に
親の死に目にも会えなかつた。

そして一方クラーは、（親が）死にそうになつたの
で、ボロ服を着て走つて行つたそうだ。だからきれい
な鳥ではない。へ私達の所にも毎日来るので、私も大
変かわいがつてゐるよ

そこで、ボロ服のクラーは親孝行した。それで親が
「お前（カーラピンピナー）は、私の死に目に会えな
かつたから、（親不孝者だ、川端でひもじい思いをし
なさい）（親孝行者の）クラーには、米倉の米を食べ
てうんと御馳走してね」と言つた。へ米倉というと米
を置く所でしよう」

外からいつもピンピン鳴いでいるので、カーラピン

んでい言いるばーやさ。

うりからまた、クラー やくぬ村ぬ家ぬ前から、ちや
ー良い所から歩ちゆるばーやさ。

へうまんでーんかい来ねー、おいでおいでんでい言
いんでー。』

ピナー（川蟬）と言づ。

それからまた、クラーはこの村の家々の前を、いつ
も良い所から歩いている。

へ（話者の松田ナエさんはクラーが）そこら辺に来る
時は、おいでおいでと言つてやるよ。』

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会へ知花春美、阿波根初美

・ ク ラ ー と カ ン ジ ュ ャ ー

話者 松 田 ミ ョ（明治四一年二月一日生）

翻字 島 袋 オツル

聞ちえーさんしがでー、遊小しーにわかとーせー や
ー。くぬ双児や、親ぬが死じやらやー、山んかい捨て
いらつたんていせー や。捨ていらつたぐとう、へくれ
ーよーい、昔人ぬしんせーしる聞ちやしがー、カン
ジュヤー や 美さしえー や。ハイカラし、毎日川んじ
水まにてい、自分ぬ体る見ちょーしぇー。鏡とー同む
んてー自分ぬ体見ち。

また、くぬ、クラーグワーやフクター着ちょーしぇ

聞いたことはないけれども、村芝居するので分つ
て いるで しょ う。双児の兄弟を。親が死んだのだろう
か、山に捨てられたそ うよ ね。捨てられたそ うだ が、
へ こ は ね、昔の人が話して いるのを 聞いたの だ が
カンジュヤーは 美しいで しょ う。ハイカラで、毎日の
よ うに 川に 行き、水の流れに 自分の 体を 写して 見て
いた。

また、この、クラーグワーや雀はボロを着ていた。

いやー。ありがとうございますー美きーねーんしぇー。川カンジユーさー。大変ぬ親孝行やてーるふーじ。親ぬ孝なていさぐとう、くぬ川カンジユーや、親ぬ死じやくとう、川ぬ側んかい送ていさぐとう。あいえー、流れてい行いしぇー。

くぬ、クラーグワーや親ぬ孝やくとう、水ぬ流りらん所んかい送ていさぐとう、親ぬ、「いやーや、親ぬ孝やぐとう、いちぐ倉から歩ち米とうてい食みよー」。んち、あれー、いちぐ倉からまーからん歩ち。

あんしるやんどーやーでい、言んせーてーるむん。川カンジユーや親不孝者。クラーや親孝行な者やんどー。あんしる、あれー、いちぐ米倉からまーてい歩ち食みよーりち。

あれー、くんなげーどう、今あ店ん米んかい入つちよーる、くんなげーや、箱んかい入つてい賣いてーぐとう、いちぐうぬ店から歩ち、うぬ米ちつち食いしぇーやー。

あれー、クラーグワーや親ぬ孝、川カンジユーや親不幸ぬむんやんでい。うつさる聞ちえーるむん。

カンジユーのようには美しくないので。だけれども、大変な親孝行者だつたそうである。親孝行だつたのでこの川カンジユーは、親が死ぬと川端に埋めた。氣の毒にも、流れて行つてしまふでしよう。

この、クラーグワーや親孝行なので、水の流れない所に埋葬した。それで、親が、「あなたは親孝行だから、いつも、米倉から歩いて米をとつて食べるよう」。と言われた。それで、クラーグワーやはいつも倉近くに食みよーりち。

こんなふうだと昔の人は言つていましたよ。川カンジユーは親不孝者。クラーは親孝行者とのこと。それでクラーはいつも、米倉の周囲を飛び歩いて食べるようによると。
今の時代だから米は袋詰めになつてゐるけど、ずっと以前は箱に入れて売つてゐたので、いつも店先にやつて来て、(散つた米を) クラーはつづいて食べていた。

言うなれば、クラーグワーや親孝行者、川カンジユーは親不孝者ということだそだ。これだけは聞いた

ことがある。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第八班 〔上原利津子、知花千代子、知花俊治、渡ヶ次喜美子、崎浜博子〕

親不孝なアタビチャヤー

話者 金子 マツ（明治四五年六月二十四日生）

翻字 知花孝子

昔、なー、いつペーなー親不孝ぬアタビチャヤーなて
い、ぬー言ちん親ぬ言いしとー、ちやー反対ぬ事し、
むる親びかー困らち。

昔、もう大変な親不孝のアタビチャヤー（雨蛙）がい
て、何を言つても、親の言うことと、いつも反対の事
ばかりして、親を困らせていた。

あんさぐとうなー、親ぬ、「とーくれーなー、今ぬ
とうーいそーちーねー、私達が、死にーにんうれーな
ー、何がすらわからんぐと、今うとーてい言ちよー
きわりやる。」んち、うりが丘んかい作りよーんり、言
いねーすぐ、わざつと、川端んかい行ちゆるはじや
ぐと、「私が、けー亡しーねー、私あ墓あ川端んじ
作りよー。」んり、言ちやくと。

なー又、うぬアタビチャヤー、「なー、あんしえー
一生に一度るやるむんや、親ぬ言いし、死ぬる時ぐら

そしたら、又、この雨蛙は、「もう、これは一生
に一度のことなので、親の言うことを、死ぬ時ぐらい

いやなー、親ぬ言いし、聞かんあれーならんむん。」り
ぬ気持から出じやーに、親ぬ、亡ちやぐとう、なー、
親ぬ言いし、そーふんぬ、川端んじ、墓あ作たぐとう。
あんさーに、雨降い前ないねー、うぬアタビチャー
や、ちやー、しぐなー、「私あ親ぬ墓あ流りーんどー
流りーんどー」して、心配し、ちやー、ガーケー、ガ
ークーし、鳴ちょーんり。

は、親の言いつけを聞かなければならぬ」という氣
持ちになつて、親が死んだので、親の言いつけ通り、
(雨蛙は)ほんとうに川端に墓を作つた。

それで、雨が降りそうになると、この雨蛙は、いつ
も、すぐ「私の親の墓が流れるよ、流れるよ」と、心
配して、いつも、ガーケー、ガーケーと鳴いているそ
うだよ。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第四班 (山城悦子、又吉初子、田場春美、当真久美子、島尻博光、湧川汎子)

紺屋鳥

話者 松田栄清 (明治二八年一月二〇日生)

翻字 島袋守成

ガラシえー、昔えタカぬ類やたんでい。なま時分、
飛れーちょーるタカでー。

鳥は、昔は鷹の姿だったそうだ。今頃渡る鷹みたい
に。

あんやしが、うぬ、ガラサーや、タカえかー頭おち
ちょーてーるばーてー。あんし、狩人ぬ、来やーに、
射ちゆんでいしーねー、だー、うれー、真つ白らそー
れー、分いやつさぬ、射たりーくとう。あんさーに、

そうだが、この鳥は、鷹よりも知恵があつたんでし
よう。それで、狩人が射とうとすると真白い姿なので
すぐ分り、射たれてしまうので、昔は染め物をする
には「藍」というものを使つていた。それから、この

あぬ昔々、あんぐとーる、染物すしぇー、「藍」んで
い、言いたんよ。うりから、うぬ、「藍」ぬじゆる所。
お、山うているすたさ、畑うている。あんさーに、う
まんじ、羽え染てい、黒なたくとう、木ぬ中んかいう
ーしぇーなんじゅ分らん、うりからガラサーや黒な
たんでいぬ、物語やたんでー。

「藍」を染める所は、山や畑でしてた。そうして、
そこで、羽を染めて、黒くなつて、木の中に居ると（
姿が）あまり分らないので狩人にみつからずにすんだ。
それから鳥は黒くなつたという物語りだつた。

猿の赤尻

話者 松田ナヘ（明治三〇年四月二二日生）

翻字 名嘉真 宜勝

あぬー、人だましんりがいち、人とういが行いたん
でいがら。えー、あんさーに、あんしやくとう、焼ち
えーる石ぬ上んかい座やーに、尻え赤どーんてい。
(アハハ……笑い)。うつさる分いる。

あの、人をだましにと言つて、人（の命）を取りに
行きましたとか。そこで、そういうことで、焼いてい
る石の上に座つて、尻は赤くなつたということです。

（話者の笑い声）。それだけしか分りません。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会へ知花春美、阿波根初美へ

8
米喰えークラーの酒發見

話者 松田栄清（明治二八年二月一〇日生）

翻字 島袋千代

あぬ、クラーや親孝行鳥、うりから、あぬカーラカンスヤーんでいしえー親不孝ぬ子やたんでいるばーでー。

あんさーになー、クラーや、ちやー親ぬん気入れーまた、親ぬ孝行ん子んやくとう、ちやー米倉ぬはたからチヨツチヨイ、チヨツチヨイし、米食てい大いーたんでいー。

あぬ親不孝ん子あ親とー氣ぬ合わらんどうあくとう川端んかい降りてい、チンボーラー小拾つてい食らいシラシェー小拾つてい食らいし。

あんさくとう、ぬーんちクラーや親孝行ん子でいがんち言ちやくとう、「なーお母さんが、なま、今日か明日かそーくとう、早く来」んちさくとう、あぬクラーいや着ちやるかきたーボロ着物着やーに、親ぬ見舞かい来て。さくとう、カーラカンスヤーんでいる者

あの、クラー（雀）は親孝行鳥で、それから、あのカーラカンスヤー（川蟬）は、親不孝の子だつたそうだ。

それで、クラーはいつも親のお気に入りで、また、親孝行の子だつたので、いつも米倉の処から、チヨツチヨイ、チヨツチヨイと鳴いて、米を食べて成長したそうだ。

あの親不孝のカーラカンスヤーは、親と氣も合わないでの、川端に降りてチンボーラー（カワニナ）を拾つて食べたり、シラシェー（川エビ）を拾つて食べたりしていたそうである。

それで、どうしてクラーが親孝行鳥かといつたら、「お母さんが今日か明日かの命なので、早く帰つてきなさい」といわれたので、クラーは着のみ着のままボロ服で親の見舞に来たそつだが、カーラカンスヤーは親不孝の子だから、きれいな着物をきて、身なりをきれいに

お親不孝^{おふく}ん子^ねるやくとう、美^うら着物^{きもの}着ち、あんぐと

う、すがてい行ちゆるえーだねー、親^おあミーウトウイ

しちゃんでいちょーるばーてー。

あんさーに、うぬクラー^や、あぬ、容姿^{かげ}え、カーラ
カンスヤーぬぐとー美^うさーねーらんしえー、ボロ布ぬ
ぐとうぬ姿^{すがた}いるやくとう今^{いま}。あんさーに、「いやー
や、家^{いえ}うてい米^{こめ}喰^くえーよー」んち、あれー米^{こめ}喰^くえーク
ラーンち、ちきらつたんでい。

あんし、カーラカンスヤー^や、「いやーぐとーぬ者^{もの}
や、親^おぬ亡^むすれー、美^うすがいすんりひやー、親^おぬミー
ウトウイン見らん^み」ち。あれー、川原端^{かわは}から降りてい、
ちやー、あぬ暮^{くろ}しやたんでいぬ物語^{ものがたり}やるばーてー。

うりから、くぬまた、クラー^やまた、別ぬ米^{こめ}んぬー
んかんしくーいぎてい来^くに、家^{いえ}や、やはりあぬー、し
ーるがんばらどうやくとう、あんさーに、うまんかい
米粒^{こめのなめ}小^こくーていちやーに、くれー、明日^{あした}食^むんち、か
んし、置^{おき}ちえーしーしーさーに、うぬ米粒^{こめのなめ}小^こぬ、雨ぬ
降^ふたくとう、膨^{ふくら}きやーに、うりから、あぬ、酒^{さけ}なたん
でいるばーてー。うぬ米^{こめ}ぬ。

して行く間に、親は亡くなつてしまつたそ^うである。

それで、クラーは、カーラカンスヤーのようには綺麗^{うつく}ではないが（ボロ布のような姿をしてるので）「

あなたは、家で米を食べなさい。」といわれ、あのクラーは、「米^{こめ}食^くえークラー」とあだ名をつけられたそ^うである。

一方、カーラカンスヤーは、「お前みたいな奴は、親が亡くなろうとしても、きれいな着物を着ようとし^{て、親の死に目にも会えないで。}（と、非難された）カーラカンスヤーは川原に降りて、いつもそのような暮ら^しをして^{いる}という物語である。

それから、そのクラーは、また、別の米もくわえてきた。家（巣）はやはり民家のシールカンバラ（下方）にあるので、そこに米粒をくわえて来ては明日食べるるものとして（何回も行つたり来たりして米粒を運んで来た）米粒を貯^{たま}わえていたら、その米に雨が降つて発酵^{はつきょう}し、それで酒になつたということである。その米が。

あんさーに、うれー、飲れーうぬクラー小やパタバ
ターし、酔^サとーるばーてー、酒^{さけ}なとーる米食^{イシエ}やーに。
珍^{マジ}ましーむんでいち、うりから、あるかんしえーぬお
じーさんが行ぢ、「ぬーが、くぬ鳥^{トリ}小やあんするやー
」。んち、行ぢ見ちやくとう、うりかんし指小入^{ササギ}つてい
かんしなみてい見ちやくとう、酒^{さけ}なとーたんでいるば
ーでー。

あんさーに、うんにんから、沖繩^{ウチナ}ぬ焼酎^{ヤクニ}や、あぬ、
かんし、かんしえー良い物^{モノ}が出来^{でき}さやーんち、酒^{さけ}たり
ーならたんりぬ物語^{モノガタリ}やたらり。酒^{さけ}ぬ始^ハまいやクラーか
らやたんでい。

そうして、それを飲んだクラー小がパタバタした。
醉^サつているわけですね。酒になつてしまつた米を食べ
て。不思議なことだと、ある感心なおじいさんが、「
どうして、この小鳥はそうするのか」と、そこへ行つ
てクラーの食べたものに指を入れてなめてみると、酒
になつていたそうである。

それで、その時から、沖繩の焼酎は、このようにす
れば、良い物が出来（クラーから）酒作りを習つたと
いう物語だそうだ。酒の始まりはクラーから得たとい
うことである。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第二班（畠村朝夫、知花春美、島袋千代、手登根政子、石垣みづえ）

9 十二支由來

話者 松田栄清（明治二八年二月一〇日生）

翻字 知花春美

動物^{ドウ}ぬあるうつさー、集^ナ合りんちやたんでい。あん
ざくとう、くぬ、うり振り^カ回すしえー、あぬねずみや

動物のいるだけ皆集合しなさいということだった。
そうして、これを呼びかけたのは鼠^{ネズミ}なんだよ。呼びか

るばーてー。振り回^{まわ}ちやしえー。

けたのはね。

あんし、ぬーんちうまんかい猫^ねいらんしえーやー、
「うぬ猫^ねおぬーんち呼ばんだが」でいやくとう、
「んーん、うり連^{なづ}おてい来^やねー大^{だい}變^か、くぬ奴^やなー、
鼠^{ねずみ}あるうつさ、全部^{ひふく}取^といてい食^くいくとう。」んち。

うりから、やはり寅^{とら}猫^ねんち、うりが上^うんかいや寅^{とら}ぬ
うしえーやー、寅^{とら}と^一姿^{すが}い方^{がた}から何^{なん}からまん似^そ
やるばーてー、寅^{とら}ん猫^ねん。まかりまちがいねー、描^かち
やんじーねー猫^ねん寅^{とら}ぬぐとうないしえー。

あんさーに、「いやーんぐとーる者^{もの}お何^なんち私^{わたし}ねー
呼びらんたが」でいやくとう、「いやーや、私達^{わたくし}あ
前^{まへ}んかい立^たつち、いやーがういねー、私達^{わたくし}やー皆^{みな}う
ちゅ^き食^くいるするむんぬ」んち、うれー、猫^ねとうぬ物語^{ものがたり}
やるばーてー。

今度^{こど}おなー、動物^{どうぶつ}ぬあるうつさ集合^{あつ}りるやぐとう、
あんし、丑^{うし}から午^{うま}からうぬ役割^{やくは}あていーんでいるやく
とう、あんし皆^{みな}、集合^{あつ}ちさぐとう、ある学者達^{がくしゃたち}が、集
やーに、現在^{なは}ぬ、くれー、支那^{しな}うてい始^{はじ}またんでいが
らー、子^ね・丑^{うし}・寅^{とら}作^{つく}たしえー、孔子^{こうし}でいがいたらー。
とにかく、沖繩^{おきな}ん支那^{しな}ぬ教^おえ、今^{いま}日本^{にほん}ぬん支那^{しな}ぬ教^おえ、

しかし、どうしてここに猫^ねが入^はってないだろ^うか、
「猫^ねはなぜ呼びかけしなかつたか」と言^つたら、「い
いえ、これを連れて來たら大變、この奴^やは鼠^{ねずみ}のいるだ
け全部^{ひふく}取^とつて食^くうから」と答^{えた}。

それから、やはり寅^{とら}猫^ねといつて、その上^うには寅^{とら}が
いるでしょ^う。寅^{とら}と猫^ねとは体^{からだ}のつくり等^{そとに}よく似^そて^{いる}
んだね。寅^{とら}も猫^ねも。まかりまちがつたら、描^かきそこね
たら、猫^ねも寅^{とら}のようになるでしょ^う。

そこで、「おまえのような者^{もの}！なぜ、私^{わたし}を呼^ばなか
つたか」と言^つたら、「おまえは私達^{わたくし}の前に立^たつて、
おまえがいたら、私達^{わたくし}は皆^{みな}、食^くわれてしま^うからだ」
と言^つた。これは猫^ねとの物語^{ものがたり}だよ。

今度^{こど}は、もう、動物^{どうぶつ}のいるだけ集合^{あつ}しなさいとい^う
ことである。そして、丑^{うし}（牛）や午^{うま}（馬）にその役割^{やくは}
を當^あてることなので、そういうわけで、皆^{みな}集合^{あつ}させ
た。そこである学者達^{がくしゃたち}が集^{あつ}まつて、現在^{なは}の支那^{しな}で始^{はじ}
つたらしい。子^ね・丑^{うし}・寅^{とら}を作^{つく}たのは孔子^{こうし}といつたか
な。とにかく、沖繩^{おきな}も支那^{しな}の教^おえ、今の日本^{にほん}も支那^{しな}の

えるやくとうや、あんし、子・丑・寅し。

教えだからね。それで、子・丑・寅で（支那から伝わつた。）

昔え時計んあんるやくとう、子の刻、丑の刻ぬーん
ち、うりから、くぬ十二方ぬみぐいん、支那ぬある学
者達が、くれー作たしやんでいー、子・丑・寅や。

昔は時計もそうであつた。子（十二時のこと）の刻、
丑の刻といつてね、それから、この十二支のことも、
支那のある学者達が作ったということだ、子・丑・寅
はね。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第四班（天久節子、金城清美）

注 十二支のこと。時刻や方角、十干と組みあわせて年や日をあらわした。子（鼠）、丑（牛）、寅（虎）、卯（兔）、辰（龍）、巳

（蛇）、午（馬）、未（羊）、申（猿）、酉（鶏）、戌（犬）、亥（猪）。

10 蟻と鳥

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 上原ヨシ

鳥んかい、あぬ鉄砲持つち、射んでいさくとう、う
ぬ蟻ぬ、うぬ鉄砲持つちよーしえー、蟻ぬくーやーに。

くーたぐとう「あかちやー！」んでいぬいえーがねー、
うぬ鳥お逃ぎとーるばーでー。

鳥に向つて、あのう鉄砲を持って射ようとしたら、
(足元で)その蟻が鉄砲持つている人を噛んでしまつ
た。すると「あつ痛い！」という間にその鳥は逃げて
行つた。

あい、うぬ鳥ぬ逃ぎてい行ぢやぐとう、うぬ蟻ぬまた水んかい流りてい行ぢゅし、また鳥ぬ木ぬ葉落とうさーに蟻や助きたんでいぬ話ぬあたしが。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査團第二班（伊波百合子、知花利江子、松元久幸）
そう、その鳥が逃げて行つた後に、この蟻がまた水に流されて行くところを、今度は鳥が木の葉を落として蟻を助けたという話があつた。

11 菖蒲節句由來

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知念妙子

菖蒲ぬ話やよー。あぬ、人ぬハブんかい追らつてい、なー咬らりーがたーなたぐとう、うぬハブお菖蒲ぬみーんかい行ぢやーに、うぬまま死じょーたんり。

あんしる、うぬ五月五日えあぬアマガシ注作やーに、うぬアマガシンかい、うぬ菖蒲ぬ葉や供ぎてい、又、あぬ、帶しちんーちやいやー、くぬ山ぬくまー。私達わたくしが童そーたるえーまーあんやたしが。又、かんてい、めーうさぎーしんーちやい、菖蒲ぬ話や。

菖蒲の話はね、人がハブに追い駆けられ、ハブに咬みつかれそうになり、そして、そのハブは菖蒲の繁みに入り、そのまま死んでしまつたらしい。

それから、五月五日はアマガシ（せんざい）を作り、それを菖蒲の葉といつしょに供えたという、又、菖蒲の葉を帯にしてみたりね。この山の手あたりでは……。私達が子どもの時分はそうしていたよ。又、頭にかぶつて、頭の前の方に飾つてみたりしてね。（これが）

菖蒲の話なんだよ。

注 喜名では旧暦五月五日は男の節句とし、大麦に砂糖を入れてゼンザイ同様のアマガン（甘菓子）を作り仏壇に供える。その日は豚もつぶし、ごちそうも作る。供えた後は菖蒲の根で作った箸を用いてみんなで食べる。

12 鬼おに 餅もち 由ゆ 来らい

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 阿波根 初美

カジマヤー桂^桂あぬ鬼おにから始はじまとーるばーてー。あんすくとうる鬼おにぬ、ウナーム桂^桂チーん桂^桂でいーる、鬼おにでいせー人ひと喰くいぬ鬼おにてーやー。

（魔除まよけの為に月桃げつとうの葉で作つて四隅の軒端くわんぱなどにさす十字形の）カジマヤーは、鬼おにの話から始はじまつているわけ。それで鬼餅おにもちという、鬼おにというのは人を喰う鬼のことさ。

妹わい、兄お生なまりたくとう、うぬ兄おや鬼おになまい、女おな一本一本當とうぬうりやせーやー。あんさくとう、うりからさーに、女おなぬなーあぬー、「貴女おな」あ兄おや人ひと喰くていならんでいんどーやー。」でいやくとう、あんさーに、「あんせー私わたしねー、うりやらー、うり直まち來くわるやる。」んち、子こん抱いだち行ゆぢやぐとう、「あいなー、君きみあんし、くんぐとーる子こ生なちえーる、あんし美味うまいさぎさる。私わたし食くま、私わたし喰くあ。」り言いちやくとう。うぬ妹わいや「んだんだ、

妹わいと兄おが生まれたが、その兄は鬼で、妹の方は本当の人間であった。それで、ある女がもう、（妹に）「貴女の兄は人を喰つてしまふがいいそうだよ。」と言つたので、それで（妹は）、「それなら私は、それだつたら（兄の行ないを）直まして来よう。」と言つて、子供も抱いて行つた。すると（兄が）「おやまあ、君はこのような子供を生んであるね、大変おいしそうだね私が食べよう、私が喰くおう。」と言つた。それで、その

うれー小便すんりるむん。」りやーに、あんし、兄ぬ手縛ち、綱手縛ち小便しみーがやらちゃくとう、木んかいぬ綱あ縛じやーに、うぬ子あ連てい家かい逃んぎーるばーてー、うぬ妹や、逃んぎたくとう、「何がうりるやー」。りち、なー物音聞からんなくとう。

妹が「いやいや、この子は小便したいといつている。」と言うと、兄が手を縛つて、綱で手を縛つて小便させに行かせたので、木にその綱を縛りつけて、その子供を連れて家に逃げたわけだね、その妹は、逃げたので「何で静かかなあ」と、もう物音が聞こえなくなつたので（鬼は思つた）。

「くれーなー仕様んじやさわるやる。」んち、なー回でいねー、ムーチー作こーやーに、あぬー、ムチー作こーやーに、「浜んかい行か。兄ん一緒にー、行ぢ遊でい来。」んち、ちりばんたんかい連てい行ぢえーるばーてー。あんさくとう、うぬ兄妹ぬ女お恥はやーにあんしムーチーうまんかいさくとう、「何が、君あうまー何やが。」んちやくとう、「くれーよー、兄、くれー人喰いる口。」りち、自分ぬ言ちやせーやー、あんし「うれー人喰いる口、くれ物食むぬ口。」でいち言ちえーるふーじてー。あんさくとう「あぎじやびよー。」りちやーなかい、ムーチー呉がちーなー後んかい落さーに、妹ぬムーチーや命取つたんでいせー、兄ぬ命取つたんでいさ。うぬウナームーチーんち、うぬムーチーぬウニムーチーんち、うりからムーチーや始またんで

「これはもう、方法を考えよう。」と言つて、（妹は）もう一度行く時には餅を準備して、あのう、餅を準備して行つて、「浜に行こう。兄さんも一緒に行つて遊んでこよう。」と言つて、崖淵に（兄を）連れて行つたわけだ。そしてその妹は陰部をあらわにして、そして餅をそこにやつたので、「何だ、君のそこは何だ。」と（兄が）言つた。（妹は）「これはね、兄さん、これは人を喰う口。」と、自分で言つてね、「それは人喰う口、これは物を食べる口」と言つたようだね。すると、「あれえっ！」と言つて、餅をあげながら後の（崖下に）落として、妹の餅で命を取つたそうだ、兄の命を取つたそだ。そのウナームーチーといつて、その餅が鬼（をやつつけた）餅といつて、それからムーチーは始まつたそだ。

- 注① 旧暦十二月八日に作るムーチー（餅）を包んだサンニン（月桃）の殻で、一枚合わせて十字型にカジマヤー（風車）を作つて、玄関先や、家の四隅、豚小屋等に魔除けとして吊るす。また煮汁も魔除けとして庭に撒く。
- ② ウナームーチーとは鬼餅の意味。一般的には単にムーチーと称している。子供のいる家庭では多く作り、天井に吊るし、正月を迎えるまで大事に食べる。

13 鬼餅由来

話者 翁長ウト（明治四三年二月十九日生）

翻字 阿波根 初美

兄さー、まー鬼みたいよーな人で、山籠いそー
てい、人ぬ通いるうつさ皆るすびち行ぢ、殺ちうりそ
るばーてーやー。食どーるばーるやさに。

兄さんはまあ鬼のような人で、山籠りしていく、
通る人皆な引っぱつて行つて、殺してあれしていくわ
けだね。食べていたわけでしょうね。

あんさぐとう、くぬ妹は「これは世間にすまない」。
でいやーにてー、大変ムーチー上戸やたんでいー、ま
た、うぬ兄さー。あんさぐとう、すぐまぎまぎーと
う作やーに、自分ぬ物ん作つてー、あんさーに、「
兄さん、私が言いし聞ちゅみ、ムツチー呉しが」。ちや

ぐとう、「いい、ムーチー吳らー何ん聞ちゅんどー」
かいなとーるばーてー。あんさぐとう「何ん聞ちゅん
どー」でいちゃぐとう、「どーあんせー、私がムツチ
ーーち作ていちゅーぐとうてー、私にんムツチー食で
い、兄さぬん食でい、兄さんや食みーさんあらー私が
言いし聞ちゅみ」でいちゃぐとう、「聞ちゅん」でい。
「あんせー、うぬムツチー食みーさんあれー崖んかい
落とうすしがしむみ」「うん、しむん」「また私が食
みーさんあらー、私うぬ崖んかいうしけーらち死なせ
ー」でい言ちやんでい。

あんさぐとう、なー、高さる崖んかい行ぢ、ムツチ
いや持つちやーに、とー開きてい「うり、兄さん」ち
取らち、自分ん開きてい食でい、崖んかいかんし立つ
ちょーてい食むし、妹やうち食でーるばーてー妹お。

「だー、兄さのー食みゆーさんせー」ち、色お見らん
せーやーなー、開きてい食でいるうくとう、包でーし
開きてい。あんさぐとう、「兄さのー食みゆーさんぐ
とう私が言いし聞き」んでいやーに、すぐ、なー恐る
さぬ後しんちやーせーうしが、聞かんどうあせーやな
ー、賭や負きているうさい。賭せーるばーてーなー、「賭

呉れるが」と言うと、「いいだろう、餅を呉れるなら
何でも聞くよ」ということになつたわけだ。このよう
に（兄が）「何でも聞くよ」と言つたので、（妹は）
「さあそれなら、私が餅を二つ作つて来るからね、私
も餅を食べ、兄さんも食べ、兄さんが食べきれないと
きは私の言うことを聞くか」と言うと、（兄は）「聞
く」と答えた。「それなら、その餅を食べきれないな
ら崖から落とすが（それでも）いいか」「うん、いい」
「また私が食べきれないときは、私をその崖から押し
倒して殺しなさい」と（妹は兄に）言つたそうだ。
そして（二人は）、もう、高い崖に行き、餅を持つ
て行つて、（妹は餅の包みを）開けて「さあ、兄さん」
と言つて（餅を）あげ、自分も開けて食べ、崖にこう
して立つたまま食べ、妹は全部食べたわけだ、妹は。
「ほら、兄さんは食べきれないでしよう」と、色は見
えないでしよう、もう開けて食べているのだから、包
んである餅を開けて。そこで（妹が）「兄さんは食べ
きれないから私の言うことを聞け」と言うと、（兄は）
もう恐くて後ずさりしているが（妹は）聞かないでし
ょうもう、（兄は）賭に負けたわけだから。（二人）

やー」んち、負きているうくとう落とさつたんでい。

鬼餅おにあめでいち、あんきーに鬼餅おにあめでいちょーんでいる

ばー。

採集 S 51・10・17

読谷村民話調査団第六班（阿波根初美、町田愛子、喜友名春子、池原涼子、宮里光雄、仲村渠清美、棚原直子）

賭ハダハタチをしたわけだねもう、「賭けよう」と言つて、（兄は）負けているわけだから（妹に崖から）落とされたそ
だ。鬼餅おにあめといつて、それで鬼餅おにあめといつているわけ。

クスクエー由來

話者 松田ミヨ（明治四一年二月二日生）

翻字 島袋オツル

うりが由來記えよー。昔人ぬ、ある所んかい、本當がら分らんしが、後生あとはんちあてーんてー。くぬ後生あとはぬ人おとこおえーば、今ぬ役場議員やくばぎいんちやしとー、同ひとむんどうやはに、何なにがなぬ。

この（クスクエー）由來はね。昔の人が、ある所に、これは本当か分らないが、後生あとはといつてあつたんでしううね。後生の人は、いわば、何かの役職やくしょくがあつて、今の役場議員やくばぎいんと同じだつたのでしううね。

うりが、うつたーが二人ちけーち。うぬ人おとこおうまうてい、なーひら草ひらくさしみしぇーたんでい。ひら草ひらくさしーにうつたー二人が話はなぬ、あぬ、「でーー、まーぬ、あれーや、私達わたくしあ取うけつていくいやー。」んち。死死なすんちよーるばーてー。「鼻はなひらさーなかい、死死なしみらやー。」んでい言いちやぐとう、うぬ人おとこおうり聞きち。

この方々（後生の人）がふたり使いで來た。ある人はそこで除草じゆそうしていらしたそうだ。除草じゆそうしている時にこのふたりの話が聞こえた。「ねえ、どこの、誰かの（魂）を私達で取つてこよう。」と言つた。殺すひるすといふことでしううね。「クシヤミをさせて死死なせよう。」と言つてゐるのを、草取りしてゐる人が聞いた。

「あんしーねーちやーすが」んでい。あれーやー、死なしーねー、昔人お「儲きてイ米食ひやー」でい言しぇー。うぬ人ん、「あはーまーぬ童取りが行ちゆさやー」。んち、聞ちみそーなかい。

うまぬ家あんぢ、「むしか、いやーが鼻ひーねーや『クスクエー』んでい言りよー、『儲きてイ米食えー』んでー言いなよー。『生糞食えー』んでいねー、助いくどうやー。『あんあんし、まーぬ童鼻くじらち、ひらち取らやー』でいち、二人話し、行みしぇーとぐとうやー。私がひら草する前うてい」

「それではどういう方法ですか」というと、それはね、死なすには、昔の人は（クシャミをした時は）「儲けて米飯食え」と言うでしょう。（その時をねらうのだよ）「ああ、どこそこの子どもの命を取りに行くんだなあ」と聞いていた。

（そして）そこの家へ行つて、「もしもあなたがクシャミをした時には『クスクエー（糞を食べよ）』と言いなさい。『儲けて米飯食え』とは言わないでね。『生糞食え』と言えば助かるからね。『こうこうして、どことこの子どもの鼻をほじくり、クシャミさせて命をとろうね』と二人で話して行くようだつたからね。私が草取りする前で（そう話していたよ）」と言つた。

うれー、貴方達や、今からー、昔人お「儲きてイ米食えーひやー」。んでいる、初めー言たんでいよー。あんやしが、うぬ人が話聞ちよーぐとうやー。「『生糞食えー』、鼻ひーねー、『クスクエーヒヤー』でいる言よーやー」。んちよー。習しみそーち。

うりからるよー、鼻ひーねー「クスクエー」んでい言るふーじーどーやー。

その時から、クシャミすると「クスクエー」と言うようになつたそうである。

昔お「儲きていい米食えー」。んでい、あん言たんでい
しがよー、うぬ人がうぬ家んじ、いんねーすんねー、
鼻ばんないひつちやぐとうよー、「あはー、くまーむ
ぬ知つちよーるむんなー」。んち、帰てい行みしえーた
んでい。

ずっと以前は、「儲けて米飯を食え」と、そう言つ
ていたようだが、この人が、そこの家で言つたと同時
にクシャミしたので、「ああ、ここは何でも知つてい
るようだ」と思い帰つて行つたそうである。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第八班 〔上原利津子、知花千代子、知花俊治、渡ヶ次喜美子、崎浜博子〕

15 クスクエー由来

話者 金子マツ(明治四五年六月二四日生)

翻字 知花孝子

昔よ、ある所んかい、ボージャーが生まりたぐとう
幽靈ぬへ集まとーんでいんで言いねー可笑さしがゝ、
「今日や、まーぬまーんかい、ボージャーが生まりと
ーぐとう、うぬボージャー、命取りが行かやー」。りち
相談すし、なー、ユタふーじな人ぬ、聞ちやーに、「と
ー、うれー、あんしぇーならん、あぬ童、守りわるや
ぐとう」。んり、言やーに、うぬ家かい行ぢ。

うつたーや、何回、鼻ひらち、うぬ子取らやー。

この幽靈達は、何回、くしゃみをさせて、その子

昔ね、ある所に、赤ん坊が生まれたから、幽靈がへ
集まつてていると言つたらおかしいけれども、「今日は、
どことこに、赤ん坊が生まれているから、この赤ん坊
の命を取りに行こうな」と、相談しているのを、ユタ
のような人が聞いて、「こうしてはいられない、あの
子を守らなければいけないから」と言つて、その家に
行つた。

何回、鼻ひーねー、うぬ子ぬ命取いんどりいち、
相談やぐとう、うぬユタぬ行ぢやーに、すぐ、うりが
うぬ童ぬ鼻ひーるかーじ、「クスクエーヒヤー」何回
ん、鼻ひつちん「クスクエーヒヤー」り言ちやぐとう
なー、うぬ命取る事おならん。あんさーになー、命え
ー取ゆーさん、帰てい行ぢ、うぬ童え助かたぐとう。
などーん。

うんにしからる、童ぬ鼻ひーねー、必じ、「クス
クエーヒヤー」んり、言るむんやさんり。なー昔から
鼻ひーねー、「クスクエーヒヤー」んり、言るくとう
などーん。

それからというもの、子供がくしゃみをすると、必
ず、「クスクエーヒヤー」と言うもんだつて。もう、
昔から、くしゃみをすると「クスクエーヒヤー」と、
言うことになつてゐる。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第四班 へ山城悦子、又吉初子、田場春美、当真久美子、島尻博光、湧川汎子

注 沖縄本島におけるト占を専業とする巫女。ときだま、男性もいる。与那城村屋ケ名はユタどころとして知られている。読谷村では長浜のアカムヤー（五班）にユタがいる。新築の日取りや、結婚式の日取り、その他家に不幸があつた場合、ユタの家に行く。手数料は、ンムンジシレー（気持次第）とするが、相場は五、〇〇〇ー一〇、〇〇〇円前後である。

を取ろうな。何回、くしゃみをしたら、その子の命を取るぞ、という相談だつたから、そのユタが行つて、すぐ、子供がくしゃみをする度に、「クスクエーヒヤー」何回、くしゃみをしても、「クスクエーヒヤー」と言つたので、もう、この命を取る事ができない。そ
うして、もう、命を取りきれない。（幽靈達は）帰つていつてこの子供は助かつた。

話者 玉城ヨシ（大正一年七月三一日生）

翻字 具志堅 タケ

あぬ皆食え物のーねーらん、鰻取つたい、海老取つ
たいしんがよー、山ぬ中んかい小川んかい行ぢやくと
う。祖母おやじンメー迫て^はいる行ぢえーぎさんどー。

あんひちやぐとう、ちやふえーぬなー真つ黒そーる
豚ぬグーグーしょー。うぬ物食でーる田ぬ端やてーん
てー。あんさくとう、「くぬひやーやなー、りー二た人じ
し、くんちひつちきらやー」んち、引っちきとーるし
じやしが。あぬー、翌日行ぢやくとう、ナビゲーなで
いよー。

あんしうれー、ミシゲーとうナビゲーとー、物ぬ精ひき
ぬちち、あんしミシゲーるやてーぎさんでー。やつば
し精ぬあるふーじどー、物ぬ精りち話しみしぇーたん。
うれー本当に自分くるー見ちやる事やたさ。また、マ
チヤーうしゆくぶー引かりーるぐとーたさ、家かい來
ねー。

注 ミシゲーは御飯をつぐもの、ナビゲーは汁をつぐもの。

あの（昔は）みんな食べ物がなくて、鰻を取つたり
川海老かわびを取つたりしに山の中の小川に行つた。（その
時は）祖母おやじと一緒に行つていたそうだがね。

そうするとね、物凄く大きな真つ黒い豚ぶたがグーグー
して^はいた。（誰かが）食事をした田んぼの端はだつたの
でしょう、すると「この野郎は二人で（捕えて）くび
つて（木に）引きつけて置こうね」と結むすんでしまつた。
(しかし)引きつけて置いたつもりだが、その翌日行
つてみると、なんと、杓子くわいしになつていていたそうよ。

それから、ミシゲー（杓文字）とナビゲーに物の精ひき
がつき（豚は）ミシゲーだつたようだよ。やつぱり物
の精ひきはあるらしいね。（昔の人は）話しておられた。
それは本当に自分で見た事だつたそうだ。家に帰ると
きはうしろ髪をひかれる思いだつたよ。

17 美女に化けた豚

話者 松田栄清（明治二八年二月二〇日生）

翻字 島袋喜美子

人とう動物でいねー、豚あ四ヶ月しかむたんしえー
やー。人お十ヶ月むつちゅしえー。あんすぐとう、う
りから考いねー、今ぬ、君達が一信じらんでい思と
ーるばーてー。なーまじ、うぬ豚ぬ化きたんでいる話
や。

うぬ昔ぬ、産さー豚んでいるむの、十ヶ年なーん
十四、五ヶ年なーん、ちやーうぬ豚や、求みてい置ち
えーたんでいるばーてー。うりから繁殖用ぬ豚ぬなー
長れーなていさくとう、うりから豚ぬサカヤーに、う
ぬ村ぬ二歳達が、うぬモーアシビ注すんとくまんかい
豚ぬ遊びーが来んでいるばーてー。

あんさぐとう、うぬ部落ぬ美二歳え騙ち、うりから
「うぬ豚あちゃーし分たが」んちやくとう「うれー、
やはり動物どうやぐとう、匂いぬ悪きたん」でいるば
ーてー。

人と動物の（妊娠期間）を比べてみると、豚は四ヶ月で、人間は十ヶ月でしょう。それから考えると、今の君達には、その豚が化けたという話は信じることができないと思うわけだがね。

その昔は、繁殖豚にしているものは、十ヶ年も十四、五ヶ年も、ずっとその豚を養つて置いてあつたそうだ。それで、繁殖用の豚を長い間飼つていた。そうしたらその豚が発情して、そこの村の青年達が野原で遊んでいる所に、豚が（娘に化けて）遊びに来たそうだ。

そうして、その部落の美青年を騙したが、（後で豚だとわかつた）「それがどうして豚だとわかつたか」と聞いたら、「それは、やはり動物なので匂いが悪かつた」と言つたようだ。

それからまた、匂いが悪い上に、歌の拍子が「シー

「シーグーグー、メーターグーグー」でいち、うぬ豚
ぬ歌すたんでいる物語やしが。うりんぬが、妊娠さん
でいるとうくるまで一聞かんたしが、二歳達が、うぬ
豚んかい驅さりやーに、「シーグーグー、メータグー^グ
グー」んち、うぬ歌ぬ拍子すたんち。うりから、だ
うれー豚舎からどう飛び出じてい来ぐとう、匂いぬ悪
きたんでいるばー。

あんさーに、うぬ「シーグーグー、メータグーグー」
でいる歌ぬ拍子え豚ぬ化きとーたんでいる物語やるば
ーでー。

グーグー、メータグーグー」だつたそうだ。その豚が
歌を歌つたという物語だがね。それもまあ、（豚）が
妊娠したというところまでは聞いてないが、青年達が
その豚に驅されて、（そしてその豚が）「シーグーグ
ー、メータグーグー」という拍子で歌を歌つたそうだ。
それに、その豚は豚舎から飛び出して来ているので、
匂いが悪かつたようだ。

そういうことで、「シーグーグー、メータグーグー」
という歌の拍子は、豚が化けていたという物語である
ということです。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査團第四班 〈天久節子、金城清美〉

注 沖繩で戦前まであつた野原や浜辺における青年男女による夜遊び。夕食後、近くの野原や浜辺に集まって三味線の音に合わせて数拾名の人々が夜遅くまで唄い踊り楽しんだ。読谷村でも戦前まで盛んに行なわれ、とくに、年に数回、隣部落とのアシビヌトウケー（遊びの交換）を行なうなど、活発だった。

の

話

話者 松田ウト(明治三四年七月二〇日生)

翻字 阿波根初美

あぬー、なー、人んかい化きとしてーるばーてー。

妻くーいがんち行ぢやくとう、あんし、うまんかい行
ぢやーにかい、畳ぬうまんかい尾やくわーち、うぬ話
やたしが、うれーわからんなどーん。うまうてい盃う
がだい何さいそーるばーてー。四ちぬうま、うぬたつ
ペーがやら、うれーわからん。

あのう、もう(狸が)人に化けているわけだね。妻
を娶りに行つて、そして、そこへ行つて畳の間に尾を
はさんでいたという、その話だつたが、それはわから
なくなつてしまつた。そこで盃を受けたり何したりし
ているわけだね。四つ角の所か、それは、その理由か
どうかそれはわからない。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第五班(山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間貞章、金城清美、金城安子)

19 キジムナ一友達

話者 松田栄清(明治二八年二月二〇日生)

翻字 島袋千代

とにかく、屋敷え広さぬ、周囲や全部ガジマル^{注①}さー
に囲らつとーたる屋敷ぬあたんでいるばーてー。うり
から、くぬキジムナーん^{注②}いでしえー、化け物んやれー、

とにかく、屋敷が広く、周囲はガジユマルで囲まれ
た屋敷があつたそうである。それから、このキジムナ
ーは化け者でもあるが、正直者だといわれていた。

正直者やんでいいやつとーるばー。

あい、なー、キジムナーンかいちやー連おらりやーに、海んじ魚取つていちさくとう、うぬ家庭や裕福になたんでい。あんさーに、今度おなー裕福んなてい、魚ん卖ぎてい錢お儲きたくとう、くれーなー、夜起きはーきしかんしえーならん、くりとー縁切りわるやるんち、うぬキジムナーテーなー海んかいちん行かん、なーちやーうぬガジマルぬ中んかい住まとーたんでいるくとうやるばーてー。

「あつ、くぬひあーや、私が儲きらしーるんしえ、樂しみーるんしえー、私とう縁切くとう、なーくぬひやーや、わちやくしとうらしわるやる」んち。うりから、豚んかい、キジムナーフジんちやい牛んかいキジムナーフジんちやい、キジムナーンかい、また嫉妬さつとーるふーじてー。

「くれー、面倒ぬむんやつさー。」んち、あんさーにうぬ庭ぬガジマル木やうぬキジムナーヌ住まとーくとうでいいやーに、うり伐採さくとう、うりから、あぬキジムナーやうまからうらんくとうんなかいなたくと、あんさくとう、くれーあんしえーならんでいやー

それで、キジムナーテーに、いつも海に連れていかれ、魚を取つて來たりしたので、この家は裕福になたそうである。そのようにして、今度は裕福になり、魚を売つて金も儲けたので、これは、夜更かしばかりではいけない。これ（キジムナーテー）とは、縁を切らねばと、もうキジムナーテーとは海へ全く行かなくなり、それで、キジムナーテーは、ずっとガジュマルの中に住んでいたそうである。

「あつ、この者は、私（キジムナーテー）が儲けさせて樂をさせてあげたのに、私と縁を切ろうとするなら、もう、こんな奴は、いたずらしてやろう」と、それから、豚にキジムナーヤーチュー（キジムナーテーのおきゅう）をしてみたり、牛にもキジムナーヤーチューをしたりして、キジムナーテーは嫉妬していたようだね。

「これは、面倒なことになつた」と思い、それで、庭のガジュマルの木は、キジムナーテーが住んでいるので、その木を伐採したら、それから、そのキジムナーテーは、そこにはおれなくなつた。これではいけないと、キジムナーテーは、そこの家財を全部焼き払つたそうである。そ

に、キジムナーぬ、うまぬ家財や全部け一焼ちえーた
んでい。あんさーにうぬ人ひとおまた失敗し元んかい戻た
んでい。

れで、その人は失敗し、元（貧乏）にもどつたそつで
ある。

採集 S 51・10・17 読谷村民語調査団第一班 〔富村朝夫、知花春美、島袋千代、手登根政子、石垣みづえ〕

注① 植物名。和名ガジマル。かつ葉樹で根が石垣を巻くので屋敷木として用いられている。温帶、熱帶にはえる。くわ科の常緑高木。
② 木の精。古木に宿ると言われ、この物語りにあるように人間と友達になって魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。夜に口ぶえを吹くとキジムナーにウサーリンと称して、一瞬呼吸困難な現象を起させるという。

20 キジムナー友達

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知念妙子

あぬ、海人ぬ魚取いがめんそーちゃぐうとう、あん
さーに、うまうてぬ魚取てい置ちえるとうくまんかい、
キジムナー小達やめーなちょーてーるふーじ。

あのねえ、漁師が魚を取りに行つたらしい、すると、
そのへんで魚を取つて、置いてあるところに、キジム
ナー達が（その魚を）見守つていたそつだ。

うぬ魚ぬめーんかい、あんさぐとう、火小めーちょ
ーつい、うつたーや、うりすんとうくまんかい、「く
つたーや、私さかながんまりするやー」ひちやーに、

この魚を前にして、火を焚いて囲んでいる所へ（漁
師が来て）、「この者たちは、私が取つた魚を、悪戯いたずら
する気だな」と思い、持つてゐる網を、ひよいと、そ

うぬ網えうつちかいうちかんしたぐとう、うぬ網え全
部バーバーバーけ燃ちねーらんなやーに。

うんにんから

キジムナーカ カンクリカンクリ

キーワーチャー カンクリカンクリ
し、子供達や。

うりからぬ唄やんろーんち。

の者たちにかぶせてしまつたら、その網が全部バーバ
ーバー燃えてしまつた。

その時から

キジムナーカ カンクリカンクリ

キーワーチャー、カンクリカンクリ
と、子ども達は（唄つている。）

こういう由来の唄だそです。

採集 S 52・6・19

読谷村民話調査団第二班（伊波百合子、知花利江子、松元久幸）

21 キジムナー友達

話者 吉田 新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 大城 薫

キジムナー注① と言うたら、あれは、魔物まお というのがあるでしよう。魂たまとか、幽靈ゆれい注② とかいうよな、あれとは違うわ
けですよ。動物どうぶつ であるというよな昔むかし の話はな ですな。

それに隠れ笠かげがさ とい、隠れ笠かげがさ を持つてですな。蓑笠みのがさ をつけてしたら、人がわからない、見えないと、それで隠れ
笠かげがさ を持つておる動物どうぶつ であると。

それを一度見たことがあるですがね、私は。みかんを取りに（山に）登つてですな、みかんの木の中に、キジム
ナーがおつたわけです。あれはいつも火、ウチリ火（火種）ひじるを持つておるというんですよ。火を持つておると、キ

ジムナー火^火というて。その火がですな、木の枝^枝にひつついでですよ。木の枝^枝が焦^焦がれておつたわけですよ。それを手でさわってみりや熱^熱いもんだから、さわってみたら（見ていると）火がついておつたわけですよ。「なんで、ここに火がつくのかなあ、ああ、これはキジムナー火^火かもしらん」と、初めて、「私はキジムナー火^火というものを見たわけですよ。

また、うちの親父^{親父}がですな。若い頃^頃にモーアシビ^{注③}に行つた時にですな。楚辺^{楚辺}バンタといつて、ハンタがあるわけです。へ現在^現の赤犬子^{赤犬子}のお宮^{お宮}の西側^{西側}が楚辺^{楚辺}バンタといふんです。へあそこに行つてですな。楚辺^{楚辺}の方に向つて、肩^肩ひじ、ひじを立てて寝^寝ておつたらですよ。女^女が来るのを待つて。そこから火^火が、たくさん飛^飛んできよるといふんですよ。海^海の方に魚り^{魚り}に行くと^いうて、魚^魚を取つて、食^食うためと^いうんです。

それと、「キジムナー友達^{友達}切りたん」と。それはキジムナーと友達^{友達}になつたらですな、切れることができないと^いうんです。魚^魚は取つててくれるしね。口^口は非常に樂^樂にいけるが、それが夜^夜はまた、夜明^{夜明}けどおし連れて歩くといふんですな。その隠^隠れ笠^笠で。人をかばつておるから。それだけしか知らないですよ。

採集 S 55・2・14 読谷ゆうがおの会（大城薰、知花春美）

注① 年経た古木に宿る木の精で、その形相には地域差があり、猿に似た赤ら顔であるとか、童形であると言われている。夜、口笛をすると、キジムナーにウサーリン（抑えられる）といわれ忌み慎む。また、この物語にあるように、キジムナーと友達になると漁がうまく行くが、屁をしたり、タコの話しあは禁物になつてゐる。

注② 沖縄では、身体には七マブイが宿つてゐると言われ、転んだり、ひどく驚いたりすると、身体からマブイが遊離すると考えられている。生者にはイチマブイがあり、死者にはシニマブイが宿つてゐると観念している。また、死期に近づいた人のイチマブイが浮遊して歩き、それが、顔を上げ笑つているとダメだとか、墓前に背を向け正面に向つていると助からないなどと言われている。

幽靈については比較的新しい輸入語で、逆立ちユーリーなどが有名で、古くは妖怪一般をマジムンとか、単にムンと称していた。

③ 沖縄で戦前まであった野原や浜辺における、青年男女による夜遊び。夕食後、近くの野原や浜辺に集まって三味線の音に合わせて数拾名の人々が夜遅くまで唄い踊り楽しんだ。読谷村でも戦前まで盛んに行なわれ、とくに、年に数回、隣部落とのアシビヌ

トウケー（遊びの交換）を行なうなど、活発だつた。

④ 潮の干潮時を利用して干瀬にいるタコや魚貝類を獲る漁業。主に、船に乗れない婦人などが中心に行なつてゐる。道具は、イグン（モリ）一本と、ティール（かご）あるいはランプぐらいである。夏場は真昼間に冬は真夜中の大干潮時にやる。

22 ハブの昇天

話者 松田ミヨ（明治四一年二月一日生）

翻字 知花春美

いつべー、にんしとーるハブぬあぬ、ある川うてい
う天ぬんかい昇いんでいそーみせーしが、うまから草
刈たる人ぬ見ちやなかーい。「何やがやー」でいち見
ちやぐとう、人んかい見ーらつてーぐとうでいち落て
いていちやぐとう、昇いる途中、落ていたぐとうや、
うぬ草刈いが行ぢよーせー、手うさーちえーるふーじ
ー、なー膝まんちゅーかきてい、手うさーちやぐとう
や。

長い間、冬眠していたハブが、あのう、ある川から天に昇ろうとしていらつしやるのを、その辺で草を刈つてゐる人が見てしまつた。「何だろうか」と見たら（そのハブは）人に見られてしまつたということで落ちてきた。昇ろうとしている途中、落ちたので、この草刈りに来ている人は合掌したらしい。もう、膝まづいて合掌した。

うぬ人にハブぬてー、「いやーがやー、私が御天
ぬんかい昇いたんどーでいぬ話誰にんさんあらーいつ
たーや、日々家庭や金持しみーしがやー、うりるん
じやつぴやていん人んかい話い言じやしーねーやー、
いつた一家や焼ちあぎーぐとう、話やくつぴんすなよ
ーやー」でいち。

なー、長一までいむねぐくるし、話やさんてーしが
てー。あんしが、るくんぬ口ぬ「あんし、うまーちゅ
ーちゃん裕福ないるやー何んち裕福さがやー」でいち
やぐとう、「実えかんるやんどーや、あんあんしやー、
自分でいーせー、永ー眠しとーるハブぬる、うりし、
あぬー、天ぬんかい昇いみそーちあれーハブどうやん
どーやー」りちゃぐとうや、うり天ぬ聞かるしんそー
ちやらー。

あんさぐとうや、うまぬ家や焼きていや、むる何ん
ねーんなとーたんりぐとうや。

言ゆなよーでいる話え「言せーあらんどーやー」で
いる叔母や言んせーてるむん、うりんうつきるやてー
んてー、えーりん。うつきる聞かしんせーてるむん。

すると、この人にハブがね、「おまえが、私が天に
昇つたという話を誰にもしなかつたら、おまえたちの
家庭の日々の暮らしを金持ちにしてやるがなあ、(しか
し)これをちょっとでも人に言いだしたらね、おまえ
たちの家は焼きはらつてしまふぞ、話はこれっぽつち
もするなよ。」と言つた。

それから、長い間、心に秘めて話はしないでいたが
ね。そうだが、あまりにも人が口だしして、「こうも
ここは裕福でいられるね。どうして裕福になつたのだ
ろう」と言つた。「実はこうこうだよ。そういうわけ
でね、自分というものは、永い間、冬眠していたハブ
がこうして、あのう、天に昇られて、あれはハブなん
だよ」と言つた。すると、それを天がお聞きになつた
のだろう。

それでね、こここの家は焼けてね。すべて何もかも失
つたということだよ。

言うなという話は「言うべきではないよ」と叔母さ
んは言われていた。たぶん、この話もそれだけだった
のでしきうね。それだけを聞かされていた。

話者 吉田 新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 山内智子

昔、金持人んかい、ンジャツクワなてい使者せしぬ多く集まとーるばーに、うまうてい年としぬ夜よやしが、年としぬ、「今日や年としぬ夜よやぐとうなー皆みな、家かい帰かてい家いえぬ妻め子こぬちやーしーてい、まじょーん正せい月つきし、又、新年しんねんぬ初まいから元氣げきそーてい、笑わらいかんとーていまた働はたちーがくいりよー」。んり。

それから、主人から錢十五貫せんじゅうごくわんとう肉二斤にくにけんなーや分わけてい持もたちやんり。へ十五貫じゅうごくわんと言ひたら、今いまの三十錢さんせんですなーへ十五貫じゅうごくわんなー分わけてい持もたちやんでい。あんしがまた十五貫じゅうごくわんやか話はなましやしえー話はな一言いつごんやていん話はな聞きちゆぶさせー、十五貫じゅうごくわんぬかわい話はな持もつち行ゆきぢとうらしんり、肉二斤にくにけんとう話はなとう持もつち行ゆきぢ。

昔、金持ちに下男げぎょになつて使つかわれている者が、大勢おおぜい集あつまつてゐる時に、そこで大晦日おおあいにちなのだが、大晦日おおあいにち、「今日は大晦日おおあいにちなのでみんな家に帰かつて家の妻と子供達と一緒に、正月せいがつをして、又、新しい年の初めには元氣げきで、笑顔えがおで働きに來くわてくれ」と言ひつた。

それから、主人は錢十五貫せんじゅうごくわんと肉二斤にくにけんづつを分けて持もたせたそうだ。へ十五貫じゅうごくわんと言ひたら、今いまの三十錢さんせんです、十五貫じゅうごくわんづづ分けて持もたせたそうだ。しかしまたた十五貫じゅうごくわんよりも話はなが好きで話はなをひと言いつごんでも聞きたい者は十五貫じゅうごくわんのかわりに話を持もつていつてあげなさい、と言ひつた。(ある人は)肉二斤にくにけんと話はなとを持つて行ゆきつた。

この山原に行く人が、下男げぎょが「私には、話を聞きかして下さい。十五貫じゅうごくわんは取とらなくともいいです」と言い、話を貰うけつたものの「そうならば、あなたは錢の十五貫じゅうごくわんよりも話はなの方が好きなんだね。話はなというのは、それは、くぬ山原んかい行ゆきちゆる人ひとぬンジャツクワぬ「私ね一話はな聞きかちくいみそーり」。りち、「十五貫じゅうごくわんのーとうらんていんしまびーん」。りやーに、話はな、貰うけたるむのー、「どーあんしえーいやー錢ぬ十五貫じゅうごくわんやか、話はなるましや

るい。話るんやれ、あんしぇー、牛巻ちがらくい、とー
くつびやさ」。「牛巻ちがらくい、くつびし十五貫やい
びんなー」。「いー、うつびし十五貫あたいんどー」。り。
うりから、泣く泣くになー、十五貫ぬましやたるむ
んやー、又、牛巻ちがらくいぬ話るましやたがやーり
ーしぇ、思案そーてい帰いるばーに、えー、ちょーど
う山ぬ中んかいはつちやかてい夕暮方に山ぬ中にはつ
ぢやかいるばーに、牛ぬうまんかい巻ちぶてい綱がら
くい巻ちぶていうたんり。牛ぬ、「くれーぬーがらー、
うぬ話んかい牛巻ちがらくいりーぬ話んかい当たとー
きー」。りち。

いへー、思案し通いるばーに、後じーんかい振ん返
らんぐーとうー、通たぐとう「エー、二歳！」り、う
ぬ牛ぬむぬ言いたんり。あんさぐとう、振ん返てい見
ちやぐとう誰ん居らん、牛びかーじるやたんり、あ
ー、ちむぬ思ーるやでーさやーりやーに、又通たんり。
又通たぐとう又、「エー二歳！」り。「珍しーむんや
つさー」。りち、又、振ん返たぐとう、やつぱり牛ぬむ
の一言いたんり、あんし牛ぬ、「いえー二歳、いやーや、
まーかいやらわんしむぐとう、ちゃつび急いでいとーら

牛巻きカラクイという話のことだ、これだけのことさ。
「牛巻きカラクイ、それだけで十五貫分ですか。」「そ
うだ、これだけで十五貫に当たる」と言つた。
それから、（下男は）泣く泣く、十五貫の方がよか
つたのになあ。又、牛巻きカラクイの話でよかつたの
かなあ、と思案して帰る途中、ちょうど山の中にさし
かかつた。夕暮れの山の中にさしかかつた時に、牛が
そこで（木に）綱をからませて、まつわっていたそ
だ。牛がね。「これは何だか、あの話に、牛巻きカラ
クイの話に値するではないか」と思つた。

(そうかなあ)と、思案して歩いている時に後を振
り返らずに、歩いていると、「おい、青年よ!」と
その牛がものを言つたそうだ。すると、振り返つて
見たら、誰もいなくて、牛だけがいたそうだ。「ああ
思いすごしだったのだなあ」と、又歩き出したそうだ。
すると、又通つたら、「おい、青年よ!」と(声がした)
「珍しいことだなあ」と思い、又、振り返つたら、や
はり、牛がものを言つたそうだ。そして牛が、「おい

青年、あなたは、どこへ行こうとも、どんなに急い

わんしむぐとう、いやークバ笠小んかい、水汲り、下ぬ川小から水汲りちやーに私にんかい飲まちくいり。り、牛ぬむぬ言いたんり。あんさぐとう、「いやーや水ふーさるばーい、ぬーんちいやーや牛どうていらむんむぬ言いが」りち、問たぐとう「あとうんかいわかれどう、今あ待つちよーけー」。りち、あんし、クバ笠んかい水えかきてい飲まちやぐとう、「二歳よー、心配さんぐとうに、私と話しくいり」、うぬ牛ぬ言いたんり。

あんさぐとう、うぬ牛ぬ言い分ぬ、「私ねー元お、山田カンジエーク注③ぬ牛やしが、かないるえーだー、若さるえーだーくん使やーに、よーがりていぶらないし、死な死なーさくとう、野原んかい持ちつち、捨ていらつとーんどー。あんしが、実えあぬー、山田カンジエークんかい、いやー今日行ぢ泊まやーに、あまぬ主人んかい、いつたー牛やたしが、あまんかい野原んかい、あぬ巻ちぶいそーしが、水かきていち、飲まちくいりりち、言ちやぐとう、水かきていち飲まちやんどーんり。飲まちやくとううまぬ家ぬ主人んかい、行ぢ泊まり」。んり、うりが言ちやぐとう「なーいつたーん、

でいてもいいから、あなたのクバ笠に、水を汲んで、下方の小川から水を汲んで来て、私に飲ませてくれ」と、牛がものを言つたそうだ。そうして「お前は水が欲しいのか、どうしてお前は牛なのにものを言うのか」と聞いたら、「あとでわかるので、今は待つてなさい」と。そして、クバ笠に入れて飲ますと、「青年よ、心配しないで、私と話をしてくれ」と、その牛が言ったそだ。

それから、その牛の言い分では、「私は（牛）元は、山田カンジエークの牛であつたが、元気な間、若い間はこぎ使い、やせ細りぐらぐらして、死にそうになつたら、野原に持つて来て捨てられてしまつた。でも、実はあの、山田カンジエークへあなたが今日行き、泊まつて、そこの主人に、あなた達の牛だつたのが、あそこの野原に、あの（物に）巻きついていたが、水をかけて飲ませてくれと言つたので、水をかけて飲ませてあげたよ。飲ませてあげると、そこの家の主人（の所）へ行つて泊まりなさい」と、それが（牛）言つていたので、「もう、あなた達も、狭せまくはあつても、大

いはきーあていん年ぬ夜げーなーやていん泊まらちく
いり。」りち言ち、泊まらちやんり。

あんしえー、泊まらす夜ぬ話ぬばーに、牛ぬんむぬ
言ちあびーんりいち、なー主人え合点のーさん、うり
から、「あんしえむの一言くとうるあぬ、言いんでい
るいる、言やんむぬ、むぬ言やびーんどーり、私ねー¹
ゆくしぬみー、ちやーしないびーが、とーあんるんや
いびーれー、かーきーしみそーれー。」

かーきーさぐとう「あんしえーいやーや、ぬーとう
らすが」りちやぐとう、「私ねー、人ぬンジヤツクワ
るやいびーぐとうぬーていーちんねーびらん。あんし
がむし負きーるしじるんえーるんさー、私が、うぬ牛
ぬむぬ言らんしじるんやらー、あー、一生涯、うんじ
ゆなーんかい、私ねー使つていゆたさいびーん。」り。
「うんじゅなー下男なていゆたさいびーん。」り、「あ
んやみ」「あんすらーとー、又、うんじゅが負きーね
ーちやーすが、うんじゅが財産の一全部取らすみ。」り
ちゃぐとう、「全部取らちしむん！」り。

あんしなーかーきーぬ始まやーに、牛えすびちちや
ーに「とーあんしえー、むぬ言ちくいりえ牛。」り言ち

毎日であつても泊まらせてくれ」と言われて（そこの
主人は）泊めてあげたそうだ。

そして、宿泊した夜の話の際に、牛がものを言つて
話をすると言つたので、もう主人は合点がいかなかつ
た。（下男は）「しかし、ものを言うから言うと言つ
ているのであつて、言わないものをものを言いますと
私は、嘘をどうしてつけるか、そう思いなるなら賭し
て下さい。（と言つた）

ふたりは賭をしたので、「それでは、あなたは何を
くれるか」と言つたので、「私は人の下男ですので何
一つありません。しかし、もし負けるようなことがあ
れば、（もし）その牛がものを言わなければ（私の）
一生涯を貴殿の所で（下男として）使つても構いませ
ん」と。「貴殿の下男になつてもいいです」と（言つ
た）（すると）「そうか」（と主人は言つた）「それ
では、又、貴殿が負けたらどうするか、貴殿の財産は
全部くれるか」と言つたので、「全部あげていい！」
と。（言つた）

そして賭が始まり、牛を引いて来て「それでは、も
のを言ってくれ牛」と言つたので、牛は、プーパーし

やぐとう、牛えブーブーしくさみちやーに、むのー言
やんない。あんさぐとう「だー、うぬ牛ぬむぬ言い
んなー」。りち、主人えなーいばてい、そーるばーに、
「なー、いやーや私、くわいんでいるやでーさやー、
ひーじー、私ねー一生涯くまぬなーンジャツクワなて
い働かんあれーならんさやー」。りち、牛ぬ首だち泣ち
やぐとう「心配すな二歳」り、むぬ言い始まいたんり。

「心配すな二歳、とー元おくまぬ財産の一、いつた
一むんやぐとう、いつたー親祖先ぬ儲き分どうくまー
横どういるそーぐとうやー、あぬーいやーとうり。か
ーきーし勝つちよーぐとう、くまぬ財産の一全部いや
ーむんやさ」。り、牛ぬ言ちやぐとう。「とーあんしえ
年ぬ夜げーなーまーにん行ぢてー行からんぐとう今日
一日やなー、いつたーとう一緒あぬー共同生活しみ
ていくり」。りち、年ぬ夜よーやくうまうていしまちや
んり。

あんし、しまちさぐとう翌日ぬ又話ぬ、うぬ牛ぬ話
ぬ、「今度お私ねー、あぬー、真栄田カンジエークぬ
牛え沖繩ぬ一番強牛ぬうぐとううぬ牛とうおーらしえ
ー、かーきーし来よー」。りちやくとう、「いやーや、

て怒つて、ものは言わなくなつた。そうしたら、「それ見よ、この牛はものを言うか」と、主人は、威張つて、そうこうしているうちに「もう、お前は私をかつこうとしていたんだなあ、毎日、私は一生涯ここの中男になつて働かねばならないなあ」と、牛の首を抱いて泣いたら、「心配するな青年」と、ものを言い始めたそうだ。

「心配するな青年よ、元は、ここの財産は、あなた達のものだつた。あなた達の親、祖先の儲け分をここは、横取りしているのでね。あなたが取りなさい。賭をして勝つたのだから、ここ財産は全部あなたのものさ」と牛が言つた。(青年は)「それでは大晦日といふこともあるし、どこにも出て行くことはできないので、今日一日は、あなた達と一緒に、あの共同生活させてくれ」と、大晦日は、ようやくそこですませたそ

うだ。

そして、(大晦日は)すませたが、又、翌日の話の中で、「今度は、私はあの、真栄田カンジエークの牛は沖縄で一番強い牛だというから、その牛と喧嘩をさせる、賭けをして来いよ」と(牛が言つた)「お前は

あんしぶらないし、よーがりているうるむんぬ、おー
れーやーんでい思いんなー牛。」りち。「あらんいやー
んかい財産とうていどうらするたみるやぐとう、おー
いるちむえーあらんしがやー、おーえーしかきーねー
あまーくさみちゅん、私達あ牛え国ぬ番外やしがやー
いつたしよーがり牛小、捨てい牛小ぬおーらりーんち
やるばーいんでい、怒ーぐとう、うんにーねー、りー、
あんしぇー財産ひつとういるーし、かーきーさー。」に
又、うまんじん財産とういるかーきーさんり。

あんしかーきー、やつぱり牛ぬ言いるとうーい、か
ーきーむくるだち行ぢやぐとう、なーうまぬ主人えく
さみち、「あんどうんやらーかーきーしんしむん。」り
ち、かーきーさぐとう、うぬかーきーぬ日などーぐと
う「いやー是非勝つたんどうんあれー、私、せつかく
とうつていとうらちえーる財産水の泡ないくとう必じ
勝つちくいりよーやー。」りちやぐとう、「とー、おー
らんていん勝たりーる方法ぬあんどー。片角かいハ
カイくんちさぎりんり、片角ぬんかいチヨーバンぬ
底抜ぢやーに四角ぬ粹、粹ぬまま、あー、片角かい
はきてい、斗牛場んかい入りりよー。あんしーねー

このように（足が）ぐらつきやせているのに、喧嘩し
ようと思うのか牛。」と（青年は）言つた。「いや、あ
なたに財産をとつてあげるためだから、喧嘩するつも
りはないが、喧嘩をしかけたら、相手は怒るでしょ。
(何故ならば) 私達の牛は国の番外だし、あなた達の
やせ牛、捨てた牛が喧嘩できると思つていいのか、と
怒る筈だから、その時は、それじゃ（負けたら）財産
を奪い取る、賭をしよう。と言つて、そこでも財産を
取る賭をしたそつだ。

やつぱり牛の言う通り賭をもくろみ（計画して）行
つてみると、もうそこの（真栄田カンジエーク）主人
は怒つて、「そうならば賭をしてもいい。」と言つて賭
をした。その賭の日になつたので「お前は（牛）、是
非勝たなければ、私は、せつかくとつてくれた財産が
水の泡になるので必ず勝つてくれよね」と言つた。
(牛が)「それじや、喧嘩しなくても勝てる方法があ
る。片角に粹をくびつて吊し、片角は枠の底を抜い
て、四角の粹、粹のまま、各々角にはめて、斗牛場
に入れてくれ。そうしたら、それを見て向こうの牛は
驚き、喧嘩をしなくなるからね。（相手が）あなたは

「うり見ぢやーなかい向ぬ牛え、驚るち、おーらんないぐとうやー、いやーや仕掛けそーぐとうるうぬ牛えおーらんらる、言いくとう、うんにーねー又、取やーに、あんしぇーおーらさやーりち、取やーに斗牛場うてい向しょー、あんしななーうぬ牛え、しかどーくとうおーらんぐとうあぬ、いやーや勝つちゅさ」。り。

あんさーにかーきーぬ日ねー、やつぱり牛ぬ言いとうしい、チョーバンとうハカイとうかきていい出ぢやちやんり、あんさぐとう牛え、やつぱり、牛ぬ話ぬとうーい向らんなやーい、えー勝つちやんり。勝つちやぐとう、なーうぬ牛え、「財産ぬん取ていとうらちなー私ねー、安心なーくなとーんどー。山田カンジエークぬ財産までいいやーんかいとうつていとうらしぶきたん」でいち、「山田カンジエークぬ財産ぬん取てい真栄田カンジエークぬ財産ぬんいやーんかい取らちえーぐとうやー、本当から言いねー、私達あ子孫やしがあぬ、どうく誠ぬゆーしじや誠ぬふり者なやーにや、貧乏こーりとーるしじるやる。私にん又、元おあぬいつたー、親祖先やしがやー、親祖先え亡しみせーね、あぬ後生極樂しぬ後お天ぬんかい昇ていぬ後お露ん

仕掛けをしているから、その牛は喧嘩しないのだと言う筈だから、その時は、又（仕掛けを）取つて、それでは喧嘩させようと言つて斗牛場で向かわしてくれ、それでも、もう牛は、おびえているので、喧嘩しないから、あの、あなたは勝つき」と言つた。

そして賭の日には、やつぱり、牛の言う通りに、耕と秤とを（牛の角に）かけて出したそうだ。そうしたら（相手の）牛は、やつぱり（教えた）牛の話の通り向かわなくなつて、勝つたそうだ。勝つたので、もうこの牛は、「財産も取つてあげたし、私は安心している。山田カンジエークの財産まで、あなたに取つてあげたかつた。山田カンジエークの財産も取つて、真栄田カンジエークの財産もあなたにあげたので、本当から言え巴、私達の子、孫であるが、あの、あんまり誠すぎて、それに馬鹿正直者だったので、貧乏人になつてしまつたことだから、私も、又、元はあなた達の親、祖先であるが、親、祖先が亡くなつて、あなたの後生、極樂した後、天に昇つての後は、露になつて、雨露になつて自分の野菜畑に降ちて、その野菜は露の

かいなでい、雨露^(あめのしら)ない自分ぬ野菜^(やさい)煙んかい降ていや
ーに、うぬ野菜んかい露ぬ力借やーに、野菜ぬ榮て
んじ。うりから、うりがあぬ精力^(せきり)さーに、子孫^(こそね)あ榮て
いちゅんどー」り。「あんし、貧乏者^(ひんぱうしゃ)なたる為んかい
私ねー、畑小^(ばたこう)に小^(ち)さる畠小^(ばたこう)ぬ草んかい、野菜作たぐ
と、降ていやんじやーにうぬ野菜んかい降ていど、刈り
しじやしが、畠小^(ばたこう)ぬ草んかい降ていど、刈り
喰^(く)ざりやーい、私ねー、動物^(どうぶつ)なとーんどー。あんさぐ
と、本當^(ほんとう)から言^(い)ねー、私にん、人間^(じんげん)生まりーしやし
がやー、あぬー貧乏者^(ひんぱうしゃ)ぬさたー畠小^(ばたこう)ぬ野菜^(やさい)煙ぬ（煙ぬ）
がんかい、いつたー親祖先^(しんそくせん)ややしが、動物^(どうぶつ)なとーぐと
うや。あぬー、とーなー、いやーん立身^(たち)すくと、あ
ぬ、立派^(りつぱ)に私にん何月何日に、あぬ、道ぬあじまーん
かい出^(しゆ)じやざーに私殺^(わざ)さーにやー、皆んかい、通^(つう)いる
人ぬんかい皆かいう汁と、んな汁と、肉煮汁よー、う
りと、一杯^(いっぱい)なー飲^(の)まち、又牛ぬ肉、一かきやらわん、
二かきやらわん食まち、「御馳走^(ごちそう)さびたん、山田ぬ力
ンカー」^(注⑤)でい言^(い)ちくいりよー」んでい頼^(たの)まーに、うに
んから、「御馳走^(ごちそう)さびたん山田ぬカンカー」んでいし
が始^(はじ)まい。

力を借りて、野菜が繁つていて、それから、その雨
露の精力によつて、子、孫が栄えていくのだよ。そし
て、貧乏者であつた為に私は、小さな畠の片隅に、野
菜を作つたのであるが、その野菜に降ちるつもりが、
誤つて畠の畦の草に降ちたので、刈りて(家畜^(かちゆう)に)喰わ
されて、私は、動物になつてゐるんだよ。だから、本
当から言えба、私も人間に生まれるべきだが、貧乏者
なるが故に野菜煙が小さかつた為に、あなた達の親、
祖先であるが、動物になつてゐるからね。あのもう、
あなたも立身するでしよう。それから、私も何月何日
にはちゃんと道の角に出して私を殺して、(道を)通
る人みんなに、お汁と、中身のない汁を、肉を煮た汁、
これを一杯づつ飲ませて、又、牛の肉、一片けでも、
二片けでも食べさせて『御馳走^(ごちそう)しました、山田のカン
カー』と言わさせてくれ。』と、頼んだ。その時から、
「御馳走しました山田のカンカー」というのが始まつ
た。

あんさーに今度お又、「あんしえーいやーやあぬ、ち
やーしいやー、うつさる財産も一きてい取らちやるいや
一殺さりーが、手かきていいやー殺すぬくとうぬないや
が」りちやれー、「私ねー動物リーネー、刃物かか
らんかじれー極楽あらんぐとう、動物んかいやつぱり
生まりわからー、道ぬあじまーんかい出じやち殺ち食か
まち、『御馳走さびたん』りち、皆うまん人、いり
きさしみり」んちなー。「うつびさーに厄ーはりてい
又、いやー子なてい生まり変わいんどー。生まり変わ
いる為に私ねー殺ちくいりりち言いぐとうやー、い
やー、自分ぬ子、産すんりる思てい殺ちくいり」り、
「とー牛、いやーや勘違げー、やつぱり、あぬ、あん
しえー私ねーいやーぬ言るとーい殺ちしむるくとうや
しがやー、妻んうらんあるんむぬ、ちゃーし子ぬ産さ
りーが」。「うれー、ひちまーしぐとうぬあぐとう、親
祖先ぬひちまーしぐとうぬあぐとう、いち何時がうま
んかい女ぬはいじやちぢやーに、子ちゆくいちわから
んぐとうやー、うれーむし、あぬー、いやー子やみ、
あらにんでいぬくとーやー、牛ぬ角ぬ形ぬ左ぬ肩先ん
かい、家ぬ後んかいよー、見らんぐとうし、牛ぬ角ぬ

そして今度は、又（青年が）「そんなことを言った
つて、どうしてお前を、（こんなに）多くの財産
をかせいてくれたお前を殺すことができるか、（自分
の）手をかけてお前を殺すことができるか」と言うと
「私のような動物というのは、刃物によつて殺されな
い限り、極楽じやないので、動物に生まれたからには
やつぱり、十字路に出して殺して食べさせ、『御馳走
しました』と多くの人々を喜ばせて欲しい」と言った。
(さらに、牛は)「これだけで、厄ははれて、又、あ
なたの子供になつて生まれ変わるよ。生まれ変わる為
に私は（牛）「殺してくれと言つてるのだから、あな
たは、自分の子供を産むと思つて殺してくれ」と頼ん
だ。「ねえ、牛よ、お前は勘違い（してい）る。やつぱ
り、私はお前の言うとおり殺してもいいが、私には妻も
いないのに、どうして子供が産めるか」「それは、め
ぐり逢いというのがあるから、親、祖先のめぐり合わ
せがあるから、いつなん時、ここに女性がやつて来て
子供をつくるかわからないからね。これは、もし（で
きたとすれば）あの、あなたの子供であるか、ないか
ということはね、牛の角の形が、左の肩先に、背の方

形ぬい一ぐとう、うれー私り思り」り。「あんすかど
うんやらー、殺ち、皆んかい、うさぎやーに厄ばりす
ぐとう。」んち殺ちくいやーに「御馳走さびたん山田ぬ
カンカー」りち、言ちくいり。」りやーに、通いぬ人んか
い皆肉一かきなーくいやーに、汁どう飲まさーにやら
ちゃーに「御馳走さびたん山田ぬカンカー」ぬ始まい。

うりから、あんきーに、うりからしばらくし山原か
ら、女ぬはいいちちやーに、「泊まらちくいり。」りち
やぐとう、「泊まらちんしむるくとーやしが、くまー、
男主びけーんるやぐとうや、女ぬ、女ぬうらんくとう、
むし間違んでーぬ、えーたいしーねーでーじやぐとう、
あぬ泊までーならん。」でい言ち、断とーしが、「うん
じゆがちやんぐとうーしみそーらわんゆたさいびーぐ
とう、泊まらちくいみそーり。」んり、なーうま、道ね
一眠らんぐとう泊またんり。泊またぐとう、二人う
まうていけーいぢややーに、やつぱりボージャー作
たんり。ボージャー作とーしがなー、わからんなやー
に、うぬ女お自分ぬ家かい帰てい行ぢ。

に見えないように、牛の角の形が入るので、それは(子供)私だと思いなさい。」「それほど言うなら、殺して、みんなに上げて厄払いするから」と言つて(牛の願いどおり牛を)殺して食べさせた。そして、「『御馳走しました山田のカンカー』と言つてくれ」と言い、通る人みんなに、肉一切れづつあげて、(その)汁も飲まして行かせた。(その後に)「御馳走しました山田のカンカー」が始まった。

そして、その後しばらくして山原から、女性がやつて来て出会い、「泊めてくれ」と言つたので、「泊めてあげてもいいが、しかしここは、男主だけなので、女性がいないので、もし間違いが、おこつたら大変なことになるので、泊まつてはいけない」と言つて断つたが、「あなたが、どんなことをしてもかまいませんから、泊まらせて下さい」と言つた。もう、ここ、道では眠れないでの、泊まつたそうだ。そういうことで、二人そこで出会つたので、やつぱり子どもができたようだ。赤ちゃんはできているのだが、そうとも知らずに、この女性は自分の家に帰つて行つた。

産し生まらしさーに、なーやがていタンカーンなで
いから、夫とうめーてい来るばー。うまに、山田カ
ンジエークとうめーてい、「うんじゅが子、うんじ
ゅなー家かい泊またるばーに、うんじゅが子、妊娠て
いやー、そーぐうとう、あぬなー今から、私一人せー
育ていーさんぐとう二人し育てていくいり」んち、
願え持つち来るばー。男ぬ、女ぬ、うぬ童そーていあ
んさぐとう、「あーとー、一夜ぬ子りちんあがやー、
どうく珍まさぬならんさーやー」りち、「あんしが、
私にん心んかいあぬ、勘とういぬ所ぬあぐとうやー、
一応、うぬ童調びらちくいり」りち調びたぐとう、左
ぬ肩先んかい牛ぬ角ぬ形ぬじゅんにいつちよーたんり
るばー。あんさーに、証拠でいーしるばーて、あんさぐ
とう、「あーとー、くれーなー間違ねーらん、私あ子や
くとう、あんるんやらーいやーうまうてい一緒に育て
いていくいり」りち。あんさーに、うぬ証拠りーしん
牛ぬ角ぬ形んかい似ちょーしん、山田ぬカンカーぬ始
まいに習ーしかた。

うりから、「御馳走さびたん山田ぬカンカー」りし

そして赤ちゃんは生まれて（その子が）もうすぐ誕生日になる頃、（女は）夫を捜してやつて来た。ここに、山田カンジエークを捜して、「あなたの子供、あなた家の家に泊まつた時に、あなたの子供を妊娠して、もう今からは私一人では育てきれないでの、（あなたと）二人で育てたいのだが」と、願いを持って来た。男（の所）へ、女がその童をつれて來たので、「まさか、一夜の子供というものあるのかなあ、とても、珍らしくてしようがないね」と言つた。「だが、私にも心当たりがあり、考えられる所があるので、一応、この童を調べさせてくれ」と言つて調べたら、左の肩先に、牛の角の形がちゃんととはいつていたそうだ。それは証拠というのだ。そして「ああ、これは間違いない、私の子供である、そういうことであればあなたは、ここで（私と）一緒に育ててくれ」と頼んだ。そして、その証拠といふことも牛の角の形に似ているということも、山田カンカーの始まりとして伝えられてきた。

それから、「御馳走しました山田のカンカー」と

ん、ちょーどう、山田ぬ恩納村山田から始まやーい、
うりが、各村、今度お又、いい事やぐとうりやーに、
うれ一部落ぐとし習タタキやーによー、シマクサラシタタキ始
まとーるばー。豚ぬ、フーチ年タタキるばーに、フーチかか
らんぐとうに、フーチに神ぬ、「ふえーしまの牛は
らていうたびみそーり」りち、あぬ左繩タタキへあぬ、しめ
繩タタキてー、しめ繩タタキのーやーに、部落ぬ入口んかいうり
なー、はてい道ぬタタキーんかい、あんさーに鳥ぬ骨やら
わん牛ぬ骨やらわん、くんち、うりんかい吊ハシてい「く
まぬ動物タタキえ、全部フーチかかやーに、くんぐとうー
し死タタキじ、不利などーびーんどー」あんすぐとうなー、
フーチぬ神えなー、うまんかい入タタキつちえーならんどー
りやーになかい、追い放タタキいぬ為タタキるなかい、シマクサラ
シ、んり。又、牛ぬまちぶとーたんりやーなかい「牛
がらくい」り。これでだいたい終わり。

いうのも、ちょうど、恩納村山田から始まつて、それ
が、各村、今度は又、よい事といふことで、部落ごと
に習つて、シマクサラシが始まつたわけだ。豚がフ
ーチにかかつた年に、フーチにかかるないよう、フ
ーチの神様に「牛の厄タタキを南の島へ追い払つて下さい」
と、あの左繩、へあのしめ繩をしめ繩をあんで、部
落の入口にそれをはつて道の上に（はつて）そして、
鳥の骨でも牛の骨でも、くびつてそれに（しめ繩）に
吊ハシして、「こここの動物は、全部フーチにかかり、この
ように死んで、不利になつています」と。そうしたらも
う、フーチの神様は、そこには入ハシつてはいけないと言
つて、（そのしめ繩は）フーチをおつ払う為に、シマ
クサラシが始まつた。又、牛の（綱が）もつれて（人
の助けを求めた）ということで「牛がらくい」という。
これでだいたい終わりです。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第九班 〔山内源徳、上地久美、知花啓子、大宜味光一、屋宜美佐子〕

注① 農村における奉行人。貧者が富農から前借金をしてその利息の分として元金返済まで月額いくらと定めて、年期奉行をさせる。

大体、男子十三〜二〇歳頃まで奉行させた。戦後は見られなくなつた。

② 別紙参照。

③ 恩納村山田の鍛治職のこと。現在、山田カンジャ一（鍛治）跡が、旧部落西側にある。戦前までは、各村ごとに鍛冶屋があつて、農具の修繕等を行なつていた。

④ 恩納村真栄田鍛治職のこと。

⑤⑥沖繩における年中行事の名称で、一般的にシマクサラ一と称している。村によつて月日は異なり一月、七月、八月、十一月頃に行つてゐる。読谷村喜名では二月と八月の二回行なわれ、カンカ一と称してゐる。牛や豚を殺し、その血をギチチャ一の枝につけ各家の四隅にさして悪疫払いとする。また部落の入口に左縄に牛骨を吊るして悪疫の侵入を防ぐ。

⑦ 風氣の訛りで、流行病名。ここでは、豚の流行病を指してゐる。このフーチは農家には大変恐れられてゐる。

アカマタ一と浜下り²⁴

話者 渡嘉敷 兼求（明治十三年六月十五日生）

翻字 神谷初子

人間ぬイチムシンかいだまさつていやー。あんそー
てーるぐとーしが、うりからぬ話やるぐとーん。

あんし、人間ぬやーさい、イチムシンかい、ヘイチ
ムシンでいねー、何イチムシンでーがるんやれー、ハ
ブーうりんかいごまかさつとーるぐとーん。

あんし、しさぐとー、うりから親達ぬ考ていさーに、
うり、あぬ、うぬ女^{ウガ}から、いやーや、ちゃーし、うぬ

それで、その時から、親たちが考えて、それを、あ
の女から聞いた。お前は、どうして、その人と、どこ

人間が、イチムシ（動物）にだまされてね、だまさ
れたそつだが、そのことがあつて後の話だそつだが。

あのう、人間がですね、動物にへ動物というのは、
何かといふと、ハブのことである。ハブにだまされた
そつだ。

ひとつぐまんじ、くえーてい受きてーるぐとーさイチ
ムシとう。

あんしさぐとうやーきい、うり定みーんでい、あぬ、
かんやてーるふーじ。「ちやーしきが」んでい言ちや
ぐとう、「大麥ちゅらむんやしが、うぬ、うまつちか
ばさんあい、なー、服んちゅらむんやしが、私が寝ん
ていから、あぬー、うまつち、うぬ人がちやんぐとう
ーがさら、うぬあてーむる分らん」でい、母親んか
い話しせーるぐとーん。

さぐとー、母親ぬ考やー、くれー、ちやーしん、あ
ぬイチムシやんでいるぐとー、ハブ^{注①}やんでいるぐとー
母親や察しとーるぐとーん。「とー、うりが、なーー
回^回ちゅーるばすねー、うりが頭^頭んかい、へうぬ昔^昔えー
くぬ着物^{着物}作いしよーさい、ウーバー^{ウーバー}_ラ^{注②}んちかんしウー
小ちなじゅしがあたさーうりが一杯入つちよーしんか
い、針^針ぬ目^目ぬちやーにやー。とー、うりが来るんさー、
うりが頭^頭んかい突^立つ立^立ていやーに、うり追^追つい行^行
んでいちさぐとう。

うり追^追つい行^行ぢやくとう、穴^穴かいうれー入つち行^行
ぢえーるぐとーんやー。あんしさぐとう、うれーハブ

で仲睦つまじくなつたのか、動物（ハブ）のようも
のと。

そこでですね、人か、動物か確かめるために、あの、
こうしたそうだ、「どんなものだつたのか」と言うと、
「大麦きれいな人だが、その、ここに来て、とても良
い匂いがして、服装も、立派なものを着けて、私が寝
た後で、その人が来て、どんなことをしたのか、全く
見覚えがない」と、母親に話したようである。

すると母親の想像では、これは、どうしても、あの
動物で、それはハブではないかということを、母親は
察していたようだ。「そうだね、それが、もう一度や
つて来た時は、その頭に、昔は、着物を織るには、
ウーバー^ラ（竹かご）といつて、芭蕉の糸をつむいで
入れるのがあつたが、そのかごに一杯入つてている糸を、
針の目に通しておいてね、そして、それが来たら彼の
頭に突き刺して、それをたどつて行きなさい」と言つ
た。

その糸をたどつて行くと、穴にその糸は続いて行
たそだ。つまり、それは、ハブだつたそだ。

やたんでい。

あんし、うりから、生まりたる子あちゃんぐとうー
なたがるんやれー、うれーなー、ちやつさんでいちえ
ー、うれーさん、うれーなー、いーさく成長えーかー
育ていてーるふーじ。さぐとー、うれー、天からがや
たら、うれー分らんしが、「うりが幾ちないねー放
ちやらしょー」んちやくとう、穴んかい入つち行ぢよ
ーるぐとーん。ハブとう一緒に遊ぶたんでい。うりだ
きぬ話。

沖縄とうしぇー、かん言んしぇーたんよーさい。三
月え女ぬアシビンでい。なー、男ぬシチビ^(桂)でいしぇー
五月えーゆたさしがやー。三月えー女ぬアシビンでい
ち。

それで、そのハブから生まれた子どもは、どうなつ
たかというと、それはもう、いつまでということでは
なく、その子が、いくらか成長するまで（その女の家
で）育てたそうだ。すると、それは、天からのおさず
けだつたかも知れないが、「その子が、幾つになつた
ら、放して行かせてね」といわれた通りにすると、穴
に入つて行つて、ハブと一緒に遊んでいたそうだ。こ
れだけの話さ。

沖縄では、こう言つておりましたね。三月は女のア
シビ（節供）の月で、男の節日（折目）は五月にある。
三月は女の節供であると。

注① 話者はハブと言つているが、一般的にはアカマターになることが多い。

② 芭蕉の繊維を入れる籠。「ウー」は芭蕉の繊維、「バーラ」は籠のこと、竹で編まれたもので、直径三五センチ、高さ一〇セン
チくらいの籠。

③ ④旧歴三月三日は、読谷村でもハマウリー（浜下り）とか、サングワチャ（三月祭）と称して、現在でも女兒のためにウジュー
(お重)を作つたり、あるいは潮干狩りをして遊ぶ風習がある。この三月の女のアシビは、もともとは神アソビ的なものであ

つたと思われるが、後には、村芝居などの余興一般をアシビと称し、現在では子供の遊びまで含めてアシビと称している。一方、

五月四、五日は沖縄各地の漁村では、男子を中心にして、ハーリーと称する舟競争があり、また、読谷村では、三月三日が女兒のお重を作る日に對して、五月には、男児のためにお重を作る日がある。

そういう行事をさして、男のシチビと称しているのであろう。シチビは節日でウユミ（折目）とともに、年中行事をさす古い民俗語である。

25 力マンタとアカマタ

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知花孝子

カマンタ注①地ちねね、置おきかんぐぐーとうう、木木んかいささぎぎていてい、木木んかいささぎぎややーにに、置おきちょよーーていてい。

うぬカマンタ注②、地ちんかい置おきちよよーーていていさくとうとう、うぬアカマタ注③ぬぬ、うまうていてい、しでいややーにに人ひとぬシしーーや受うけききていてい、男おとこんん人ひとんかい化ほりりていてい、化ほりりややーにに、あんんしし、うぬ女めととうう、寝ねんじじややーにに、あんんしし、うれれーーかささぎぎていてい。

あんさーにに、三さん月げつななたくたくとうとう、親おやぬぬ「りりつかつかー、ハハマウマウりりしつしつくくーー」ーんんりり、浜はんんかい連れんおおていてい、行いぢぢ

カマンタ（鍋蓋）は地面に置かずに、木に吊して置くものだとよくいわれている。

（しかし）それを地面に（ふせて）置いたためにアカマターがその蓋ふたの下で孵化はふか（脱皮だつひ）し、人間の精せいを受け入れて男の人に化けて、化けてですね、そして、（ある日）その女人の人と（仲良くなつて一緒に）寝たようだ。すると、女は妊娠してしまつた。

それから、三月になつたので、（アカマターのことを知しつた）親おやが、「さあ、浜降はまおりりに行いこう」と誘いざない、

やぐとう、アカマター、じやらない産ちえーたんり。

浜辺に連れて行くと、（女は）アカマターの子を沢山
産んであつたそよ。

採集 S 51・10・17 読谷村民語調査團第五班 〈山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子〉

注① 農家でさつま芋等を煮るシンメーナービ（四枚鍋）等の鍋蓋、茅やわらを竹ひごで編んで作る。

② 琉球列島中央部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部、与論島、久米島、渡名喜島、沖繩本島とその属島（浜比嘉島、伊計島や宮城島などを含む）に広く分布している無毒蛇で体長一三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で主として夜間活動する。

26 アカマターにだまされた美女

話者 松 田 ミ ョ（明治四一年二月一日生）

翻字 島袋 オツル

三月 えーあれー、あぬ、ある人ぬ、美人い女ぬうた
んでいせーやー。うぬアカマター注①ぬ、くぬ女うすいが、
美二歳んかい化きて、赤手拭かんていうすいがちゅ
ーたんでいせーやー。

うすてーしーしーしー、はちえーしーしーしそーせー。

うり（女）が分らんせー、うすらつていん、分らん

三月（三日の由来はね）それは、ある美人の女がいたそうである。このアカマターが、この女を誘いに、美青年に化けて、赤い手拭をかぶつて誘いに来たそうである。

誘いに夢中になり、通つてはいるけれども、女には分らない。誘われていても、分らないので、しまい

ぐとう、あと一うまぬ。主ぬが分たらー、「いやー前
んかい来る男や、あれーそ一人やあらんやー、あれ
ーアカマターるやんどーやー。」んちやくとう。「あん
ねーあらん、美二歳るやる。」んち、聞かん。「とー、
あんるんやらー、ありが額んかいやー、針^(注②)んかいウー
へ昔^(注①)えー、ウーむいせーやー、うりんかい刺さ
ち見ち、ありが後ちび追てい見でい。」んでい言ちやぐ
とう、追てい見ちやぐとう、んちや、穴小んかい入^入
りんちゅつさいやー。

あんさぐとう、うれー、アカマターン子^あるカサギと
ーせーや。三月三日^(注③)あまんじうるしわる、浜くらみ
ーねーうるすんちやぐとう、浜くらみていうるちやぐ
とう。んちやアカマターン子ぬる出^出じーたんでい。

うつさる私にん聞ちえーるむん、なーひのー、何や
が、くいーやがしぇー聞かんてーるむん。

には、そこの主が気がついて、「あなたの所に来る
男は、あれは、本当の人ではなく、あれは、アカマタ
ーなんだよ。」と言った。「そうではない、美青年だと
思う。」と言つて聞き入れなかつた。「なら、そうだと
思うなら、あれの額に、針に芭蕉で作つた糸へ昔は、
芭蕉で布を織つていたを通し、刺して行かせて見て
アカマターの後を追つて見なさい。」と言つたので、追
つてみると、なるほど、穴の中に入つて行つてしまつ
た。

そうだつたので、女は、アカマターの子を妊娠して
いるのである。三月三日には、むこう(浜)で流産さ
せなければ、浜の砂を踏ませば流産できると聞いて、
浜を踏んで下した。言つていた通り、アカマターの子
が出て來たそうだ。

これだけしか、私も聞いていない。もつと他に、ど
うのこうのは聞かなかつた。

③ 現在でも、旧暦三月三日はハマウリーと称する行事があり、特に女子は浜下りをすべきだという信仰がある。このアカマターと浜下りの伝説は広く語りつがれている。

27 三月三日浜下り由来

話者 松田栄清（明治二八年一月二〇日生）

翻字 島袋喜美子

神谷初子

あぬー、三月三日女の節句^{注①}でいいやぎーしえーやー。

あれーぬーから三月三日^{注②}あ女ぬ節句^{注③}やがでいーねー、

アカマタ^{アカマタ}ーぬ人んかい化^ハきて^ハいよ、あんさーい、なー
うぬ部落^{アカマタ}ぬ美女^{アカマタ}だまち、女ぬ座敷^{アカマタ}んかい忍^ハでい來^ハやん

でいるばーてー。あんさくとう、親達^{アカマタ}ん、「不思議^{アカマタ}や
つさー、ぬーがあんしえー、誰^{アカマタ}ん見^{アカマタ}らんしが話^{アカマタ}や聞^{アカマタ}か
りーしが、何^{アカマタ}やがやー」でいち。親達^{アカマタ}ん感じ^{アカマタ}やーに、
「いやーや、昨晩^{アカマタ}え、誰^{アカマタ}が來^{アカマタ}たが」親達^{アカマタ}んかい説教^{アカマタ}さ
つたくとう、「誰^{アカマタ}んちん分^{アカマタ}らんしが不思議^{アカマタ}な事^{アカマタ}やた
つさー」、「えーあんやみ」んち、親達^{アカマタ}感じ^{アカマタ}いさぐと

う。

うりから昔^{アカマタ}あぬー、ウー、くぬバサージン^{アカマタ}作^{アカマタ}いして

それから昔^{アカマタ}は、ウーといつてこのバサージン（芭蕉^{アカマタ}）

1、ありウーバーラんかい、ウーバーラぬいつぱいん
かい、かんしちなじ入つてーくとう。「とーあんしえ
ー、むしちよ今日来るもんどうんやらー、あぬ、針はぬ先さき
かいうぬ糸いとちなじ、ありがうんちよーびへ今ぬかたか
しらでーーうりんかい通つちやらしよー」んでい親おやぬ言
ちさくとう、「うー」んでい。あんしなー、うりやら
ちやくとう、うぬアカマターどうやくとう、ガマンか
い。うぬ糸いとさとうてい翌日あした行ゆぢやくとう、行ゆぢよーたん
でいるばーてー。「とー不思議ふしきぎ、くれーなー、ちやー
されーしむが」でいち。

うりから、うぬ女めのお妊娠わがまそーんでい、アカマターぬ
妊娠わがま。さくとう、「くれーちやーてーしむるむんが」。
でいち、家内中心配かぶそーるばーてー。

うりから昔むかぬ、あぬ昔むかぬ伝話だんわぬ、とー女めのおうんぐと
うする場合ばや、浜は下さりしみーしやんでいっさーでいる
ぐとうんかいなてい、うりから浜はぬ白しろ浜はあぬー、砂いさごく
らみるんせー、うぬアカマターぬ、うり見みちよーるば
ーてー、あんさぐとう、海うみんかい連つれおてい行ゆぢ、三月さんげつ
三日さんじつに海うみんかい遊びあそびんが行ゆぢやぐとう、うぬ砂いさごくらみ
たくとう、んちや、うぬアカマターぬ子こぬサラサラ出で

布ぬの着物きもの)作つくる糸いとだがね。それをウーバーラのいつば
いつないで入れておいた。「もし、今日(アカマタ)
が)来るんだつたら、針はの先に糸(ウー)をつないで
その化け物の結髮くわいがにへ今の片頭かたずきさして行かせなさ
い」と親おやが言うと、「はい」と答こたえて実行じつこうしてみると、
(やつぱり)それはアカマターだつた。洞穴うきあなにその糸
を辿たどつて翌日あした行ゆつてみると、洞穴うきあなに入はつていたそうだ
よ。「これは不思議ふしきぎだ、これはもうどうすれば良いの
だろう」と考かんえた。

それからその女は妊娠わがました。アカマターと妊娠わがました
ので、「これはもうどうすれば良いのだろう」と家中
が心配こころしたそうだ。

それから昔の、その昔の伝え話に、女がそうなつた
場合は、浜は下さりさせるものだということになり、その
時から浜の白砂しろいさごを踏めばそのアカマターの子は流産りゅうさん
するということだった。それで海に(妊娠わがまを)連れて行
つた。三月三日に海に遊びに行くと、(そこで)白砂
を踏むと、思った通りにそのアカマターの子がぞろぞ
ろ出て來たという物語ものがたりりである。

じたんでいる物語でいるばー。

あんし、なー、うぬ^{なんたまし}ぬぎてい、氣絶^{きぜつ}なら
なら一さぐとう、よーやく命^{いのち}とりとめやーい。あんし
から三月^{さんげつ}三日^{さんじつ}女^{めの}ぬ浜^{はま}遊びすんでいるくとうぬ昔^{むかし}物語^{ものがたり}や
るばー。

そこで女はびっくりして氣絶しそうになつたが、よ
うやく命をとり止めたということで、この時から三月
三日の浜遊びをするようになつたという昔物語がある
んだよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第四班、(天久節子、金城清美)

注① 52頁の注③参照。

② 50頁の注②参照。

28 ショウジョウにさらわれた女^{おんな}

話者 渡嘉敷 兼求 (明治十三年六月十五日生)

翻字 上原ヨシ

ソージョー^{注①}ぬくとう話しんじゅみ。猿、猿なかい
や、あれ一種^{ひとき}ぬ一^{いち}えーあらんよー。あぬ幾^{いく}ちんあん
よー。へ貴方達^{あなた}や見^みちえーんーだに。見^みちよーみ。見^み
ちょーらや。へあれ一種類^{ひとくわい}にゆつてい大^{おほ}変^{へん}ちがとーん
どー。ソージョーりち、同^{どう}ぬ猿^{さる}ぬ種類^{くわい}なかいよあさ。

ショウジョウのこと話をみてみようか。猿は一種類
ではないようだね。あの、幾種類もあるんだ。へ貴方
達は見たことがないか。見ているかな、見ているね。へ
あれ(猿)は種類によつて大変違うんだよ。ショウジ
ョウというのは猿の種類に入る。ショウジョウの思考

あれ一物思や人間やか少る落ていとーんでい。またく
ぬ人ぬ姿見じゆるふーじどー。女んでー姿見じゆるふ
ーじー ゃん。

あんやしが、ある時、うれー内地うていぬ話どー、
沖繩うてーあらん。ある友達三人、山んかいあぬー
何がな取りがやら、遊びなじやきーし、三人行ぢよー
るふーじーてー。へ今ちきてい見ちみーるんしぇー、
人ぬいつペー良い友達でーねー、二人とうか三人、
うり以上ねーうらんふーじやつさー。私ねーてーげー
や見ちよーんよー。あんやしが、三人や山んかい行ぢ
よーるぐとーん。三人行ぢそーしが、うぬ時にちやー
ぬ柏子がやたらー。

へうぬ猿。でいしなかい、ソージョーりちういやー。
猿んちうい、猿でいしえー尾ん長やいよー。ソージョ
ーでいしえー尾ん短さん、体格ん大さるぐとう。うれ
ー見ちえーんーだんどー。話る聞ちよーる。ー

あんやしが、三人遊びーが行ぢよーる。まじ仕事し
ーががやらー。遊びーががやらー、うれー分らんて
ー。三人が中から、いちばん良い者からうり出会やー
にやー。ソージョーでいるむん、出会いい連去ていて

力は人間より少し劣るだけだそうだ。それに人間の容
姿も気にするようだよ。(たとえば、人間の)女を見
つけると美人を選ぶそうだよ。

(ショウジョウというのは)そんなものだが、これ
は内地(日本)での話で、沖縄ではない。ある時、友
達三人で、山に何かを取りにということで、遊び半分
に出かけたらしいね。へ今だに思うのだが、人には、
とつても仲の良い友達というのは、二人とか三人で、
それ以上はいないようだね、私はだいたい見て來てい
るがね。~ そうなんだが、三人で山に行つたようだ。
三人で行つているのだが、どういう運の悪さからなの
か。

へその猿の仲間にはショウジョウというのがいるし、
(普通の)猿がおり、猿というのは尾も長いしね。シ
ヨウジョウというのは尾も短いし、体格も大きいよう
だ。それは見たことはなく、話だけは聞いているのだ
が。~

聞いたところでは、(山に)三人で遊びに行つたよ
うだ。仕事しになのか、遊びになのか、それは分ら
ない。三人の中でいちばん良い人(美人)がショウジ

い行ぢよーるぐとーん。力んあるふーじやつさー。体ん大きさ、ソージョーでいしえー。あんし連去ていてい行ぢよーしが。

あんきーに、二人や帰てい来しが、なーうれー、ソージョーんかい連去ていらつとーしにちーてー、なー来てー。

うりから、イキーや、「はー、くれー、かんしえーならん。ソージョー探めーてい殺さんねーならん。」でいち、鉄砲持つち、ちやーうぬ山んかい通とーるふじーやしが、一週間ぬ間通ていむる見らんてーるふじ。一週間でいねー、見とーるぐとーんやー。

あれーただ一步かんイキーや、うり殺しーがるやしにちーてー、鉄砲し射つちよーるぐとーさ、ソージョーや。射つちさぐとう、いえー珍ましむんやつさー。うぬ女お涙落とうすたんでいっさー。射ーねー死ぬしえー。

なーうぬえーかーや、髪んだー、うれー山んかい獸んかいどうすびかつとーぐとう、髪んモーイクワンクワンどうそーんてーなー。何んくい姿あかわとーるあたいてー。

ヨウというものに出会つてしまつた。(そして)抱きかかえられて連れ去られた。ショウジョウは力もあり体も大きいので、(かんたんに)さらつて行つた。
そういうことで、二人は帰つて來たが、(一人は)もうショウジョウにさらわれてしまつたので帰つて來なかつたそうだ。

それで、イキー(兄又は弟)が、「これはけしからん。ショウジョウを探して殺さなくてはいけない」と言つて、鉄砲を持つていつもその山に通つたようだが、一週間もの間通つても全く見つからなかつたそうだ。(やつと)一週間目に姿を現わしたようだね。

(山には)イキーはただ歩いていたのではなく、シヨウジョウを殺すためだつたので、鉄砲でショウジョウを射つたそうだ。射つてしまふと珍しいことが起きた。(さらわれた)その女は涙を流したそうだ。(相棒のショウジョウが)射たれて死んでいるのを見てね。(女は)獸にさらわれたために、それまで山で生活していたので髪も乱れていたのでしょうか。身も心もすつかり変わりはてるぐらいにね。

人間ぬうぬふーじぬ話んで一聞ちやつさー。うりん
話どう聞ちよーる、見ちえーんだんさー。

人間がこんなふうに（獸にさらわれた）話を聞いた
のだよ。これも話を聞いただけで、実際に見たことは
ないんだ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第一班（稻嶺盛和、山城悦子）

注 頴人猿の一種。オランウータン、中国では想像上の動物。人に似て毛が長く、酒が好きだという。

29 子育て幽靈

話者 宇江城 ヤ ス（明治二八年三月二〇日生）

翻字 山内智子

昔えー、首里うていいやー、あぬ、うりやたんでいよ
ー。毎日菓子買いが来ーしがうしがよー。あんし、銭
ぬ計算しーねー、ちやー銭お、不足なでいてー。

あんさぐとうでー、ある人ぬてー、年寄いぬ、
やーうぬ錢取いねー、あんすらー、疑いやらーやー水
んかい入つとーきよー。言ち、習しみせーたら。
んさくとうでー、水んかい入つたくとう、やつぱし、

昔、首里でね、あの、こういうことがあつたそうだ。
毎日、菓子を買いに来るのがいるけど、（買つた後で）
お金の計算をしたら、いつもお金は、不足になつた。
それでね、ある人が、年寄りが、「あなたはそのお
銭を取つたら、それが、疑わしかつたら水に入れてお
きなさい」と言つて教えて下さつたそうだ。そして、
水に入れたら、やつぱり、その紙は、あぶつた後のも

うぬ紙^な、あんてーる後^きやたんでい。^(注①)あんさくとうでー
あぬ、「あんやいびーたつさー」。りち、話^{はな}さぐとうでー
ー、「とーあんしえー、うりが来^くねーや、後^{あと}追^おいで行^く
ぢ、見^みちんりよー」。りち、あんさぐとうでー、後^{あと}追^おい
て、見^みちやくとうやー、墓^{はか}んかい入^いつちはいたんり。

あんさぐとうやー、あぬ、うれー、妊娠^{妊娠}そーでい亡^む
さんでいよ。あんさぐとうあぬ、墓^{はか}んじ産^{うぶ}ちえーんて
ー。あんすぐとう、毎日^{まいにち}菓子^{がし}買^うていち食^くてい、あんさ
ーに、うまうてい育^{いく}わーちえーんり。あんさーに、
「とー、あんやんどー」。りち、あぬうぬ墓^{はか}んかい入^い
ち行^いちゅたんりちてー、開^あけてい見^みーちやぐとうやー、
童^{わらわ}小^こよー、うぬ棺^かよ、宝^{たから}物^{もの}てー、うりが周^{まわ}囲^いから、遊^あ
り歩^{ある}ちゆたんり。

私達^{わたくし}ああんいちやーに、昔^{むか}し人^{ひと}から聞^きちやるばー。
うりから、打ち紙^{はが}え始^{はじ}またんり。

のだつたそだ。そこで、あの、「そうこうだつた」
と、話をしたのでね、「そうならば、それ（お菓子を買
いに来る人）が来たら、後を追つて行き、見てみなさ
い」と（言つた）。そして、後を追つて見ると、墓^{はか}に^は入^つ
て行つたそだ。

その人は、あの、それ（墓^{はか}に入^つた人）は妊娠して
いて亡^死くなつたようだ。だから（その後）あの墓^{はか}で産
んだんでしょうね。（その子に）毎日、菓子^{がし}を買つて
来て食べさせて、そこ（墓^{はか}の中）で、育てていたよう
だ。そして、「もうそなんだよ」と、あの、その墓^{はか}
に入つて行つたと言うので、（墓^{はか}を）開けてみると、
子供が、その棺^棺の、宝物^{たからもの}さあ、その周囲で、遊び歩い
ていたそだ。

私達^{わたくし}は、そういうことを、昔の人から聞いたんだよ。
それから、打ち紙^{はが}は、始まつたそだ。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第九班 〔山内源徳、上地久美、知花啓子、大宜味光一、屋宜美佐子〕

注① 七月の盆行事や先祖拝みをする時、ウチカビと称する褐色の紙錢をあぶる風がある。

② 沖繩では、死体を納めるものをクワンチエーバク（棺箱）とか、タカラムン（宝物）と称している。後者は忌言葉である。

30 後生戻い

話者 渡嘉敷 兼求（明治十三年六月十五日生）

翻字 上原ヨシ

酒が飲どーたらやー。ある男やるぐとーん。あぬーなー、なげー半時間のーあらん、一日ぬ半分びかーんやてんてー。あぬむる動かんぐとーさなし、死じよーるぐとーん。死じよーんでいち墓んかい送たぐとうやー、やつぱり死じえーうらん生ちち。

うりから、なー生ちちょーしにちーてー墓ぬ中うてい、ばんないさぐどう、草刈人が聞ちやーに出じやちうりしえーたんでいぬ話。

酒を飲んでいたのだろうか。ある男のことなんだ。あの長い間なんだが、半時間でもなく、一日の半分（半日）だったでしょうね。その全然動かなかつたそうだ死人のように。死んでいるものと思つて墓に送つたそつだが、やつぱり死んではいなかつた。

それからは、墓の中で生き返つた男が墓の中から強く叩いて音を出したので、草刈りに来た人が墓から出してあげたという話なんだ。

うぬ話をあらあら聞ちよーしが、込み入つた事お分らん。草刈人が聞ちやーに、うぬような事ぬあたんでい。

その話のあらすじを聞いたが、込み入つた事は分らない。草刈人が聞いて（助けたという）そのようなことがあつたそうだよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査團第一班（稻嶺盛和、山城悦子）

翻字 神谷初子

あぬ一、金持ちぬ嫁など一たしがて。年ぬ夜に、粟御盆、刀自ぬしちやくとう、「今日ぬ年ぬ夜んでーにくんぐとう粟し御盆しぇーしがー何んならん、出じてい行き。」んち、年の晩やしが、ばんない殴さつたくとう。

まあ、行く所ないで、今度おなー、親ぬ前んかい行きわん大変でいやーに、足の向くまま歩ぢ行ぢやくとう、炭焼ちゆる洞穴ぬあたんでい。あんさくとう、出じてい泣ちゆんでさくとう、クラー小ぬへうれー金持やんでいしえー「私追てい来よー女、私追てい来よー女。」へだーうれー、いつペー良い女やくとう、夫ぬる悪者やくとうし、クラー小ぬチヨツチヨイ、チヨツチヨイし歩ぢやくとう、うり追つい行ぢやんでい、泣ぢやがちー。

年ぬ夜にうれーちやーすがやーんち、泣ぢやがちーうり追つい行ぢやくとう、なーうまんかい炭焼窯どう

あのう、金持ちの嫁になつた人の話だが。大晦日の夜のこと、粟御飯を妻が炊いたら、「今日の大晦日の夜に、こんな（まずい）粟御飯しか作れない者は何にも役立たないから出て行け。」と大晦日の晩だけどひどく叩かれたそうだ。

それで行く所がないので、今度はもう親の前に行っても大変だからと思い足の向くままに歩いて行くと、炭焼き洞穴があつたそ�だ。そこから出て泣いている所に、雀がへ雀は金持ちに例えられているがやつて来て、「私についておいでよ女の方、私についておいでよ女の方。」へこの女人はとつても良い女だから、夫の方が悪者らしい」と雀がチヨツチヨイ、チヨツチヨイ呼びかけるように歩いたので、雀について行つたそうよ泣きながら。

大晦日の夜なのにどうしようと、泣きながら雀について行くと、もうそこには炭焼洞穴なんだけど、入つ

やしが、入ち行ぢやくとう、窯小ん、うぬ炭焼ち倉、
炭焼ちゆるおじいさんの一堀かーはいし。なーまた窯
小ぬあたんでい。なー入ち行ぢやくとう、全部うりが
入ち行ぢゆる所お、使てーる窯小ん、側ひらーぬ洞
穴んむる黄金なでい、金まがりんでい。金まがりなた
くとう。

入ち行ぢーに、「ぬーが女いやー泣ぢゆる。」んちや
くとう、「今日ぬ年ぬ夜に粟飯炊ちゃんち、夫んかい
殿さつたくとう、行ぢゆる所ぬねーらん。親ぬ所ん年
ぬ夜お行からん、一夜泊まらちくいり。」んちやくとう、
「んーしえー広さき、泊まれー。」りちさくとう。入ちさ
くとう、全部黄金んでい。

あんさくとう、「何が貴殿お、貴殿が住とーる所お
全部黄金やる。」んでいさくとう、「いーい、私がーむ
る分らんどーやー。」んち、あんさーにうり出じやち
金持さーに。じこー大福ないい、あんすくとう、あぬ
粗末さしえー、またでいきらんなどーたんでい。

てみると、窯や炭焼き倉があり、炭焼きおじいさんの
皮ふは、垢だらけだつた。そしてまた窯があつた。そ
こへ入つて行くと、おじいさんが入つて行く所は、使
つた窯も、周辺の洞穴もすべて、黄金でできていた。
金のかたまりだつた。

それで、入つて行く時に、「女よ、どうして泣くの
か」と聞くと、「今日の大晦日の夜に、粟飯炊いたと
いうことで、夫に叩かれ、行く所がないので、それに
親の所にも大晦日の夜は行けないし、(ここに)一晩
泊めて下さい」と言つた。(すると)「良いとも、(一
場所も)広いし泊まりなさい」といわれて入つてみると全部が黄金に囲まれていたそだよ。

それで、「何故、貴殿が住んでいる所は全て黄金な
んでしよう」と(女が)言うと、「えつ! 私には全然
分らないんだがね。」と言つた。それで、それ(黄金)
を取り出して金持ちになり、とても幸福になつたそう
で、これとは反対に、あの(妻を)粗末にした夫は思
わしくなかつたそうです。

翻字 知花春美

子供の寿命といふのはね。十八までい運勢の。八十
八までいトーカチ注①さんでいる話です。これは、うり
ん唐話やんばー、沖繩ねーんばー。

財閥ぬ家ぬ十八ないる息子さんがね、くぬ相続さん
ねーならん立場、なー時期ぬちやれー、刀自うらんど
うあさい、刀自うらんぐとう、刀自とうめーらんねー
ならんち。刀自とうめーてい、家あ持つちゆぬたみね
ー、一応、修業しくーらんねーならんち。

修業するたみに山底んかい降りたくとうよー、うま
うてい、ニーヌフア注②ぬおじいさんとう、御神ぬおじい
さんと、ウマヌフア注③ぬ御神ぬおじいさんとう碁うつち
ゆるばーよー。碁うつち。

「くぬひやー、青年ひやー、碁んかい趣味あつさや
ー、碁んわかいるすんなー。やしが君や、ゆー生まり
とーしがやーなー、君や年え十八までいどううつさー。」
でいやぐとう。

子供の寿命といふのはね、運勢では十八歳までとな
っていたが、米寿の祝いまでしたという話です。これ
はね、これも唐話だがね、沖繩にはないんだよ。

財閥の家の十八歳になる息子さんが（家の）相続を
する立場で、その時期がきた。（その息子には）妻が
いない。妻がいないので、妻をさがさなければならな
かつた。妻をさがして、家の相続をする為に、ひとつ
うり修業しなければならない。

修業する為に山底に降りて行つた。そこでは、ニー
ヌフアの神（子＝北の神）のおじいさんとウマヌフア
の神（午＝南の神）のおじいさんが碁をうつていた。
碁をうちながら。

（おじいさんが）「ここにいる青年よ、碁にも趣味
があるんだね、碁もわかるのか。だけど、君はすばら
しく生まれているのだがね、君は十八歳までしかいな
いね。」と言つた。

な——うれ——、十八なや——や、うぬ青年や泣ちや——に
て——、金持人ぬ子あ財閥ぬ子るやぐとう。家かい帰て
い、親んかい、「山底んかいめんしえーるおじいさん
が碁うつちゆしが、私ね——十八までいるうんでいさ——」
でいちやぐとう、「あんし、うぬおじいさの一何処か
いめんしえーが」、「あんし、うぬおじいさの一何処か
いめんしえーが」、「山底んかいめんしえーが」、「山底
んじ碁うつちゆん」、「と——あんせ——、十八までいうん
でいちわかと——れ——、うりからぬびらり——ぐとう、神
どうやぐとう、お願ひし——ね——ぬびらり——ぐとう、瓶
小んかい、酒——ちんかい、酒——ちげ——わ」でいち。
酒——ちがち持つち行ぢ、くぬ碁うつるゆるおじいさん
ぬ前んかいうち、二ち酒——うち、な——、むの——言——らん、
親子座——に、むの——言——らん。

な——そ——と——碁うつち——ね——、夢中やつせ——や、あ
んさ——に酒——ちゆ飲——むる時分——に、うぬ十八までいうんど
——でい言——やつたる親ぬ——て——、男ぬ親ぬ、「実えな——か
んしるちよ——び——ぐとうくれえ是非、一人子——るやぐと
う十八ね——くれ——世失——ないね——私あとう繼——じゆせ——う
らん。助——きていきみそ——り」でい言——ちやぐとう。あんさ
——に、うぬ酒瓶——や見——ちやれ——、酒——え無——んしえ——。「と

もう、十八歳になるこの青年は泣いてね。金持ちで、
財閥の子だからね。家に帰つて、親に「山底にいらつ
しゃるおじいさんが碁をうつていてるが、私は十八歳ま
でしか生きられないと言つていたよ」と言つた。「そ
れで、そのおじいさんは何處にいらつしやるのか」と
言つたら、「山底で碁をうつていてる」、「そうか、十八
歳まで生きるとわかつていれば、それからのはすこと
もできるだろ——から、神だからね。お願ひしたら（寿
命を）のばせるはずだから、瓶二つに酒をつぎなさい。」

と言つた。

酒をついで、（山底に）持つて行き、そこで碁を打
つおじいさんの前に酒を二つ置き、もう何も言わず、
親子は黙つたまま座つていた。

もう碁を打つのに夢中になり、ずいぶん時間が経つ
て、酒を飲みほした頃に、この十八までしか生きられ
ないと言われた（子の）親が、父親がね、「実はもう
こういう事で来ました。この子は一人っ子でもあるし、
十八に世を失なつたら、（大変なことで）私の後継ぎ
もいないし、ぜひ助けて下さい」とお願ひした。
そこで、この酒瓶を見たら、酒はないでしょう。「さ

「ひやー、君達むん酒さけえうち飲のり無なんむー」。

あ、大変！君達の酒は飲みほしてしまった。（と神様は叫んだ）

あんさーに、ニーヌファヌ神カミぬおじいさんがウマヌファヌぬおじいさんぬかい「えー、うまぬ件あおぢやーすが」でいちやぐとう、「人ヒトぬ物モノお御ミツ馳走チカラシそーるむん、願タメちきわるやいびんてー、助タマきらんねーないびらんてー。」でいち、あんさぐとう、「なーあんしえーあんすんてー。」でいち、ニーヌファヌ神カミぬおじいさんとうウマヌファヌぬ神カミぬおじいさんとう、「とーあんせー、十トド八ハチどうやぐとう、上アベんかいハサ八ハチたタくわーせー、君キムやハ八ハチ十八ハチ、トーカチ注タマリんすぐとうやー、なーあんせー、八ハチ十八ハチまでいうりつさやー。」でいちよー、さぐとうなー親チヨウ子コノ喜ハジくでい家アガかい帰カクやーに。

それで、ニーヌファのおじいさんが、ウマヌファのおじいさんに、「おい、この件件はどうしようか。」と言つたら、「人の物は御馳走チカラシになつたのに、願タメは叶タケえてあげないといけないでしようね。助けないといけないでしようね。」と言つた。それじゃ、「もうそうしようね。」ということになつた。ニーヌファの神のおじいさんとウマヌファの神のおじいさんが、「それでは、十八だから上に八をくつつけたら、君は八十八、トーカチも迎えて、もう八十八歳まで大丈夫でしよう。」と言つたそうだ。親子はもう、たいそう喜んで家に帰つたそうだ。

それから年月が流れて、（その青年は）八十八歳になり、八月八日になつた。それで、この青年は相続もりつぱにし、トーカチのお祝タマいもおわつた。もう助けでもらつたおかげで、八十八歳を迎タマえ、トーカチのお祝タマいには、もうこのおじいさん達もお招タマきしたそうだ。トーカチの由タマ来タマはただこれだけの事だよ。これは、

トーカチの由タマ来タマはただこれだけの事だよ。これは、沖繩の話ではなく、唐話なんだよ。それから沖繩での

ぬトーカチ、うりから始まつてゐる。

トーカチも始まつたといふことである。

採集 S 55・2・14 読谷ゆうがおの会 大城薰、知花春美

ぬトーカチ、うりから始まつてゐる。

注① トーカチ、八十八歳（かぞえ歳）のトウシビー（年日）祝いをトーカチスージと称し、喜名部落では、現在でも、親戚、隣近所、知人を招いて盛大に酒宴を催す。

② 沖繩では、子・丑・寅、……の十二支の神がいて、それぞれの方角を司る神がいると觀念している。特に子（北）と午（南）は重要視されている。

③ 注①に同じ。

33 子供の寿命

話者 松田ナエ（明治三〇年四月二三日生）

翻字 神谷初子

あぬ男ぬ、どうく童んあらん、若者ぬ病氣さくとう

今死じえならんあい。くれーなー、ちやーされーしむ
がやーんでいちざくとう。

なーくれー、生命ぬ神、繁昌ぬ神、錢ぬ神、うつさ
揃てい碁打つちみしぇーんでい。「あんすらー、貴方や

ある男が、そんなに童でもない若者が病氣をした。

今死んではいけないが、（心配して）これはもうどう
すればよいのだろうかと思つた。

それが或る日、生命の神、繁昌の神、お金の神様三
人揃つて碁打つていらしたそだ。（その神々を

やー、今死ぬしえーいとういらー、いつか、何月何日
ぬ行事んでいしが、五月五日うぬあしえーやー行事ん
でいしが、年に何や何日んち、うぬまるひーじーやし
みそーらんぐとう。うぬ日行ぢやー、するーと行ぢ
やー、肉、豆腐、昆布、酒、なー一ちえー何んでいが
やー。ニハナんでいがらー持つち行ぢやなかいやー酒
肴んち。折んかい作こーてい行ぢやーにあつたーが碁
打つちゆる前んかい置ち、あんし願むちしみーるんし
えー切り換いぐとう。あんしが、初めー切り換てーと
うらんさんくとう、碁打つちみしえーる所んかい、そ
ろーとぐわー持つち行ぢやーにへうつさろー五品
持つち行ぢやーなかい。」

なーあんすくとう、碁打つとう場じらーい、酒ん三
ち注ぢ、碁打つちゆる側んかい置ちえーたぐとう、酒
え飲でー碁打つち、酒飲でー碁打つちえーしーしーし
さーに、うつたーがけー飲みーねーまた酒注じえーし
ーしーし、側うてだまとーてい。

あんさくとう、また、今度お肉ん豆腐ん全抜ちうち
食らるばー、ねーんなたぐとう、まー、「私ねーなー
願むちぬあていどうちやーびたる。まーぬ何がしぬ何

知つた人が）「それならば、貴方が今死ぬのがいやだ
つたら、いつか何月何日の行事で、五月五日という行
事が、年に何は何の日（吉日）とあるから、平日はな
きらないので、その日に行つてそつと行つて、肉、豆
腐、昆布、酒、それに、もう一つあるが、何であつた
かな、（あ、そうだ）ニハナ（花米）というもので、
それらを酒の肴として（供えなさい）。折詰めにして持
つて行つて、あの人達（神々）が碁を打つている前に
置いて、そして願いもてなしすれば（運勢を）切り換
えてくれるから、しかし、初めは（運勢を）切り換え
てくれない筈だ。碁を打つていらつしやる所にそつと
持つて行つてへこれだけよ、五品持つて行きなさい。」

そして、碁を打つてゐる間中は酒も三つ注ぎ、碁を
打つてゐる側に置いていたら、酒を飲んでは碁を打ち
また酒を飲んでは碁を打つたりして、それで、そ
の人たちが酒を飲んでしまうと又酒を注いだりして側
でだまつて待つてゐた。

すると、また、今度は肉も豆腐も全て突き刺して食
べてしまつた。全てなくなつたので、その「私は実の
ところ、願い事があつて参りました。どこそこの何番

番地ばんぢぬ何なやいびーしが、何相なまこぬ幾いくちないびーしが。」んち、足あしまんちゅーかきやーにし、「私わたくしねーなー、今死なまじえないびらんしが。」んち、「生命せいめい助たすきていくみそーらんなー。」んちやぐとう。

生命せいめいぬ神かみえ糸いと小持こもちつちよーんでいしえー。「生命せいめい助たすきていくみそーらんなー。」んちやくとう「うりがんあんしないがやー。」んち、なー頭かしらふとーたんでい。頭かしら振ふいしえーうにからぬ。大体だいたいぬくとー、考かたいねー頭かしら振ふいしえーやー。

やていん、あんし頭かしら振ふいしえーたんでいぬむん、あんしんしえーたんでいるむんぬ、今度こんどお「あんしえーうれー全部じゅぶんいやーがる持もつつちちえーんなー。」んちやくとう、「はい」んちやくとう、「あんしえーうち食くりねーらんむんぬ、願ねが聞きかんあれーちゃーすが。」んち、あんさぐとうやー、「とーあんしえー、いやーとうやー、同どう日に生うまれりとーるくりとー緒よ生うまれりとーる子こ調ひらびらいー。」んち、繁昌はんじょうぬ神かみぬうり調ひらびんそーやーに、「あはー良よかつた。あつちにいるから、ありとう換かいこう、んちやいやーなー、話はなさんよーい帰かれー。」んち、あんさーにあれーしぐけー亡なましち。

地の何なという者ですが、何相なまこで幾いくつになりますが。」と、ひざまづいて「私はもう、今死んではいけませんが。」と言つて「生命せいめいを助たすけて下さいませんか。」と言つた。

生命せいめいの神かみは糸いとを持つていらつしやつたようです。「生命せいめいを助たすけて下さいませんか。」と言うと、「それがそんなに簡単に出来るものかなあ。」と(神かみは)頭かしらを振ふたそうだ、頭かしらを振ふるようになつたのはこの時からである。(出来ない時に頭かしらを横よに振ふる)

けれども、あんなに頭かしらを振ふつておられたそうなのに思い直されたのだろうか、今度は、「それではこの御ご馳走ごちそうは全部あなたが持もつつて来たんだね。」と(神かみが)言ううと、「はい」と言うつた。「そ、だつたら食べてしまつたのだから願ねがいを聞いてやらなくてはいけない。」と言うつた。それでね、「それじゃね、貴方あなたと同じ日に生まれた子と一緒に生まれた他の子を調べてみようね。」と繁昌はんじょうの神かみが同日生まれの子を調べ出し、「ああ良かよかつた、あつちにいるからあの子と(生命せいめいを)換かえるから。」そ、うだ貴方あなたは話をしないで帰かりなさい。」と言うつた。それで、他の子は死んでしまつた。

あんしからぬ願えむちえー、肉、豆腐ん、何ぬスー
コーン、何ぬ祝ん、肉ん豆腐、昆布よー、酒やー、ユ
ハナんでーよー、うつさ組んでいち、うんにんからぬ
りーんでい。

その時以来、願い事をする時は、肉、豆腐が用いら
れ、焼香ごとや祝ごとにでも肉と豆腐、昆布や酒、花
米などが用意される。これだけは一組だとして、その
時から始まつた慣例だそうだ。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会 〔知花春美、阿波根初美〕

注 冠婚葬祭の供物、沖縄の冠婚葬祭に用いられる供物は、その行事によつて異なり、この物語に出てくる以上に数が多い。豚肉やト
ーフ、コンブ等の御馳走は、重箱に詰める代表的なものである。その他、餅だけを詰めた重箱も用意する。主に、酒（泡盛）や花
米（一般にミハナとかハナグミと称する）、線香、打紙（紙錢）、白紙等が祈願の種類によつて用いられる。

34 火の神報恩

話者 松田ミヨ（明治四一年二月二日生）

翻字 島袋オツル

今帰仁城お首里注①ぬわつくいやせーやー。今帰仁城ん
かい首里ぬわつくいてい行ぢやくとう、うぬ首里ぬ御
子あ行ぢやれー、くぬ家や、うぬ人あがうる城じょや焼やきた
るばー。

うぬ人あが娘むすめ玉鏡たまがねむたち、やらえーみせーたんで

今帰仁城は、首里より分家ぶんかした所である。今帰仁城
に首里から分れて行つた時に、この首里の娘むすめも行つ
てしまふと、この家は、その人がいた城は焼やてしま
つた。

首里の人の娘に、玉鏡たまがねをもたせて行かしたそ�であ

い。火事いじたくとう、うぬ玉鏡とういやしゅーさん

戻てい行ぢ黄金取みそーち、うぬ人お取みそーちや

ぐとう、うぬ人おけー亡ーしみそーちえーるふーじ。

焼死さくとう、今度お、わつた一喜名一門でいしん

中城とう血筋ひちよーき。

あんさぐとう、うぬ人おなー、火事んじやすんでい

がらーんかいめんそーち。

私達あぬーなまー、比嘉ウシリしが、いくちぬ年が
なみせーたらー、山原んかい牛買いがもーち、牛買て
い来る途中うていアヤグワーメーはいいちやてい、
靈るやしが、はいいちやたぐとう、うぬ人が話ぬ、「
わんにん喜名んかいやんどーやー」。んち、言みせーた
んでい。「あんせーやー、御供うがまびーぐとう、一
緒道じりさびらやー」。んち、めんそーちやんでい。

めんそーちやぐとう、山田つ来んでいがらーやー。「
やーはぬ、リー、アイグワーメー、うまうてい、芋と
う豆腐湯し食りから行ーいびらやー」。んちやぐとう
「あんせー、あんさやー」。んち、うまうてい休て、
塩湯豆腐うさがたぐとう、後とうんけーてい見ちやぐ
とうあるふーじ。だーんちや靈どうやくとう、うさが

る。火事が出たので、この玉鏡を取ることが出来ず、

戻つて行つて黄金は取ることが出来たが、その人は、

焼死してしまったようである。

焼死したので、今度は、私達喜名一門というのも、

中城と血筋を引いているのだよ。

そのため、この人が、火事を出すためにどこかにい

らしてしまった。

私達は、今は、比嘉ウシというが、その方がいくつ
の年だったか、山原に、牛を買ひに行つて、牛を買つ
て来る途中で、アヤグワーメー（おばさん）に出会
った。靈なんだが、出会つた時のこの人の話によると
「私達の叔母さんだけど、どちらへ行かれますか、叔
母さんは」と聞くと、「私も喜名に行くんだけど」と
おつしやつたようである。「それでは、お供いたしま
すので、一緒に、道づれ致しましよう」といらしたそ
うだ。つれだつて行くと、山田に着いた時のこと、「
お腹が空いた、どう？おばさん、この辺で、芋と湯豆
腐を食べてから行きましょうか」と言うと「では、
そうしよう」と言つて、そこら辺で休み、塩湯豆腐を
召し上がるが、後を振り返つて見ると、食べてなくそ

らんせーやー、とうん返たぐとうあてい、うぬ人お、
そんぬむんやさやーんち、思とーたんでい。

あんさーなかい、「アイグワーメー、いいばー、道半
まじよーんないびたんやー」。んちさぐとう。今度お
へくまーぬーでいちょーがやー、久良波あぬーミカン
木ぬあぬとうくまー、ぬーんちょーがやー、多幸山い
かん先なかい、水だまいぬあたんでいよ。

あたぐとう、「えー、女わらびよー、いやー牛ぬ綱
からさんなー」。でい言みせーたんでい。「借みそーり」
んち、うさぎたくとう、うりから、飛ん越ていめんそ
ーち、だー、火どうやぐとう、水かいちかいねー、ね
ーんないせー、火魂どうやくとう。

あんし、渡ていめんそーち。あんしなー「時えー遅
ないるむん、私達んじ、休みそーらんなー」。んちや
んでい。「あんせー、あんすみ」。んち。

のままあつたそうだ。そう言えば靈だから食べる筈がない。ぶり返つて見るとあるので、この人は、普通の人ではないなあと思つていたそうである。
それで、「おばさん、よかつたですね。道の途中で一緒になれます」と言つた。それから、へここは何という所だったかね。久良波あの、ミカンの木のある所は、何といつているかなー、多幸山へ行く手前に、水たまりがあつたそうだ。

そこで、「ほら、そこの女の子よ、あなたの牛の綱を貸してくれないか」といわれたそうだ。「お借り下さい」と差し上げると、その綱を飛び越えていらした。それは火なので、水にひたると消えてしまうので、火魂だから……。

そして、この女の子の綱を渡つていらした。それが時間が遅いので、私達の所で、お休みになりませんか」と言つたそ�だ。「それではそうしよう」と言つた。

私達は松田なんだが、ここに泊つたのだが、夜中に起きたぐとう、見ちやぐとう、うぬ人お、しこーい、まこーいしみせーたんでい。「うれー、貴女おぬーが夜

中まーかいめんせーが。でいちゃぐとう、「私ねー、喜名ぬやー、前喜名ぬ家焼ちーが。」でい言みせーたんでい。

あんきぐとう、「どーりん、うぬ家や、私達あ親が元やぐとう、どーりん焼ちえーくいみそーらんよーい別んかいやなみそーらんがやー。」んちやぐとうやー、「あんせー、いやー御恩あぐとう、親が元やらー、わんねー、楚辺んじ、家焼かいー。」んち、楚辺んかい行ひしえーにからー、尾引ち、とうーみしえーぎーたんでい。

あんし、うぬ人がなー、「あつさみよー、どうーぬ親が元おぬがーたん。」んち、手うさぎーがもーちやぐとう、向ーや、きつさ「火事どー。」しつよー、楚辺んじ火事んじやちえーみしえーたんち。

あんしる女ぬやー、「ホーハイ」や先つたかーあびーんなでい、火魂や、女るやぐとうやー「ホーハイ」んでー言なんでい。うつさる聞ちえーるむん。

すると「どうか、その家は、私達の親元だからどうか焼かないようにして、別のところにすることは出来ないでしようか。」と言うとね、「それでは、あなたの御恩もあることだし、親元だつたら、私は、楚辺に行くつて家を焼くことにする。」と言つた。楚辺に行く時からは、尾を引いて通り過ぎて行つたそうだ。

そして、その人が、「ああ、よかつた、自分の親元が火事にならずに済んだ。」と、手を合わせて、拝みに行つた時には、向うは、すでに「火事だ！」と騒いでいた。楚辺で火事を出して下さつたそうだ。

それで、女が、「ホーハイ」を人先に呼んではいけないとか、火魂は、女なので、「ホーハイ」とはいつてはいけないとのことである。それだけしか聞かなかつた。

注①

今帰仁村今治の南方一、五キロメートルの丘上にある古城跡で、築城年代は不明。一三三二年頃伯尼芝が城主となり、その後四代目の攀安知にいたる九四年間で城は大修築をうけ、今日のような規模に達したようである。一四一六年中山王世子尚巴志によつて滅ぼされた。一時そこに北山監守を置いたが、一六六五年首里に引きあげたため廢城となつた。

② 夕亥に頭大の大きさで屋根の上や墓地周辺で上がるヒーダマ（火玉）は、タマガイとか、チュダマ（人魂）として死の予兆にながる。真紅の時の火玉は火事の予兆であるとする地方もある。

35 真玉橋の人柱

話者 松田ナエ（明治三〇年四月二二日生）

翻字 神谷初子

こんな小さい橋どうやんどー。「くまーまーなとーが」んでい言ちやくとう、「くまー真玉橋」^{説①}「あんしえー真玉橋ぬ橋えじるなとーびーがやー」んちやれー「今いがたーが渡たしるやんどーやー」んちやぐとう。「あんしうつび小ぬ橋どうやいびんなー」んちやぐどう、「あんどうやんどー」んち。

こんな小さな橋なんだけど。「此処はどこでしよう」と（或る人が）言うと、（また或る人が）「此処は真玉橋」と答えた。「それでは真玉橋の橋はどの方向になつてているでしょうか」と聞くと、「今私たちが渡つた所がそうなのよ」と言つた。（尋ねた人が）こんなに小さい橋なんですか」と言つたので、「そういうんだよ」と答えた。

いー、あぬー、人先言ちやるたみなかい、女ぬ人先物言んなよーんでいしえー。

そう、あの、人先に（物を）言つたために（真玉橋の人柱になつた）女が人先に物を言うなということは

こういうことである。

あらんよー、橋うぬ真玉橋造いしが、造てー壊りて
い、また壊れて、もう二回ん三回ん壊りたくとうよー。
「うぬ橋えへうぬ人どうどーやーあぬー、女ぬ髪調
びてい、七色ぬムーテイー七色、これが一二三四五六
七卷ちよーる女探てい、うり埋みれー、橋しーるんし
ー、柱しーるんしーー壊りらんさ」んちやぐとう。

なー、うぬ上ぬ人がへえーりん神んやてーんてーや
ー、うつたが全部かんし調びてい、なーうれー調びて
いん皆七ムーテイーしーーねーらん。三ムーテイーな
ーるそーるむんち。あんさぐとう、三ムーテイーなー
るそーるむん、皆同ムーテイー髪んち。へ昔え髪えム
ーティーしる結いてーくとうーあんしが、うぬ人お丁
度七ムーテイー、七色ぬムーテイーそーたんでい。言
ていん居らんどうあくとう。あんさぐとう、あん言ち
やる七ムーテイーそーる人ぬうまんかい殺さつてい。
殺さつてい橋なたぐとう、「あぬ人先物言ゆんでい
橋柱なでーぐとう、いやー物お言なよー」んち、娘

それがね、その真玉橋の橋を造るんだけど、造った
かと思うと壊れてしまい、また造つても壊れた。も
う二、三回も壊れてしまつたのでね、「その橋はへ
橋のこと尋ねた人がねーあの、女の髪を調べて、
七色の紐、これが一、二、三、四、五、六、七巻きし
ている女を探して、その女を埋めて橋を造れば、柱に
すれば壊れないさ」と言つた。

そこで、その上役がへ多分に神だつたんでしょうね
その人達が全部（女たち）こうして調べて見たが、誰
も七ムーテイーはしてなかつた。三ムーテイーしか
てない。そこで、三ムーテイーしかしてなく、皆が同
じ髪の結び方をしていると。へ昔は髪を紐で結つてい
たからねーそれがね、その人（人先に物言つた人）が
丁度七色の紐をしていたそうだ。言つた人を調べる他は
はないので。すると、やっぱりその人が七色の紐を
していて、その人が殺され埋められたそうだ。

殺されて人柱になつたので、「あの、人先に物を言
つたために橋柱にされたので、お前は（人先に）物を

「一人産ちえーたぐとう言ちやぐとう。お母さんが物言なよーんでいぐとう。へ本当ぬチーグーやあらんしが物お言やんたんでい。お母さんがあん言てーるむんちく「人先物言んあんなとーぐとう、人先物言なよー」。んでい娘んかい遺言ぬあたぐとう。

なーもう、色気んちち、十七、八ぬ娘なていから、なー、海んかい遊びーんが行ぢ、色男ぬめんそーやーい、あんしそーしがぬーんでいがさーに、一言葉むぬ言ちやーに。^(注②)チーガーあらんしが物お言らんたんでい。

それがもう、（娘が）色気づいて、十七、八の娘になつた時、海に遊びに行つて、色男に出会い、そうこうしている間に、ちょっとしたはずみに一言だけ言つてしまつた。（娘は）啞ではなかつたが（母親の遺言を守り）口をきかなかつたそ�である。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会 久知花春美、阿波根初美

注①

国場川にかかる橋で、那覇市と豊見城村を結ぶ橋。十六世紀の尚真王が三山の按司を首里城下に集めて、中央集権を固めたところから代官の往来やらで、南山の豊見城間切と中山の那覇を結ぶ要路としての重要な橋であった。

②

呉屋ナヘさんの「真玉橋の人柱」（『伊良皆の民話』P 86）によると、国頭、謝敷の海へ貝拾いに行つた娘はそこで首里の侍と出会いふたりは結婚の約束をする。娘の父親は「物も言えない娘だから」と思い悩むが、二人の情熱に負けて三人首里の御殿に結婚の承諾を得に行つた。そこにはすでに侍の妻になる人も来ていて、その人が娘に「私の夫になるんだ」と言つたそ�だ。その時蝶が飛んだので、娘は「スリーしばし待てお母さん、私は大きな立身（結婚）するのよ」とそれから物を言い出したそ�だ。

「言うなよ」と、一人娘に言つたそ�だ。お母さんが物を言うなと言つていたので物を言わなかつた。へ本当の啞じやないけど物を言わなかつたそ�だ。お母さんがそう言つていたからと「人先に物を言つたためにそうなつた（人柱）ので、人先に物を言うなよ」と娘に遺言を残したそ�だ。

翻字 知花春美

くぬ縁結びでいぬ話や、うれ一唐話やんよー。唐ぬ、唐うていよー。財閥ぬ長男ぬてー、跡継がんねーならんせーやー。やしが、妻うらんねー跡お継がさんばーてー。妻ぬうらんねーやー。妻とうめーらんでーならんばーてー。

妻とうめーらんたみに、なー山んじ、山奥んかい行ぢ、修業しーが行ぢよーん。修業しーが。

あんさーい、うまうとーてい赤毬タンメーがよー、赤綱緗いんばーてー。緗いんとうくる、「あんし、青年、何しーがうまんかい、何しーが歩ちゅが」りちやぐどう、「実えなー、親ぬ跡継がんたみに、妻うらんねー跡継がらんぐどう、妻とうめーいんでいー」言ちやれー、「君あ妻え柳みーとーる井戸うていよー、髪洗いる髪洗いる女やさ。縁結ばつとーさ」りちやぐどうよー。

この縁結びという話は、これは唐話だがね。唐でのことなんだが、そこで財閥の長男が跡継ぎをすることになつたんでしようね。しかし、妻がいなければ跡継ぎはさせないわけだ。妻がいなかつたらね。それで、妻をめとらなければならないでしよう。

妻（になる人）をさがすために、山に入り、山奥へ修業しに行つた。

そしたら、そこで赤毬のおじいさんがね、赤綱を緗つていたようだ。（綱を）緗つてている（おじいさんが）「どうした、青年よ、何をしにここへ、何で（そこを）歩いているのか」と言つたら、「実は親の跡継ぎをするには、妻がいなければ跡は継げないので妻をさがすためです」と言つた。すると、（じいさんが）「おまえの妻（になる人）は柳が生えている井戸で、髪を洗つてゐる女だよ。（その女と夫婦の）縁が結ばれてい るよ」と言つた。

あんさーに、見ちやれー、後姿あなー体格美人やんばーてー。体格美人。前から見じやれーなーミーハガーー。やるばーてー。くれー神ぬ縁結びでーんりーぐとう、なーくりんでー生ちきとーちーねーなー大変すんりやーに、うり妻さんだれならんでいち。

なー、うりが持つちょーる短刀しょー切つとーるばーてー。うぬ女お切つたぐとう、倒りたるばーてー。倒りたぐとう、うぬ金持ぬ息子おなー怯まーに逃げてい、短刀うつちやんなぎてい、逃ぎとーんばーよー。逃ぎてい。うぬ女おなー、いちじ、気絶そーてーんてー。あんさーに、氣ちきていとうい戻ちやれー、短刀持つち家かい帰とーるばー。女親んかい見しとーるばーよー。「くぬ短刀持つちょーしが、私あうまんかい切ていーたん」でいー。あんさーに、「とーあんせーくぬ短刀や、うぬ短刀やなー、大切にそーてい、うり必じ敵とりよー」。あんさーに大切に持つちょーたんりーよ。うぬ女ぬ。

あんしなー、年ぬ流りてい、再んなー、結婚すんりちやぐとう、ちょーどう、うぬ女あたとーるばーてー。うぬ女あたとーるばーてー。自分ぬ短刀切ていてーる

それで、（その女を）見たら、後姿では体格も良くて美人なんだね。前から見るとミーハガー（ただれ目）だつた。これは神の結んだ縁で、これを妻にしなければいけないので、こいつを生かしておったら大変なことになる。

そう考えた男は、持つている短刀で切りつけたわけだ。その女は切りつけられたので倒れてしまった。倒れたので、この金持ちの息子は、もう怯えて短刀はそこに残したまま逃げて行つた。（男は）逃げた。その女はもう、いつときは気を失つていたらしい。

それから、気をとり戻したので、短刀を持つて家に帰つたそだ。そして、その短刀を母親に見せたようだ。「この短刀を持つていた人が、私のここに切りつけたんだ」と（母親に）言つたら、「そうか、この短刀は、この短刀はもう大事に持つていて、これで必ず敵とりなさいね」と言つた。そのために大切に持つていたようだね。その女が。

それから、年月が流れ、再度、結婚することになり、ちょうど、（相手が）その女になつていた。自分が短刀で切りつけた女、その人と結婚することになつ

女、うりとう結婚すぬぐどうなとーんばーよー。

たんだね。

あんし、結婚されー、うぬ風呂てー、支那、唐や、夫婦なー風呂入るばーてー。うぬ女お肩んかい、ちやータオルうつちやきてい、傷があるから、あんさーにうぬ男ぬ、「何がやー、夫婦るやるむんぬやー、毎日タオル色かじタオル、うまんかい掛けーがやー。」りちやぐとう、「夫婦どうやぐとう、礼儀どうか何とうかねーんぐとうすな」ち、男が取つてい見ちやぐとう、うまんかい傷あるばーてーや。自分ぬ切ついてーせーわかいせー、傷あぐとう、うぬ男あなー魂ぬぎていよー。「くり、私が刺さる女おあらんがやー。」りち、魂ぬぎとーるばーてー。

あんきーに、「あんしえーや、まーうてい、まーぬ井戸、柳みーとーる井戸うてい、髪洗いたしが、うびじ切つていらつてい、うぬ男あ逃ぎーたん。あんし、うぬ短刀や私が生ちちょーる間、うぬ短刀し敵とういん」り、「応見しとーれー、「うれー私物どうやんれ!」私がるしえーんでー、なーあんしえー敵とうり。」りちよー。「私ん殺し。」りち。

そこで、結婚したら、風呂なんだがね。支那や唐では、夫婦いつしょに風呂に入るようだ。その女は肩に傷があるので、いつもタオルをかけていた。それで、その男(夫)が、「どうして、夫婦だのに、毎日いろんなタオルをここにかけるのだね」と言つた。

「夫婦だから礼儀とか何とかはないからするな」と男が取つて見たら、そこに傷があつたようだ。自分が切りつけたのはわかるからね、傷を見て、その男は肝をぬかす程驚いてね。「これは私が刺した女ではないだろうか」と、すごくびっくりしたそうだ。

あんきーに、「あんしえーや、まーうてい、まーぬ井戸、柳みーとーる井戸うてい、髪洗いたしが、うびじ切つていらつてい、うぬ男あ逃ぎーたん。あんし、うぬ短刀や私が生ちちょーる間、うぬ短刀し敵とういん」り、「応見しとーれー、「うれー私物どうやんれ!」私がるしえーんでー、なーあんしえー敵とうり。」りちよー。「私ん殺し。」りち。

なー、結婚そーしえーやー。ニービチ、なー結婚し

もう結婚しているからね。ニービチ(結婚)してい

は叫んだ。

それから、(女が言うには)「それじゃ、どこそこの井戸でね、柳が生えている井戸で、髪を洗つていたじ切つていらつてい、うぬ男あ逃げーたん。あんし、うぬ短刀や私が生ちちょーる間、うぬ短刀し敵とういん」り、「応見しとーれー、「うれー私物どうやんれ!」私がるしえーんでー、なーあんしえー敵とうり。」りちよー。「私ん殺し。」りち。

るうぐとう、なー殺さらんせーやー。殺さらんぐとう
なーあんしうぬ女ぬ夫どうやぐとう殺さらんせー。な
ーあんし、「しむん」でいー。

あんさーに、うれー神ぬやー、神ぬ生まりーしとう
同時や、縁結ばつてーる夫婦あらんねー、本当ぬ縁で
いしぇー結ばつてーねーんぐとうや、あんすぐとう、
本当ぬ結ばとーぬ夫婦やてーさやーりちょー、妻さー
い家やすつと栄とーたんりーよ。

あんさーい、今ちきてー、たまねー離婚すしんうつ
せーや、あつ人達や縁結ばつてーねーんよー。うぬ言
葉うにーから出じとーんよー。

と夫婦でいて、家庭も栄えたということだ。

そんなわけで、今につけて、たまには離婚するのも
いるでしょう。そのような人達は縁は結ばれてないの
でしょうね、この言葉はその時から出ているのだよ。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会 へ山内源徳、島袋喜美子

るのだから、殺すことはできなかつた。それにこの女の
夫だから殺すことはできないでしよう。だから、「
もういい」と（その女は夫を許してあげた）。

これは、この世に生を受けた時に、神が縁を結んで
ない夫婦であつたならば、実際には縁は結ばれてない
のだから（離婚したでしようね）。そういうことで、こ
の夫婦は、ほんとうに（神が縁を）結んだ夫婦だつた
のでしようね。だから、（離婚することもなく）ずつ

37 お盆の由来

話者 宇根良誘（明治三九年六月十四日生）

翻字 上原ヨシ

旧ぬう盆ぬ由来記えー、旧七月十三日ぬ、御迎は、

旧暦のお盆の由来記といふのは、旧七月十三日のお

午後四時、十五日の御送は三時と。うり何んちあんい
ちやがんりれー、お盆はある坊主ぬ、弟子ぬ、自分ぬ
親祖先ぬウスコー、祭ぐとう、うさぎーんでいされー
供物から、火ぬ出じやーい、くぬ祭事お受き取らんた
れー、くぬ弟子え先生前んじ、「今日ぬウスコーや受
き取いびらんたつさー」。あん言ちやれー、「受き取ら
んせーわかいんなー」。んちやぐとう、「うれー、わか
いつさー。ぬーんち受き取らんがんでー、うれーわか
いびらんさー」。んでい。

「うれー、後生ぬ制裁や、祭事ぬ供物受き取らんし、
うりが後生ぬ制裁やんち。罰くわーさつとーさー」。
あんし、じひ親祖先ぬ事おうさぎれーやーんでい思
んなー」。でいされー、「親祖先んかい産さつとーて
親祖先ぬ事おさんあれーならん。じひうさぎりわるな
いんどー」。んちやれー。

「受け取らないのが後生の制裁で、祭事の供物を受
け取らないのもそれも後生の制裁なんだ。(だから)
罰されたのだ。それでもぜひ先祖には焼香をしてあげ
たいと思うか」と言うと、「親や先祖から生まれ繼が
れて来たのに、親や先祖の事はしなくてはいけない。
是非とも焼香しなければならない」と言った。

「後生ぬ吉日や、ちやつさ罪受きとーていん、七月
盆ぬ、十三日ぬ四時から、十五日ぬ送い取り限りやぐ
とう、三時、チャーン小や、三時に鳴いたんよ。今や
ていん三時内うていうさぎりよー」。あんさーに、十三
日ぬ四時から御迎さーに、それでいろんな供物。昔えミ

迎えは午後四時で、十五日の送りは三時だった。それ
がどうしてそうなつたかというと、お盆は、ある坊主
の弟子が先祖の焼香や祭事をしようとして、自分の供
物から火が出てしまったので、この弟子は先生の前に
行つて「今日の焼香は受け取らなかつたんですが」と
言うと、(どうして)「受け取らないのが分るか」と
言つた。「それは(後生)分るさ。どうして受け取ら
ないかは分りませんが」。

「後生の吉日は、どんなに罪を受けていても、七月
のお盆には十三日の四時から十五日の送り火までには
受け取ると限られているから、その間に午前三時のチ
ヤボの鳴く声と共に焼香してあげなさい」と言つた。
それで、十三日の四時から(先祖を)お迎えして供物

カンとうか、リンゴおうにんの一ねーんばーよー。山行ぢよ、色々な山ぬ木ぬ実とうていたさ。私達んあてーあんよ。御馳走や今ゆかん多くなー作いたしがてー。木ぬ実でいせー買いる物おむるうさぎらん。今あパンうさぎーせーやー。アダンガチャーよ。何んねーん時代やぐとう、山ぬ木ぬ実うさぎーるばーてーや。

あんきーに、くぬ七月ぬ、親祖先ぬ、ウスコー、あまんじ罰うきやーに。ウスコー、今までいせーぬうつさー全部受き取てーねーんさにんち。うぬ人ぬ、うさぎたれー、後生ぬ事、分いせーうらん。なー一般ぬ殆んどぬ人ぬ、とー私達あ親祖先ん、今ああまんじ罰がさつとーら分らんてー。だー、後生ぬ事わからんむん。とーあんせー、皆うさぎれーしよ。

とー、うりから、七月十三日に御迎して、十五日にとうい限りー三時、後生は、又鶏ぬ鳴りわから、遅りたんち又ん罰受きーくとう。あんきーに十三日の御迎や早くし、送や、よーんなーし。うんにーからずつと伝ていんじ、七月する事なたんりぬ話。

をした。色々な供物をしたが、昔はミカンとかリンゴはなかつた。(それで)山に行つて色々な木の実を取つて来たものよ。(今でも)私達は覚えてるんだ。御馳走は今よりも多く作つたものだがね。(それに)果物でも買つて供えることは殆んどしなかつた。今はパイナップルも供えるでしよう。アダンの実を供えたが、何もない時代だったので山にある木の実を供えていた。

それから、この七月の親先祖の祭事は、後生で罰を受けて、今までして來た祭事も全部うけ取つてないかも知れないと或る人がやると、後生のことを分る人はいないので、もう一般の殆んどの人が、それじや私達の親先祖も後生で罰されているのかも知れないと言い、皆が供え始めたそだ。

そういうことから七月十三日は(先祖を)お迎えして、十五日の三時までにはお送りした。(なぜなら)後生では一番鶏が鳴く時間に遅れたといつて罰を受けれるそうだ。それで十三日のお迎えは早くして、送りはゆっくりしたそうだ。その時からずつと伝わり七月の

お盆行事をするようになつたという話。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会 〔山内源徳、島袋喜美子〕

38
継子の麦搗き

話者 松田ウト(明治三四年七月二〇日生)

翻字 知花春美

自分ぬ娘あ、水かちやーち搗かち、ありがむのお搗かりーるむん、うりがむの一から搗ちやつせーや。

(継親は)自分の娘には麦に水をかきませてつかせた。あれの物はつくことができるのに、継子の物は何も入れないでついているでしょう。

「あいえーや、私ねー継親どうやい、くんぐとうーし。ち、涙^{なみ}ポロポロうとうしーがちなー麦^{むぎ}え搗^うちやくとう、うぬしつたいさーに麦^{むぎ}ぬ、涙^{なみ}ぬうちでーる麦^{むぎ}え搗^うかつたぐとう。

「あはーうぬ理由^{ゆう}やどうーやさやー」でいち涙^{なみ}うていてーるうつびぬ麦^{むぎ}えしらぎだつたぐとう、うりから麦^{むぎ}え。

「そうか、そういう方法でやるものなんだね。」と。涙の落ちた部分の麦はきれいになつたので、それから麦は(水を入れてつくようになった)。

繼子と二葉草

話者 松田ウト（明治三四年七月一〇日生）

翻字 知花春美

二〇日余ぬえーま、うれーうまんかいうつちやぐ
とう「なー今から貴方や許すぐとう行ぢー、二葉草取
ていくー」でいち繼親ぬ「二葉草取てい来」でいちや
ぐとう、なーうぬ二葉草でいせーわからんせーや、別
ぬ人お。

あんさぐとう、うぬ人ぬ、船ぬ出じーたんでい、魚
取り船小ぬ、「船乗ぬ人達二葉草知らに」でい、「二
葉草知らに」でいやぐとうやー、乗とーる人ぬ「う
り知らに童、松ぬ縁」でいやぐとうよー、うぬ松え
縁二ちやせーや二葉草。

あんし、うりさーに自分ぬ親ぬ家んかい行ぢ、食事
お食らんでいー。

大道出してい物習しでいせーうんなたとういや、う
ぬあんべーてー。あんすぐとう、うぬ乗とーる人達ぬ、
うりわからんてーでー、うりやてーしが、あんしが、
うり歌聞ち、「船乘いぬ人達、二葉草知らに」でいち

二〇日余の間、この子を（繼子）ここで養つたので
「もう今からおまえを許して（養つて）あげるから（
どこかへ）行つて二葉草取つてこい」と繼親が（言つ
た）「二葉草取つてこい」と言つた。もうこの二葉草
というのは、別の人ではわからないでしよう。

そうしたら、この人が（さがしていたら）船が出よ
うとしていた。魚を取る船がね。（繼子が）「船乗りの
人達よ、二葉草を知らないか」と言つたら、船乗りが
「それも知らない童、松の縁」と言つたようだ。松
は縁葉二つあるでしょ。二葉草が。

このように（二葉草をさがして）自分の親の家に行
つて、食事もしたということである。

大道に出て、いろいろ勉強しなさいというたとえは
こんなものだよ。だから、この乗つている人達が、こ
の事がわからなかつたら大変だつたね、だがその歌で、
「船乗りの人達よ、二葉草知らないか」「それも知ら

やぐとう、「うり知らに童、松ぬ縁」でいやぐとう、
「ないか童、松の縁」という歌で、松の縁を見たら、松
草ぬ葉あ見ちやぐとう、松んかい一ちあしえ一や二葉
草でいせー、あんさーに。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第五班（山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子）

40 繙子の機織りと二葉草

話者 松田ウト（明治三四年七月二十日生）

翻字 上原ヨシ

あれーやー、布織らちやぐとう、布ぬアジ注①うれー¹
入つて一ねーらんばーてー、ハーぬうれー。あんさぐ
とう、自分ぬ子あハー入つてーるばー。うぬ子ねー入
りらんばーてー。

あれはね、（繼親が）布を織らせた時のこと、布
のアジは（繼子には）入れてなかつた。それが自分の
子どもには針（織糸を通すもの）を入れてあつたそ
うだ。繼子には入れなかつた。

あんさぐとう、うりさぐとう、大道んかい出じてい
行ひ。あんしる昔ぬ大道んかい出じれー物習すんでい
る言葉注②あ。あんしハー入つたぐとう、子守ぬてー、子
守しーがちーなーてー、おばあさん達が「あぬナカジ
チ入らわる布の一あつちゅる。うんぐとうしえーあつ
かんどー」。んでい言ちやぐとう、うぬうれー、「あー

ないか童、松の縁」という歌で、松の縁を見たら、松
には二つあるでしょう。二葉草が、それだよ。

んちや」んでいやーに、道端みちばた行ぢ、うぬ布ぬぬナカジチ入りーしえー習ならひたぐとう、布ぬお織おりてい、自分じぶんぬ子こやか一いち番ばん織おりてーたんでいるばー。

またうぬ後あとんかいや、親おやぬ「貴女いなや二葉草ふたはすき取とつていい」んでい言いちやぐとう、二葉草ふたはすきなー分わけらんしえーやし。へ貴方あなたや分わけいみ、分わけらんだやー。二葉草ふたはすき取とつていいんでいち、親おやぬ行ゆらちやぐとう、親おやぬ。

あぬ船ふな乗のいぬ所ところんかい、海うみぬ側そばんかい行ゆぢえーんてー。『船ふなぬ人達ひとだか、二葉草ふたはすき知しらに。』んでい言いちやぐとう。船ふな乗のいぬ人ひとぬ「二葉草ふたはすきは知しらに松まつぬ縁えん」んち。松まつぬ葉はや二葉草ふたはすき二にちあしえーやー、うりんかい二葉草ふたはすき知しらにんち、うりやたんでいるばー。

そうだつた」と道端みちばたに出てその布にナカジチを入れるのを習つたので布を織ることが出来た。それで実子よりも一番に織つてあつたそうだ。

またその後には、継母が「お前は二葉草ふたはすきを取とつて来くわい」と言つた。二葉草ふたはすきというのはわからないでしよう。(貴女達ひとだは分わけるか、分わけらないでしょ)二葉草ふたはすきを取とつてきなさいと継親けいしんが行ゆかせた。

(継子は)あの船乗場ふなのばに、海の近くに行つたんでしょ。『船乗りの皆さん、二葉草ふたはすきを知しらないか。』と言つたら、船乗りの人が「二葉草ふたはすきとは松の葉はのことだ」と言つた。松の葉はは二葉草ふたはすきからなつてゐるでしょ。それが二葉草ふたはすきというものだ知しらなかつたのかと言つたそ

うだ。

注① 機織の器具の名、経糸を上下に分けるもの。

② 織機の器具の名、布を織る時、経糸を上下に分けてまん中に入れるもの。

話者 宇根良誘（明治三十九年六月十四日生）

翻字 知花春美

菊酒よ。昔あぬ、旅に行つてゐるんだ。男ぬ。妻え家んかいうちやーにやー。それでなし、長年、二、三年し後、帰ていちーねーよ。男が入つてゐるさーね。色男が、つくとーるばーてーや。

菊酒はね、昔、男が旅に行つてゐるんだ。妻は家においてね。それでもう、長い間、二、三年後に帰つてきてね。（その時は）男が入つてゐるでしょう。（妻は）色男をつくつてゐるわけだ。

それで、けー隣ぬてー。けー隣ぬ人ぬわかとーせーや。わかつてい、「いひぐわー休やーに家かい行き」。でいち、あんさーに、コップんかい酒えぢぢやーに、菊しうすてい、下んかいゴミ入つとーるばーよー。ゴミ入つていさくとう、くぬ人間ぬゴミんでいるむのー悪させーうするんせー、のーいんでいちょーるばーてー。

あんさーに、くぬ旅から帰いんでいしーねー、きつさうまあ男あ入つちよーるばーてー。入つちやぐどう、くぬ菊酒作いてい飲まちえーる人のーわかつてゐる言ちよーせーや。あんさーに弓持たちよーるばーよー。弓、

「くぬ弓さーに貴方がかなさし射りよー」でいやーに、友達ぬ持たちよーるばーよー。うぬ弓え。

そこで、この旅から帰つたところ、すでに、ここに男は入つてゐるでしよう。入つてゐることがわかつてゐるので、菊酒を作つて飲ませた人はそう言つたのでしょうね。そういうわけで、弓を持たしたようだね。「この弓で貴方の愛しい人を射ちなさい」と言つて、友達が持たしたようだね。その弓を。

あんし、まつさきに行ちーねー、馬ぬ、うりつしそーねー、馬んかい弓射なすんでいすしが射なさらんばーてー。あんし、家んかい来ぐとう、男ぬ來せーや。
逃^なぎーる暇^なんねーんばー。うぬ女ぬ、自分ぬ妻ぬでー。
ヘ昔^なえケー^(注①)でいちあんばー。タンス無んばー。ニービチケーでいち大^おがあんよー。ヘうりんかい入りやーにてー、うぬ男^おあ。

あんさーに、「これ変だなー」でいち、弓引なちやぐとうよー。弓引なちさぐとう、うぬ妻、自分ぬ妻え女^おかがどーるばーてーや。あんさぐとう、ケーんかいあたとーるばーてー。弓^ゆや。あんさぐとう震^{ふる}いるばーよー。なー「くり、変だなー」でいち思^{おも}てい、あきてい見^みちやれー、男^おが入^はつちょーせーや。あんさーにうぬ旅^{たび}から帰^かる男^おあてー、何んでい言^いらん。そのまままた友達^{ともだ}ぬ家^{いえ}かい行^くぢよーるばー。

あんし、わかて^{いて}いるやー、「ゴメえ、人間^{ひと}ぬ非^ひんでいせー、覆^おいるんせー覆^おらりんどー。うぬ意味^みつしるうぬ菊酒^{きくさけ}でいせー、コップんかい、下^{した}んかい、ゴミ入^いつてい、菊^{きく}ぬ葉^はし覆^おてい、貴方^{あなた}んかい飲^のまちえーぐと

そして、まつさきに（家）に行こうとすると、（途中に）馬がいたので、馬に弓を引こうとするができないようだね。それで、家に来たら（他の）男が来て^{いる}で^しょ^う。（突然、夫が帰つて来たので）この女は、妻は逃げる暇^なもない。ヘ昔^なはケー（衣裳箱）というのがあるがね。タンスもない頃で、ニービチケー（嫁入り道具）といつて大きいのがあるよ。ヘこの（ケー）中に男を入れていたようだ。

（妻の）「様子がおかしいなあ」と思^{おも}つて、弓を引いたらね。弓を引いたら、自分の妻はかがんだわけだ。かがんだので、（矢は）ケトにあたつたようだ。矢はね。そうしたら（ケーが）震^{ふる}るので、「これは変だなあ」と思^{おも}つて、あけてみると男が入^はつて^{いる}でしょ^う。旅から帰^かってきた男（夫）は（驚きのあまり）何も言わ^わず、そのまま、また友達の家に行つたようだ。

そこで、（その友達が言うには）「ゴミは（つまり）人間の非^ひというのは隠^かそ^うと思^{おも}れば隠^かすことができる。その意味で、この菊酒^{きくさけ}というのは、コップの下にゴミを入れて、菊の葉で覆つて、貴方に飲ましたのでね。

うや、貴方がしまさりーるんせー、なー貴方が許いる
んせー、くぬ妻えなーいちまでいん貴方あ妻ないしが
貴方が許らんむんやれー、なー別でいらんねーならん
せーやー。あんさーに、うぬ男あ考一せーやー。

「私がるなー旅んかい行ぢ居らんぐとう、なーしみ
るする。」でいちょー。

「あんさーに、うぬ意味さーに、菊酒でいせー九月
九日ぬ男ぬ帰てい来る日が九月九日、あんさーに菊酒
でいせーすんどー。」りさぐとう、喜名ぬ若者達一人
二人んかい言ちやぐとう、菊酒、元祖ぬ前んかい供ぎ
ーたんよー。」「君や浮氣るするい。」でい言ちやれー、
なーうれーわからんどうあさい、「何がお父、あん言
る。」「えー、うれーうぬ意味どうやんどー。君が男ん
でー入つてーでー供ぎれー。」でい言ちやぐとうよ、う
りからざんないよ。

だいたい菊酒でいせー、うぬ程度ぬむんやんよー。
簡単やんどー。

貴方がそれでいいのであれば、この妻は、もういつま
でも貴方の妻でいるが、貴方が許してあげなかつたら
もう別れないといけないでしょう。

そこで、この男は考えるでしょう。「私が旅に出て
留守にしていたので、（悪いのは私だから）もういい
でしょう」と言つた。

「そういう事があつたので、その意味で、菊酒とい
うのは九月九日の男が帰つて來た日が九月九日なので
菊酒というのはやるのだよ。」と、喜名の若者達一人、
二人に言つたらね、菊酒を祖先の前に供えていたんだ
ね。（そんな事があつたのを知らないので）「君は浮
気でもするのかい。」と言つたら、「どうしてお父さん
そう言うの。」「これはこういう意味だよ。君が男でも
入れてあるのなら供えなさい。」と言つたら、それから
しなくなつた。

だいたい菊酒というのはそんなものだ。簡単だよ。

注② この菊酒由来は、結果で本来の主旨から大きくはずれて、旧習打破に向かっている。

喜名では現在でも年中行事として行なわれており、菊の葉を浮けることは健康祈願の意味に解釈されている。

42 若水由来

話者 松田マツ（明治二十五年六月一日生）

翻字 名嘉真 宜勝

容姿ぬねーらん、暮しかんていそーる人ぬ、水温ら
さーに浴みたくとう若くなてい、あんしから、年ぬ夜
ぬ若水えー、迎が行ちゆんちぬ話やたしが。

容姿も美しくなく、貧しい暮しをしている人が、水
を温ためて浴びたら若くなつて、そういうことで、大
晦日の若水を汲んで来るという話でありましたが。

大変、がじんちゆくーエンチュなつい、猫ぬぐとう
あてーに、ヒングかーし、あんさくとう、年ぬ夜ぬ水
温らち浴みたくとう、若くなとーんでいちら聞ちやる。

どぶネズミや猫のように、垢だらけで、そして、大
晦日の若水を温ためて浴びたら、若くなつたという話
を聞きました。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会 〔知花春美、阿波根初美〕

注 元旦の早朝、ウブガ（産井戸）と称する村で一番古い重要な井戸から、ワカミジ（若水）を迎える風習がある。読谷村では、若水を汲みに行く時に生芋の大きなものを三箇井戸の神に供える。汲んで来た若水で、家族の者が洗顔し、茶を沸かして仏前に供える。

翻字 島袋 フジエ
神谷初子

金持人とう貧乏者がうてい、まー、年ぬ夜あぬ、金持人ぬ家んかい乞食ぬ姿し、「あぬ一家貸ちとうらし。」でいち行ぢやぐうとう、あぬ、金持人ぬ家や欲やぐとう旅人が来ねー物ぬ減ないんち欲やぐとう「泊まらするくとーならんぐうとう前ぬ家んかい行け!」んでい「泊まらさん。」りち言ぢやぐとう、だー、うぬ乞食え別ぬ家んかい行ぢ、うまんじなー「夜んゆつぐーといいやー行ちゆるん所んねーんぐとう泊まらちとうらし。」んちやぐとう、なー、「私達あ貧乏者なでいぬーんねーん、火びかーじ燃ち温むぐとう、ぬーんねーのーあしが、なーんまぬ片隅やていんしむらー、んまんかい泊まみそーれー。」んち泊まらちさぐとう。

皆が、けー寝んでいから……、あぬ、此ぬ家や朝あぬ、おじいさんとうおばあさんが朝起きてい見ちゃぐとう餅んまんどーい、お米ん有い、肉んぬーんくー

お金持ちと貧乏人がいた。ある年の夜（大晦日）にお金持ちの家に乞食の姿で、「あのう、家を貸してくれ。」と行くと、（それが）あのうお金持ちの家は欲張りなので旅人が来ると食物が減るといって、「泊めることは出来ないから前の方の家に行け。」といつて泊めなかつた。（それで）その乞食は別の家に行つた。（そして）そこで、「夜になつても行く所がないので泊めてくれ。」と言つた。（すると）「私達は貧乏者で何もなくて火だけを燃やして火正月しかしません。火だけ燃やして温まるので、何もありませんが、それにその片隅でもよろしかつたら（どうぞ）そこに泊つて下さい。」と言つて泊めてあげた。

(すると) 皆が寝た後に(そこに泊つた乞食はこつそり食物を置いて去る)。あの、そこのおじいさんとおばあさんが朝起きて見ると、(そこには) 餅も沢山あり、

御馳走んまんでい、さーにうぬ旅人の一姿あうらんなどーるばー。うらんなどーしが。

あんしからよー、又、うらんなどいそーしが、今度お、この金持人の家や、あぬ今まである神様が言うよりは、翌日起きたれー、皆家族動物なとーしが、男主ひかーサールーかいなさつてい、サールーなてい出じとーしが、これ、もー執念深くて、あんし、ちやー「私あ家ねーれー、私あ家ねーれー」と言うて、その門ち叫びたぐうとう。くぬ貧乏者ぬおじいさんとおばあさんはなー、神様に言やーに、うぬ家んじなー、「貴方達あ、うんぐとーるボロ家やぐとう、あまんじ住まれー。あま、誰んうらんぐとう、あま、いつた一家しみーんろー」んちやぐとう、「オー」んち、あまんじ入つちよーしが、サールーぬ毎日、「私あ家返れー、私あ家返れー」。言うてくりかえしくりかえし言ち来ぐとう「なー、これはどうしたらいいかねー」。年寄達あ心配つし、そして又、その神様が現われて、あんし神様に相談したら、「あぬ黒石、ちやつびんそーる黒石があぐとううぬ黒石焼ちやーに、うぬサールーが毎日座る所んかい置ちよーきよー」。でい言ちやぐと、「はい、じやーそ

お米も肉も何もかもあつて御馳走が沢山あつた。しかし、その旅人の姿はもうなかつた。

そしてその夜、旅人はいなくなつていたが、（不思議にも）今度はこのお金持ちの家は、ある神様がいうには、翌日起きて見ると家族みんなが動物になつていたが、男主だけが猿にされ、猿になつて出て来るが、これがもう執念深くて、それに何時「私の家をよこせ私が家をよこせ」と言つて（貧乏者の）その門に来て叫んだ。（それで）この貧乏者のおじいさんとおばあさんが神様に（このことを）言つた。（すると）「貴方達はこんなボロ家だから向うに（金持ちはの家）住むとよい。向うは誰もいないから向うは貴方達の家にしてあげるから」と言つた、「はい」と答えてその家に入つたのだが、猿が毎日来て、「私の家返せ、私の家返せ」と繰り返し言つて來るので、「もうこれはどうすればいいのだろう」と老夫婦が心配している所へ神様が現われたので相談すると、「あのとつても大きな黒石があるから、その黒石を焼いてその猿が毎日来て座る場所に置いていてね」と言つたので、「はい、じやあそします」ということになつて、その貧乏者が

うします。」んでいるくとうなやーに、うぬ貧乏者お黒石焼ちやーに、うまんかい、置ちやぐとう、いんねーすんねーサールー來ーに、すぐ慌ててい、うぬ石ぬ上かい座ちやぐとう、なーしぐ、「アツチヤアツチヤ」して、逃げてい行ぢえーるばー。あんしから、うぬサールーぬ尻え、なー真つ赤らー。そのいわれでなー、サールーぬ尻え赤などーんでい。

なー、うりいら家ねー、サールーん來んない、このおじいさんとおばあさんはいつペー幸福に暮ちやんでいる話。

黒石を焼いて座る場所に置くと、思つた通り猿はやつて来て、慌てて（焼いた）石の上に座つた。すると（とたんに）「アツチツチー」と逃げて行つてしまつた。それから猿の尻は真つ赤になつたといい伝えられてゐる。

もうその後は（貧乏者の）家に、猿は来なくなつて、このおじいさんとおばあさんは大変幸福に暮したといふ話。

採集 S 51・10・17 講谷村民話調査団第四班（山城悦子、又吉初子、田場春美、当真久美子、島尻博光、湧川汎子）

44 大年の宝

話者 吉田 ツル（大正三年三月十日生）

翻字 阿波根 初 美

あんし、年ぬ夜に金持人ぬ家んかい、「泊まらしつ」。ちちやぐどう、「貴方やしたなしーはごーさ者やぐとう泊まらちえーならん。別んち泊まれー」。んり言ちや

（ある人が）大晦日の夜に金持ちの家に「泊めてくれ」と来ると、「貴方はきたない不潔な者だから泊めることは出来ない。別で泊まれ」と言つて（断わられ

ぐとう、「あんせー、あんるやいびんなー。」んち、行ぢやーにまた歩つち、百間ばかり歩つちやぐとう、また、うまんかい、茅葺ぬ大変貧しー生活そーる所んかい、「泊まらちきり。」んち行ぢやぐとう、「あーなくんぐとーぬ家るやいびーしが、筵んねーんあたいやいびーしが泊まいせーびーんなー。」りちゃくとう、「筵んねーんていんしむぐとう夜明かしみていきり。」んり言いやぐとう、あぬー、「とー、あんせーなー、貴方なーが良たさみせーらー入みそーれー。」んち、蒲簾が敷ち寝んじみそーらち。蒲簾んでいし、うり一枚でいがらーあたんりー。

あんさぐとう、また、うぬ夜なー、起きとーていぬ話んでいー。「あんし、貴方達やあんし貧しー立場し私ねーなー大変助かてーぐとう。」んち、あぬー、箱、箱ねー、箱置ちやーに、「くぬ箱お今日や開きーんなよー、私が行ちから開きりよー。」んち、「くまんかい隠みてーくとう。」でいち、裏座ぬまーんかいいでいがらー、うぬ人が入りみそーやーに。さぐとう、「開きーんなでいみせーてーるむん。」りち、「私が行ちから開きり。」んちさぐとう、うぬ人またなー、帰いみそーち

た)。「そうですか」と言つて、また歩いて行つて、百間(一八〇〇メートル)ばかり歩くと、またそこに、茅葺の大変貧しい生活をしている(人の)所へ、「泊めてくれ」と行くと、「いやもう、このような家ですが筵もないくらいですがお泊まりになりますか。」と言われたので、「筵はなくともいいから夜が明けるまで泊めてくれ」と(ある人は貧乏人に)頼んだ。(そこで貧乏人は)「さあ、それならもう、貴方がよろしいのでしたら、お入り下さい。」と言つて、蒲簾を敷いて(その人を)お寝かせした。蒲簾というのも、那一枚しかなかつたそうだ。

そして、また、その夜、起きていての話だそうだ。「このように、貴方達はこんなに貧しい立場で、私はもう大変助かつたから。」と言つて、(その人は)箱、箱ね、箱を置いて、「この箱は今日は開けるなよ、私が行つてから開けなさいよ、ここにしまつてあるから。」と言つて、裏座のどこにとか、その人が入れられた。それで、「開けるなと言われたから」と、「私が行つてから開けなさい。」と言われてから、その人はお帰りになられた。どこに行かれたかわからない。どこにと

やぐとう。まーんかいが行いみそーちやらーわからん、まーかいいんでい言みそーらんぐとう行いみそーち。あんし、行いみそーち後からまた、うぬ箱お開きたぐとう宝物が一杯入つてね。あんし、うぬおじいさん、おばあさぬん「誠そーちーねー宝ん呉みせーさやー、神るやみせーてーさやー」。んち、とつてもいいおばあさん、いいおじいさんなつてねー、あぬーもー、大変偉い方なでい、あぬー、うぬ人ん世ぬ流りぬ残たんでいーぬ話やたん。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第六班（阿波根初美、町田愛子、喜友名春子、池原涼子、宮里光雄、仲村渠清美、棚原直子）

トウシトウイユーバン飯^{ばん}

話者 玉城ヨシ（大正一年七月三一日生）

翻字 具志堅タケ

ある、なー貧乏者ぬ、年とういる肉ん無んあたいるやしが、「トウシトウイユーバンでいちあるむん」でいち、夕飯のー作てい食らくとう、なー食むしん無らのーあしが、てーげーしまちやしが。

ある、もう貧乏者が、（大晦日に）年越す肉（御馳走）もないくらいであつたが、「トウシトウイユーバン（年越し夕飯）は食べなければいけない」と思つて、ろくに食べるのもなく、ありあわせのもので済ました。

もおっしゃらずに行かれた。そこで、（その人が）行かれた後で、その箱を開けてみると宝物が一杯入つていた。それで、そのおじいさんとおばあさんは「誠にしていれば宝も下さるんだね。神であられたんだね」と言つて（感謝した）。（そして、その正直で貧乏者の夫婦は）とてもいいおばあさん、いいおじいさんになつてね、あのもう、大変偉い方になつて、あの、この人たちも沙汰を残したというお話です。

「年ぬ夜ぬマカイや洗いしえーあらん。黄金ぬ入ーがすらーわからんむん。」ちやー。さくとう、黄金ぬ入つち、さくとう、幸いに神様から、あんしやたんでい。金持そーたんでいぬ話。

「大晦日に使つたお椀は洗うものではない。(もし
かすると) 黄金が入るかも知れない」と(待つていた)。
すると、幸いにも神様のお恵みがあつて、椀に黄金が
入つていたということだ。そして、お金持ちになつた
というお話です。

46 男の友情

話者 翁長ウト(明治四十三年二月十九日生)

翻字 阿波根 初美

ある所んかいよー、男の友達の、あぬー、いつペー
ーぬいい友達ぐわーぬうたんでいー。あんさぐとう、
うぬ友達ぐわー一人やなー、妻ぐわーとうめーてーる
ばーてーやー。けー隣、襖隣で、一人ぬ男なー、妻ぐ
わーとうめーていさぐとう、今度お、妻ぐわーとうめー
ていといつペー仲いいやしが、是非とも勤めかい行か
んあいねーならんなやーにあぬー、旅かい行ぢやんで
いよー。うぬ妻とうめーてーせー。あんさくとう、う

ある所にね、男友達の、あのう、大変いい友達がいたつて、それで、その友達の一人はもう、妻を娶つたわけだね。(二人は)隣、襖隣で(住んでいたが)、一人の男は妻を娶つたら、今度は、妻を娶つたら(その妻)と大変いい仲なんだが、是非とも勤めに行かねばならなくなつて、旅に行つたらしい。この妻を娶つた男は。それで、その友達に、「私が旅に行つている間は、私の妻は君の方で立派に守つていてくれ。浮氣

ぬ友達んかい、「私が旅行ぢちゅーるえーかー、私あ
妻えー君さーに立派守とーていとうらしょー。サング

ワナーンしみんなよー」。りち、な、頼でーるばーて。

「うれー友達んかいあんすかなー頼まつとーるむんな
ーくれー大事なとーさやー、むしかくりがなー、フェ
ージュリサングワナーンでーしーねーちゃーすが」。ん
ち。

襖ちょつと開きやーなかいてー、ちゃー夜ないねー、
手置ちきてい眠じゅたんでいよー。「君あまーにん行
ぜーならんどー。私ねー、君あ夫んかい頼まつとーく
とう」。りち、あんし手ぐわー置ちきてい眠じゅたんで
いー。あんさーに、うりが真心ぬうりさーになー、夫
ぬ帰てい来からー妊娠そーるふーじてーやー。妊娠さ
くとう、「君や守ていとうらしんでいれー、まーまで
いん守いんなー。私あ女触てーさやー」。んちなー、憎
氣喧嘩が始まとーるばーてーや。あんさぐとうなー、
「君や、うんぐとうーせーならん。女お預きーるんせ
ー、立派ぐわーる務みーるしみーる、君が触てーさや
ー」。んち、じつこー喧嘩ていさぐどう、「あねーあら
ん。私あ真心ぬ現りーぐどう。私ねー、襖開きやーに

もさせないでくれ」と言つて、もう頼んだわけだ。(一
すると友達は)「これは、友達にあんなに頼まれて、
もう大変なことになつたなー。もしこの女が街娼のよ
うに浮気でもしたらどうしよう」と言つて(心配した)

(友達は)襖をちょっと開けて、いつも夜になると、
(女の身体に)手を置いて眠つたつて。「君はどこに
も行つてはいけないよ。私は、君の夫に頼まれている
から」と言つて、それで、手を置いて眠つたつて。そ
うしていると、この男の真心が(女の身体にうつって)
もう女は、夫が帰つて来てから妊娠しているようすな
んだ。(女が)妊娠したので、「君は守つてくれと頼
んだら、どこまで守つたんだ。私の女に触わつたな」。
と言つてもう、憎氣喧嘩が始まつたわけだね。すると、
「君はこのままにはしておけない。女を預ければ、立
派に務めさせるのが(友情というものなのに)君は触
わつた(手を出した)な」と、激しく喧嘩したら、「

そうではない。私の真心が現われるから、私は襖を開

手る置ちきていやー、まーにん行かん考し、手るかん
し置ちきてい眠たるやー。うりがうふいぐわー動ちー
ーねー、『まーんかい行ちゅがやー』んち、私ねー夜
ぬみーん眠らんよーる守てていやーそーるむんぬ、私に
んかいあん言んなー』んり。『私が触てーんり言んな
ー』んち。あんしなー、うりさくとうてー、「とー、
私あ真心おうりが産しねーわかいるはじやくとう、産
するまでー、まじ待てー』んりち。『やみ』んりちな
ー、辛抱そーてい。なー月ん満ち、産ちやぐとう、い
んねーすんねー、手ばかーん、かんし。指、指ばかー
ん産ちえーたらりーぬ話やるばー。

けて手を置いて、(女)がどこにも行かないようにと
いう考えで、手をこうして置いて眠つたんだ。女が少
しでも動いたら『どこに行くのかなー』と、私は夜通
し眠らないで守つているのに、私にそんなふうに言う
のか。と。それでも(友達が)、「よし、私の真心
はこの女が産んだらわかるはずだから、産むまでは、
まず待て。」と言うと、「そうか」と言つてもう、(男
は)辛抱した。やがて月も満ちて、(女が)産んだら、
やつぱり、手だけが、こうして(出てきた)。指、指だ
けを産んであつたという話なんだ。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第六班(阿波根初美、町田愛子、喜友名春子、池原涼子、宮里光雄、仲村渠清美、棚原直子)

47 渡嘉敷ペークー(1)

話者 渡嘉敷 兼求(明治十三年六月十五日生)

翻字 具志堅 タケ

くれー、ミーなとーたんでいやー、剣術。うれー、
誰がすがやれー、平民のーさん、士族ぬすしやてーる

これは、大物になつた剣術の話だがね。それは、誰
がしたかというと、平民ではなく、士族がするものだ

ぐとーん。うぬ士族達ぬ、先生頼んで習でい習でいすしが、
うつたーがなー、大変沖繩とうせー、何でも上手んで
いぬ話。話聞ちやぐどうやー。試合んでい。へ試合んで
いせー一分とーさにやー。試合。うり先生かかてい
武勇習いる所やん。うりが二番目に望ろーぎさん。
試合望でいさくとう、んちやうれー、ちやーしすが
るんやれー、くぬ沖繩んでいせー、うぬ時えー、道具
物ぬ切り物ぬねーらんあい、又、やらすしんねーらん
専ら手るやるぐとう。棒やあんてー。棒やあぐとう、
あんるやくとう、うんな物なー、沖繩とうせーうりや
てーるふーじ。あんまり押いせー居らんたんでい。や
くとう、内地ぬ武士ぬ二番ぬよー。うり望でーるぐと
ーん。「沖繩ぬ上手んでいしが、試合しみていあぬー見
だ」でいち。

さぐとう、「ゆたさん」内地ぬ試合んでいーねー、太
刀持つち、ペークタンメー^{法①}や、また太刀ん持つたん、
何んさんぐとう、扇子小^{ちよ}、くり一^ひち持ちゅん。「私ね
ー何ん持つたんぐとう、くり一^ひちさーにゆたさん。貴
方や太刀持つてい」んち、太刀持つちつし受きゆーさ
んでいせー、くりしさりーんどー。さりーしやしがや

つたそだ。この士族達は、剣術の先生を頼んで習つ
たが、この人達は、沖繩では何でも大変上手だという
話を聞いていた。それで、試合を申し込んできた。へ試合
というのは分るのでしよう。へ試合（剣術の）がある
士族が、先生について武勇を習っている所の二番手が。
試合を望んだので、それをどうしてするかというと
この沖繩ではその頃、闘^争道具で切れる物はないし、
また、槍だつてなかつた。専ら手だけが頼りだつた。
棒はあつたが、そんな物では沖繩としては相手になれ
なかつた。相手を抑え込めるような人は居なかつたそ
うだ。だから、内地の武士の二番手が試合を望んだそ
うだ。「沖繩は上手だというが、試合をさせてみましょ
う」と言つた。

すると、「よろしい」と答えた。内地で試合といえば
太刀を持つ、しかし、ペークータンメーは何も持たず
に、ただ扇子だけ、これ一つを持っていた。「私は何
も持たないで、ただ扇子一つだけで結構だから。貴方
は太刀を持ちなさい」と言つた。太刀を持って受けき
れない者は、これで（太刀）をやられるよと。太刀で

「、うれーなー、理屈ぬ強さるばーてー。くりんでいせー、飛び蹴りぬあい、又立つちよーてい蹴しがあい。
へ飛び蹴りんでいねー一分とーんてー。」走つて来す
せー飛び蹴り、立つちよーてい闘いせー、なーうり当
い前。

あんやしが、飛び蹴りんでいねー、無術さーねーは
んざらん。又、ペークータンメーや、くぬ扇子小一
持つちよーるふーじ。くぬ時えー、ちゃんぐとうーし
すがるんやいるんせー、くぬムシル、くぬ畳えーあら
ん、ムシル一枚敷ち、うり一枚ぬ広うていんでいちょ
ーるぐとーん。あんし合点そーるふーじ。

さぐとう、二人構てい立つちしーねー、「とーつ」
んでいぬ時ねー、うぬムシル足ぬ指し、けーすんちや
ぐとう、しーくとーるぐとーん。うぬ時ねー行ぢやー
に、カジ押しーちきてー、「ちやがついやーや、今す
しが」りちさくとう、「なー悪つさん」でいちょー。
あんし負きらんたんでいぬ話。

武勇ぬ話んでいねー、なーうぬ話、人お理屈ぬ強さ
てーるばー。

やられるかも知れないが、ペークーは理屈が強い人だ
つたので、飛び蹴りがあり、また立つたままで蹴る術
を知っていた。へ飛び蹴りというのは分つていて
しょう。走つて来てするのは飛び蹴りで、立つたま
で闘うのは当然である。

そうなんだが、飛び蹴りというのは、術を知らなけ
れば応じられない。また、ペークータンメーは、この
扇子一本だけ持つていたそうだが、その場面でどんな
にしてやつたかというと、この筵の上で、畳の上では
なく、筵一枚敷いて、その広さで試合を望んだそ
だ。そういう条件で合点したそうだ。

そして、二人が構えて立つていると、「はい、始め
！」と言つた時、この筵を足の指で引つぱつたので、
転んでしまつたようだ。その時に行つですかさず（ペー
ークーが）相手の首筋を押え込んで、「どうだ君、今
やるけど……。」と言うと「もう、悪かつた」と言つた
そうだ。相手が詫びたのでペークーは勝つたという話。
武勇の話といえば、もうこの話に限る。ペークーと
いう人は理屈の強い人だつたのでしょう。

注① 渡嘉敷親雲上、尚敬王十三年寛保三年（西紀一七五〇年）首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男に生まれ和名を兼副という。兼副は長じて花当の職等を奉じていたが、二七才の時鹿児島へ行き文武の修業をなすことを七年和文、和歌、書道、生花、謡、剣道、茶道等の諸芸道を修得して帰朝し、尚穆王の世子、尚哲公の仮右筆となり、翌和右筆となつた。尚育王十四年天保十二年（西紀一八四一年）九二才の時、北谷間切真榮城の名島を賜わり、「真榮城」に改姓。尚育王十七年弘化一年（西紀一八四四年）旧三月二十四日九五才で桑江之前の奄で死す。

渡嘉敷ペークー(2)

話者 渡嘉敷 兼求（明治十三年六月十五日生）

翻字 具志堅 タケ

ペークー・ターンマー^{親や}_{注①}、守役^や。守役んでいねー、かんししかすし。王しかちよーる人。国王しかちよーしやい。うすばすんでい言ねー、今とうしえー、^金摂政^{さんせい}三司官^{さんしがん}やー。うりてー、摂政^{さんせい}三司官^{さんしがん}でいーねー、なー上^{じよう}んかいめんしえーしやー、三司官^{さんしがん}ぬるめんしえーしえ。大将^{だいしよ}てー。うぬ人達^{らど}がそーる仕事^{しごと}そーるしじてー叔父^{おじ}や。摂政^{さんせい}三司官^{さんしがん}やくとううりそーい。

また、国王や、首里^{さき}ぬ城^{しろ}およー、中じんなかいあたしがやー。へ分^わとーさに、あぬ城^{しろ}ぬあたしえーか

ペークタンマーの親は、（国王の）子守役でね、子守役と言ふと、国王の幼い頃に、子守りした人のことである。お付け役といふのは、今でいう、摂政^{さんせい}三司官^{さんしがん}だね。摂政^{さんせい}三司官^{さんしがん}といふと、上位についている方のことで、いわば大将のことです。その人達がしている仕事を（ペークーの）叔父さんはしていたわけさ。摂政三司官なのでその仕事をしていた。

また、国王が住む城は、首里の中央にあつたが、へ分るでしょうね。あの城があつたことをへずつと向

一 まあまから来しえー、あれー本門。那霸から城んかい入つち来る本門。又くぬ東んかい向かとーしえー赤田御門んでいちょーん。

家えーまーやがるんやいるんしえー。ペークタンメーぬ家えー、うぬ赤田御門から三番目やてーるふーじ。だー守役やしんでいちょー。へヤカーンでいしえー分なとーらやー国王しかちよーし人やくとう。うぬ人が家んかいどう来い、うぬ時にペークタンメーや、いくちないたがどうんやれー、八位もないたんでい。

うりが生りぬ変わてい。どうくあつさりぬ強さくとう、国王や、うりがんまりしよ、わちやくしよ、喜そみしぇーるぐとーん。酒うりてー、なー国王んかい出じやちよーぐとうやー。なーうりが話しーるんしえー、くぬ茶碗ぬんかいうりにん注じとうらしーるんしえー、ひつかしーるぐとーさ。ひつかしてーしーしーざくとう、親とうしえー、国王ぬ前うてー、くぬ童がくんぐとうーしみてーならんでいやーに、「あぬ、いえー、いえー来わ。」んでいち。あまんかい呼ばーに、呼でい行ぢ隅んかい。人ぬ見だん所んかい縛ち引つちきていやらさんぐとーんうまねー。さくとー、なー國

うから来る所は、あれが本門。那霸から城に入つて来る所が本門、又、門に向つている所が赤田御門と言つていた。

ペークタンメーの家はどこだつたかというと、あの赤田御門から三番目だつたそうだ。それは守役だということでね。へ守役というのは分るでしょー国王のお守り役をする人だから。国王の家にペークーは来ていたが、その時ペークーは何歳だつたかというと、八歳くらいだつたそうだ。

ペークーは風変わりな人だつた。とてもあつさりした気質だつたので、彼を相手に几談をしたり、からかつたりして喜んでいらしたそうです。お酒を国王にしてあるので、国王は、ペークーが話をすると、彼にもその茶碗に酒を注いでやると、それを飲んでしまつたそうだ。何回も飲んでしまつたので、親としては、国王の前で、こんな幼い子どもに、酒を飲ませてはいけないと想い、「あのう、君々来なさい。」と、他の場所に呼んで、隅の方に。人の見えない所に、縛りつけ、国王の前には行かせなかつたそだ。すると、もう国王は、話をしたいが(相手がいなくて出来ない)

王や話をさんでい。うりわくてい喜そーしが、居らん、来んどうあくとう、ならん、縛らつているうくとう。

さくとー、国王やうぬ座ちょーてい、「ぬう、うぬ童まーかい行ぢやが」んでいちさくとう、返答やらん。縛ちるあくとう。じやますくとうんち、うれ一八ちぬ年。

あんしさくどう、なー親また心配っし、あーくれー国王ぬ望み、気持くれーかんしえーならんしがんでいち考げーてい、うりんかい言わきし、「とーあぬー、いやーはんしーるんさー、またあまんじ拝みよー」でいちやぐとう、「んーんー、なー行かん」でいち、うれー（ペークー）なー大変やくとう行かんでいちさくとう、親ぬなー大変わきし行らちよーるぐとーん。

あんしやしが、うぬふーじし、どうくまくなていさくとう、あとー親あくれーあぬー、首里うていかんし育なでーならん。叔父んでーねーやー、國頭伊地ーんでいる所ぬシマ貴てい、あまんかい行ぢよーるふーじ。くれー叔父ぬ前んかい行らち、そーりわるやるんち、八ちぬ年に行らちよーるぐとーん。なー、う

ペークーを相手にお喋べりして喜んでいたものをー。
彼が居なくて、来なくなつたのでー：（話しが）出来ない。（それもそのはず）縛られているから。

それで、国王は（退屈そうに）座つていて「いつたいあの子はどこへ行つたのか」と言うと、返答に困つて、縛つてあるので、じやまになるからとの理由で、それはペークーの八歳のことである。

国王の前に行かせないようにはしたが、親はまた心配になつて、ああこれは、国王の望みや気持ちに反してはいけないと思い、子どもに言い聞かせて、「それでは、繩を解いてやるから、君はまた向うに行つて国王に会いなさい」というと、「いやいや、もう行かない」と言つた。ペークーがもう大変だから行かないと言つたので、親の方でうんとなだめて行かせたそうだ。そうだつたが、あまりにもわんぱくだつたので、しまいには親の方が、この子は首里でこんなふうに育てはいけないと想い、國頭の伊地という村を貴つて住んでいる叔父の所に行かせたそうだ。この子は、叔父の所に行かせて立派な子にさせようと思い、八歳の年に行かせたそうだ。その頃からとても大人びていたん

にんにからちゅーい早さーあてーんてー。

でしおうね。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第一班（稲嶺盛和、山城悦子）

注① 渡嘉敷ペークー（一七五〇年生）の父親にあたり、渡嘉敷兼倫のことである。兼倫は尚穆王（一七五二—一七九四年在位）の御右筆主取の職を勤め、又、謡取調役として江戸に派遣される等の重職に在つて日本文学にも相当通曉していたようである。

② 琉球王朝時代の役職名で国王の補佐役、三人の重職で共同して任にあたつた。

49 渡嘉敷ペークー (3)

話者 渡嘉敷 兼 求（明治十三年六月十五日生）

翻字 具志堅 タケ

首里ねー昔えー、ヌールんちあたしえー知つちょー
み。女達ぬヌールでいち。あぬ、ウマチーばなー、
白帽子かんてい嶽々抨でい歩つちゅしが居たんどー。

首里には昔、ノロというのがあつたが知つてるかな。
女達のノロといつて…。ウマチーが盛んな頃に、白帽
子をかぶつて嶽々を抨み歩いている人がいたよ。

うりがあれー、チージン御殿（注④）でいちよー、うりうぬ
一家借とーたさ。県中（注③）ぬヌール、村なかいん幾人（注⑤）が、
読谷山やていん、二人三人の一居たのーあらんがやー。
ヌール殿内（注⑥）んちあしが、ヌール殿内（注⑥）んでいぬ所（注⑦）おうぬ
ヌールぬ家やるばし。うつたーや時々あぬー城んかい

それがあれば、チージン御殿といつてね、この家を
借りていた。県中のノロで、村にも幾人かいた。読谷
山にも二、三人はいたんじゃないでしょうか。ヌール
殿内（注⑧）といつてあるが、ヌール殿内（注⑥）という所は、このノ
ロの家のことである。この人たちは時々城に行つて祈

行ち物願えさいやー、國ぬ願えどうやんどー、物願え
んでいしえー。神とうし信じーてーぐとう、服装ん、
うつたーや神ぬ服装るしみていい歩かすたさヌールん
いしえー。

村に、読谷山でーやいるんしえー、宇座んかい一人
居い、喜名なかい居い、楚辺なかい居い、読谷山やて
いん三人うたんよーヌールぬ、うつさ居しが、県中ぬ
ヌール、あぬー、何か用事ぬある場合、皆城んかい集
てい御願えするくとうんあいやー。又、何やかんや願
事ぬあいねー祝、踊たい、ぬーさいんするふーじやさ。
あんし、むる県中ぬ仕事する女ん居んてー。うれー
無料あらん、ヌール地でいち、土地ん多く与らつとー
ん県から。

あんしそーぐとう、あぬーうつたーが居しがやー、
うれーだーあまんかい行らちえーぐとう、あとーあま
ー、国頭のー首里から行ぢえー、淋らーさんあさやー。
八歳るないしが、しぐ頭髮んもーいくわんくわんし、
首里んかい出じてい来るぐとーん。珍まさんあい、ち
ゆーい早さんあてーんてー。八歳ないしが国頭から首
里までいたんでいくとう。

村でも、読谷山でいえば、宇座に一人、喜名にも居
り、楚辺にも居たし、読谷山だけでも三人は居たよヌ
ールが。それだけ居たが、県中のノロが、あの、何か
用事があるとき、皆な城に集まつて御願いをすること
もあるし、また、何やかんや願い事があれば祝いもし
踊つたりなどもしたそうだ。

こうして、殆んど県中の仕事をする女もいた。それ
は無料ではなかつた。ヌール地として多くの土地を県
から与えられていた。

そうだつたので、首里にはノロが居たが、ペークー
は国頭の方に連れて行つたので、しまいには、国頭と
いう所は、首里に比較すると、淋しいでしよう。八
歳だけど、すぐ頭髮も乱れるほど急いで首里にやつて
来たそだ。珍らしいことに、早熟だつたんでしょう
ね。八歳になる子どもが、国頭から首里まで来たそ
だから…。

願したり、國の願いごとだけね、(ノロたちを)神
として信じていたので、服装もこの人たちは神の服装
をさせて歩かせていたね。

なー、うにんねー、親達んかい、「叔父めーや淋しきぬないびらんくとう、此処うてい勉強さびーくと
う、なー許ちくいみそーり。」んち。「あんしえーあん
しーよー。」んでいち。あぬー童そーいねー、あんやた
んでいぬくとう。うれーなー童そーにぬくとう。

私ねー、元氣やるうちやー、無理ぬ事んでいちはー、
むるしえー居らんくとうやー、沖繩うていん、武勇や
ていん、学問やていん抑いしえー居らんたんでいぬ話、
沖繩うてー。やしが、他人苦しみたる事んちえー絶対
ねーらんくとうやー。「私子孫なかい馬鹿な事すしえー^出じらん筈。」んでいち、うつさー遺言やいぎさん。
遺言やしが、私が今、調べてい見じゅんてーやー。
あぬー、監獄とか、警察とうかんかい入つち、うんな
罪けん受きたしえー、私達子孫なけーうらん。うれー
なー実際なかーうらん。

もうその時は、親たちに「叔父さんの所は淋しくて
たまりませんので、此處で勉強しますから、どうか許
して下さい」と言つた。「そうだつたらそうしなさい。」
と親は言つた。このように、少年の頃は、わんぱくで
早熟なペークーは親たちに面倒をかけたそうである。

私は、元氣でいる間はね。無理だと思うことは全然
してないからね。(ペークーの言)、武勇でも、学問
においても、彼より秀れた者は居なかつたという話で
ある。沖繩では…。そうだからと言つて、他人を苦し
めることは絶対になかつたそうだ。「私の子孫に馬鹿
なことをするのは出ない筈だ。」という遺言を残したそ
うだ。遺言だけれども、私(話者)が今、調べて見た
んだけど、あのー、監獄とか、警察などに入れられて
罪を受けた人は、私達の子孫にはいない。それはもう
実際には居ないということである。

② 沖縄諸島で行なわれる、二月ウマチー（麦穂祭）、三月ウマチー（大麦祭）、五月ウマチー（稻穂祭）、六月ウマチー（稻大祭）の四祭が知られている。喜名部落でもこの四祭が、ノロを中心として行なわれていた。

③ 沖繩本島およびその周辺の島々では、神女たちが祈願をしたり祭を行なつたりするところを御嶽^{ミヤクニ}、または、ウガミと称している。喜名部落では、御嶽はウタキ（ニシムイとも称す）、ユーフルダキ、クガニムイ、グーフヌニー等がある。

④ 琉球王国最高の神官の聞得大君、チフィウフジンのこと。尚真王が中央集権の国家体制を一六世紀の初めに確立した際、巫女制度の改革を行ない、聞得大君を頂点にすえ、その下に真壁大阿母子良礼、首里大阿母志良礼、儀保大阿母志良礼の三人の大阿母志良礼の職を置き、その下にさらに村々のノロを配属するという組織をつくった。

⑤ 読谷山村（現在、読谷村と改名）には、ヌール（ノロ）は五名いた。この物語に出ている宇座にはヌールは配置されてなく、座喜味ヌール、瀬名波ヌール、楚辺ヌール、大湾ヌール、それに喜名ヌールの五名である。現在、読谷村には完全な姿のヌールはない。その代理的なものがいて時々祭に参加している。

50 蛸か化物か

話者 松田ミヨ（明治四年二月一日生）

翻字 玉城洋美

うぬ男ぬ、ガチやてーるばーてー。タコお取つてい
来なかい、煮る道具おねーんばーてー。鍋えねーんな
たくとう、隣んじハガマ借ていちえーるふーじ。
ハガマ借りいち、煮ちやくとう、隣んいふえー知恵

この男は、食いしん坊だったんでしようね。タコは
取つて来たものの、煮る道具がなくてね。鍋が無いの
で、隣に行つてハガマを借りて来たそうだ。
(男は)ハガマを借りてきて(タコを)煮た。また

持ちやでーるばーでー。隣ぬ人ん。今ねー、タコおむげーる時分のー、上んかい手やうつ返てい、たくないんでい。「今ねーなー、うれーたじとーる時分やぐどう、ハガマ取つていくーりわるやつさー。」んち。

あんさーにかい、「いえー、私達あ今、ハガマ使いくとう、ハガマとうらさんなー。」んちやくとう、見しらんよーい、そーまりーいつけーらちえーるしじやしが、ハガマンかいはっぱてい、汁る落ていたる、身や落ていらんしえーやー。

あんさーにかい、うぬ人が行ちから、「タクか化物か、タクか化物か。」んち、ひつちー言びたんでい。さぐとう、隣や聞ちよーしえーやー。男ぬがチなでい、自分一人、煮ち食いんでいさぐどう、「タクか化物か」でい言やきーんどーひつちー。

あんさーにかい、「タコお洗てい入つたん。火燃ちやん。たじたん。タクか化物か、タクか化物か。」んちえーしーしーすたんでい。

あんさくとう、んちやなー、見ちんねーんくとう、あとー、隣や可笑はぬ我慢らんしえーやー。あとー持つちちやーなかい、「いえー、男ぬやー、餓鬼ん食

隣の人もちよつと知恵持ちだつたんでしようね。今頃は、タコは煮立つてゐる時分で、タコの手は上方にひつくり返つてゐる。「今頃は、タコは煮立つてゐる時分だからハガマを取りに行こうかな…。」と思つた。それで、「おい！私達は今、ハガマを使うので、ハガマを返してくれないか。」と言うと、見せないで、急いで煮汁をこぼしたつもりだが、ハガマにタコはくつついて、汁だけが落ち、中身は落ちないでしよう。

それで、その人が行つてから、「タコか化物か、タコか化物か。」と繰り返し言つたそだ。すると、隣ではそれを聞いてゐるでしよう。男が餓鬼しようど、自分一人で煮て食べようとするが、「タコか化物か」と言つてゐるようだよ（と隣の人はおかしく感じていた）。ところで、「タコは洗つて入れた。火は燃やした。煮立つた。タコか化物か。」と繰り返してゐたそうだ。

それは当然でしようね。（汁を）こぼすのを見てないでの。とうとう（隣の人は）我慢できずにふきだしてしまつた。ついに（タコを持ってきて）「ねえ、男

しーねー、君や。タクか化物かでいしがやー。タクか化物かーあらん。煮立とーる最中に、ハガマンかい、タコおはつぱてい落ていらんくとう、君わちやくすんでいる取つていちやる。うりつ、君あタコお。んち、とうらちやくとうやー。

「私ねー、うれ一本物タクやたがやー、化物るやたがやーんでい思たるむー、本物やいびーてーさやー。あんしる、タクか化物でい言やびたんでー。」んちよー。

あんし、話ぬチヨーギンかいややー。タクか化物かでいーしぇー、ちよいちよい。あんしるあん言ちえーるふーじーどーやー。

のくせに餓鬼しようとするから君は。タコか化物かと言うけどね、タコか化物かではない。煮立つてゐる最中に、ハガマにタコはくつついて落ちないので、君をからかうつもりで取りにきたのよ。はい、君のタコは返す」と渡したそだ。

「私は、これは本物のタコだつたかな。化物のタコだつたかなあと思つていてたのに本物だつたんですね。それでタコか化物だと言いましたのよ」と言つたそだよ。

それで、話の狂言に「タコか化物か」というのがたまたあるでしょ。だからそう言つたのでしょね。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査團第三班（宮里光雄、大本敬子）

51 姥捨山

話者 比嘉ウト（明治三七年九月一〇日生）

翻字 国吉洋子

昔はね、年寄んよー、なー、税金でいしが、上納物

昔はね、年寄りまで税金ー上納物が出たそだ。そ

ぬ出じーたんでい、あんさぐとう、年寄までい上納む
たちえー出じやしかんていーやぐとうんりち、畦ぬ片
側んじ親あかじみてい、うつさる居んどーりち、うり
さぐとうてーなー、日本ぬ国から、黒繩むつち来でい
るうりが出じたぐとう。

あんしなー、誰がん分らんないさぐとう、あん
かんりちぬ話があんでーり、親んかい言ち、うぬ物持
つち行ぢえーる子ぬ言ちやぐとう、「うれー大変どう
易むんやさ」んりち。「繩の一てい持つち來わ私前ん
かい」りち、あんさーに繩の一てい持ち行ぢやぐとう
うぬ繩のーてい置ちえーるまま焼ちやーに、「くりが
灰繩やさ」んりち、持つち行ぢさぐとう、うりから年
寄や宝やさやーんりち。うんにんから、年寄やなーう
れーすなんりちぬ話ぬ出じとーんりぬ話聞ちゃんよー。

それで、年寄りまで上納をさせてはとても出しかねるので、畠のあぜの片側に親（年寄った）を隠し、家族はこれだけしかないと報告していたそうだが、ある時日本の国から、黒繩（灰繩）を持って来いというおふれが出されたそうだ。

それが、誰もその難問を解くことが出来なかつたので、こんなこんなの話があるのだが、と親のところへ食べ物を持って行つた子どもが言うと、「それは大変お易い御用だ」と言つた。「繩を縫つてすぐ私の前に持つてきなさい」と言つたので、繩を縫つて持つて行くと、その繩は縫つて置いたままの形で焼いてから「これが灰繩だよ」と、持つて行つたそうだ。それから年寄りは宝だと知つたそうだ。それ以来、年寄りは畠のあぜに捨ててはいけないという話が出たという話を聞いた。

翻字 玉城洋美

二階うてい、煙草ばくないくわいたんりーしえーやー。親ぬ「あんし煙草ふちえーならんやー。煙草お一日に一吸なーる吸ちゅんどーやー。」んでい言みそーちやくとう、「いえー、あんやいびーみ。」んち。

大ハラ注②作てい、一卷買とーるキザミえー、うりんかい入つてい、二階うていばくない吸ちやくとう。んちやうれー、一卷やる煙草うみちつち煙いしえーやー。あんさくとう、二階や火事どーし、行ぢ見ちやくとう、モーイ親方ぬ、「ぬーがさい、ターリー。」んちやくとう、「あぬ、いやーや、煙草お一吸ちふきんでー、うんぐとうすんなー。」んちやくとう、「ターリーがる一吸ちふきんでい言みしぇーたくとうやー、私ねー、一卷ち一吸ちんかい入つてい吸ちやびんどー、ターリー。」んちやくとうやー、「いやーんかいや、何ん話えーならん。」んちよー。親あ却てー我うーりていめーいたんでいでー。知恵ぬ強さぬがとーさやーんち。

（モーイ親方が）二階で、煙草をすばすば吸つていたそだね。（すると）親が「そんなに煙草を吸つてはいけないよ。煙草は、一日に一吸きづつ吸うのだと」と言われたので、「ああ、そうですか。」と言つた。

そして大きなハラを作り、一巻き買つてあるキザミをハラに入れ、すばすば吸つた。勿論のこと、それは一巻の煙草だからうんと煙るでしよう。

すると、二階は火事だあと言うので、行つて見るとモーイ親方が、「どうしたのですか、お父さん？」と言ふと、「あの、お前は、煙草は一吸きづ吸えと言え巴、そんなにするのか。」と言うと、「お父さんの方から一吸きしろとおつしやつたので、私は、一巻きを一度に吸えるように入れて吸うのですよ、お父さん。」と言うとね、「お前には、何も話せないな。」と言つてね。親は、却つて相手になれなくて困つていたそうである。知恵がありすぎて教えられないと。

注① 毛氏八世盛平。伊野波親方（一六四八—一七〇〇）童名眞志、唐名毛克盛、順治五年戊子閏三月二日生。父盛紀（毛泰永、尚質

王代の三司官）、母向氏眞伊金、室は毛氏池城親方安憲の女恩武太金、長男盛忠（伊野波親雲上）、次男盛任（糸満親雲上）。

康熙十九年庚申三月任御鎮側職、二三年甲子十二月四日叙紫冠、三三年九月任、三司官職加賜知行高三百二十石都合四百石。同

十月任大美御殿大親職。三九年庚辰十一月四日卒寿五三才号瑞泉。

② 入れもの。沖縄では、入れものの用語例としてハラは、ミーバラ、ウーバラのように竹製の籠の名称として用いている。ここで
はキセルの一種をさしている。ちなみにキセルは方言で、チシリと称している。

モーアイ親方と龕

話者 松田ウト（明治三四年七月一〇日生）

翻字 知念妙子

親方あ、あぬ、家造みそーちやぐとう、石垣積れー
みしぇーんてー。石垣積らぐとう、風水師注①あぬ、あ
たとーがやーんち、頼りくーんちやらちやぐとう。

(モーアイ) 親方が家をお造りになられて、石積みをな
さったんでしようね。石垣を積み終えたので、出来上
り具合はどうかと、(見てもうたために)風水師を頼ん
でくるように、(父親がモーアイ親方に)言いつけた。

うぬモーアイ親方あタルミニチューザーにかい、コー注②
担みてい来るばーてー。^(棺りち)あり担みてい来る

を担いで來たそだ。龕をね。

とう。

「いやーや、あぬ、風水師頼りくーんりれー、いや
ーうり担みらち来んなー。」りちゃぐとう、「よーさい、
ターリー、くぬ自分達あ家庭からー、あぬ、クーぬ上
うりし、旅からうとーてー、うれーしみらんぐーとう
ー、自分ぬ家ぬ屋敷から立派ん、あぬ葬式えしみりよ
ーんりち、うぬていーるやつさい、ターリー。」んりや
ーいよー。

龕ぬカツカイみかち石んかいさぐとう、「とー、く
つペー悪きいびーさ。」んり、うりが言ーたんり。

(すると、父親が) 「おまえは、風水師を頼んで來
いと言つたのに、そんなものを担がせて來るのか。」と
言うと、「それはね父上、この自分達の家族の者が(一
旅先で死んでも) 旅先では葬式はしないで、必ず家に
連れてきて、龕に乗せて、自分の家、屋敷から、立派
に葬式はさせてくれるようにとの手段なんだよ、父上」
と言つたそうだ。

(それから) 龕がコツツンと石垣にあたつたので、
「あの、(龕があたつた) 分は(造り方が) 悪いです。
(もう少し門を広くした方がいいでしょう。)」と、モー
イ親方は言つたそうだ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査团第一班(伊波百合子、知花利江子、松元久幸)

注① 沖縄では家や墓を普請する時、風水師を頼む風習がある。現在でも棟梁格の大工ならたいてい風水を見ることができる。

② 死者を墓地まで運ぶ籠のことで、現在の靈柩車に相当する。別名、ガン(龕)とか、アカンマー(赤馬)とも称されている。これは日常、動かすのを忌み、丁重に祈願して龕屋に納められている。また、正常な死に方をした者は家から龕に乗せて葬式を出さが、異常死の場合は龕にも乗せず、家や正門から葬式を出さないという慣習もある。

話者 松田ウト（明治三四年七月一〇日生）

翻字 知念妙子

あぬ、あまんかい揃しえー何んりが言ーたら、うれ
ーむる忘していねーんさー。那覇なは町んかいやしがや
ー。何ぬ揃がやら……。

あんしなー、くりがあぬ、行ちーねーやー。くぬ着
物ものお買いていち、うちきやーい、うぬ親おやぬてー。女親めおやぬ。
「なーくり縫ぬいいねー、くりがうり着きち、行ゆちゆるむん」
りち、うぬ布ぬのおうぬまま置おきえーみしえーたんり。

置おきえーたぐとう、「なー今日きょうやしがやー」んでい
思おもてい。見みちやぐとう、布ぬのびけーあてーんてー。うぬ
布ぬのおはち、しぐ。

自分親じぶんおやあなー偉伟い人ひとやみしえーしえーや。前まへんかい
出だしてい行ゆぢやぐとう、ぬーが、人ひとぬ、「ぬーが、モ
ーヤー、君きみや、あぬ、くぬ布ぬのお卷まきちぢやる、ぬーが、
うんとーる形かたちえ。」んちやぐとう。「私達わたくしアヤーや、
私着物わたくしお今日きょう着きしーる着物きものやしがやー。私がくまなか
い出だじーんち、うぬ着物きものお縫ぬいらんぐうとう置おきえーび

あのう、向こうに集まるのは、何と言ったかは全部
忘わすれしままたが、何の集まりだつたのか、那覇の町
でだつたがね。

そして、彼（モーイ）がそこへ出かける時、（モーイ）
の）親がこの着物は買いてきて置いてね。母親がね。
「この着物を縫ぬいつたら彼はきっとそれを着けて行くだ
ろう」と、その布はそのままにしておいたそうだ。

そうして置いていたら、（モーイは）「着きていく日
は今日きょうだがなあ」と思おもっていた。見ると、布だけがあ
つたので、その布を巻きつけて（家を出た）。

彼（モーイ）の親は偉い人物だつたので（集会の）
前に出て行くと、そしたら人々が「どうした、モーヤ
ー、君のその布は、卷いて来たのはどうしたわけだ。
その不格好は？」と聞かれた。すると「私の母親は、
今日着せる着物にもかかわらず、私がこの席に出ると
いつて、この着物は縫わないでそのまま置いてあつた

「くとう、うぬたまし、くぬ布お身体いつペ一巻ちち
よーびんれー」んでいちよー。うぬモーイ親方(えりかた)あ。

採集 S 52・6・19

読谷村民話調査團第二班（伊波百合子、知花利江子、松元久幸）

55 モーイ親方と殿様の難題

話者 松田ミヨ（明治四一年一月一日生）

翻字 玉城洋美

あぬー、だー、あまからあんしぇー、大和から、あ
ぬー、「灰し綱のーてい来」。んちどう、またうりから
「雄鶏ぬ卵むつち来」。またうりから、「七曲い曲とー
しんかい、糸通ち来、山持つち来」。んち。うつき、な
ー、内地から琉球んかい、うりぬ來くとう、なー、親
ん、んちやうれー出来しぇーやー。

なー、大変心配つし、ちやーさらーうりやがやー。

あの、ほら、あそこからその大和から、あの、「灰
で綱を綱つてきなさい」と言うことと、またそれから
「雄鶏の卵を持つてきなさい」。またそれから、「七曲
り曲つている物に、糸を通してきなさい。山を持つて
きなさい」と、内地から琉球の方に命令がきたので、
もう、親も、そういうことは出来ないでしよう。

それで、とても心配して、どうすれば良いのだろう。
もしそれが分らなければ、首になるが、どうすれば
良いだろうかと迷つていると、モーイ親方が、「どう
したのお父さん、あなたはそんなにだまりこんでいる
のですか」と言うと、「だつておまえ、大和から、こ
んちやくとう、「あんしぇーいやーや、大和から、か

ので、それならばといつて身体じゅうその布を巻いて
来たという理由ですよ」とモーイ親方は（答えた）

んし、くつさくつさ来るむんやー、くりちやーし灰し
綱のーらりーぐとう。また、雄鶏ぬ卵、まーぬ雄鶏ぬ
鶏ぬ卵産すしがうが?」んちやくとう。

あんしからんちよー、「七曲い曲とーしんかい、糸
通ち来んでいれー、ちやーし通さりーが。山持つ來
んでいれー山ん、ちやーし持つち行かりーが?」んで
い言みそーちやくとう、「うぬあたいぐわーん出来そ
ーらに。私が行ちやびーん」ち。「いやーぐとーる馬
鹿者、いやーやあまかい行ちゆみ、あんしえーなー、
いやーん、私にん、馬鹿者どうなゆさやー。」んち言ち
やくとう、「私が行ぢ立派きりはんちちやーびーん」
ちやぐとう、「とーあんしえーちばていとうらし子」
んち。

行らちやくとう、「ぬーがいやーが来る。」んちやく
とう、「だーさい、私達あターリーや、産むゆーしそ
ーびん。」「男ぬん子産すんなー。」んでいちやくとう、
「ぬーが、あんしえー、雄鶏ぬ卵なさびんなー。」で
いちやくとう、とー、負けとーみしえー相手や。

あんされー、「あんしえー、いやーや、灰し綱縛り
。」んちやくとうやー、「うりん持つちえーん。」りち

んなに沢山の問題が来ているのに、これどうやつて灰
で綱が縛れるか。また、雄鶏の卵というが、どこに雄
鶏が卵を産む鶏がいるだろうか。」と言つた。

それからまた、「七曲り曲つている物に、糸を通し
てこいといえ、どうして通されるものか。山を持つ
てこいといえ、山だつてどうして持つて行けるもの
か」とおつしやつたので、「それくらいのことも出来
ないのでですか。私が行きます。」と。「馬鹿な奴だなお
前はー。お前が大和に行くか。それじゃお前も私も、
馬鹿な人間になるんだなあ。」と言つた。「私が行つて
立派に解決してきます。」と言うと、「それなら頑張つ
てくれわが子よ。」と…。

大和に行かせると、「どうしてお前が来たのか。」と
聞かれて、「そうですね。私の父は、産気づいてお
りましたので…。」と云うと、「男が子供を産むのか。」
と言われた。「そうだつたら、雄鶏が卵を産みますか
。」と言うと、もう、相手は負けてしまつたのである。
そうすると、「それでは君、灰で綱を縛え。」と言う
とね、「それも持つて来た。」と、綱をからませて焼き

綱つなあからくてい焼やち燃やちえーしょーやー、うりんかい持つち行いぢやくとう、うりん負まきとーしょー相あ手てや。

負まきたれー、また、かんし七曲しちくい曲くとーしんかい、糸いとどう一ち来きんでい言いやつとーしん、蟻アリぬ足あし取とい入いんち、うまんかい砂糖さとう置おきちきていうてい、うりんかい行いらちやくとう、砂糖さとうぬ匂におじやしが、糸いとや通つち行いぢよーしょーしょー。うりん負まきとーしょー。

「あんしぇー山さん？」んちやくとうやー、「うつさ積のむる船ふなぬ無なびらんくとう、船ふな出だじやしみそーり、積のりうさぎやびーさ。」んちやくとう、んちや、山さん積のむる船ふなえ無なんしぇーやーまーやでいん。

なー、負まきたくとう、「いやーや、くれーなー、くりるん生なちきとーちーねー、大和おなー、ぬーがないらー分わらんくとう。」んち、「褒美ほめ、うまんかい上うんかい上うり。」んち、うぬー、あまぬちよーる王様おうさまぬ座くわちよーる所ところかい座くわしみそーち、うぬモーイ親方おはかた座くわしたくとう、うね、くりしー考かげー。

「何なが、貴殿きどん、私わたくしくまんかい座くわしてい、でいしみさーしうりそーしがやー、何なが、私達わたくしやー、貴殿きどんなーがー言いしみそーるうつさー全部ぜんぶせーるむんぬやー、

燃にやしたものを持つて行くと、それも相手は負まけてしまつた。

負けたので、また、こうして七曲り曲つている物に糸いとを通してこいと言いわれていたのも、蟻アリの足あしを取り入れ、入口に砂糖を置おきいといて、曲つた物から行いかせると、砂糖の匂においに蟻アリはつられて、糸いとを引ひつばつて行ったのである。これも（相手が）負けた。

「それでは山は？」と言いうとね、「それだけ積める船ふながありませんので、船ふなを出して下さい。積んで上げますから。」と言いうと、だつて、山を積める船ふななんて無いでしようどこだつて。

もう、負けたので、「お前まへというものは？」こいつを生かしておくと、大和おなはもう、何になるか分わらないから」と、「褒美ほめだ、この上座うわくわに上あれ。」と言いつてこの、そのちょうど王様おうさまが座くわつている所に座くわられて、そのモーイ親方おはかたを座くわらせて、ほら、こうして殺すつもりでー。

「どうして、貴殿きどんは、私わたくしをここに座くわらせて、何かをなさうとしているようだが、どうして、私達わたくしはね、貴殿きどんたちがおつしやつただけは全部ぜんぶなしとげたのに、

打ち首ぬくべーない。うれーならん」ち。「うんぐ
とうしえー無理やぐとう。」んちあん言ちやくとうやー。
「なーんちや、くりが頭のー、くりが頭んかいやかな
ーんきー。」でいやーなかいよー、うぬモーイ親方えいぱうあ褒ほ
美うつくいーていちゃんでいどーやー。

あんしるモーイ親方えいぱうあ、るく頭かぶぬちつちる、あんぐ
とう馬鹿者ばりぢやねーびーしる歩あつちえーてーるふーじやん
でいどーやーんち、叔母おばやあん言いんしえーたしが。う
りんあつたーが、話はなる聞きちよーる。ぬが、本当ただがやら
ー、嘘うそがやらー、私わたくし一分ぶんらんなー。私達わたくしや見みじんき
んそーてい。

打ち首の罪になるのか。それは出来ない」と。「そん
なことでは道理に反することだ」と、そう言うとね。
「まいつた、この人の頭の良さには負けてしまった」
と感心されて、このモーイ親方は、褒美ほめをもらつて來
たそうだよ。

そういうことでモーイ親方は、あんまり頭かぶがきれす
ぎてるので、あのように気違けちいの真似まねをして歩いて
いたようだつて、叔母は言つていたが。それもあの人
たちが、話を聞いているだけで、それが、本当ただのか
嘘うそなのかは、私も分らない。私たちは、見たこともな
いから……。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第三班 (宮里光雄、大本敬子)

56 話に葉なし

話者 松田ミヨ (明治四一年二月一日生)

玉城洋美

うれー、何からがやらー、うりがはつきり分わらん
るあんでー。

これは、何からだつたか、それがはつきり分わらない
んだが……。

「何くんぬ言が一ちゅーがー。」んちやくとう、「うつび珍らさる大根ぬ葉んあがやー。」んちやくとう、さー、あぬ、ミルクぬ爺がてー。「大みる、あぬー、大根ぬ葉ぬ、沖繩うちうするか茂とーる大根ぬ葉ぬあつさー。」んでい言みしえーたんでい。

「あぬー、うつびなー広がいる葉んちえー無びらんしが、見していくいみそーり。」んでいちやくとうやー、「話にん葉ぬあんなー。」でい言ちやくとうやー。「んちや、あんどうやいびーさやー。」話んかいや、うつびぬ大根ぬ話ぬー、葉や無んぐとうりる、あん言んどーやー。」んち。うりからる、話ぬ、「話にん葉ぬあんなー。」りぬふーじーやさ。

あんさくとうなー、なー、くれー、ミルク爺ねー勝んむんなー。うぬ人がまた作いぬうつさー、何んくいでいきーたんでい。ミルク爺が作いぬうつさー。何んくいでいきたぐとうやー、あぬー、サーかんでいぬ者おや、くれー、かんしえーならん。ミルクんかい負けーならんちやーなかいよー。うぬつ人が作物や全部うちゆ食しわるないつさーんち、鼠ちゅくい始みそー

「何でも言いたい放題にしましよう。」といふと、「こんなに珍らしい大根の葉があるものなのかな」と言つた。ミルク爺さんがね。「こんな大きな大根の葉が、沖繩においかぶさるくらいに茂った大根の葉がある。」と言われたそうだ。

「あのう、そんなに大きく広がる葉なんてありませんが、見せて下さい。」と言つたのでね。「話にも葉があるのか」と言うと、「それもそうですね。話には、そんなに大きな大根の話には葉は無いというので、こう言うのよ。」と言つた。それ以来、話に、「話にも葉があるのだろうか」というようだ。

こんなことでは、もう、ミルク爺さんには勝てないなあ。また、この人が作るものは、何でも豊作だつたそうだ。ミルク爺さんが作るだけはー。何でも豊作だつたのでね、あのサーかという者が、これはこうしてはおれない。ミルクに負けてばいけないと言つてね。この人の作物を全部、何かに食わせてやらなければーと、鼠を作り始めたそうだ。

ちやんでい。

サークが鼠ちゅくたくとうやー、んちや、うぬ人が作物むるうちゅ食とーしえーやー、うぬミルク爺作物や。うちゅ食たくとう、うぬひやーや、かんしえーならんくとうやー。んだつ、私ねー猫ちゅくてい、うぬ鼠、猫んかいうちゅ食さんちやーなかいよー。

ミルク爺がる猫や、作り出じやしみそーちやんでいどーやー。あんさーにかい鼠およー、うぬー猫んかいあんし全部、食りーぬふーじどーやー。

サークが鼠を作つたらね、思った通りに、その人の作物を全部食べてしまつたでしよう。このミルク爺さんの作物を。食べられてしまつたので、こん畜生！許してはおけない。それなら、私は猫を作つて、この鼠を、猫に食べさせようと言つてね。

ミルク爺さんによつて猫は作り出されたそだよ。それで鼠はね、この猫に、あんなに全部、食べられてしまうらしいよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第三班（宮里光雄、大本敬子）

「ウー」という言葉の使い分け

話者 松田 栄清（明治二八年二月二〇日生）

翻字 知花春美

くれー、昔物語。平民とう侍とうぬ言葉使いやるばーてー。

これは昔物語、平民と侍との言葉使いなんだよ。

あんし、首里んかい御殿奉公しーが行ちゆる下女んかい、かにていから、親達や「首里んかい行ちーるん

それは、首里に御殿奉公しに行く下女に、前もつて親達が「首里に行つたならば『ウー』（御）という言

さー『ウー』でいる言葉離すなよーやー」でい、親んかい教一さつたぐとう。

あんし、二、三月に蛙ぬガクガクさぐとう、「ウ旦那ぬウ下水うとーてい、ウ蛙ぬガクガクさびん。」こう言つたら旦那様は「何んでい言ゆん」と言つたら「なー、いやあーむのー、あんえーぬ下水にん、ウ下水でいる言ん。蛙にんウガクガクさびんでいる言ん。うぬ「ウー」や、なーいやあーやむる使てーならんどー」んでい言やつたくとう。

今度お食事ぬ後、「旦那ぬゲーんかい、チヂぬちちよーびん」とこう言ちやぐとう。旦那あなー何がくいーがなとーらーむる意味やわかいみそーらん。

今度は食事の後に（御を使うなと言われた下女が）御をとつて、「旦那のゲー（あご）にチヂ（飯粒）」がついています」と言つた。旦那はもう何がどうなつているのか、その意味が理解できなくなつた。

うりたんにきつちやぐとう、「『ウー』やむる取つてい捨ていりよー」りちやぐとう、「ウー」や使一びちとうくるんかい使いくとう、うぬたじやむじやぬわからんなどーたんでいぬ物語。とーうつさやさ。

つたという物語。これでおしまい。

葉をいつも使わなければいけないよ」と親に教えられていた。

そんなわけで、二、三月に蛙がガクガク鳴いたので「御旦那の御下水で御蛙が御ガクガクしています。」

と言つたので旦那様は「何と言つてている?」と言つたら、「もう、おまえはそんな下水にも御下水と言う。蛙にも御ガクガク鳴くと言う。この『御』はもう、おまえは絶対に使つてはいけないよ」と言つた。

注① 頸のこと。ウトウゲーなどと言い、この物語では「ウトウ」をとつて、単に語尾の「ゲー」のみを言つている。

喜名では頸のことをウトウゲーとか、ウトウガクと称している。

注② ご飯粒のこと、ウブンチヂとも称す。「ウブン」を省略している。チヂは「頂上」などの意味になり、ご飯粒とは縁遠い。

喜名でもご飯粒のことをウブンチヂと称している。

58 屁ひり嫁

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 阿波根初美

「踵よーマージュー、覚いとーみー」んでい。屁ふ
いらーなやーに、踵おちやー尻んかい、人ぬ、客ぬめ
んせーいねー尻んかいぬしきてーんてー。

あんさぐとう、親ぬ「踵よーマージュー」んちやぐ
とうやー、「覚いとーびーせー」んり言ちよーるばー
てー。へ「踵よーマージュー」んでいせー、尻んかい
貴女あ踵お入つとーみ、どうく屁ひらーなやーに「踵
よーマージュー」んりちやくとう「覚いとーびーせー」
んち、踵んかい尻えー。

クーヤーがめんそーちやぐとう、ユミクーヤーがめん

「踵だよマージュー、覚えてるかい」という話。（一
娘は）屁ひりだつたので、いつも踵で尻を押させて、人、
客がいらつしやる時には尻に踵を入れていた。

それで、親が「踵だよマージュー」と言うと、「覚
えております」と言つたわけだね。へ「踵だよマージ
ュー」というのは、尻に貴方の踵を入れているか、あ
まりに屁ひりなので「踵だよマージュー」と（親が）
言うと、「覚えております」と（娘が）答えて踵を尻
にあてたということだよ。√

嫁乞いの人々がいらつしやつたので、嫁乞いの人々

そーちやぐとう、あんさーに、踵んかい尻えー入つて
ーくとう、ちやー人ぬめんせーねー、「踵よーマージ
ユー」んでいち。うぬ、マージュー名やてーるばーて
ー、あんさくとう、「うー、うたり、あんまー、覚と
しひーせー」りち、うぬマージューやうりやたんりー。
屁ふいらーぬうりやたんりー。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第五班（山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子）

59 山原と団亀

話者 吉田ツル（大正三年三月十日生）

翻字 阿波根初美

山原ぬ旅や 績度んさしが
糞ぬ歩つちゅせー今度初み
んたりー、亀ぬ上んじ糞まやーに。

山原の旅は 績度もしたが
糞が歩くのは今度が初めてである
と詠んだそうだ、亀の上に糞をして。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第六班（阿波根初美、町田愛子、喜友名春子、池原涼子、宮里光雄、仲村渠清美、棚原直子）

がいらつしやつたので、それで、踵を尻に入れている
ので、いつも人がいらつしやる時には、（親が娘に注
意して）「踵だよマージュー」と言つた。その（娘は）
マージューという名だつたわけだね。すると、「はい、
はいお母さん、覚えております」と言つて、そのマー
ジューは（尻を押さえた）そうだ。屁ひりの話だそうだ。

話者 比嘉正貞（明治三十三年九月二五日生）

翻字 神谷初子

漢文の易者がいらつしやつた。それは久米村の人。
あの、久米村の人は支那人だと。その人が「本当に唐
船ドードー工や簡単の一あらんど」。唐船くまから行ち
るんせー、来年の一帰てい来ん。」

五月のカーチーベー⁽³⁾ あれが吹く時にはこっちから
出て、また来年のカーチーベーには沖縄に戻つて来る
唐船は、戻つて来るが、戻つてこなかつたそうです。
あまうてい延期しみらつとーん。学問しみらつとーん。
連絡んできない。二ヶ年だから四年目に帰つて來た。

そうして、待つても待つてもこないから、年は若い
からこの行つた連中は。妻たちは「あー、もーこない
なー。もー夫もつた方がいい」。幾分は夫もつて。また
久米村に近い所の人が、非常に頑張り抜いて「いや、
私は死ぬまで、子どもも一人はできておるし、死ぬま
でこつち」そして頑張つて…。

それで、待ちに待つても行つた若者たちは帰つてこ
なかつた。そこで妻たちは「ああ、もう帰らないんだ
なあ。そうだつたら再婚した方がいい」と思つた。幾
人かが再婚した。だが久米村の近くの人が非常に頑張
り抜いて「いや、私には子どももいることだし、死ぬ
までここにいる」と頑張り通した。

漢文の易者がいらつしやつた。その人は久米村（那
霸）の人だつた。その久米村の人は支那人だとのこと。
その人が「本当に唐船の航海は簡単ではない。唐船が
ここから行くと来年しか帰らないから」（と言つた）

五月の夏至のころ吹く南風に乗つてここから出て、
また来年の同じ頃に沖縄に戻つて来ていた。（ところ
が）戻つてくるはずの唐船が戻つてこなかつたそうです。
中国で（帰国を）延期させられ学問をさせられた。
(そのために)連絡が出来ず二ヶ年の役目が延期にな
り四年目に帰つて來た。

へ昔あのー、豚小屋の前に、女のハカマ、カカン桂^桂あれずらつとさげよったでしょ。もー昔は、だから、四年で唐船ぬいつちょーんとーさくとう、掃除すたんでいがやー、うぬ女あ。掃除しーねー、「唐船のー入つちょーしがよー」し、隣近所あびたくとう、「うえー！」んでい言やーに、うぬ簫えひつかたみて、ハカマあ簫んかいかかてい。「いやーむん待つちょーれーよー」さんて一聞ちゆみ、うれー、うぬ女お。

へ昔は、豚小屋の前に洗つた女の袴袴、下裳下裳をすらつとさげていたでしょ。昔はね。そして、四年目にして唐船が入つたという知らせがあつた時、頑張り抜いた女は掃除をしているところだつた。「唐船が入つたよー」と隣り近所の（人々が）呼びかけると（その女は）「えつ！」と言つたかと思うと持つていた簫を肩にかついで迎えに出た。（あまりにも急いだので）その瞬間に袴が簫にまつわつてしまつた。（隣りの人が）「ちょっと待つて、あなたの簫に袴がー」と、注意してもその女は聞くどころではなかつた。

あんし、港んかい、なー、あんし迎てーるふーじ。
なー、夫ん狂ているうるんち。夢中どうやくとう物ん見だんばー。それくらいやせーまた。残いや夫どうむつちょーしんうい。待ちかんていーし、四ヶ年でい言ねーなー。兵隊んでーやれーなー、待つちんする。もー今年行つたら来年はぜひ帰つて来る。「いやーくりもー」んちやんてーん絶対ちかん。しぐちやーまん抱ち。

うりから唐船ドーエーや出じとーん。これは本当にそうだ。

こんなことがあつてから唐船ドーエーの歌がはやり

久米村の人が話しておつた。

出したそだ。これは本当のことだと久米村の人が話していた。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 現在の那覇市久米町と天妃町にあつた村で一三九二年、察度王の時代に中国の福州閩^{フン}地方から移住した三十六姓によつて創始された村。王國時代、進貢使、航海者などを多く出した村である。

② 中国を往来する貿易船で、一三九二年国王察度の遣使として、宇座出身の泰期が入貢して以来、一九世紀まで五〇〇年つづいた。帆船であつたため、春三月頃の風を待つて那覇から出発し、九月の北風に乗つて帰つて來たが、途中遭難するのが多かつた。

③ 夏至（旧暦五月初）のころ吹く南風をいう。

③④袴には、男女用がある。女袴の形で、長パンツ形の首里袴と、長筒パンツ形の那覇袴がある。これらの袴は礼装には着ないで、晴着や日常着として使用した。

カカンは、花嫁装束として女子がはく一種の腰巻で、長スカート形のもので腰まわりに細い襞をよせ、上部両端に長短二本の腰紐がついており、右腰で両端を深く違えて前の方で結紐して固定する。

51 人間の始まり

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日）

翻字 知花春美

ウナイ、イキー降りていめんそーちやぐとう、ウナイ、イキー降りていめんそーちやーに、へ降りていめんそーちゃん所おまーでいたがやー／＼岩ぬあるばーてー。
うまー降りてい二人めんそーちやぐとう、貴方やあまから廻りよー、くまから廻りよーでいちやぐとう、ちよーどううぬ岩かんしけー廻りていめんそーちやぐとう。

あぬちよーどうなー人他人などーるばーてー、うりウナイ、イキー一緒降りていめんそーちやしが、降りーせーウナイ、イキー一緒降りていめんそーちやしが、あんすぐとう貴方やあまんかい行きよー、私ねーくまんかい行ちゆさでいち、かんし会わたぐとう、ちよーどう人他人なでい、ウナイ、イキーぬくぬ沖縄や子、孫生ちえーる子でい。

ウナイ、イキー（姉弟）が（地上に）降りていらした。ウナイ、イキーが降りてきたところ、へ降りてきた所はどこだつたかはつきりしないが、岩があつた。ここに降りて、二人いらして、貴女はあそこから廻りなさいここから廻りなさいということで、ちようどこの岩をそのように廻つていらした。

そうしたらもう他人になつたわけだ。ここに、ウナイ、イキー一緒に降りていらしたのだが、降りたのはウナイ、イキー一緒に降りられたのだが、それから貴方はあそこに行きなさい、私はここに行くからということで、このように会つたら、ちよーど他人になつて沖縄にはウナイ、イキーの子や孫が生まれ、広まつたということである。

注① ウナイ、イキーは、日常の民俗用語としても用いられており、男女兄弟がいる中で、ウナイは、姉妹をさし、イキーは、兄弟をさす。ウナイがイキーを守護するという、オナリ神信仰は有名である。

稻作の始まり

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知花孝子

米え沖縄ねー無んしが、雀小ぬ米くーてい来に、水を
ぬ中んかいうりしちやくとう。

うぬ米ぬ、雀ぬ、アガリマーアイぬ受水ワタンジぬ所注①まじら注②とゞ

んかい、うぬ米ぬうりさくとう。

米は沖縄には無かつたが、雀が米をくわえて来て、
水の中に落としたようである。

雀がくわえてきた米が、アガリマーアイをするところ
の受水走水といふところに落ちたようだ。

（それが）生えてきたので、「これは何だろうか」

ち見ちやくとう、うりやしえー。食りん一ちゃくとう
食まりーしなやーに、うりからぬ、雀ぬ持つちちえー
る米やんり。

（それが）生えてきたので、「これは何だろうか」

と、（モミを）開いて見たら、食べられそうだったの
で食べてみた。食べられるものだつたので、これから

雀の持つてきたものが米として広まつた。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第五班 へ山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子×

注① アガリウマーライとは、東御廻りのこととて、かつて首里を中心にして、大里、佐敷、知念、玉城を東四間切と称し、その中でもに知念、玉城の井泉や拝所を巡礼することを言う。各門族によつて旧暦八、九月にかけて行なわれてゐる。

注② アガリ、ウマーラの拝所の一つで受水走水のこと。玉城村百名の水田地帯にあり、御穗田と称する神田に注ぐ水源地。岩間から泉が湧き出ている。

嘉津宇岳の由來

話者 吉田新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 上原ヨシ

あぬ國頭様といふ、國頭様は國頭親方のことですよ。

國頭親方の精靈どうやみしえーだと。精靈といふ言葉は、この神様であると、この神様同様に崇拜しておつたうですな、國頭親方を。

あんし、うぬ國頭親方ぬ、首里ぬ城かいへ政府かい、琉球政府かい、用事ぬあくとう、あぬ行きわるやしがと、海を見たら非常に荒れてをつたといふですな。海え荒りたくとう、龍宮ぬ海ぬ御神んかい、「海え、私ね一里んかい船出じやち行きわるやくとう海え静みり、静かにしてくれ」というようについたら、「何が！」海え私勝手るやる「龍宮ぬ御神でいるばーて一海ぬ神え。龍宮ぬ御神えその御神にそういうたら、「何だ

あのう国頭様といふのは、国頭親方のことですよ。国頭親方の精靈だつたと思う。精靈という言葉は神様で、神様同様に崇拜していたそ�ですな。

そして国頭親方が首里城へ琉球政府（首里王府のこと）へ用事があつて行かなればならないのだが、海を見ると非常に波が荒れていたそ�ですね。海が荒れていたので、龍宮の神様に「海よ、私は首里に船を出して行きたいので海を静めて凧にしてくれ」というと、「何さ、海は私の勝手だ」龍宮の神は海の神でもあると言つてゐるわけだね。龍宮の神にそう頼むと「何だね、海は私の勝手だ。私の海だ。荒れようとどうしよ

が！海え私勝手るやる。私海るやる、荒らわんぬーさ
わん、私が知つちよーみ」というて、聞かなかつたそ
うです。「聞ちくわーんだらーしむさアタビチ！」んで
いいやーに。

うりから海山んでいち、昔から海山とー一ちんでい。
「海、山でいちあぐとう、私ね一首里までい山から行
ちゅくとう」んち、山から船通ちーるふーじ。

あんさくとう嘉津宇岳ぬ下うとーていまたお爺さん
が山羊草刈いたるばーに、うまから船ぬサーラサーラ
通たくとう、「何がやー」りち、見上ぎてい見ちやく
とー、「人ぬ乗とーる船ぬ山から通いさ」んでい。
「船え海からが通いらんでい思たれー、山からん通い
さ」でい。

「あびんなひやーウスメー物言なけー」んでい言やー
に鰐俵一俵投ぎてい与たくとう、嘉津宇岳り言ちよー
るぐとーん。

うと、私の知つたことではない」と聞き入れてくれた
かつたそうです。（すると、国頭親方も）「聞いてく
れないなら、いいさ、アタビチ！」と言つた。

それ以来、海山といつて昔から海と山とはいつしょ
だそうだ。（君が海なら）「海山とあるので私は首里まで
山から行くさ」と山から船を通して行つたようだ。

すると、嘉津宇岳の麓で、あるお爺さんが山羊の草
を刈つて近くから、船が（落葉の上を）サラサラ
音を立てて通つたので、「何だろう？」と見上げて見
ると「人を乗せた船が山から通るとは」と不思議に思
つた。「船は海の上だけを通るかと思つていたら山か
らも通るんだね」と言つた。

すると、（龍宮の神は）「だまれ！爺々ー物言うな
」と言つて鰐俵を一俵投げてくれたので（その場所を
）嘉津宇岳というようになつたようだ。

注② 沖縄県名護市勝山にあり、沖縄本島では四番目に高く、海拔四五一mで中腹まで道路が整備され、季節を問わず訪れる人が絶えない。特に頂上からの眺めはすばらしく、南は残波岬や慶良間諸島、北は伊是名島などを展望することができる。

64 楚辺クラガ一の由來

話者 比嘉ウト（明治三七年七月十日生）

翻字 国吉洋子

あの一洞穴にね、泉があるわけさー。すぐ、遠く遠く行つて行つてから洞穴にね、洞窟みたような洞穴に泉があるわけさー。

それでもう、干魃にあたつて、村の人はとても水に困つている時に、あのー、犬がいつも濡れてくるのを見た人がね、「めずらしいねーこの犬、いつも濡れてくるんだけど」と言つて、その犬を不思議に思つて、その犬をたどつていつたらね。

ついていつたら、そこにきれいな水が湧いていたつて、それから楚辺の部落は、そつちを飲み水に利用して、そのところを、暗いからクラガーといつて付けたつて。

あのう洞穴にね、泉があつたとき。それが遠い遠い所にある洞穴なんだけどね、洞窟みたいな所に泉があるんだ。

ちょうどその頃は干魃で村の人たちが水に困つている時に、あのう、犬がいつも濡れてくるのを見ていた人が、「珍らしいね、この犬いつも濡れて来るんだけど」とその犬を不思議に思つて、その犬の後をたどつて行くとね。

ついて行くと、そこにはきれいな水が湧いていた。それから楚辺の部落は、そこを飲み水として利用した。そこは暗かつたのでクラガー（暗井戸）という名を付けたそうである。

注① 地名。「琉球国由来記」等にも見える古層の村で、御嶽やノロ等が存在した。現在戸数五七九戸で読谷村で一番大きい部落である。現在の集落は戦後できたもので、戦前は東方の米軍通信基地内にあった。

注② 旧楚辺部落にある。鐘乳洞を流れる地下水源で、戦前は飲料水用として利用されていた。洞穴で暗いので、クラガ（暗井戸）の名前がついている。現在は米軍基地になっている。

65 美人の生まれる井戸

話者 吉田 新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 大城 薫

昔の川はですな、ずっと上にあつたわけですよ。^{注①}それがですな、あんまり上等も生まれるし、あんまりヤナカギー（不美人）も生まれたので、これは中に下げるといかないと言うので、「中に生まれてクイミソーリ」という御願をしてですな、ヌール根神^{みがん}^{注②}と言う村の御願をおさげる人がおるでしょう。

ノロと、それは昔のですな、琉球政府から報給をもらつて、ノロは男も持つてはいかないと言う女が、女がいたが、公儀の御願事、それから民間の、部落の御願事も、おまえはどそここの村へと考へておると言うのですな。喜名のヌン殿内^{ヌン}^{ドウ}内^{ドウ}と言う所にノロがおつたわけですよ。ヌン殿内^{ドウ}内^{ドウ}と言ふ所はみんなノロがおるわけです。そのノロ、ヌン殿内^{ドウ}内のヌルがですな、喜名の、伊良皆まで掛け持ちして、現在までも報給がくるわけです。現在も少しがらですな、報給がくるんです。

ヌール玉と言つて、曲玉もあつたわけですよ、曲玉はもうひもが切れてですよ、ちりちりになつておるのを私は戦後見たことがありますね、ヌール玉と言つて、玉もあります。それを頂いて初めて辞令になるわけです。ヌール玉と。

いかにヌールであつてもですな、独身しなさいと言うわけにはいかないでしよう。独身しなさいと言われてもですな、独身はできないものだからつい男を持つてしまつたわけですよ。男を持つてしまつたらね、この人を男神だと言う意味をノロがつけたわけですよ、それで根神と言う根神、根神と言う神はですな、男神ですよ。ノロは女、根神は男、それで沖縄の言葉に直したらですな、根神はですな、ヌール根神と言うておりますがね、しかし字に書いたらね、根神は密通スーと言ふんです。^{注③}密通と言うたら、密通、密会している事は密通と言ふんです。密通、これはノロがつけた男神です。そしたら自由にできるわけです。御願事があると言うて。

採集S・55・2・14 読谷ゆうがおの会（大城薰、知花春美）

注① 現在の喜名部落は再三移動してできた村である。部落北方の、現米軍基地内にムトウチナ（元喜名）と称する所があり、そこが部落発祥の地で、その後、シムチムラとニシンダムラが出来て、そして、この二村が合併して喜名村が出来たと言われている。その古い集落には各々井戸があり、ニシンダガ（ニシンダムラ）、ワンジャガ（シムチムラ）等がある。

注② 熟語になつていて、これはヌールと根神のことである。ヌールは首里王府から任命されたもので読谷村では五名が配置された。一方根神は、ニーガンと称され沖縄本島区域で村落の草分けの家、ニードウクル（根所）から出た神女をいう。喜名部落のニードウクルは、アガリーとウフヤがあるが、ウフヤから出ている。

注③ 「密通スー」は「根人主」のことをしていいると思われる。根人は宗家の長男がなる。ここでは、話者の語り違い。

66 屋良ムルチ〈鰻退治〉

話者 松田ウト（明治三四年七月一〇日生）

翻字 上原ヨシ

屋良漏池やらぬち^{注①}んかい、雨ぬ降あふ^{注②}らんなくたくとう、雨願あまねがいん
でい屋良漏池やらぬちんかいササ入いつてーるふーじ。うぬサ
サ入いつたくとう、うぬ鰻あなぬ出だじていちやーに、鰻あなぬ出だ
じてい、なーうまかいある作物さぶつお全部べふうちゅ食くてーそ
ーたんでい。

うれーひちやくとう、なーくれーくつさ何ぬ食くいが
やー。盜人ぞうじんどうやるんち、皆みなさーにそーしが、トージ
ンてー、うちゅ食くてい。あんさーに、なーうりがうら
ん。

うりれーむん、ちやーさらーましがやーんち、人ぬ
見みんちえーんばーてー。あんし灰持アシテつち行ムぢ、灰ほー
たくとう、うぬ鰻あなえ別べんかいほーいゆーさん、うぬ鰻あな
え灰ぬ中アシナカうてい死マシじよーたんでい。うぬ話ハガやたん。

屋良漏池に雨が降らなくなつたので、雨乞いのつも
りで屋良漏池にササ（毒物）を入れたそうだ。そうす
ると、この鰻あなが出て来て、もうそこら辺にある農作物
を全部たべてしまつたそうだ。

毒物は入れてみたが、いつたいこれはこんなに沢山
のものを何が食べるのだろうか。（きっと）盜人に違
いないと、皆は思つていたが、（鰻が）トージン（黍）
を食くい荒してはいるがその姿が見えない。

さて、それをどうすれば良いのだろうと考えている
ところ、ある人がその正体を見たそうだ。そこで（畑
に）灰を持って行き、まいておいたら、その鰻は灰の中
からはい出すことが出来ずにその中で死んでいたそ
うである。こんな話だつた。

注① 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグマイと称し、比謝川の支流である茂呂木川上流の知花へぬける県道十六号線沿いの森の中にある。この渓潭は昔は約千坪の広さがあったといわれるが、米軍基地拡張で半分埋め立てされた。



写真(2) 屋良漏池

魚をとるために、水中に投入する毒物。ササ入れば、千魅の続いた時、川底にわずかに水が残った頃に、サンゴジュや、ルリハコベ等の草木をたたいてその液を毒物として投入し、フナやコイ、ウナギ等を取る。屋良漏池には、雨乞いの拝所があり、現在でも大千魅の時には雨乞いの行事が行われる。この物語に出ているササ入れとしての雨乞い形式は、民俗事例としてはない。話が大部混同していると見たい。

屋良ムルチの生贊

67

話者 吉田ツル（大正三年三月十日生）

翻字 阿波根 初美

農作物荒らして、荒らち、あんしなー、うぬ、うまぬ
やつぱし役目やる娘ぬ当たとーぐとう、食いんちるや

（大蛇が）農作物を荒らして（大変だったので）、
その（屋良の）、やつぱり役人の娘が（大蛇の生贊に）

んろーやー、あんし食いんちさぐとう、うぬ役目なー
うりが言いねー、なー「私ねー錢、金持人やぐとう、
別から買おてい呉らやー」んでいぬ、うぬ親兄弟しが
さらー、あんし、親あ盲目なでいさぐとう、あんさぐ
とう、買おらつとーる子供え眞面目なやーに、「親ん
あぬ、元氣えねーんぐとう、私ねー買おらつていしむ
べとう」ち、立派、すがやーに出じてい。あんしさぐ
とう、なー、やつぱし大蛇やていん、うれーなー神や
ぐとう、本当ぬ者やてーれー、うぬ悪者ぬ子やれー食
いてーしが、上等ぬ心配者ぬ子やたぐとう食あんたん
でいー。あんし、褒美呉らつたんりぬ話やたき。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第五班 〈山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子〉

-134-

68 普天間権現

話者 松田ミヨ（明治四一年二月二日生）

翻字 国吉洋子

神谷初子

普天間人るやてーはに、大変美はる女ぬ居たんでい。
あんいぬかぬ美さるうぬ女お、いちぐクチヤぐまいし

普天間の人だつたんでしようね、とても美しい女が
いたそだ。評判の高い美女だつたが、いつもクチヤ

当たつたので、食わせるつてだよ、そして食わせようとすると、その役人が言うには、もう「私はお金持ちだから別から買つてあげようね」と言つた。その親兄弟で（見つけたのか）、親が盲目の（娘を買つてきた）その買われてきた子供は眞面目だつたので、「親も、あの、元氣がないから、私は買わてもいいから」と言つて、立派に身仕度して出て來た。ところがもう、やつぱり大蛇とはいつても、それはもう神だから、本当の者だつたなら、その悪者の子だつたなら食つただろうが、上等な心配者の子だつたので食わなかつたそらうが、上等な心配者の子だつたといふ話だつたよ。

ウーリー續むたんでいとうーち。

うりんかい妹ぬ居たんでい。あんさぐとう、ある人ぬ、侍ぬ大変美はる男ぬ居てーはに、うり、ちやー見じーが来しが、見だらんしえーや、クチヤんかいくまていウーリー續どーぐどう。あんさーかい、くぬ美女ぬ妹しかち、「いつたー姉、一目どうん見しーらーやー、私が菓子え吳いーさ」んでいちさぐとう、「あんしえー、ちやーし姉や見しーが」りちやぐとう、考んじやち、「いやー、あぬー、池んかい〈昔えーまーかいんあたしえーや〉うまんかい落ていー真似し、落ていー真似さーなかい、姉よー、私ねー落ていとーんどーしーねー、飛ん出てい来ぐとう、あんし、私達あ姉や出じてい来ぐとう、うにんねー、「見ちゃん、見ちゃんすなよーやー、呼んなよー」んちょーんでいるむぬ、咄嗟ぐとうどうやしえーやー、落ていー真似し、「姉よー、池んかい落ていとーんどー」さぐとう、咄嗟ぐとう飛ん出てい、「あいえーなー、見ちゃん、見ちゃん」し、手打つちえーは、うぬ男あ手打つちやぐとう、「私ねー人んかい見らつていーなー、見らつとーぐとう、ゆーちらーねーん」でいち、自分ぬ續でーるウ

(裏座)に閉じ込もつて芭蕉布を、續んでいたそ�である。

美女には妹がいたそ�だ。それである侍で、大変きれいな男の人がいたんでしょうね、この人が、いつもこの美女を見に来るけど、美女は裏座に閉じ込もつて芭蕉の繊維を續んでいるので見ることが出来ない。それで、この美女の妹に親しく近づき、「あなたの姉さんをひと目でも見せてくれるなら、私がお菓子を呉れるから」と言うと、「じゃあ、どうして姉を見せれば良いのか」と言った。すると考えを出して、「あなたが池に〈昔はどこにでもあつたでしょー〉落ちる真似をして落ち真似をした後で、姉さん、私は池に落ちてしまつたよー」と呼べば、飛び出して来るから、そうすれば、私達の姉さんは出て来るから、その時は、「見た、見た」と言わないので下さい。叫ばないで下さ「い」と言つてあるのに、咄嗟のことでしょー、池に落ち真似をして、「姉さん、池に落ちてしまつたよー」と言つたので、姉さんは咄嗟に飛び出して來た。すると、男は、「見た、見た」と手を打つて喜んだ。男が手を打つたので、「私は（姉）人に見られてしまつては、見つかっては、生きる甲斐がない」と、自分の

一や持つち、普天間權現ぬ穴んかいぢやー行いしちやんでい。

あんさぐとう、んぢやなー、親ぬぢやーん、うれーうーらんなどーせー。うぬウーさとうでい行ぢやんでい。ウーさとうでい行ぢやぐとう、なー、うつび小ぬ穴がまなでい、中とーばまでー行ぢよーしが、なーうりがらー分らん、行方不明なでいさぐとう。

今度お、内地から、いやりん内地ぬ偉がる沖繩かいうりしぇーはに。うぬ、普天間ぬ穴ぬ端んじ、太刀忘てーみしぇーたんでい、太刀えー忘たぐとう、なー忘てい、うぬまま歸てーんてー。

あんさぐとう、うぬ美女ぬ、太刀えー守てい、守たーにかい、うぬ内地かい帰たしが、「普天間權現まさきみしぇーらー、私太刀えーなー、うぬままうりそーていくいみそーり」んでいち。

さぐとう、帰ていちえーるむのー、うぬ太刀えー。

置おきちえーるぐとう、くまんかいあたんちよー。

あんしる、普天間權現のーまささぬ、皆し、拝むんでいどーやーあまー。うぬ女ぬうまんかい入りんぢ行ぢるよー、うぬ穴がまんかい。今、穴がまあまんどーしぇーやー。

續つづんだウー（芭蕉系）を持つて、普天間權現の洞窟に入つて行つたそだ。

それで、この姉妹には親たちがいないので、このウーを辿たどつて行つたそだ。ウーを辿たどつて行くと、もうこんなに小さな穴になつていて、途中まではいつたがその先は暗くて分らず、（姉は）行方不明になつてしまつた。

今度は、内地（本土）から、たぶん偉い人が沖繩にやつて來たんでしようね。この普天間の洞窟の近くに、太刀を忘れたそだ。（偉い人が）太刀を忘れたが、取りに戻らずにそのまま歸つてしまつた。

すると、（穴に入つて行つた）この美女が太刀を見守つていたそだ。この内地に帰つた人は、「普天間權現に靈験があるならば、どうか太刀をそのまま見守つていて下さい」と祈つた。

そしてその後、再び来てみると、この太刀は置いてあつたようにそのまま同じ場所にあつたそだよ。

それで、普天間權現は靈験あらたかだということであなが拝むようになつたそだよ向うは。あの美人が入つて行つた穴だそだけどね。今はあちこちに洞窟

あんしる、あぬ普天間権現、まさぐとう、子供達、
ん、普天間権現のー、神様ぬ守いぐとうんちる、拝む
んでいどー、普天間権現のー、あれー。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第八班 〈上原利津子、知花千代子、知花俊治、渡慶次喜美子、崎浜博子〉

はたくさんあるのに、あの普天間権現は靈験があると
いうので、子どもたちも普天間権現は守り神として拝
んでいるそうだよ。普天間権現というところはね。

注① 宜野湾市字普天間。普天間神宮内にある洞穴。戦前は森厳な森の中の大鐘乳洞窟の中についた。沖縄の古神道の神々と共に伝説

の美女の普天間女神が祀られている。普天間権現という名称は洞内に観音像を祀つて熊野権現の信仰が移植され、普天間山神宮寺とも呼ばれるようになつてからであろう。



写真(3) 普天間権現



写真(4) 芭蕉の木

翻字 知花孝子

昔、人ぬ亡ち、葬式さぐとう。〈昔えなー、けー亡しぐとうまじゅん、葬式えすぐとう〉注①さぐとう、翌日ぬ朝、草刈やーが、その墓の近辺で、草刈としたぐどう、内うてい、呻き声ぬ聞かりーぐとう、なー即、うぬ草刈やーや、魂ぬぎやーに、うぬ、うまぬ家んかい知らしーが行ぢえーるばー。

あんさぐとう皆、騒動なてい、集まつて來に、墓開きてい、見ちやくとう、なー、うぬ人お生ちちょーるばーてー、死んだ人が、あんし、生ちちょーぐとう、あぬ草刈やーが、持つちよーしょー、ゲーンとう、桑ぬ葉やぐとう、うり持つち、うれー、いち戻い歩つちよーぐとう。

あんさい、うんにーから、桑ぬ葉とう、スキえかりーなむりやーに、うぬ八月九日ぬ、シバサシ注②えうり差すしぇ、そのいわれやんり、いわれで、なーうれー上等やんりち、死じよーる人ん、生ちやぐとう、

昔、人が亡くなつて葬式をした。〈昔は、亡くなればすぐ、葬式をした〉翌日の朝、草刈りが、（亡くなつた人の）墓の近辺で、草を刈つていたところ、（墓の）内から呻き声が聞こえてきた。（すると）そこにいた草刈りは、びつくりしてその（墓の主）家に（そのことを）知らせに行つた。

すると、みんな騒動になつて集まつて來た。（そして）墓を開けて見たところ、何とその人は、生きかえつていた。（死んだはずの人が）このように生きていたので、（初めに見た）この草刈りが（その時）手に持つていつたのは、ゲーンと桑の葉で、それを持つて（墓とその主の家を）この人は行きも帰りも歩いた。

それで、その時から、桑の葉とスキはかりー（縁起が良い）なものとして、旧八月九日はシバサシをするようになつたといわれる。この伝えは上等だとされ、死んだ人も生きかえつたので大変縁起が良いので、こ

大変かりーなむんりち、くりとうい持つち、必じ、うぬ
ゲーンとう桑の葉あまんきいていそーんり。
れを重んじ、シバサシには必ずこのゲーンと桑の葉を
混ぜて行うそうである。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第四班 〈山城悦子・又吉初子・田場春美・当真久美子・島尻博光・湧川汎子〉

注① 戰前までは、喜名でも日中に亡くなると、急いでその日で葬式を済ました。夕方亡くなつて、その日で葬式が出来ない場合に通夜をし、翌日葬式をした。

注② 喜名では、旧暦の八月十日をシバサシと称して、ススキの葉を結んで、サン(シバ)を作り、門前や、家の角、井戸などに差した。神が降臨し、魔物をよせつけないためである。地域によつては、桑の枝をススキといつしょに結ぶる地方もある。

マンサンスージの話話者

話者 金子マツ (明治四五年六月一四日生)

翻字 知花孝子

子供ができてね、マンサンスージの時に、あの昔の人だから、見る人は見るけど、見ない人は全然見ないから、幽靈を。

その人がそこに来ている時にこの家の中に、その幽靈が子供の命を取りにきているのを、見てわかつてゐるけど、絶体出でいかないから、何しても出ていかないから、しまいに、謝敷……。この歌をしたので、この幽靈は、もう後ろ向きに出て行つたそうです。だから、そのマンサンスージには、必ず、この大節はするものだといって、昔の人はしていたそうです。この歌を三味線で、

謝敷板干瀬にうちやい引く波ぬ
謝敷美童ぬ目笑え歯茎

謝敷の海岸の板干瀬に、打ち寄せては引いて行く波が真白に砕けて散るありさまは、謝敷めやらべの笑顔の美しい面白い歯を思わせる。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第四班 〈山城悦子、又吉初子、田場春美、当真久美子、島尻博光、湧川汎子〉

注① マンサンスージ（満産祝）は、喜名部落では子供が生まれて六日目の日に、親類縁者隣り近所を招いて酒宴する。母子の健康祝いである。

注② 板干瀬とは、洗濯板を並列したように形成されている岩石のことで、つい最近まで国頭村の謝敷にあったが道路工事の際に破壊され、今では完全に水没している。現在では、大宜味村喜如嘉の板敷海岸にある板干瀬が、天然記念物としての県指定を受けている。

打ち紙由來

話者 宇根良誘（明治三九年六月十四日生）

翻字 上原ヨシ

後生ぬ、錢作いるたみに、紙打つち焼ちゅしえ注①、
ずつと昔、貧乏者ぬ、今息ひきとうらんでいすしが、
借金残さーに、「私ねー、借金払んうちえー死なん」
りすたんでい。

後生のお金を作るために、紙にお金の型を（型写で）
打つて（仮前で）焼くでしょう。ずっと昔のこと、貧
乏人が今にも息を引きとろうとしているのだが、借金
があるために、「私は借金を払わないうちは死ねない」と苦しんでいた。

ある神様がうり聞ちみそーやーに、「何ん心配す
な、此ぬ世ぬ錢とう、あぬ世ぬ錢とう違いくとう、此
ぬ世ぬ、いかな金持人やていん、ちやつさある錢やて
いん、あぬ世んかい持つちえー行からん。くぬ錢（お）使
一らんくどう。あぬ世んかい来らん人（お）居らんくとう
貴方や先なでい行ぢ、子孫んちやーが、七日、七日紙（かかひ）^{（注）②}
あんていうりし、後生ぬ錢（お）うりるやぐとう。あまん
じえー、御生ぬ錢（お）なー、子孫ぬ多さしぇーあまんじ
えー金持人ないー、子孫ぬ居らんしぇー、あまんじえ
ー貧乏者どうないくとう。うぬー、やくとう、うぬ心
配さんよーい、うぬ錢（お）あまんじ払（は）ーりー
くとう、心配さんき。」りちなー。あんしなー、「あ
んやいびしがやー」「んち、うぬ人（ひと）、ミーヴトウイそ
るばーてー。

あんさーに、うぬ子孫（こくそ）やうり聞ちよーくとう、あん
さーに七日、七日、むるなー、うぬ縁故（えんご）近さる者達
あ全部、昔（むか）なー、紙打つ持つち来るばーてー。私
達が小さるまでー持つち来たんよー。あんさーに、
「後生ぬ錢、うりるやんどーいー」「んでいち、やくと
うからるやる。実際は錢ならん。」（今はわん）私にん思
い

(すると) ある神様がそれをお聞きになつて、「何
も心配するな。この世のお金とあの世のお金とは違う
ので、この世のいかなるお金持ちでも(また)どんな
に沢山あるお金でも、あの世に持つてはいけない。こ
のお金は使えないから、あの世に行かない人は居ない
ので、貴方（あなた）（死直前の人）は先に(あの世へ)行つて、
子や孫たちが七日ごとに紙のお金を焼けばこれが後生
のお金になるから、後生でのお金は、子、孫が多い者は
お金持ちになるし、子、孫が居ない者は貧乏（ひんぱう）になつてしま
う。だから、その心配はしないで、そのお金は後生
で払（は）えるから心配しないでよい」と言うと、「そうで
しようか」と安心したようにその人は目を閉じたそ
だよ。

それで、その人の子孫はそういうことを聞いている
ので、そのために七日ごとに縁故関係者はみんな、打
ち紙を持って昔は行つたものよ。私達が小さい頃まで
は(打ち紙を)よく持つて來たがね。そして「後生の
お金はこれ(打ち紙)なんだよ」と言つた時からそ
なつた。実際にはお金にならないが。(今になつて思

ばー。うりし、かじかじ私達あお婆さんかい、「う
り錢おならんりつさー」りち、私ねーかじに叱りんよ
ー今ん。叱りーしが、後生ぬ錢おうりるやんどー」う
ぬ紙焼ちゅしえー、貧乏者ぬ安心しみーるたみに、「
後生んじ、錢おうりるやんどー」んでいち安心しみー
るたみに始みてーるふーじ。

あんさーに、ちやー後生や「紙どう第一どー、供え
物、ムーチーとうか紙どうどー」んち。品物やなー肉
とうか、あまの一取らん。紙どう取いる、紙どう。
注③ 一コ一どーんち、昔から、今伝えて、なかなかうれー
直らんばー。實際から言いねー、うぬ紙えあまんじえ
ー錢ならんくとう、今頃やれーしむんでい思ひしが、
錢かからんくとうするばーるやる。

うんだ、それで度々私達のお婆さんに「（打ち紙は）
お金にならないそうだよ。」と言つたら、今でも時々叱
られることがあるんだ。叱られても（やはり）後生の
お金はそれなんだよ、と言う。この紙を焼くのは、貧
乏者を安心させるために、「後生でのお金はこれなん
だよ」ということから始まつたようだ。

そのために、何時も後生では「打ち紙が第一だよ、
供物もムーチとか打ち紙なんだよ」と教えられた。（
供物もムーチとか打ち紙なんだよ」と教えられた。（
供える）品物でも肉とかは後生では受け取らない。打
ち紙だけを受け取る。焼香だからと言えば、（この習
慣は）昔から今日に至るまでなかなか直らないね。実
際からするとその打ち紙は、後生でもお金にならない
から、今頃は供えなくともよいと思うが。（しかし）
そんなにお金がかからないので今も続けている訳です。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会〈山内源徳、島袋喜美子〉

注① 打ち紙、紙錢のこと。以前は店から褐色のウチカビを買って、それによるい錢の型をした、ウチカビウツチャードと称するもので、縦五個横七個に打つて使用したが、現在では、打たれたものが店で用意されている。焼香事や清明祭等に用いている。

注② 沖縄では人が死んで七日目ごとに四十九日までナンカ祭を行う。家と墓とで打ち紙（紙錢）を焼いて焼香する。

注③ 烧香。沖縄での焼香としては、死んで四十九日までの七日ごとのナンカ祭と、百日、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、

二十五年忌、三十三年忌、等がある。

72 念仏者の始まり

話者 渡嘉敷 兼求 (明治十三年六月十五日生)

翻字 上原ヨシ

くぬ沖縄や、いち日本世なたがでいねーよー。明治十二年ぬ時になたん。うぬ時になとーしがや。

うぬ乞食が出じーたんでいぬ話やらやー今あ。とーうぬ乞食でいしえー。

ある人ぬ、大和からかんしくまんかい、戦寄してい来る敵んかい、あぬ国頭くにびら^{注①}とてー大変そーしが、国頭くにびら^{注②}お物ものあてーねーらんやー。しぐ昔むかしぬ鉄砲てつぱうんでいしえーよー、短發たんぱくんでいち、あぬー、うれー長ながん、私達わたくしん持つち見みちよーしがよー。弾だん三十発さんじゅうぱつなーんでー撃うていわからーよー。また、ありんかい、されーいしがあぐとう、されーらんえーかー使つからん。破裂はりくすん。あんすぐとう、昔むかしえうり持つつちそーしが。

あぬ、大和から来きんてー。うり持つつちちし、なー国くに

この沖縄が、いつ日本の時代になつたかというとね。明治十二年の時になつた。その年になつたがね。

今はあのう、乞食が出たという話でしよう。そう、その乞食というのがね。

ある人が大和からこうしてここ(沖縄)に戦い寄せ來た敵にね、国頭では大変戦つたが、国頭の人たちは怖き知らずだった。それから、昔の鉄砲に短發といふのがあって、それは私達も持つてみたことがあるがね。(それは)弾を三十発も撃つた後は、銃を掃除しなければならない。そういうわけで、昔はそれを持つて戦つたそうだ。

あのう、大和からこの武器を持ってやつてきたが、

頭お物あてーねーらんくとう、うれーまた、短発んでいしが、長んくなぎびかーんあたさ。私達んうれー使ていんーちゃん。短発んでいし使ていんーちょーしが弾あ一発込みやーに、またかんし、くまから取てー付きー使ーるすぐとう。戦争ぬ時ねー、かんにー、かんにーるやしえーやー。うり取いる間あ待たらんぐとうやー。いーさこー、国頭うとーてー、国頭お物あてーねーん。怖るさー知らんどうあぐとう。

酒屋ぬ酒たりーる薪長切りーんでいうりんかい言ちよーしが、くなぎびかーんなーあさ。あんさーに、太おくぬ茶碗ぬうひなー。丸木小どー。うりんかいや長切りーんち、酒屋ぬうれー買いたるばー。うり多く切つち、まーんくい積まつとーぐとう、うりくなぎそーる長切り茶碗ぬうひびかーんそーるうり、うつちえーひつちえー鉄砲向しきーがえーねー、しぐ行ぢやーに目頭あかきてー、すげいすげいし、ゆかいうつさうりしぇーるぐとーん。うぬうちなかい側なかい居しが鉄砲やらしーねー。またうつたーんさりーさやー。

あんさーに、後おなーあわざらんなたぐとう、首里

国頭の人たちは怖きらずだつた。この武器は短発といつたが、長さもこの位あつて（話者が手で示す）私達もそれは使つたことがある。短発というものを使ってみたが、弾を一発込めでは、またこうして一発と取り付けて使つていた。戦争の時もこんなことをくり返していた。一発づつはずしたり、取りつけたりする時間も待てずにいた。国頭の人たちは物おじしない怖き知らずの人たちだったので、国頭ではだいぶ手こづったようだ。

酒屋で酒を造る薪のことを長切りといつていたが、長さがこれ位あつた。そして、その太さはこの茶碗の位あつた。小さい丸木で、それを長切りと呼び、酒屋が買つていた。その丸木の薪は、たくさん切られて、どこにでも積まれてあつた。それで、長切りの太さは茶碗ぐらいある薪で、敵が鉄砲をこちらに向ける前に急いで行つて、相手の目頭をめつたうちににして、だいぶ戦つたようだ。ちょっとでも油断していると、側にいる味方が鉄砲を撃つと、またみんなもやられるからね。

それで、しまいにはもうどうにもできなくなり、首

んかい行ぢ、「棒ぬ先から火ぬ出じてい、私が鼻射つ

注③ち、私がやなやびらん。」でいち、公儀んかいうり申上

んでいる言るい、うりうんぬきーが行ぢよーるばー。

「とーうれー大変どー。うれ一鉄砲んでいち、うりから出じーしえー、あれ一弾どうやぐとう、うれ用心り

よー」んでい言ちやぐとう、うんにんから怖るさし、

出来さんたんでい。

あんやしが、うぬ乞食や、ちやぬふーじ出じたがれ
一やれーやー、國頭から首里かいあま一片付てーぐと
うやー。あぬ首里なかい城ぬあんどー。うまんかい行
ちやる時ねーやー、天川坂注④でいち、あぬ港ぬ間、今
あ真直やしが、うにんねー天川坂注④んち、くぬあたい立
つちよーたさ、覚らんだやー貴方達がー、分らんやー
うまー天川坂注④んちよーさ。」出会とーるぐとーん、あ
る人、個人出会いとーんてー。出会たぐとう、「首里んか
いぬ道探めーいんでー」ちさぐとう、「とー首里かいぬ
道え、まーからちやんぐとうーし行ちやびーんどー。」
んち、敵んかい教ちよーるぐとーん。

「とー貴方や知行くいんどー。」んち。〈知行くいん
でいしえー、年金くいんでいるばーてー。年金でいね

里にいつて、「棒（鉄砲）の先から火が出て、私の鼻
を射て私にはもうできません。」と公儀へ申し出に行
ったそうだ。「それは大変なことだ。これが鉄砲とい
うものだ。それから出るものは弾だから用心しなさい。」
と言つた。その時からは恐れてできなかつたそうだ。

ところで、その乞食がどうして出たかというとね、
戦いが済んで、国頭と首里の間が片付いて後のことだ。
あの、首里には城があるでしょう。そこへ行く途中に
天川坂というのがあつた。〈あの港までの間は、今は
真つ直ぐになつてゐるが、その頃の天川坂はこんなに
急坂だつたよ。貴女たちは覚えてないでしよう。分ら
ないねそこは。そこは天川坂と呼んでいた。〉 そこ
であるひとりの人に出会つたそうだ。それでその人に
「首里へ行く道を探しているのだが。」と言つて、「そ
うか、首里への道は、どこそこからこんなふうにして
行きます。」と敵に教えたそうだ。

（すると、敵は）「では貴方に知行をあげよう。」と
言つた。〈知行をあげるというのは、年金を与えると

一ちやつさでいがらやー。」年に一万円なー、うつさく
いんどーんでいち、日本からー、うりんかいや聞かち
やぐとうやー、なーうれーうつさ貰るむんでいち喜そ
ーるぐとーん。

やつぱり、日本から錢おきいらんふーじやつさー。
國んかい言い付きとーるぐとーん。うりんんかい、う
つさなーくいりんち。

また、沖縄ぬ國んかいうり言い付きたぐどう。國と
うしえー、「君んかいや、うつさあんしえーくいらん。
君や乞てい食え。」でいちはーるふーじ。今あ乞てい食
えんでいやぐとう。あれー念佛者ぬ話どー。乞食あ
話を。

寺んでいち、あぬふーじーぬ円なかい、くひびかー
ん作やーに、うりんかいや、かんし穴ふがちしげー、
うりかんていやー、「サー、サンティル、サーシル、
ミーサイ、イチマングワヌ、チジョーヤ、ミーチヌ
ファーニルウサミタル。」^{注⑤}しょー。

乞てい食えんでいち、國から許可いーとーさや。む
る金持人なーりー、また官舎なーりー、うれー錢いー
て歩ちゆるばー。〈今あいがすらやー〉 いつペー

いうことだ。年金というのはいくらというのか。」日本
から年に一万円づつ、それだけを与えると、この人（乞
食）には聞かせた。もう、この人はそれだけ貰えるも
のと喜んだそうだ。

しかし、日本からはお金はくれなかつたそうだ。國
に命令したそうだ。乞食には僅かばかりを与えるよう
にと。

また、沖縄の国にも、知行を与えるように命令した
が、国としては「お前には、こんなにたくさんのお金
を与えることはできない。お前は乞食にでもなれ。」と
言つたそうだ。今は乞うて食えと言つたそうだ。これ
は念佛者の話だよ。乞食の話。

寺といつて、あのような円いものの中に、これぐら
いの大きさのものを作つて、こうして穴をあけて付け
て、それをかぶつて、「サー、小鳥さしを見なさい。
一万貫の知行は耳の端にぞ納めた。」と唄いながら
物乞いした。

乞食になつて食えと、國から許可されていた。だか
らすべて金持ちの家や官舎などからお金を貰つて歩い
ていた。〈今もあるだろうか。〉乞食とはいえ、大変

金持人。だーうれー乞てい銭お沢山ぐとう。あぬー、
アンナ村んちよー、首里ぬ東なかいあつた。
注⑥

な金持ちになつていて。乞食になつて、沢山のお金を
貰つていたからだ。この人が住んでいるところは、ア
ンナ村（安仁屋村）といつて首里の東の方にあつた。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第一班（稻嶺盛和、山城悦子）

注① 一六〇九年の薩摩軍（島津氏）の侵入を指している。

注② 薩摩軍は一六〇九年三月二十五日、今帰仁村の運天港に上陸し、同月二十七日に今帰仁城を攻め滅ぼした。

注③ この諺は、広く伝承されているもので、一般には「棒の先から火ぬ出じてい、私が腹や射り穴ち。」となつていて、「腹に穴を開けた」となつてている。一方、腹に穴を開けられても、なかなか死なず動き回っているので、それに当つたら死ぬと云われてはじめて、「あいえー」と云つて倒れたというオチまでついている。

注④ 現在の嘉手納町中央公民館前の国道五八号線一帯にあつた急な坂道をいう。天川坂の由来は、薩摩軍が侵攻してきた際、この坂に煮えたぎつたおかゆを流して敵の侵入を防ごうとした。しかし敵は反対におかゆで空腹をしのぎ、元気づいて戦いは負けたという。

注⑤ 京太郎と称する芸能の中で歌われる「扇の舞」の歌詞の一部、現在では、沖縄市泡瀬や宜野座村宜野座でこれらの芸能が保存継承されている。

注⑥ 沖縄における念佛者の起こりは、一六〇二年に来島した浄土宗の大徳袋中上人での相伝の直系は垣花念佛として栄え、那覇市一円の葬儀にたずさわった。その他、那覇市松山と首里安仁屋村にも念佛者屋敷があつて雇われて遠くまで出かけたという。とくに、安仁屋村（現在の汀良町）には、勢頭と称する頭のもとに多くの念佛者が抱えられ、彼等は仕事のない時は物乞いをして歩いた。また、京太郎という門付の芸能をして各村々を廻つて歩いた。戦後になつて、この職業は全く姿を消してしまつた。

翻字 知花孝子

戦んかい、追わつていいにい、一杯茶あ飲ま
に、うぬ家にい、発つちゅんりいしちやぐとう、一杯
茶あ飲まんよーい、なー一杯え飲めーんち、うまぬ主
人ぬ、飲まちやくとう。

戦に追われてきて、茶を一杯飲んで、この（かくま
つてくれた）家から出掛けようとしたところ、一杯の
茶を飲まないで、もう一杯飲みなさいと、そこの主人
が飲ませた。

「うん」りち、茶あ二杯飲むる間ねー、戦あ敵ー前
んかい進まーにかい命、こーたんりいぬ、うぬ話やさ。

「うん」と、いって、茶を二杯飲んでいる間に戦は
敵は、前に進んでいって命拾いしたという、その話
であるよ。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第五班（山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真草、金城清美、金城宏子）

74 「サングワナー」の始まり

話者 松田栄清（明治二八年一月二〇日生）

翻字 島袋喜美子（方言）

知花春美（対訳）

「やなサングワナー」^{注①}でいる言葉ぬあせー。うり
が始まいや何やたがやーでい。

「やなサングワナー」 という言葉があるでしょ
う。これはどうして始まつたのか。

くぬサングワナーでいる言葉あ、あぬ女郎んかい身
売りさつていよー。昔え貧乏人の子供達やむる身売り
どうやでーぐとう。うぬ身売りさつたる子供え容貌ぬ
わっさんでいるばーてー。

うりから、ジユリアンマー^{注②}が「あんしぇー、いやー
や、人お借金ん納みーるむん。何んちいやーや客んと
うらん、借金ん納みらんが。」言ちやぐとう、「たり、
なー私ねー、かんし貴方が恩義んあいやすびーしが、
客ぬめんそーらん。無礼ないびてい、ちやーしん貴方
ぬ金お情ぬある金、恩義ぬある金やぐとう、ちやーし
ん儲きてい払いんてーんち思とーびん。」

さぐとう、「いやーや、あんしぇー払いぬ可能性やあ
み」でいちやぐとう、「払いぬ可能性やあしが儲きー
るさびらんでー。どーりん無礼ぬ話やしが、暇きてい
くんそーらんなー、アンマー、ちやーしん貴方が金お
儲きてい払いびーぐとう。」

なーうれー女郎どうやぐとう、「あんしぇーあんや
らー、シマうてい儲きーさんあらー、儲きてい元金
だけーんちょーん払いとうらせーよーやー」でい
ち、なーアンマーん情かきてい暇んきたるでいる物

このサングワナーという言葉はね。(貧乏人の子が)
女郎に身売りされてね。昔は、貧乏人の子供達は皆身
売りされた。この身売りされた子供は容貌が悪かつた
ようだ。

それから、ジユリアンマーが「どうして、他の人は
借金も納めるのに、どうしておまえは客もとらないし、
借金も納めないか」と言つたら、「それにもう、私は
このように貴方に恩義もあるのですが、客もいらして
もらえず、無礼になつています。どうしても、貴方の
お金は情のこもつているお金、恩義のあるお金だから
どんなにしてもかせいで払うつもりです。」(と言つた)

すると、(ジユリアンマーが)「それでは、おまえ
には払える可能性はあるか」と言つたら、「払える可
能性はあるが金儲けができません。無礼な話ではあり
ますが、どうか暇を下さい。アンマー、どうしても貴
方のお金はかせいで払いますので。」(とお願いした)
もうこれは女郎なので、「そういうことであれば、
ここで金儲けができるのなら、(別のところで) 儲
けて元金だけでも返してちょうだいね」と言つて、も
うアンマーも情をかけて暇をくれてやつたという物語

語でー。

うりからなー、辻うとーてー儲きーさん、うりから渡地でいねー、現在ぬ明治橋(注⑤)、あまにん辻、中島、渡地(注⑥)でいち、あまにん遊郭(注⑦)あいるすぐとう、あんさーに、うぬ渡地え、につかからくぬ女ぬ行ぢから遊郭始(注⑧)またんでい。くぬヤナカーギ女ぬ行ぢから。

あんさぐとう、うぬ儲きじくでいるむの、イー力しきでいちねーらん、ヤナカーギでいちねーらん、知恵ぬあるうつさすぶてい、ちやーさらー儲きて(注⑨)アンマーレ金(注⑩)お払いがやーでいち、なー恥んほーんいららんどうやぐとうやー、なー恥ん振り捨(注⑪)ていーん。
うりから、あぬうまんじ、渡地え、昔ぬ、帆船ぬ船着き場やぐとう、ゆーあぬ、

渡地女郎(注⑫)小がちりなさや
裾(注⑬)ちり袴(注⑭)に、肩落(注⑮)てい着物着ち
山原船通(注⑯)いさ

でいる歌ぬあしぇー。

あんすぐとう、商売女ぬ肩落(注⑰)ち着物着ち、裾(注⑱)んちりとーる袴(注⑲)んでー着ち、うぬ山原船(注⑳)んかい客とういが

なんだよ。

そういうことで、辻では金儲けはできなかつた。それから渡地というのは、現在の明治橋、あそこにも辻、(と同様な)中島、渡地と言つて、あそこにも遊郭があつた。そこは、この渡地は、(辻よりも)おくれて、この女が行つてから遊郭は始まつたようだ。この容貌の悪い女が行つてから。

そこで、この金儲けというものは、美人であろうと不美人であろうと関係なく、知恵のある限り出しきつて、どのようにしたら儲けてアンマーのお金は返せるだろうかと、もう恥も外聞もないのだからね。もう恥も振り捨ててね。

また、ここは、渡地は、昔の帆船の船着き場だつたので、

渡地女郎のあわれさよ
裾のきれた袴に、肩のおちた着物を着て
山原船に通うよ

という歌があるでしょ。

（その（歌）から、商売女が肩のおちた着物を着て、裾もきれている袴を着け、この山原船に客をとりにい

行ちゆる姿あ、ちやぬあたいぬぢりなさやたがやーで
いち、自分達とうしえー感じーるばーでー。」

うりから、うぬお茶屋、茶屋し、うりから船から来
れー、「茶あうさがみそーれー」でいちしーるんしえ
ー、うぬ船ぬ人達や、人ぬ茶やただー飲まん。一錢ぬ
ん二錢ぬんうちきていはいし�ー。うりさーに日々ぬ
生活おそしたんでいるばーでー。日々ぬ三度ぬ食事お。

あんさぐとう、なー茶屋から始みやーに、今度お「
いやーや食事作ていどうらさんなー、姉さん」でいち
やぐとう、「うー」「あいえー、食事代ん無びらん
しが、ちやつぴからー作みそーらんなー」でいるんし
えー、「いー」でいち。また、うぬ客お「とーあんし
えー米ちやつさー買おていくわー。豆腐一丁買おてい
くわー」でいち、金お渡しりーるんせー。うりから
「けーい小ん取れー」でいるんせー。なーうぬ人達ん
うりぬ生活おわかとーるぐどう、ちむぐらさぬ、つれ
ーいーらんたるばーでー。おつれー。あんし、うりか
ら少なー少なー貯てい、なーお茶屋から食事屋んかい
なでいさぐとう。

なー、「でい、まるけーでいるやんむん、今日寂さ

く姿は、どれほどのみじめさだつたのかと、自分達は
思わずにはいられない。」

それから、このお茶屋、茶屋をした。それで船が着
くと、「お茶をお上がり下さい」と言うと、この船で
来た人達は、人の茶はただでは飲まず、一錢か二錢は
置いて行くでしよう。これで日々の生活はしていたよ
うだ。毎日の三度の食事もね。

そこで、もう茶屋から始めて、今度は「あなたは食
事を作つてくれないか、姉さん」と言われたら、「は
い」(と言ひ)「どうしよう、食事代も(ろくに)無
いが、このぐらいで作つて下さいませんか」と言えれば、
「はい」と答えた。また、この客は「それでは米はこ
のぐらい買つてきなさい。豆腐一丁買つておいで」と、
金は渡した。それから「つり錢はもらひなさい」と言
つた。もうこの人達もこれ(女)の生活はわかつてい
るのだから、かわいそうに思いおつりはとらなかつた
ようだ。おつりはね、それから少しづつ貯えていった。
もうお茶屋から食堂にかえたのでね。

そうこうして、(船乗りが)「さあ、たまには、今

ぬ、女郎んでーこおていくー』でいちやぐとう、「あんしみしえーみ」でいちさぐとう。當時え、中島、辻え十錢、女郎が値ぬてー。あんさぐとう、うぬ泊い貨ぬ十錢やぐとう、「うまんかい泊まみそーれー。私達あ三貫しえーゆたさいびさ」でい、くぬヤナカーギ女ぬ言ちよーるばーてー。あんさぐとう、男ん欲おあしえー、金ぬ欲お、あまんじ一晩泊まいしかーなー二晩錢たれーでー、くまんかい二晩泊まらりーぐとう、うぬ船ぬ荷物積ちーる間るやぐとうやー。ほんとー、男ん金お使いぶさーねーんしーやー、ただ飲み食い、寂しさのーしぬ為んかいどう辻んかい行ちゅん、中島んかい行ちゅんでいる。「あんしぇーあまんかいめんそーらやか、くまんかい泊まみそれー。私達あ三貫しえーゆたさいびさ」でい言ちやぐとう。うりからあぬー、渡地え三貫しえー呼ばでーん、辻、中島あ五貫とういぐとうあまやかー渡地えましどーでいち。あんさぐとう、うつさぬ船むち、なー皆、うまあ津口やぐとう、皆うまんかいどう入りんちやる、辻、中島あ不景氣などーんでいるばーてー。うりからジユリアンマー達揃てい、「くり、客ぬ入らんしー不思議

日は寂しくもあるし、女郎でもかつてこようか」と言つたら（仲間達は）「そうしようか。」ということになつた。当時は中島、辻では女郎の値が十錢だつた。その泊まり貨が十錢なので、「ここにお泊まりになつて下さい。私達は三貫でよろしいです」と、この容貌のわるい女が言つたようだ。そこで、男にも欲はあるでしょう。金の欲はね、あそこ（辻、中島）に一晩泊まるよりはあと二晩を加えたら、ここ（渡地）に二晩泊まることができる。この船の荷物を積むまでだからね。実は、男も（むだな）金は使いたくないし、ただ飲み食い、寂しさをまぎらす為に辻に行くし、中島に行くのである。「それでは、あそこにいらつしやるよりは、ここに泊まつて下さい。私達は三貫もらつてよろしいです」と言つた。その時から渡地は三貫で（女郎を）呼ぶことができるし、辻、中島は五貫もとので、あつた。それに、ここは港でもあるので多勢の船乗り達は皆ここに入りこんてきて、辻、中島は不景気になつたそうだ。それからもう（辻、中島の）ジユリアンマー達が揃つて、「これは、客の入らないのは不思議

な事やつさー』でいち、吟味さぐとう。「やな渡地んかいサングワナー達がうぐとう、自分達や不景気なでい客ん皆あつたーんかいけーとうらつてい』でいち。

さぐとう、うんにーぬ『私達あ三貫しえーしむさ』

でいる言葉あ、自分ぬ知恵ぬあるうつび、なーすぶい出じやち、ちやーし金お儲きーがやーでいち、知恵ぬあるうつさーなーすぶい出じやちぬ事やぐとうやー、とーうにーねー、うぬサングワナーでいしえー、「私達あ三貫しえーしまびさ」でいしえー、別んかいわーさんよーい、金からくいんでいる、「三貫しえーゆたさいびさ。くまんかいけー泊まいみそーれー」でいちよーしが、うりから、辻、中島ぬ言葉やまた、「やな渡地んかいサングワナー達がうぐとう」でいやーに、うりからくぬサングワナーでいる言葉あ現在ちえーやな言葉などーんでい。

なことだ』といつて吟味した。「賤しい渡地にサングワナー達がいるから、自分達のところは不景気になつて客も皆あそこにうばわれてしまつた』と。

それは、その時の「私達は三貫でよろしい。」という言葉は、自分の知恵のあるだけ、もうしぶり出して、どうしたら金儲けができるか、知恵のある限り出して（考えた言葉）であつた。この時のサングワナーといふのは、「私達は三貫でいいですよ」ということであつた。それは、別にはやらないように、金をまきあげるために、「三貫でいいですよ。ここにお泊まりになつて下さい」と言つたのだが、辻、中島での言葉はまた、「賤しい渡地にサングワナー達がいるから」ということで、それからこのサングワナーという言葉は、現在につけて賤しい言葉になつたそうだ。

注① 現在では、身持ちの悪い女に言うばとう語。この物語で、この言葉のおこりを説いている。

注② 尾類の抱母で、二、三人の尾類を前借金で抱え、彼等が一人前になるまで部屋を提供してめんどうを見た。かつては、彼女等が

十三、四歳の娘の頃、田舎から身売りされて来た尾類子で、苦業の末、このジュリアンマーの座を獲得した。

注③

明治橋は明治十六年（一八八三年）木橋を架したのがはじめで、その後、水流が激しく橋脚が保ち難く、明治三六年（一九〇三年）に御物城の東側に移して南北二橋とした。その開通は明治三六年五月三十日に行なわれた。渡地から垣花へわたる那覇江にかかる明治橋は明治にできたから、名づけられたといわれている。

注④

那覇にあつた遊郭の名、沖縄各地の、多くは農漁村の貧しい家々から幼少の時売られてきた。またはそこで生れ育ち、性を売ることをなりわいとする女たちだけで形づくつてある社会であり、「花ぬ島」ともよばれていた。本土人、中国人、首里那覇の上流人を相手とした高級な遊郭であった。

注⑤

那覇市泉崎橋から大石に至る所に中島遊郭があつた。大正から昭和の初めころまでは旧泉崎付近まで伝馬船が横付けになり船員たちが出入りしていた。

注⑥

那覇市通堂付近に渡地遊郭があつた。渡地は辻、中島に次ぐ下流の遊郭で山原船の船乗りや島尻の農民たちが出入りしていた。

注⑦

山原船の別称。山原船はもっぱら帆によつて航海していたので、この帆船の名がある。

注⑧

他に馬鑑船の別名もある。戦前までは、山原船が沖縄の海上交通機関の主役で、沖縄本島北部地方、いわゆる山原の村々から薪炭を中頭、那覇方面へもたらし、都會からは日常雑貨を山原の村々に運んでいた。

尚 巴 志 と 喜 名

話者 松 田 ナ エ （明治三十年四月二二日生）

翻字 知 花 春 美

あれ一、二百年ないるはじどー。二百年、四百年ばけーんないるはじどー。あぬ、日本ぬかいてー、薩摩

あれは三百年になるでしそうね。三百年、四百年ばかりなるでしそうね。あのう、日本にね、薩摩に戦争

んかい戦争負けやーなかい、なー城から王様あ城から
降りーせーやー。城お占領（注①）さりしせーや。

あぬよー、浦添ユードウリんかいめんしーたんで
いー。あんすぐとーう、浦添ユードウリや那覇からも首
里からも内地からも近いやぐとー、佐敷からも近いや
ぐとー、「まー読谷ぬ方面ぬかいめんそーり」。言ちや
ぐとー、夜担みて、生きている時に夜担みて、う
まんかい入みそーらちやんでー。あさぎぬ下んかい。
伊良皆（注②）ぬ。あんすぐとー、くれー佐敷王子ぬ、うれ
ー尚巴志（注③）などーみ、尚巴志（注④）え位やなどーるばーやさ。』
あんさぐとー、生ちちめんしーにちけーち。えー
りん水から井戸から掘らんあらんねーならんち、伊良
皆（注⑤）ぬサシジヤーしや夜掘たんでー。夜、水あがらんと
ー生きられんからとーうて、夜掘たぐとー、サシジヤ
ー、伊良皆サシジヤー。佐敷王子かい。
うぬ尚巴志王や佐敷人やみしーしー。あんさー
い、浦添ユードウリんかいめんしーたんでーしが、
うまんかい担（注⑥）みて、いめんそーちやぐとー、なー浦添は
世はうされた、世うすりんでー、世うすりんでー、ユ
ードウリ、世はうすりとーんでーち。

負けてしまつて、もう城から、王様は城から降りるで
しよう。城は占領されるでしよう。

あのね（尚巴志は）浦添ユードリにおられたようだ。
それで、浦添ユードリは那覇からも首里からも内地か
らも近いので、佐敷からも近いので、「読谷方面にい
らして下さい」と言つた。そしたら、夜担いで、生き
ている時に夜担いで、ここに、伊良皆のはなれ（別棟）
の下に入れられたようだ。（この人は佐敷王子。それ
は尚巴志のことかな？位は尚巴志（王）になつている
でしよう。）

それで生きておられる時にお連れした。だから水を、
井戸から掘らないといけないので、伊良皆のサシジヤ
ーは夜掘つたらしい。夜ね。水がないと生きることは
できないといつて、サシジヤーは夜掘つた。伊良皆の
のサシジヤーはね。佐敷王子のために。

この尚巴志王は佐敷（知念村）の人だつたのでね。
それから、浦添ユードリにもいらしたそうだが、ここ
(伊良皆)に担（注⑦）いでいらしたので、もう浦添は世はうす
れた、世うすり、世うすりといつて、世はうされたと
いってね。

あんさーに、伊良皆ぬ部落んかい、なーまた偉い人達が、くぬ伊良皆ぬ部落あ寄留は誰も入れてありません。

道あがりからうまんかい按司ぬめんしぇーたんでいしが、「語かたでいくり」でいち、〈伊良皆ぬうぬ人ひと達たや区長くわどうやみしぇーたさに〉あんすぐとう、「伊良皆ぬ部落しょあ寄留よりゅうやめんしぇーびらんどー」でいち。「あんしぇー來た証拠じょうこ、何なんでもくれ」言いちやぐとう、「何なんでもくいらんあれー、私わたく達たあ來るかいやねーらん。ちやーし、上うんかい返答へんとうすが」でいち。「あんしぇーなー」すぐ、ダツチヨー持もつちめんそーち。〈昔むかからダツチヨーあたん。有名わざわざやんよー、うぬダツチヨー。〉

あんすぐとう、伊良皆ぬ部落しょあ寄留よりゅうやたたん、寄よりやたたんでいしぇー。うぬなぐりから、いるんな家庭かていなたぐとう。今いまなー、世よぬたていアメリカ世よなたぐとう。あんさーに、うり意味いみとうてい、伊良皆ぬ大親おおおや一門いちもん、注註⑤あまから逃のぎていもーち、夜ようすりんでい。あんさーい、うまんかいや尚巴志王じょうばしおうや四よち五ごちびかーん

それから、伊良皆の部落に、もうまた偉い人達が、この人（尚巴志）の敵が伊良皆の部落に（他所から）いらしたが、この伊良皆の部落は寄留は誰も入れてありません。

道の東側からここに按司がおられたようだが、（追手が）「情報を知らしてくれ」と言つたようだ。

〈伊良皆のその人達は区長くわだつたのでしようね〉だから、「伊良皆の部落には寄留民よりゅうみんはいないですよ」と言つた。「それでは來たしるしに何なんでも下さい」「何なんくれなかつたら、私達は來たかいがない。どのように上の（人に）返答へんとうしたらいいか」と言つた。すると、「それではもう」と言つてすぐラツキョウを持つてこられた。〈昔むかからラツキョウはあつた。このラツキョウは有名わざわざだつた。〉

それで、伊良皆の部落は寄留民よりゅうみんは住みつかない。寄留民よりゅうみんは住みつかなくなつた。このような習慣から。今はもう世も経てアメリカ世になつた。そんなことで、伊良皆の大親一門いちもんはあそこから（浦添）逃げてきた。夜暗に乘じて。そして、ここには尚巴志王の墓や（サシジャー）森など（関係するものが）四つも五つもあ

あるはじどー。墓ん、うりん、森ん。〈山内ぬおじー やうんな事おじよーじやみしえーるはじどー。それ半 分しか分らない。〉

あんさーに、寄留や入みそーらん。「私達あ部落あ寄 留やたつちやびらん。私達から北ぬ喜名ぬ部落あ、村の ぬ人から寄留やでいきーびぐとう、あまんじたちみそ ーり。」でいち。

今度は喜名の部落はどの寄留も栄えとーん。伊良皆 あうにーから、佐久川小でいしどう野村でいち二世帶 入つちよーみしえーたしがよー。子んでいきらん、金 ん儲きららん、帰みそーちゃん。あんさーに、私達 からくーてんぐわー、少し歩ちみしえーねー、しぐ上 んかいぬぶみしえーねー、じこー寄留やあまからん、 くまからん寄でいたつちゆぬ部落やしが、うぬ人、来 ねーらんでいち、言る為に「私達あ部落あ寄留や入つ ちめんしえーびらん。寄留たつちみしえーびらん。喜 名ぬ部落んかいめんしえーびり。」

あんさーい、くぬ喜名ぬ部落あ寄留やどんどん來、 栄え部落やんでいち。〈昔から、あぬー崎浜んでーよ ー、私達あウフオジーや区長やんしえーてーぐとう、

それで、寄留は入らなかつた。「私達の部落は寄留 は育ちません。この部落から北の喜名の部落は、村の 人からも寄留は歓迎されるので、あそこにいらして下 さい。」と言つた。

これで、喜名の部落は各地からの寄留も成功した。 伊良皆はその時から、佐久川というのと野村という二 世帯が加入されたが、子も生まれない、金も儲けられ なくて帰つて行つた。それで、私達の部落からちよつ と、すこし歩いて、すぐ上に行かれたら、沢山の寄留 があつちからもこつちからも寄つてできた部落なのだ が（尚巴志を敵から守るために）その人は寄留はして ないと言う為に、「私達の部落は寄留は入つております。寄留民は住んでおりません。喜名の部落にいら して下さい。」（と言つた。）

それから、この喜名の部落には寄留がどんどん来て、 部落は栄えていた。〈昔から崎浜ではね、私達のおじ いさんは区長だつたようだが、私の夫の祖父が昔、言

私わたくしあ夫おとこぬ祖父おじいちゃんや、昔むかしめんしえーねーよー、あぬタゲー
ウヤんち、うりが必要いのちたんでい。もーこの人が保証人ほじょにん、
タゲーウヤんち。

あんし今いまあ、崎浜さきはまぬぐとうしくぬ比嘉ひが小こぬおばー達たつ
めんしえーにまでいんよー、私達わたくしあ年頭とんとう注⑦んすたん。あ
つたーが幼おさなさる間あいだ、崎浜さきはまからよ、じこーめーたんよー。
現在いまどんどん、一人ひちびちないしえー、誰だれがでも來
たら。昔むかしあんねーあらんたんでいー。村むらぬ人ひとぬ前まへ
かいどう、またかんし寄よてい来くわぐどう、この人がどう
でもしたら貴方あなたどーんでいる保証ほじょう。あんすぐとう、く
ぬ喜名きなぬ部落そらふるよー、じこー榮さかいんでい。あまー少すくない難ひが
さんでいー。伊良皆いらわぬ部落そらふる。寄留よりや絶対ぜったいくまんか
い誰だれんめんしえーびらんでい。うり断きりわいる為ゑによー。
寄留よりはたちません。喜名きなんかい、喜名きなんかいんち断きりわ
いさ。

「あんしえー、貴方あなたあ部落そらふるんかい来るていだん何なにや
ていん持もたし」んちやぐとう、何ん持もたすしえーねー
らん。なーくぬダツチヨー やれー、寄付よふないぐとう
ち、伊良皆いらわぬうんにんぬ区長くわ長なが、議員ぎいんどうやみしえーた
らー、伊波上地いはうぢぬおじー やんしえーたんでいさ。うれ

われていたのだが。それから（寄留には）タゲーウヤ
(互親) というのが必要だつた。その人が保証人。タ
ゲーウヤと言つてね。

それで今は、崎浜のように、この比嘉のおばあさんが（元氣で）いらつしやる間は、私達も年頭に行つて
いた。あの人達が幼い間は崎浜からよくいらしていたよ。現在は（先に来た）人々を頼りに誰でも來たら、
どんどん入れるでしよう。昔はそうではなかつたそ
だ。村の人の前にこのように寄つて來るのだから、この人が何かやらかしたら、あなたが（責任者という）
保証。だから喜名の部落はとても栄えて、あそこは（伊良皆）ちよつとむずかしかつたようだ。伊良皆の部
落には、寄留民は絶対誰もいらつしやいません。と寄
留を断わる為に言つた。「寄留は育ちません。喜名に
行つて下さい。喜名へどうぞ」と断わつた。

「それでは貴方の部落に來たしるしに何でも持たせて下さい。」と言つたら、何も持たせるものはないでし
よう。もうこのラツキヨウだつたらあげることができ
るということだつた。伊良皆のその時の区長か議員だ
つたのでしようね。伊波上地のおじいさんだつたよう

一 聞ちよーさ私ねー。ダツチヨーいく株でいがらー、
必じ数あたーちよー。七、五、三でいがらー。うりダ
ツチヨー掘やーに帰ていめんそーちゃん。

1。

あんさーに喜名ぬ部落あ寄留やいつペー栄えいんで。
本当やしえーやまた。あまーまためんそーちよーたん
でいしが早く、めんそーちよーたんでいしが、二世帯、
あぬ、仲吉ぬ所にん、野村でいちがらー、佐久川小ん
ちめんしえーたしょーやー。年寄みそーやーに、むる
部落んかい子んでいきらん、金ん儲きらん、あんし年
寄みそーちやぐとう。喜名ぬ西なとーしょーやー、元
ぬ部落ああらんぐとう。むるあまんでいきーさ。だー
あまーくぬ三叉路から尚巴志王や入つちよーしょーや
だ。

だ。私はこんなことを聞いたよ。ラツキヨウを何株か
ね。必ず数を決めてね。七、五、三とかで、ラツキヨ
ウを掘つて（あげたら）帰つて行かれた。
それで、喜名の部落は寄留が沢山いた。本当のこと
ですよ。伊良皆には早くいらしたようだが、あの、仲
吉家の側に、野村や佐久川という二世帯がいらしたが、
亡くなられたようだ。部落では子供もできなかつたし
金儲けもできないままに亡くなつてしまつた。もう、
部落の西側になつてゐるからね。元の部落ではないか
ら。伊良皆の部落の三叉路から尚巴志は入つてゐるか
らね。

あんし、あぬ夜ち、井戸や夜掘たぐとう、あぬ佐敷
ぬ部落ちゆくみそーちやる王なたぐとう、サシガード
いち、サシジヤーでいち、井戸ちきてーんでー。生
きているうちにめんそーちやぐとうよー。

それに、夜、井戸を掘つた。佐敷の部落をつくつた
王だったのでサシガード、サシジヤーという井戸の名を
つけたということだ。（尚巴志が）生きているうちに
(ここへ)いらしたので。

る。自然の洞穴をさらに削りとつて造られており、向かって右が英祖王陵、左が尚寧王陵である。英祖王のころ僧禪鑑が来琉し始めて浦添に寺を建て、墓を建てたと伝えられる。第二尚氏の歴代王は尚田王以来、首里の王陵に葬られることになつていたが尚寧王に到つて慶長の役の敗戦の責任を感じて浦添の墓に葬られた。一六二〇年八月の建立である。「ドゥリ」は無風の原義で転じて風の静かな事にも使われる。また「ようドゥリ」は極楽のオモロ名かと思われる。

注② (一三七二—一四二九) 神号勢治高真物、思紹の長男。父思紹に嗣いで佐敷按司となり大里按司を「ぼす。一四〇五年中山王武寧を「ぼす、一四一六年北山王(今帰仁按司)攀安知を討ち、一四二九年南山王他魯毎を亡ぼして三山統一する。

注③ 伊良皆の旧部落北方サシジャーレ森の麓にある井戸で、サシジャーレと称され、佐敷井戸の意味である。今日でも水が枯れることのない湧泉井戸である。

注④

十八世紀の初頭、政治、経済、文化の中心地域であった首里、那覇から沖縄本島の農村地域にユカツチュと呼ばれる士族の人口移動、いわゆる寄留が行われた。このようにして形成された小村落を「屋取」と称している。読谷村内にも屋取集落があり、喜名部落では「上原ヤードウイ」等がある。

注⑤

平田、屋比久の関係する根人門中を指している。

注⑥

よそ者が、部落に加入する場合の仲介者。現在でも、

波平部落では部落に新加入する場合一人の保証人が

必要である。

注⑦ 正月の行事の中で、親元や長上の者に年頭のあいさ

つをする風がある。お茶やセッケン等のセットもの

を持つてあいさつに行く。



写真(5) 浦添ユードゥリ

話者 松田栄清（明治二八年二月一〇日生）

翻字 島袋守成

觀音堂の始まりは、喜名のヌン殿内の百（人名）おじいさんが墓敷にするといって、前の窪地を敷き始めたそうだ。それで読谷村としては是非そこに、首里や金武に拝みに行くには遠すぎるのに、そこに觀音様を勧請しようということになった。ヌン殿内の百おじいという人の墓石を仕掛けているが、これは又黄金物だと、このような果報なことはないという話だった。沖縄には、そうひんぱんには（ないことである。）

觀音堂や、始まいやうまー喜名ぬヌン殿内ぬ、百おじーんでいぬ人ぬ、墓敷すんち、あぬ、前ぬ窪お敷ち始みてーたんでい。あんさーい、読谷村のー、是非うまんかい、首里ん遠さい、金武ぬん遠さくとう、あがとうー行ぢ拝でーならんくとう、でーうまんかい、御觀音様うんちけーし、くーんでいぬくとうんかい、なでいさーに。ヌン殿内ぬ、百おじーんりぬ人ぬ、墓石しかきとーしが、くれーまた黄金むんち、くんぐどしぬ、かんのねーんりぬ話でー、沖縄んかいあんちゆーか。

後ー、あぬ、大ぎ山くさていさーに、森小や、四方八方、かんし、溝ぬみぐとーるばーてー、くぬ觀音堂ぬ、今、お祀りしーる敷地えー。

あんさーい、「あーうまー私が墓敷かくてーくとう、あんしえーならん」でいしちやくとう、うりから、公儀とう一人とう、争いないるばーい、「いやーや、公

後方には、大きな山が控えており、この森は四方八方、溝に囲まれている。今、觀音堂を祀つてある敷地は。

それから、「あら、ここは、私が墓の敷地として囲つてあるので、そうされでは困る」と言つたが、しかし、公儀（首里王府）と一人とは争えないでしよう。

儀ねー、負けー』んち、あんさーに観音堂造たんでい。

うぬ観音堂や金武ぬ寺からうんちけーしちゃんでいやはり、首里えーかんあれー先やらはじやでーさ金武の。

あんしきくとう、ちょーどう、うぬ仏様うんちけーさる日とう、また後山内ぬ、おばーんち、うぬ人んへ九十歳あまでいから年寄いんそーちやがやー。神とうまじゅん生まりているうさきーなー、あぬ一年ん、拝でーるみしーるんでの物語やしが。

うりから、九月十八夜に、うぬ神え金武の寺から、うんちけーしちよーくとう、九月十八夜や村の拝み。又、十九日え、喜名ぬ、老人、若人揃ていうまんじ、う祭りやたるばーてー、棒ちかたい、手踊いしちやい舞踊、あい、うぬ、後山内ぬおばーさんぬ、ウバギー祝と、又、くぬ観音堂ぬ仏様うんちけーさぬ日とう、ちよーどう九月十八日へ旧ぬ九月十八日やかのと丑の日に、うんちけーしちやんでい。へうれー書ちよーけー、うれーいったーんうびとーちゅしやさ、村ぬ拝みや十八日、十九日えー喜名)

「貴方は公儀には負けなさい」といつてそれで観音堂を造つたということである。

この観音堂は金武の寺から勧請したとのことである。やはり、首里よりも金武の方が先に出来たかも知れない。

それで、丁度、この仏様を勧請した日と、又、後山内（屋号）のおばあといつて、この人は（九十歳余りで亡くなつたのでしょうか）神と一緒（同じ日に）に生まれたので、こんな長生きされたという物語であるが。

それから、（旧歴の）九月十八夜に、その神は金武の寺から、勧請してきているので、九月十八夜は村の拝み、又、十九日は喜名の老人、若人が揃つてそこで、お祭りをしたそだ、棒術をしたり、手踊りの舞踊をして祝つたそうである。この後山内のおばあさんの誕生日と、又、観音堂の仏様を勧請した日が、丁度、九月十八日（旧歴の九月十八日）の庚丑の日に、勧請したそうである。（これは貴方たちも書いておきなさい。覚えておくと良い。村の拝みは十八日、喜名は十九日と。）

うぬ觀音堂や、男う神とう、土帝君んち、男う神や
るばーてー。うまー農業ぬ神、働きわる裕福に物お食
りいちゆるんち、うぬ人、土帝君や、かんし、片手や
鍼かたみてい、片手やかんし、黄金抱ちよーるばーて
ー。あんし、働ちやる人ぬる黄金え抱ちゆーする。働
かん人おちやー貧乏、食えーかんていーすんどーんで
いる意味、土帝君やー。

又、「女神え、習字学問でいきらち、うたたびそ
り」。んち、子供達が、生まりーるばーや、女ぬ生まりー
ねーあぬ、ウーブシとうか、うりから、墨筆紙うさぎ
ていぬ、うまー願望するばーてー。うぬ、「手習学問
秀らち、うたびみそーり」。んち、又、「手花すぐらし
者なち、うたびみそーり」。んち、だー昔え手花んで
いーねーくぬ、着物自分、藍染てい自分、かち作てい、
あぬ機んかい織いてーくとう、今ぬぐーとう錢ぬあれ
一買てい着らりーるむの一あらん、むる自給自足るや
くとう。あんさーにうぬ女神え繁昌とうか、うりから
手習学問、なー子供達あ教育やるばーてー。くぬ女う
神え。あんさーい、九月十八夜や村う拝、又、十九日

この觀音堂（敷地に）は、男の神様で、（ある土帝
君が祀つてある）土帝君と称して男神であるわけです。
それは、農業の神様です。働く者は裕福に物が食べて
いけるということです。この人、つまり土帝君はこう
して、片手は鍼をかつぎ、片手には、こうして黄金を
抱いているわけです。このように、働く人が黄金を抱く
ことが出来る。働く人は、ずっと貧乏で、食い
はぐれるという意味だそうだ。土帝君というのは、

又、女の神様は、手習いや学問が出来るように授け
て下さるようにと祈った。子供達が生まれる場合や、
女子が生まれると、ウーブシ（芭蕉の糸）や、それか
ら、墨筆紙等をお供えして祈願をするわけです。その
「手習い学間に秀れさせて下さい」と祈り、又、「手
花（花織り）の秀れた者にして下さい」と祈った。そ
の昔は手花といふと、着物も自分で藍に染め、機織り
してから自分で着物を縫っていた。今のようにお金さ
えあれば買って着れるような時代ではなかつた。殆ん
ど自給自足だった。それで、この女の神は繁昌とか、
それから、手習学問とかで、いわば子供達の教育なん
でしようね。この女神の役目は。そういうことで、九

え字拝みやたしがよー。〈なー、今あたつた廃止し役員びかーさーに拝むんぐうとうになとーしがよ。〉

月十八日の夜は村の拝みで、十九日は字（部落）の拝みになっていた。〈もう今はだんだん廃止したものが増え、役員だけの拝みになっているがね。〉

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第二班（富村朝夫、知花春美、島袋千代、手登根政子、石垣みづえ）

注① 喜名部落北西の小丘に觀音堂はあり、一八四一年旧暦九月十八日金武の觀音堂から勧請されたといわれる。觀音像は温顔の女神で人々のいかなる苦惱も救い、また願いもかなえてくれる慈悲深い仏様で、旧暦九月十八日喜名部落を中心に村民による觀音拝みが現在でも続いている。

注② 喜名部落における屋号で、かつて、ノロが出た家筋。現在では、比嘉トミ氏がノロ職に就くべきであるが、ほとんど行事に参加していない。

注③ この物語に出て来る喜名觀音堂の建立は、一八四一年であるので、この時代は、読谷山間切時代でなければいけない。その後、一八七九年に読谷山村に改称し、そして戦後一九四五年に読谷村に改名した。

注④ 金武觀音寺のことで琉球八社のひとつである。およそ一五五二年紀州の真言僧日秀上人によつて建てられた。

注⑤

旧藩時代に農業の守護神として各間切りに觀請したといわれ、喜名觀音堂觀音様の横に安置されている。毎年秋頃になると、村内外の人々が、健康と家業の発展を祈願する参詣者で賑わう。



写真(6) 喜名觀音堂

アカヌクイの話

話者 松田栄清（明治二八年二月二〇日生）

翻字 島袋千代

ちて一話あれー、んだ、あぬー、首里うとーでい
昔えくぬ、恋愛でいるむぬ続^きーねー、親達^{おやぢ}が縁組^{えんぐみ}
濟^すませんえーだー打ち首ぬ刑^{けい}とうか、うりから島流^{しまなれ}し
とうかぬあたんでいるくどうやでーるばーてー。
大昔^{おとぎ}えー。

あんさーに、なー、昔ぬ首里親國^{しゅりおおき}んでいねー、なー、
くぬ恋愛^{れんあい}とうかぬーとうか、大変嚴^{ひやうげん}しくさつとーる時^じ
代^じやくとう。あんさーに、あまうとーていムチカサゲ
ーさーに、読谷楚辺^{よかなも}、あんしうまんかい、なー、打ち
首^{くび}さりーみ、またいやー島流^{しまなれ}しさりーみんでいぬ際^{とき}ん
かいなたくとう、くまんかいけー逃^はぎていちゃんでい。
「とー、いやーなー、うまんかいうとーきよー、何^{いか}
時^じあ私が連^{つづ}おいが来^くとー」んち。なー、うぬ男^{おとこ}あ読^よ
谷山楚辺^{よかなも}かい、持つちち、はんなぎたくとう。うぬ
女^{めの}お。さくとう、「うぬ生^おまりたる子^おあ誰^な子^こが」んで
い言^いちやくとう、「アカインヌクワ」んち言^いちゃんで

伝え話なんだがあれば。あのう、首里では昔、親同^{おやぢど}
志^しで縁組^{えんぐみ}しないうちに恋愛を続けると、打ち首の刑と
か、島流しとかあつたそうである。昔々の大昔のこと。

それで、昔の首里親國では、この恋愛とかいうものは、とても厳しくとりしまられていた時代であった。
それで、あそこで（首里）妊娠したので、打ち首^{くび}になるか、島流しになるかの瀬戸際^{せとぎ}になつたので、
読谷楚辺^{よかなも}に逃^はげ帰つて来たそうである。「お前は、
そこにいておきなさい。何時か、私が迎えに来る
から。」といつて、その男は読谷山楚辺^{よかなも}に女を連れて
来ておいて行つてしまつた。それで、その女に子供が
生まれて、「誰の子供か。」と聞かれたので、（女は）
「アカインヌクワ」（赤犬の子）といったそうである。
そうして、「アカインコー」（赤犬子）「アカヌクー」

い。あんしから、「アカインコー」、「アカヌクー」^{注①}
かいなたんり。楚辺アカインコー。

うりから、なー、うぬ犬ぬ楚辺暗井んち注②、自然壕ぬ

中んかい、立派な泉ぬあんよー。あんし、うまんじ、

被害年に、干魃でいち、なー、まーん水えねーんなて

いさくとう、うぬ犬注③おうぬ自然壕んじ、バタバタ濡でい

てーちーちーさんでい。くぬ犬注④お珍ましーくとうやつさ

ーんち、部落民注⑤おうぬ犬追てい行ぢ、うぬ洞穴調びた

くとう、うまんかい、なーすぐ、こんない湧ちゆる水

ぬあんでいるばーてー。〈また、ありますよー、楚辺

暗井んち〉

あんしきくとう、くぬ赤犬ぬ子でいしぇー、楚辺ぬ
屋嘉ぬ赤犬ぬ子でい。うりが大元祖が、屋嘉かい残と
ーら、うれー分らんしが、楚辺ぬ屋嘉んりいちょー
る家ん名や、くぬ赤犬ぬ成長たるとくろー。あんさ
ーに、アカイヌクーや、うぬ犬ぬ子んち、名ぬちちよ
ーんりる昔物語やしが。

あんさーい、うりから「歌とう三味線や昔はじまい
ぬ、イヌクはじまいぬ、国ぬみさぐに」^{注④}という、こう
いう琉歌がありますがね。うりから、うぬアカヌクー

になり、(いわゆる) 楚辺アカインコ(赤犬子)(と
なつたようである)

それから、その犬の楚辺暗井といつて、自然壕の中
に、立派な泉があるが、そこで、日照りの年に干魃で
どこも水がない時に、この犬が自然壕で、びしょ濡
れになつて来たりしたので、この犬は珍らしいことだ
と思い、部落の人々が、この犬を追つて行つて、その
洞穴を調べてみたら、もう、そこには、こんこんと湧
く水があつたそうである。〈また、ありますよ、楚辺
暗井といつて〉

そのようにして、この赤犬の子というのは、楚辺の
屋嘉の赤犬の子で、この人の祖先が屋嘉に残つてゐる
のか、それははつきりしないが、楚辺の屋嘉という家
は、この赤犬の成長したところである。それで、アカイ
ヌクーは、この犬の子といつて、名前が付いたという
昔の物語である。

そして、それから「歌とう三味線や昔はじまい
ぬ、イヌクはじまいぬ、国ぬみさぐに」という琉歌がありま
すがね。それから、このアカヌクーから、沖縄の歌、

や三味線ぬ始まい、沖縄や、くぬアカヌクーから歌、

三味線お生じたんりぬ物語やしが。

三味線は始まつたという物語だが。

うぬ三味線さんしのおまーから来がやれー、また、うりが、
叔父おきんりがらぬ、勝連かちんぬんかいめんせーたんりるばー
てー。うぬアカヌクーりる人ぬ叔父や。うぬ人ひとおまた
支那しなぬ貿易ぼえきしちよーたんでい。くり何なんとうか家んかい
持つち行いぢやらー入用いりようならんがやーんち。あんさーに
沖縄おきなぬ三味線さんしんのお支那しなから入いち来に、アカインクーんか
い見みしたくとう、ありが弦ことあていてい、テンテンし、
三味線さんしんならい始はじみやーに、うりから沖縄おきなぬ歌、三味線
や広ひろまたんり。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第二班 〈富村朝夫、知花春美、島袋千代、手登根政子、石垣みづえ〉

この三味線は、どこから来たかといえば、また、こ
の人（アカヌクー）の叔父さんとかいう人が、勝連に
おられたそうだ。このアカヌクーという人の叔父さん
は、支那と貿易をしていたそうで、これ（三味線）を
何とか家に持つて帰つて、使えないものかと。それで
沖縄の三味線は、支那から入つてきて、アカインクー
に見せたら、彼が調弦してテンテンと弾いて、三味線
を習い始めて、それから沖縄の歌と三味線は広まつた
ということである。

注①

伝説上的人物、赤犬子の字を当てる。母は読谷村楚辺部落の屋嘉（屋号）のチルーで、恋人と身ごもつたので、部落民から愛犬の赤犬との子供であると言われ、村にいたたまれず津堅島で、赤犬子を出産したと言われている。赤犬子に関する伝説は多い。

楚辺部落では、中国に使者としておもむき五穀を持ち帰つた恩人としてあがめている。

注②

旧楚辺部落内で、現在は米軍用地になつてゐる。鐘乳洞内にある水脈で、現在でも水量は豊富で農業用水として使われてゐる。このクラガーは、他のウツカー、カビギンガーとともに、一月の初ウグワンに拌まれてゐる。

注③

楚辺部落の屋号で、現在の戸主は安里善昌氏。また、チラーの恋人、大屋のカマーの子孫も現在あり、戸主は上地鎌吉氏である。

注④

楚辺アカヌク原の赤犬子宮に一九五六年に野村流音楽保存会によつて建立された石碑。碑文は、

「歌と三味線の むかしはじまりや

犬子称阿がれ乃 カミの美作」と、記されている。

注⑤ 方言ではサンシン（三線）と呼ぶ。蛇皮線とは言わない。三

味線は十五世紀の初め頃に中国から沖縄に伝わり、それが室
町時代末期に日本に渡った。皮は南方の錦蛇の皮である。



写真(7) 赤犬子歌碑



写真(8) 赤犬子宮

78 察度と王の話

話者 松田栄清（明治二八年二月一〇日生）

翻字 知花春美

銘 荏子んでいぬ伝え話ねー、あぬ、浦添謝名ぬ生ま
りでいちょーるばーてー、大謝名よー。
くぬ人ん、クンチューンかいちながりやーに、妻な

銘 荏子と言う伝え話には、あの、浦添謝名の生まれ
だと言われている訳だ。大謝名（地名）のね。

この人も貧乏人の家庭でどん底な生活をしていたの

やーん居らん、あぬ、うまー、真志喜大川注③るすがやー、
大川注④、うまんかい山羊草刈りが行ぢよーたんでい。う
りから、なー、うぬ女おな着物木のき股またんかい下さぎでい、
うまうてい浴あみーるさぎーくとう、うぬ着物きものけー取とりや
ーに、隠かひみていよし、奥間おくま大親おおおや注⑤でいちやる人ひと。あん
さくとう、なー、女おな裸はだかなでー、まーからん歩あるからん
どうあぐとう、今度いんどお自分じぶん裸はだかなやーに、自分じぶんぬぼろ
着物きものお女めんかい着きしてい、「とー、あんしえー歩あるから
んくとう、今日きょう一いち夜や、あぬー、私達家わたくしんじ泊とまいみそ
ーれー」んち。

あんし、謝名じなぬ奥間おくまでいる人ひとぬ連つれおてい行ゆぢ、なー、
着物きものおねーんどうあくとう、帰かでー行ゆからん、うまう
てい夫婦ふぶ生活せいかつかいなたんでいる物語ものがたりやるばー。

今度いんどおなー、貧乏者ひんぱうしゃどうやくとう、赤あかちやのーでい
きたぐとう、今度いんどおうぬ子こぬ成長せいこうたくとう、なー、女おな
おくぬ生活せいかつそーねー、親おやんかいあおらりんりち、うれ
ー天あま女めりちよーしが、天女りーねー、昔むかぬ按司あんじぬ子こ
孫まごりるばーてー。ゆー、あぬ大新城おほしんじやチヨーギヌ注⑥ンでー、
一誠いっせい、黄金前加那志こがねまへかなしトト御天みつけんどうやみしえーる」んでい
ぬ言葉ごんばぬ出だじーせー)

で、妻になる人もいなかつた。あの、ここは、真志喜
大川注③というか、そこに山羊の草を刈りに行つていたそ
うだ。それから、或る女が、着物を木の枝にかけて、
大川で浴びてゐるので、その着物を取つて隠してね、
奥間おくま大親おおおや注⑤という人がね。すると、もう、女は裸になつ
てはどこへも行けないので、今度は、自分が裸になつ
て、自分のぼろの着物は女に着せて、「もう、こんな
では歩けないので、今日一晩は私達の家で泊まつて下
さい」と言つた。

そして、謝名の奥間おくまという人が連れて行つた。もう
着物がないので帰ることが出来ずに、ここで夫婦にな
つて生活せいかつをしたという物語ものがたりなんだがね。

それがね、貧乏者ひんぱうしゃなので、赤ちゃんが生まれてその
子が成長したとき、女が思うには、こんな生活をして
いたら、親に追い打ちされるのではと思つた。これは
天女あまめといつてゐるが、天女というのは、昔の按司の
子孫まごなんだがね。よく、あの大新城芝居しばゐ(喜劇)で、
「誠に、黄金加那志こがねまへかなしトト御天みつけんどうやみしえーる」んでい
ぬ言葉ごんばぬ出だじーせー)

あんさーに、首里ぬ大名達あ子供達がるうまんかい
まーんかいや、良い水ぬあんち、えーりんたつふあふ
りてい、ありから来るばーるやさに。

あんしなー、うぬ着物おうぬ子守歌ぬ、稻倉ぬ下ん
かい隠みらつとーし、子守人ぬ、うぬ話なき、聞かぢやん
でい。あんさくとう、子んなー、二二ちん、三三ちんない
るさのーあらに。あんし、うぬ着物、よーやく、うぬ
子守人から聞ちやーに、探し出じやち、着ち、しぐ女めの
お、飛び立つちやんでいるばーてー、首里んかい。

あんさくとう、うぬ子あなー、いちぐ、一日、十五
日ねー、海んかい降りてい、魚釣つちやい、また、満
潮ぬ場合や、山から薪小拾つてい、日々ぬ生活えーし
ちよーたんでいるばーやるばーてー。あんさーに、う
ぬ浜はまあくぬうりが魚釣つちえーる所お宇地泊ぬ、何で
いぬ岩いわ小でいる言いたらー、今んうぬ岩やあんでいる
ばーてー、うりが海んじ魚釣つちえーる岩いわ小ぬ。

うりから、ふるふるなたくとう、また、勝連、与那
城方面じえー、〈あんかいや、東浜崎でい言いたん
でい。昔、昔、大昔えー〉あんさーに、あまんかい福
人ぬうてい。

そうだから、首里の大名達の子供達が、どこそこには、良い水があるといって、おそらく言いふらして、そこから来たんでしようね。

それから、この着物は、その子守歌に、稻倉の下に隠されていることを、子守人がこの話を聞かせたそうだ。すると、子供も、もう二歳、三歳にもなつていたんだろうね。それで、この着物のことを、ようやく子守人から聞いて探し出して着けて、すぐに女は飛び立つたようだ、首里にね。

そうすると、その子は、もういつも、一日と十五日には、海に行つて魚を釣つたり、また、満潮の時には、山から薪を拾つて来て、日々の生活をしていたようだがね。それから、その子が魚釣りをするこの浜は宇地泊の何でいう岩だつたのか、今もこの岩はあるというのだが、その子が海で魚を釣つた岩がね。

そうして、(その子が)成長した時、また、勝連や与那城方面で(そこの半島のことを東浜崎と言つたようだ。昔、昔の大昔はね)それで、そこには福人がい

なー、あまんじ、魚釣やーし、また、満潮ないねー、
山から薪ひのき小とうてい、あまんじん同ひとぬ生活せいかつやたんでい。
うぬ天女てんじょとう産うぶちえしる奥間大親おくまほおぬ長男おさこえー。さくと
う、ちょーどう、うぬ、うまんかい福人ふくじん親雲上くもじょうち、な
ー、うぬ人ひとぬ、あんし、婿むすめ調ひびすんち、婿むすめ調ひびすんで
いちさくとう、うまんかい、良いお嬢お嬢さんぬ生うぶまりて
い、あんし、なー、首里那霸しゅりなはからん、身分みぶんぬあぬ人達ひとたち
が、うぬ娘むすめ、いーりわるやるんち来くわらくとー。

また、くぬ奥間大親おくまほおぬ産うぶちえしる子こあ、やな赤毛あかげが
だー、いちぐ海うみんじ日焼ひやけどうそくとー、あんし、
うりんなー、「婿むすめ調ひびぬあついから、んだまじ私わたくしにん
行ゆぢ見みだ」んち。丈たけ高く生うぶまりとーーるばーてー。
だー、天女てんじょでいちゃんる子こるやぐどう。あんさくとー、
うまうとーてい、男親おとこおやじのー、天あまが一腹ひとはらんち、天あまぬ下さう
とーてい、私わたくし、福持ふくつちよーしぇーうらん、裕福ゆふくぬ人ひと
おうらんでいぬ額がたはてーるばーてー。

もう、あそこでも、魚釣りして、満潮になると。山
から薪を拾つて、あそこでも同じ生活だつたそうだ。
この天女との間に生まれた奥間大親の長男はね。する
と、ちょうどここに、福人親雲上くもじょうという人がいた。こ
の人が、婿むすめ調べひらべをするといつて、婿むすめ探しひらめをするという
ことだつた。福人親雲上のところに、すばらしいお嬢お嬢さん
さんがいて、それで、首里、那霸なはからも、身分みぶんのある
人達ひとたちがその娘むすめをもらいに來た。
また、この奥間大親が産うぶんだ子は、変な赤毛あかげで、そ
れは、いつも海で日焼ひやけして、山を歩いたりするとき
も日に焼けるので。(色が黒かつた)そして、この人
も、「婿むすめ調べひらべがあるんだつたら、私もまず行つてみよ
う」と。その人は、天女の子なので身長みだりが高かつた。
それで、ここで男の親が思うには、天は一つの腹はらのご
とくで、天の下では、私のような福を持つている人は
いない。裕福な人は他にはいないという額がたをかけたそ
うだ。

また、うぬ娘むすめぬ、婿むすめ調ひびぬ時にてーる絵ゑや、う
れー、「富貴裕天ふくいゆてん^{注⑥}」でいち書かちさくとー、うぬ、富貴
裕天ゆてんでいる意味いみえー、ちゃんとーる意味いみやがやーで

また、この娘の婿むすめ調ひびの時にかけてある絵は、それ
に、「富貴裕天ふくいゆてん」と書いてあつた。この富貴裕天ふくいゆてんとい
う意味は、どういう意味だろうか。ストウク(潮徳

い。潮徳ぬ入りわる金儲きらりーるんでいる言い分や
るばーてー、うぬ潮徳でーせー。潮徳ぬ入らんあい
ねー、ヤミターレー當たていんーちやい、表、とうぬ
くふあさんでいるばーてー。

あんさくとう、私がー、くりがる本当でいる思とー
る。また親ぬ言いしん、「あんしえー潮徳ぬ入るんし
えー、働かんていん金儲きらりーみ」でいち、男ぬ親
あ言ちやくとう、「なるふどう、貴方が言みしえーし
ん最とうもやしが、私がー、潮徳ぬ入りわる金儲きら
りーるでい思とーびんでー」んでい言ちやくとう、「
えーあんやみ、とー、あんしえー、今日ぬ婿調びぬ結
果やー」んち。くれー、親ぬ言やぎーしん本当、子ぬ
言いしん本当やるばーてー。んちやうれー、優しい家
庭んかい生まりてい、今日、明日んかい金儲きらりー
るむのーあらん。働きわる金儲きらりーる。男ぬ親あ
「働く金儲きらりーる。潮徳ぬ入れー、ただうぬ金
まーからん来るむのーあらんどー」くりん、ごもつと
もの話。

また、子ぬ言しん、「あぬ、錢金でいしえー、天ぬ
まわりむんどうやる。潮徳ぬ入らん限れー、金儲きら

幸運)にめぐりあわないと金儲けは出来ないとい
う言い分である。この幸運というものはね、幸運に恵ま
れないと病気になつたり、周囲の人たちとも仲が悪く
なるそうだ。

だから、私は、これが本当だと思つてゐる。また、
父親が言うには、「それでは、幸運の来るのを待つて
働かなくとも金儲けができるか」と父親が言うと、「
なるほど、貴方がおつしやるのも最もだが、私は、幸
運の訪れによつて金儲けは出来ると思つております」
と子は言つた。「ああそうか、そうと思うのなら、今
日の婿調べの結果でね」と親は言つた。これは、親の
言つてることも本当、子の言うのも本当なんだ。勿論、
優しい家庭に生まれたからとて、今日、明日にでも金
儲けが出来るわけでもないし。働いてこそ金儲けは出
来る。男の親は、「働いてこそ金は儲かる。幸運があ
れば、ただその金は、どこからでも来るということでは
はないんだよ」これもごもつとも。

また、子供が言うことも、あのお金というのは、世
のまわりものである。幸運に恵まれない限り、金儲け

らんでいち思とーびん。」んちや、金持人達が、いち
ぐ、病院、行ち戻やーし、金ちやつさ使たんでいち。
うぬ、貧乏者ぬ健康新者達や、金ねーんていん暮
ちあんそーしえーやー、くりかーやていん今ん。あん
すぐとう、あれー、親ぬ言やぎーしんむつとも、子ぬ
言やぎーしんむつともやるばーてー。なー、二ち理
届えーかなているうぐとう。

うりからなー、うりん好かん、くりん好かんでいち、
後おくぬ奥間大親ぬ長男ぬ、うぬ、日ぬ暮ししえーち
ゆる、日雇小さーしえーし、うぬ娘あ選どーるばーて
ー。いやーぐとーるむん、いやーや、あんしえー、
女お、樂ん裕福んすんでいちる、婿、子選ぶんでいる
する、いやーや、あんねーぬ日雇小さー妻どうないる
ばーい。いやーや、家ねー置かん、今日から家出じて
い行き。」んち、親加那志やさくんじてい。
うりから、夫婦、「とーあんしえー、いやーや、う
りが妻なでい行けー。」んち。家から二人出じたくと
う、うりからなー、うまー、食物から何からくいーか
らまんでいるうぐとう、女ぬ親あ肝ん忍ばらん、うり
から、米小ん包でい持つち、うつたー食くち、なー。

はできないと思つております。なるほど、金持ちが
いつも病院へ行つたりきたりして、金をいくら使つた、
どれだけ使つたと嘆くことがある。この貧乏者で健康
体の者達は、金はなくともどうにか暮らしているでし
ょう。ここら辺で今でも。だから、あのことは、親の
言つてることももつとも、子が言つてることも最もだ
ね。だから、二つとも理屈に叶つているんだから。

そんなこんなで、（その娘は）あれも嫌い、これも
嫌いと言い、しまいには、この奥間大親の長男で、そ
の日暮らしの日雇い人夫をしていく男を、その娘が選
んだわけだ。「お前みたいな奴は、お前は、何と言つ
ても女は、楽で裕福になるために婿を選ぶというのに
お前は、そんな日雇い人夫の妻になるのか。お前は、
家には置かない。今日から家を出て行け。」と、父上は
怒つて言つた。

それから、両親は、「それじゃお前は彼の妻になつ
て行け」と言われて、家から二人して出て行つた。だ
がね、親元では、食物やら、何でもかんでも沢山ある
ので、母親は、忍び難く、そこを訪ねて、米を包んで
持つて行つた。娘夫婦の食糧として。（それに）お産

お産さんぬんそーんでいるばーてー。うりから、黄金こがね、昔むかし
ぬ黄金こがね一握いっこう持もつち、行ゆぢさくとう、「なー、あんし
ちやー元氣げんきそーみ」。んちやくとう、「ちやー元氣げんきそー
しえーお母おはな」。んち。なー、親子おやこうまうてい涙流なながながちよー_ー
てい物語ものがたりいさくとう。「えーお母おはな、何が、貴女あなたが夫おとこ
あらん、私夫わたくしどうやる、私達わたくしあ心配こころぶまでーしみそーん
なけー」。んち、くぬ娘むすめんかい言いらつたんでいるばーてー
ー。「えーあんすみ、とーあんしえー、貴方達あなたなー、
夫婦ふうふましやらー、夫婦ふうふ、元氣げんきに暮くらしょー」。んち。
今度こんどおや自分じぶんぬ家いえんかい帰かてい行ゆだ。

「えー、くつさきー、くぬアヤーや、御米ごまいん持もつち
ちえーみしえーんでー」。でいち誇ほたくとう、また、う
ぬ黄金こがね、「ぬう、かんねーる石いし小こ、うりまでいん、枠ま
ぬ口くち満まつちーんでー。んちや、金こ、儲たまきる人ひとお変かわとー
さ。ぬー、あんねーぬ石いし小こぬーすが」。んち、今度こんどおく
ぬ夫おとこぬうぬ石いし小こ取とてい捨すていらんでいさくとう、「えー
一貴男いっきのすけおうれー何なにでい思おもとーみしえーが。うれー、
黄金こがねどうやんどーやー。うつびあいんしえー、二人ふた人ひと
が生いちみとうとうーみ、くつびしえー暮くらさりーんどー
ーやー」。んちやくとう。「はーとーやー、あんねーる

もしているというので。それから、黄金も昔の黄金を
一握持ひとこうつて行くと、「どう? ずっと元氣でいるか」。
親子はここで涙を流して語り合つた。「ねえお母おはなさん
と言うと、「ずっと元氣でいるよお母おはなさん」と言い、
親子はここで涙を流して語り合つた。「ねえお母おはなさん
どうして貴女の夫ではなく、私の夫なのに、私達の心
配までしないで下さい」と、その娘に言われたらしい。
「ああそうか、そういうことなら、貴女達も夫婦だけ
でいいなら、夫婦で元氣に暮らしなさい」と言つた。
そして、親は自分の家に帰つて行つた。

石小ぬ一すが、私が魚釣ぎ一ぬ所おくりが黄金んるんやれー全部黄金どうやんどーやー』んち。『冗談しみそーんなけー』んち。『でーーあんしぇー、論より証拠、行ぢ見だ』んち、夫婦行ぢ…。

うりが坐ちよーてい魚釣ちえーる所お、全部、黄金ぬ上んかい坐ちよーてい魚釣つちやんでいるばーでー。あんし、うりから、うぬ黄金あさい出じやちつち、家んかい貯うえーていさくとう。今度おうぬ金さーに、
（うにんまでー、あぬー、くぬヒーラとうか、鍬とうかー、沖繩やねーらん、あんし、うりーないねーティビクんち、山から木切つち来に、うりんかい立派ん力ナちち、うりさーにカンド植たい、芋掘たいすたんでいるばーでー）かんしぇー、農業ならんむんでいち、
うりから、うりが、うぬ黄金さーに、内地から鉄、鉄物々交換し取つてい来に、沖繩ぬ、鍬、ヒーラー集みたい、また、あぬ、イーザイぬ刃作たいぬーさい。うぬ人ぬ沖繩や農業すすみたんでいるばーでー。

あんさーに、（だー、何王ぬ後やたがやー）王立ていていなたぐどう、うぬ人お察度王んでい。あんし、察度王ぬ世から、沖繩ぬ農業や、鍬、ヒーラ、集みてい始

る所は、これが黄金なら、そこは全部、黄金だな」と言つた。『冗談はしないで下さい』といふと、「じゃあ、論より証拠、行つてみよう』と言つて夫婦は行つてみた。

この人が坐つて魚を釣つた所は、全部黄金で、その上に坐つて魚を釣つたというわけだ。そして、それから、その黄金を掘り出してきて、家に貯わえた。今度は、このお金で、（その頃までは、このヘラ（農具）とか、鍬などは、沖繩にはなかつた。それで、雨が降ると、ティビクと言つて、山から木を切つて来て、それに立派にカソナをかけ、これでかずらを植えたり、芋掘りに使つていたそうだ）こんなふうでは、農業はできないと、それからこの人が、この黄金で、内地に行き、鉄と物々交換して持つて来て、沖繩の鍬、ヘラを集めたり、また、あのイーザイ（スキ）の刃を作なるなどして…。この人が沖繩の農業を進歩させたと
いうわけだ。

そうして、（えー、何という王の後だつたかな）王を立てることになつた。この人は、察度王という。察度王の時代から、沖繩の農業は、鍬やヘラを集めて始

またんでいぬ物語やるばーでー。

まつたという物語なんだよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第四班 〈天久節子、金城清美〉

注① 人名、銘苅子は真和志間切の安謝村に住む若者で、畑の帰り川へ行くとそこで天女に会ったという伝説がある。この物語りでは、奥間大屋を銘苅子と取り違えている。

注② 昔、真志喜大川を中心とする一帯は浦添の一部であり、謝名とよばれ、現在の大謝名、真志喜、大山までを指す地域であった。

謝名の地名が大謝名になつた。

注③ 宜野湾市真志喜の森の中にある川名。

注④ 察度王（一二三〇—一二九五）の父親のこと、『中山世譜』によれば、奥間大親は農を以て業としたが家が貧乏で妻をめどること

ことが出来ず独身であつた。ある日畑の帰り森川に立寄るとそこでひとりの美しい女に出会う、そこからこの物語が始まる。

注⑤ 大新城狂言とは、大新城英雄伝の芝居という意味で話者は語っている。大新城親方（毛童吟、新城親方安基）は尚元王（一五五六年—一五七三年在位）の部将で、王位継承問題で、王を助けた人物。

注⑥ 察度王統第一代の王にして、神号は大眞物と云い浦添

間切謝名村の奥間大親の子である。察度は初めて中國と相通じた王である。彼は聰明叡知ではあつたが、成長の後農事にはげまず諸国を遊歴した。勝連接司の姫をめとり、黄金を得て日本本土の商人の鉄塊を買取り、百姓に与えて農具をつくらしめた。人民は彼を父母のようだとあおいだ。



写真(9) 森川

翻字 神谷初子

尚巴志王注①んでいねー、沖縄や、あぬー、今帰仁へ
北山注②中山、南山んち。王ぬ各郡ぬんかい一ちなーあ
たんでいるばーてー。

うりから、くぬ、うんにんぬ年頭ねんとうんでいねー、唐ん
かい行ちゅたんでいよー、支那しなんかい、あんさーい、
「沖縄うつびぐわぬ島んかい王しま三人なー置おきちえーなら
んぐとう、あぬー、一人んかいなさんなー」んでい言
らつたくとう。支那しなぬ皇帝こうていぬ。あんし、「はい」んち、
尚巴志しょぱしそんでいるむのーなかなか頭かぶおゆたさぬ、しぐ、
くぬ船ふねえ割わかりとーくとう今八重山いまやえやまんかい引ひち返かしよー
さーに、南山なんざんとうくぬ、今帰仁ききじんぬ按司あんじとー、しぐ沖縄
んかい引ひち返かち、はち来らんでい。

さくとう、尚巴志しょぱしそえまたん、あぬ、支那しなぬ皇帝こうていぬ前
んじ、「とーなー沖縄うつびぐわぬ王や、私わがるないる」んち、
「なー、二に人ひと方ほう決定けっていそーくとう、沖縄うつびぐわぬ王や私わにんかい
なちとうらし」んち、あんさーにあぬー「尚よー」んでい

尚巴志王じょぱしおうというものは（それは中山王なかやまおうだつた）、沖
縄には、今帰仁ききじん、北山きたやま、中山、南山なんざんがあつた。各
郡（國頭、中頭、島尻）に王が一人づついたそうだ。
それから、その頃の年頭ねんとう（挨拶あいさつ）といえば、唐とうに
行つていたそうだよ。支那しなにね、そしてその時に、「

沖縄というこんなに小さい島に、王が三人もいては困
るので、あのう、一人にしてくれないか」と言われた
支那しなの皇帝こうていから。それで、「はい」と答こたえた。（そこ
で）尚巴志しょぱしそというのはなかなか頭かぶが良いので、（悪知
恵わざを働はたらかせて）すぐ、この船は割わかれているから急いそいで
八重山やえやまに引き返かしなさいと言つたので、南山なんざんと今帰仁
の按司あんじはすぐに沖縄に引き返かして來たそうだ。

すると、尚巴志は再びあの支那の皇帝の前に行き、
「考かみえるに沖縄の王は私にしか出来ません」と言い、
「もう他の二に人ひと方ほう（南山、北山）は（納得なあつさせて）決
定したので、沖縄の王は私にさせて下さい」と言つた。

る字やあぬ支那ぬ皇帝ぬ御拝領やんでい。うぬ尚巴志ぬ字ぬ「尚」んでいる字や。

あんし、うにんから、南山ぬん、今帰仁ぬん、あんしぇ一合点の一あらん。うんな相談の一あらんたん。貴方やくぬ船え割りとーくとう、今船え八重山んかい引ち戻しよーさーに、しぐ支那んかい行ぢやーに、貴方勝手どうそーくとう、あんしぇーあらん、戦争すんち。うりが三山ぬんかいちえーるばーてー。あんさーに、南山のー、「あんしぇー何勝負すが」んちやくとう。尚巴志えまた頭おちちよーくとう、「でいー、多勢ぬ人數揃てーんだんくとう、何どうか二ヶ所かたじきーるたみに方法けーていんーだな」んでい言ちやくとう。「島尻えー馬国やくとう、でいー今度お勝負し、負けーしぇー、あぬー落ち、勝ちゆしんかい王なさ」んでいー。くれー南山ぬ按司ぬ威張るふーじてー。「いえーあんやみ！」なー、くまー、昔から中部お牛ぬる多さる。走馬んちえーあんしぇーうらんくとう、なー、馬勝負かんし、あぬー、うりさーに勝ち負けー決みーんちそーしが、「なあー、ちやーてーしむがやー」

それでの「尚」という字は支那の皇帝から恩賞として賜わつたものであるそうだ。この尚巴志の字の「尚」という文字は。

しかし、その時から南山も今帰仁もこんな（自分勝手）では合点がゆかない。そんな（一人だけが）相談ではなかつた。貴方はこの船は割れているから今すぐに八重山に引き戻るよう言いながらも、（自分は）すぐ支那の方へ（一人で）行き、自分勝手に（王を）決めたんだからそんなことは許せない、戦争するんだと。一人が三山に申し出たそうだ。それで、南山は「では、何を勝負するのか」と言つた。尚巴志は頭がきくので、「そうだね、こんなに大勢揃つたことがないでの、何とか二ヶ所（南山、北山）かたづけるために方法をえてみよう」と言つた。「島尻は馬国だから、どうだ！ 今度は、その勝負をして負ける者は（王位を）落し、勝つ者に王はさせよう」と、南山の按司が威張つたそうだ。「ああそういうことか！」と、（だが）中部は昔から牛の方が多くて走る馬という的是数少ないから、（もし）馬が勝負してそれで（王位）を決めるとなると（中山は）「もうどうすれば良いの

んち、考ていん考さん。あん島尻ぬうつきー走馬あうらんどあくとう。

うりから、くぬ、急ちゃんぬ考や、女おましんちやる考や、あぬ、うぬ尚巴志ぬウナジャラ、うぬ妻きぬ「ぬーがうり心配しんそーる、休みそーれー。十分眠じみそーれー、睡眠とうらんあれー、何んならんどー」んち、妻ぬ叱きとーるぐとーんてー。「あんしえーやー、あん言いんしえー、ちやーするばーが、あんしえー馬勝負し負きれー、南山ぬんかい沖縄王とうらりーすしが」でいやくとう、「何ん心配しんそトんなけー、私が勝ちゆる考すさ。」んち、なー、奥さのーまた張り切つとーるぐとーんてー。

あんさくとう、今度お、あぬー、馬勝負んでいちやくとう、「首里サンカー^{注④}雌馬所やくとう、サンカ雌馬御用しみそーり」。んち、なー馬勝負おいちぬ何日、あぬ、シチヌマガイとーい馬勝負しみていしむんちやくとうんち。サンカ雌馬んかい鞍うつち行ぢやくとう。ぬー馬あ後方から雌馬ぬ尻どう追ていさくとう、「ぬーがいやー馬勝負おあんしるやるい」。んちやくとう。「私むのー雄馬、貴方むのー雌馬なれー、雄馬ぬ先な

だろう」と考えても考え方には、（中部には）走れる馬がいなかつたから。それから、この急な時の考えは女の方が良いという考え方には、そのう、この尚巴志の伴侶で、妻が「どうしてそんなことで心配するんですか、お休み下さい。十分に睡眠をとらなければ何も出来ませんよ」と妻が叱つたそうだね、「そう言つたつて、いつたいどうすれば良いのだ。だつて馬勝負して負けることになるのだ」とれば南山に沖縄の王位は奪われることになるのだ」と言つた。「何んも心配しないで下さい。私が勝つようになるから」と、奥さんは張り切つていたそうだよ。

ところで、今度はその馬勝負だといつたので、「首里サンカーは雌馬が多い所だからサンカ雌馬で勝負させて下さい」と教えた。その馬勝負はいつの何日、あの、シチヌマガイ（地名）で馬勝負をさせても良いと許しが出た。（それで）サンカ雌馬に鞍を乗せて行った。（すると）何と、（相手の）馬は後方から雌馬の尻に追いて來た。（それで）「何んだね、君の馬勝負はこんなこといいのか」とやじつた。（すると）「私

「いんちえーねーんき。」んちやくとう、「ぬーが！ 雄馬
雄馬ぬ区別ぬあでいー。」んち、あんさーに二人しち公
儀んかい、うぬ尚巴志んかい負きていよー。南山ぬん。
あんし、うぬまま、まじ内乱の一一起くりたる筈やしが、
馬勝負さーに、んぬ勝負お止みたんでいばーてー。あ
んさーに、南山城趾ん馬勝負し負きたんでいー。

うりから、今帰仁城おなかなか落し難さぬ、だーあ
まんかいなー本部大原達、大宜味金城達んでいる
武士ぬ集ていどううくとう、あんさーに、あれーなが
つかいしやたんでいしが、あとー、尚巴志んかい負き
やーに、沖縄王や首里城んかい決まんでいるばーて
ー。今帰仁ぬん負きてい。さくとう、南山ぬん、今帰
仁ぬん、「かんねーる悪魔人ぬうらんどうあれー、自
分達ん今までー按司ぬ位んかい座てーしるやる。く
れーなー悪ぬ強さくとう、でい両方揃やーにくりが骨さ
しのー出じやち焼ち上ぎら。」んち。

うにんねー、〈あぬーガンでいしー貴方達や覚と
ーみ、戦前ぬ〉うぬガンのー、沖縄王ぬ死しねーうぬ

(南山)のものは雄馬で君(尚)のものが雌馬であれ
ば、(勿論)雄馬が先になることはあり得ない」とく
やしがつた。(そこで)「何だと！ 雌馬、雄馬の区別
があつたか」ということで二人して公儀の尚巴志に負
けてしまつた。そしてそのまま少しの内乱は起きた筈
だが、馬勝負で王位争いは止めたそうだ。それに南山
城趾も尚巴志王にぶち負けたそうだよ。

それから、今帰仁城はなかなか落し難く、(何故な
ら)そこには本部大原達や大宜味金城という武士が集
まつてゐるから。そして、あれはがつかりしたためであつた
ようですが、しまいには尚巴志に負けてしまつて沖縄王
は首里城に決まつたそうだね、(南山)今帰仁も負け
てしまつて。すると、南山も今帰仁も、「こんな奴、
悪魔みたいな人がいなければ、自分達も今までは按司
の位に座つておれたのに。この人(尚巴志)は悪が強
いから、どうだ、両方揃つてこの尚巴志の遺骨を(墓
から)出して焼きつくしてしまいたいが」と話し合つ
た。

その後は、〈あのう、龜という物を貴方達は覚えて
いるかね、戦前のことだが〉その龜には、沖縄王が死

ガンぬんかいしぐうぬままやたんでい。うち折てい、

あんさーに、すんち出じやち、ちつち碎ちゅんでいさ

くとう。

うりから平田、屋比久注⑦んでいしえーくぬ尚巴志ぬ甥

子やるばしてー。平田子、屋比久子や。あんさーに、
くりが親んあぬー王やしが、弱体なやーに、あぬー国
え治ちゅーさん、うぬ人おうぬ尚巴志ぬ抑圧きやーに、
自分ぬ王なたんでいる物語やるばしてー。
うんぐとーる弱体のー国え治みゆーさんち。

あんさくとう、なー今度お、あんそーらー火事、今
度とお骨すんち出じやさーにむる焼ち上あげていちつち碎
きんでいる吟味ひんみなでいさくとう。くぬ平田、屋比久
でいしえー甥子ぬちやーどうやくとう、「まさか叔父おじ
ていらむん、フニシンぬんうれー焼やち上あぎらすみ」ん
ち、あまから、首里ぬお墓からー、うんちけーさーに、
くまんかい読谷山んかい逃はなぎてい来きんでい。あんしう
れー、昼ひるなーや歩あるからん。夜よる歩あるかりーくとうやー。
くぬ、浦添ユードウ注⑧りよー。あれー今あユードウリ、
ユードウリちよーしが、「ヨートリ」んでい。なー、
くぬ平田、屋比久ぬ物語ぬ、「自分達親達までー、

ぬとすぐそのまま龕がんに納めめたそうだ。

(体を)折り曲げて、そして(龕から)引っぱり出し、
て粉々に碎こうとした。

それから、平田、屋比久というのはこの尚巴志の甥
になるそうだ。平田子と屋比久子はそれでこの人の親
も王だつたが、弱体のために國を治めることが出来な
かつたので、その人をこの尚巴志が抑圧あつあつして自分が王
になつたという物語である。こんな弱体では國を治め
るのは不可能ふかうだということだつた。

抑圧された腹はらいせに、今度は、火事を出して遺骨いこを
墓から出して全部焼き上げて粉々に碎いてしまえとい
う吟味ひんみになつてしまつた。(しかし)この平田、屋比
久は(尚巴志の)甥になるので、「まさか叔父おじであ
りながら(みすみす)フニシン(骨神)を焼き上げさ
せてはならぬ」と考え、首里のお墓から(骨を)運ん
でここ読谷村に逃げて來たそうだ。だからこの人達は
昼間ひるは歩けず、夜しか歩けなかつたそうだ。この浦添
ユードレの話はなしだがね。あれは今はユードレ、ユードレ
と言つてゐるが、(実際は)「ユートリ」というそ
だ。それがこの平田、屋比久の物語には、「自分達の

沖縄王おきなわおうなんなたしがやー。世よや祉めぐみてい、またん自分世どきな
いるばーんあいがすらやー』んち。うぬ浦添ユードウ
りえ、朝あさあまから出でじて い来きに、昼ひおうまうて い隠かく
つくいさくとう、うぬ物語ものがたりさーに浦添ユードウりえ、

「ユードレ」んち付きたんでい。

あんさーに、また、夜よぬ暮くいたくとう、うぬ御ご轎こし注(9)

かたみて い読谷山よみだにやま、うまーサシジヤーぬ森もり。あれー、
佐敷さしきぬ森もりんで い言いちよーしがよー。やはりくぬ人ひとおあ
ぬ、佐敷大主さしきだいしゆ注(10)長男ながむすこどうやくとう、あんさーに、うま
ん井戸いのどん佐敷さしきんち付つけきらつとーい、うぬ森もりん佐敷さしきぬ森もり
んち付つけきらつとーしが、うまんかい今いまあくぬ尚巴志じょうはし遺骨いこつお読よみ
らつていそーしが。あんさーにくぬ尚巴志じょうはしぬ遺骨いこつお読よみ
谷山だにやまんかい行いぢよーんでいくとう、「でーー、行いぢフ
ニシンの集あつみてい焼やち上あげて い来き」んち、またうまん
かい来きさくとう。

なー、平田ひらた、屋比久やびくんでいねー、沖縄おきなわぬ武勇ぶよん頑丈がんじやう
さい、力ちんあい、知惠ちえんある人ひとやたんでい。あんさー
に今いまぬあぬー、佐敷井戸さしきいのどぬ佐敷井戸さしきいのどぬ下したんかい大田おおたぶ
つくわぬあんよー、うまうて い牛飼うしほてい使つかいぎーたん
でい。くぬ平田子ひらたこや、「いえー二歳ふたと！」んちやくとう

親の時代までは沖縄の王にもなつたがね。世の中なかが静しづか
かになつて再び自分達の時代が来る日もあるだろうか。と嘆なげく。この浦添ユードレは、朝は向むかう（首里）から
出て来て、昼はここで隠れたという物語からして浦添
ユードレは「ようどれ」と付けられたそうだ。

昼間は隠れてまた夜になると、御ご轎こしをかつ
いで読谷村のサシジヤーの森（現伊良皆）にやつて來
た。ここは佐敷の森とも呼んでいるがね。やはりこの
人（尚巴志）は佐敷大主の長男だから。それでその井
戸も佐敷井戸と名付けられ、その森も佐敷の森と名付
けられているが、今はそこに尚巴志は祀まつられている。
そのため（首里では）この尚巴志の遺骨は読谷山に運
ばれているそうだから、「どうだ、そこへ行つて（彼
の）フニシンを集めて焼き上げて來ようじやないか」
とここまで來たそうだ。

次に、平田、屋比久といえば、沖縄の武勇も頑丈だ
し、腕力もあり知恵もある人ひとだつたそうだ。そこで、
今いまの佐敷井戸の下の方に大きな田んぼがあるがね。そ
こで牛を飼つて使つていたそうだ。（そして）この平
田子に、（役人が）「おい青年よ！」と呼ばれて、「

「うー」んでい、なー公儀事なでい、うぬ平田、屋比久殺しーがんちる来くとう、「くまんかい、平田、屋比久んでいる人ぬ百姓なでい来んでいしが分らに。」んちやくとう、「何が何やいびーが」ちやくとう、「平田屋比久んでいしえーなー、うち首ぬ罰、殺ち来んちやしが、なんとうしん探ゆーさんさー」んちやくとう。牛使いぎーしる人る平田百姓やしが。

「あーとー、平田、屋比久んでいねー、貴殿なーうつさしえーならんでー」んでいいちゅくとう、「ぬーが！」んでい、「私がんちよーん、あんしえー、牛んかんし、田から持上てい出じやしるするむんぬ、ましてうれーふんとーぬ平田、屋比久おとうゆーさん」んでい言ちやくとう、「えー、あんやんなー」んち、「でいーなー平田、屋比久おうつちきてい来びたん」ち行ぢふいるー申上らんち、あんさーに公儀んかい報告うんぬきたくとう、くぬ平田、屋比久おなー読谷山人なたんでいるばーでー。なー向かい士ぬ籍えねーらん。あんさーに伊良皆んかい平田子んちあしが、今ぬ祀らつとーるサシジヤーぬむんてー。うまんかい、尚

はい」と答えた。(すると)もう公儀の命令でこの平田、屋比久を殺しにと来たんだが、「ここに平田、屋比久という人が百姓になつて来てているというが知らなかいか」というと、「どうして何があつたのですか」と聞いた。「平田、屋比久というのは死刑の罰で殺して来るよう言われたが、どうして探しれないんだ」と言った。(すると田圃で)牛を使つている者が百姓に扮した平田であるが。

「ああ、いけませんよ、平田、屋比久のような人は貴方たちだけでは無理だね」と言うと、「何だと！」と、(平田は)「私でさえもこうして牛を田んぼから持ち上げて(外へ)出せるんだから。ましてそれは本当の平田、屋比久だと(もつと力がある)貴方たちそれだけでは平田、屋比久には勝てないね」と言うと、「えつそんなに強いか」と(役人は)「ではもう、(諦めて)平田、屋比久は殺して来ました」と公儀へ行き報告を申し上げよう」ということで公儀に(嘘の)報告をしたそうだ。(その後)この平田子、屋比久子は読谷山の人になつたそうだよ。もうむこうには士族としての籍はなくなつて、そして伊良皆に平田

巴志から尚忠／なー一人や誰やたがやー／三神祀らつ
とーしがあん。／一人や思出じやしゆーさんさー／三
人うまー祀らつとーしがよー。

あんさい、うぬ御元祖お伊良皆ぬ百姓なやーに、
伊良皆ぬニツチユぬ今あ御崇みそーしがよー。平田、
屋比久んでいる人お、沖縄ぬ大武士やたんでいる物語。
尚巴志ぬ伝え話。

子というのがあるが、今のサシージャーに祀られてい
るのがそうである。そこには尚巴志、尚忠／もう一人
は誰だつたかな／三体の神が祀つてある。／一人は思
い出せないね／三人がそこに祀られているがね。
それで、（三人の）この元祖は伊良皆の百姓になつ
てしまつたので、伊良皆の根人（屋号）という所で崇
められているそうだよ。平田、屋比久という人は沖縄
の大武士だつたという物語。（これは）尚巴志の伝え
話（ですね）

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第二班（富村朝夫、知花春美、島袋千代、手登根政子、石垣みづえ）

注①
160頁注②参照。

注②

十四世紀から十五世紀にかけて、沖縄本島は北山、中山、南山の三つに分かれて統治された。北山は石川と仲泊を結ぶ地峡を境にした北の方で今帰仁城が居城であった。中山は首里（浦添、西原、南風平、真和志の一部）を中心とし、首里城が居城であった。南山は、沖縄本島の南部地方を統治し高嶺大里城が居城であった。

注③ 王妃

注④ 三個とは、現在の赤田町、崎山町、鳥掘町をさす。第一尚氏が首里に都した時に真先に目をつけたのが三個で彼らのすぐれた農具と稻作技術はたちまち三個を美田と化し（ヨリタチ、ブリグラ、マジンの実つた）繁栄した。

注⑤ 本部大主のこと。今帰仁城の重臣でその臣下の者達で、今帰仁世の主になろうと返逆をおこし、成功するが、仇敵をねらつていた忠臣たちにより討たれる。

注⑥ 死者を運ぶ朱塗りの籠、部落共に通常は龕屋に保管している。

注⑦ 尚巴志の一族で、平田子と屋比久氏らが首里天山の靈御殿にあつた一族の遺骨を運び出し、各地を点々として読谷村伊良皆の「サシジャ一」の近くに、尚家三王（尚巴志、尚忠、尚思達）の墓をつくつたといわれる。平田子の子孫が現在の伊良皆根人屋の

元祖で根人屋には尚巴志、平田子、屋比久の仏壇が祭られている。

注⑧ 159頁注①参照。

注⑨ 遺骨を納める木厨子

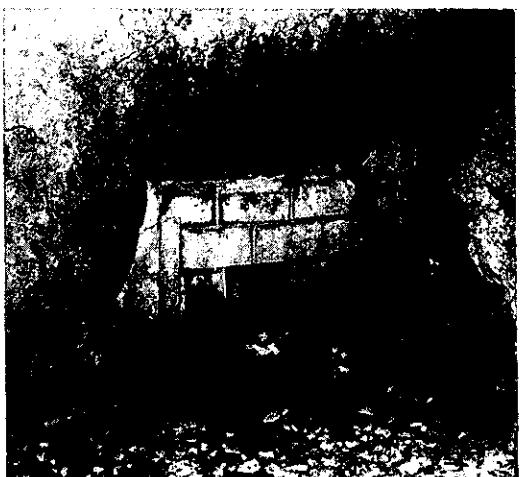
注⑩ 佐敷森の意。読谷村伊良皆の旧部落北方にある森。そこは石灰岩が露出し、尚巴志王の墓や、平田、屋比久等の古墓がある。そ

のふもとに、サシジャ一ガ一（佐敷井戸）がある。

注⑪ 尚思紹（一四〇五—一一）王で、佐敷接司をつとめた。中山武寧を滅して王位につく。第一尚氏の創始者。その長男は尚巴志のことである。



↑写真(10) 尚巴志の墓



↑写真(11) 平田子の墓



↑写真(12) 屋比久子の墓

80 阿麻和利の話

話者 吉田ツル (明治三八年十月十日生)

翻字 津波古米子

神谷初子

七つになつても立つことが出来ないからんやーい、川ぬ端んかいよーふー、捨てて一たんり。あんし、捨てても親としては気の毒だから、三度三度の飯を持つて行つてくれでよ。

したら、これは、とても頭はすばらしくてよ、まあ体が悪いんで足も立たないで、(今では、健康不良児と言ひますが)ただ七ぢなていん、ほーやーほーやーし、親ぬ捨ていたくとう、物持つち行ぢくいくいさくとう。

蜘蛛の巣を張つてあるのを見てですね。親に、「こんな網を作りたいから、糸でも何でも持つて來い。」と、言うたら、お母さんは……。また、そして暇はあるから、大きい網を作つてこれで魚を釣つたそうです。

して、だんだんだんだん大きくなりましたからね。今度、屋慶名に行つて魚を獲つて、そして部落の人には

七歳になつても(阿麻和利は)立つことが出来なかつたので、(親が)川端に捨てて(放つて)あつたそうだ。だけども、親としては氣の毒に思い、三度の食事は持つて行つてあげたようだ。

すると、阿麻和利は頭はすばらしく働いたが体が悪く足が立たなかつた。(今で言う健康不良児だね)(彼は)七歳になつても立てず、這つて歩いていた。親が捨てたが、食事はその都度持つて行つて食べさせていた。

(ある時)蜘蛛の巣が張つてあるのを見て、親に、「こんな網を作りたいから、糸でも何でも持つて來て。」と言うと、お母さんは、(持つて來てくれた)また、それに、暇もあるから、大きい網を作つて、これで魚を獲つたそうです。

そして(彼は)だんだん大きくなり丈夫になつた。(それで)今度は、屋慶名に行つて(作った網で)魚

あげたから、「あなたの恩はどうして報いるねー」と言つたから、「私がいざという時にねー、あのー、男の人は出て来い」と言つたからね。やっぱし勝連城趾（注）^{（2）}は落したと言つております。

頭は良いから、欲は深くて、今度は、首里の王様が、これはもう、隅に置けない人だから、自分の娘を百十踏揚（注）^{（3）}をこれにくれたら、あの首里の中山には弓は引かないでしようと言つてやつたそうです。したらねー、その百十踏揚は必ず何かがある。隅に置けないもんだからと、首里城から「ヤカー」と言つてですね、子守り、また、乳母（注）^{（4）}と言つてですね、お乳をあげた人。また、あのー、今のお手伝いさん、三名向うから結婚にやつたそうです。あの、お洗濯も出来ないから、お洗濯したりする人をつけた。ヤカーというのは鬼大城（注）^{（5）}、一番大将（注）^{（6）}。

だんだん様子が違つてですね。だんだんだんだん、このアマンジヤナーが変だつたので、床下に隠れたそうです。この鬼大城は、で、床下に寝たら、もう、あの、自分が気に入つたあれを集めて、三名ぐらい集め

を獲り、そこの部落の人達にあげると、「あなたの恩に何で報いましょうか」と村人が言うと、「私にいざということがある時に男の人は出て来て欲しい」と言つた。（後に阿麻和利は）やはり、狙つていた勝連城を陥落（注）^{（7）}したと言つております。

（阿麻和利は）頭はよかつたが欲が深くて、今度は首里（地名）の王様から隅に置けない人だと目をつけられた。（それで）自分の娘の百十踏揚を嫁にやれば、首里の中山に弓を引くことはないだろうと娘を（彼に）嫁（注）^{（8）}させた。娘に必ず何かが起こりそうな気がして（王は）隅に置けないことを知つて、首里城から、ヤカーという子守り役と乳母をつけ、それに今までいうお手伝いと三名つけて（娘の）結婚の時に送つたそうです。（それは）娘がお洗濯ができないという理由で洗濯をしたり、ヤカー（お側付）は鬼大城（注）^{（9）}がした。（彼は）一番大将だつた。

（結婚後）阿麻和利はだんだん様子が変わつていつた。（それに気付いた）鬼大城は、床下に隠れて寝泊りして、（阿麻和利の）様子を探つた。すると、もう自分が気に入つた役人たちを三名ぐらい集めて、あの

て、あの首里城を攻める話していたそうです。それを聞いて、今度は、「貴女は首里に帰りましょう」と言つたら、百十踏揚に。いつたん百姓の嫁になつてもね、いつたん嫁いでからは、「私はもう、アマンジヤナーの妻だから、あの御城には帰りません」と言つたそうです。

したら、「その阿麻和利は、まずこれは、あなたの親元の首里の城に必ず弓を引くから、私がおんぶするから逃げなさい」と言つてね、聞かなかつたつて。今度はその鬼大城が、「じゃ私は先になつておくから」と言つて歩いて行きますでしよう。三日で歩いて六日でこつちへ戻つて来て、したら、今度は、その鬼大城がそんな警戒をしなさいと言つたので、今度はほんとに首里城からやつて来たんですよ。鬼大城は、百十踏揚をおんぶして逃げたと言つておりましたよ。逃げながらもね。こんなでつかい石をね、投げてですね敵の兵隊を殺したと言つておりましたよ。そんなに力が強かつたつて。

どうして阿麻和利もこんなに頭の良い、力の強い私に、自分の妻の方について来ているのさーねーと、不ふ

首里城を攻める話をしていたそうです。それを聞いて（鬼大城は）百十踏揚に、「貴女は首里に帰つた方が良い」と言うと、（しかし）「いつたん嫁いでからは、百姓の嫁であつてもよい。私はアマンジヤナー（阿麻和利）の妻だから、あの城には帰りません」と言つた。だけどね、「この阿麻和利は、（きっと）貴女の親元の首里城に必ず弓を引くから、（今のうちに）私が鬼大城）が背負つてあげるから逃げなさい」と言つても、（百十踏揚は）聞かなかつた。今度はこの鬼大城が、「じゃ私は先になつて行くから」と歩いて行つたんでしょうね、（首里まで）歩いて二日かかり、六日で勝連に戻つて來た。すると今度は、この鬼大城がそんな（攻められる）警戒をするように言つていたが、それが事実となつて首里から攻めて來たそ�だよ。それで鬼大城は、百十踏揚を背負つて逃げたといわれている。逃げながらも、大きな石を投げて敵の兵隊を殺すほどに（鬼大城は）力が強かつたそうだ。

阿麻和利も、どうしてこんなに頭が良く、力のある私なのに、自分の妻に（鬼大城が）ついて來たのだろう

思議だつたつて。だから、お話しも、妻にも話さない
ようにしてね、こつそり、いつでも妻が寝た時分に、
三名集まつてやつたと言つておりますよ。

うと、不思議がつていたらしい。だから、妻にも（阿
麻和利は）あまり話さないようにしていた。いつでも
妻が寝た時分に、こつそり三名集まつて話していましたそ
うだね。

（それから、阿麻和利が）首里城の旗を掲げてやつ
て来たので、護佐丸は（それが）親の王様の旗印であ
ることを知り、手向うことはしなかつた。その旗印が
なければお前（阿麻和利）には負けないが、首里城の
旗印だから、親に弓を引くわけにはいかない。自分の
妻は向うの長女だから、親に弓引くことは出来ない。
妻は向うの長女だから、親に弓を引くとは出来ない。
私が切腹すると言つて戦わなかつた。妻子も殺してみ
んな死んでしまう。一番未つ子のカミジヤーを、護佐
丸が太刀を持つてこうして首を切ろうとした時は（ち
ょうど）九月の十三夜だった。

あの、につこり笑つたそうです。そして、護佐丸
もちよつとゆるめたそうです。で、乳母がおんぶして
逃げたそうです。（あれば敵討ちますでしょ）その
ヤカーハの家にですね、乳母と二人で成長させてから、
かたきを討つわけです。

（月の照る中で）につこり笑つたので、（いじらし
くて）護佐丸もちよつと（手を）ゆるめた、（その隙
に）乳母が（奪い取り）おんぶして逃げたそうです。
（彼が成長して敵討ちする）そのヤカーハの家にですね、
乳母と子守りが育て、その成長後に敵討ちをする。

注①（地名）、与那城村字屋慶名。別の物語では勝連城西側の泡瀬部落で語られている。

注②与勝半島の中央部勝連村南風原に在つて、中城湾をまたいで南の方には中城跡が望見される。首里城第一尚氏尚泰久（一四五四—一四六〇）時代、勝連按司阿麻和利の居城であつた。

一四六〇）時代、勝連按司阿麻和利の居城であつた。

注③第一尚氏尚泰久（一四五四—一四六〇）の王女である。彼女は父親の攻略の犠牲になつて勝連の阿麻和利に嫁いだが、阿麻和利の謀反を百十踏揚の御附として遣わされた大城がかぎつけたので、二人は城を脱し、首里城へ知らせに行く。泰久王は勝連城への討手の大将に大城を命じ、大城は阿麻和利を攻略し、武功によつて王女百十踏揚の婿になる。その後大城は殺され、彼女はそれからどう生きたか定かではないが墓は玉城村の富名腰にあり父泰久といつしょに葬られている。

注④・⑤184頁注②と195頁注③参照。

注⑥大城 賢雄、唐名を夏居数という。尚泰久王時代勝連の按司阿麻和利を首里王府軍の総大将として討代し勇名をとどろかせた。

その功績で、かつて尚泰久王の居城であった越來の按司に任せられた。しかし、一四五八年の金丸（尚円）のクーデターにより第一尚氏が滅亡する。知花城にこもつて、尚円軍と奮戦したが力尽きて自刃した。一八五三年子孫は知花城の自害した地に鬼大城の墓をつくつた。

注⑦北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳の頃まで体が弱く山に捨兎されてたが、山中で蜘蛛が巣をはるのを見て網をつくりだしたという。成長の後、勝連按司につかえていたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。それから海外貿易なども盛にしたとされるが護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越來按司（鬼大城）にひきいられた軍勢に亡ぼされてしまつた。

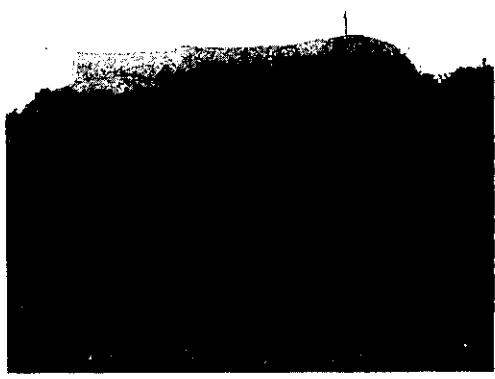
注⑧一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田城にいたが、後座喜味に城を築いて移つた。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行なつたといわれる。更にその娘が尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四五〇年に中城城を造築して移つた。その背景には尚泰久の婿勝連按司阿麻和利が強力な存在となってきたことがあつた。尚泰久五年（一四五八年）に護佐丸、阿麻和利事件が起つた。阿麻和利の讒

言により官軍が攻めて来た時、護佐丸は王軍に手向うのは義に背くとして夫人と二子を刺し自らも首をはねて死ぬ。幼児一人は乳母が抱いて逃げ国吉親雲真元にかくまわれて育てられる（豊見城盛親）

注⑨ 護佐丸の娘は尚泰久の妻である。ここでは親元の首里城の王である泰久王に手向うのは義にそむくとしてあきらめて、妻子とともに自殺するのである。

注⑩ 「自分の妻は向うの長女だから」というのは「自分（護佐丸）の娘は向うの妻だから」と取り違えている。

注⑪ 組踊「二童敵討」に登場する亀千代のこと。史実によれば護佐丸は阿麻和利に攻められて自決した際、妻子も自らの手にかけ道づれにしたが、末児のみは乳母が抱いて逃げることはできた。しかし、仇討のことはなかつた。しかし、ここでは組踊「二童敵討」の筋になつていて、「二童敵討」は玉城朝薰の作で組踊五組の一つである。一七一九年尚敬王の冊封使来琉の時、重陽の宴において初めて首里城に於て上演された。護佐丸が阿麻和利の讒に逢うて中城城で討死した時、その子鶴松と亀千代は母と共に城をのがれて、国吉のひやに庇護されていた。鶴松が十三、亀千代が十一の春、阿麻和利が春の野遊びを催しているとき二人は踊子になりすまして討ち取るという筋である。



写真(13) 勝連城跡



写真(14) 中城城跡

話者 松田栄清（明治二八年二月二〇日生）

翻字 知花春美

チヨーフグンぬ親方えきかた^{注①}でいちやる人お若さる時ねー、
腕力たるがきし。ありん、百姓ぬ子やたんでい。うり
から、うぬ人お金武ぬんかい生まりとーたんでいる事
やしが、山かい行きわん、腕力たるがきし、人お道具
しる薪ぬん取つてい来しが、うぬ人お枝枝んかちふいち
はん投投ぎてい、しぐ、根根ごーし、かんし家かい担たんみてい
來たんでいぬ話でー、チヨーフグン親方きなたあ。

あんし、うり産産ちやる女めぬ親おあ、夫おうらんよーぬ子
やたんでい。あんさーに、くれー、どーにかし、うぬ
子お堕胎たまわるやるんち。〈あぬ、シルカニんでいねー、
ちゃんぐどーるむんがやらー〉、あぬ、鉄てつ煎せんてい飲
だいしーるんしえー、うぬ子おあ、堕胎たまんちさるむのー
うぬ子おあ、全部ぜんぶ身体からや鉄てつなでいよー。チヨーフグン親方きなた
あ。あんさーに、なー、産婆さんばさん連れーちやくとう、
「ちやーしん、くれー、子こあゆーむちゅしが、親おあゆ
一やむたんでー、ちやーすが」でいちやくとう、「な

チヨーフグン親方きなたという人は若い時には、腕力だけ
をたよりにしていた。彼も百姓の子だつたそ�だ。そ
れから、この人は金武の生まれだつたという事だが、
山に行つても、腕力だけで仕事をした。他の人は、道
具ぐを使って薪ひきを取つて来るが、この人は、木の枝枝をか
き折つて投げ棄て、すぐ、根ねっこから引き抜いて、そ
れを家に担たんいで來たといふ話さ、チヨーフグン親方は。
そこで、この人を産んだ女の親には、夫はいなかつ
たそ�だ。それで、これはどうにかしてこの子を堕胎
しなければと……。〈あのう、シルカニ（白金）とは
どういうものだつたのだろうか〉、あのう、鉄てつを煎せん
て飲んだりすると、その子は流産りゅうさんできると思つたのに、
この子は、全身が鉄になつてね。チヨーフグン親方は。
それで、もう産婆さんを連れてきた。「どんなにして
も、これは、子どもは大丈夫だが、親はよくないね。
どうしようか」と言うと、「もう、どうなろうと、だ

「、ちやーさん、あんしえーうれー、なー身、身な
しるする」んでちやくとう、なー、女ぬ親あだーう
れー肉(お)あらん、鉄るやくとう、産しえーしゆーさん
よー。

あんさーに、うぬ人(お)身体から、何ーから全部鉄る
やくとう、成長ていから、刀し切つちん切らんたん
でいるばーてー。くまぬくつび開ちよーたんでいーの
ど口(くち)ぬ。

あんさーい、薩摩とう戦争(せんそう)注(2)ぬうくりーんからー、う
ぬ人(お)亡(お)らんなどーたんでいがらー。うぬ人(お)、殺ちや
る人(お)うらんしが、薩摩から、くれーなー、どーにか
し、殺ちとうつてい退らんあれー、沖縄や、自分達(おのなた)あ、
滅ぼしーゆーさんしがんでいる事んかいなてい。
うりから、うりが家来ぬ、なし、昔(むか)えくぬ、鬚中剃
んしちやいぬーさい、奥さんぬんかいしみたい、また、
大変、氣入りやるうぬ家来んかい、くぬ鬚中剃ぬん、
昔(むか)えしみーたんでい。

あんさくとう、うぬ家来んかい、あんし、うぬチヨ
ーフグン親方(お)でいる人(お)全部鉄どうやる、まーん開ち
間ねーんちさくとう「喉口(ののくち)ぬくつペー開ちよーびん」

つてこれは、親と子は別々にしなければ」と言つた。
もう、女の親は、これが肉体ではなく、鉄でできてい
るので、産むことができずには。

ところで、この人は、身体から何まで全部、鉄なの
で、成長してから、刀で切つても切れなかつたそうだ。
のど口が少し開いていたようだ。

それから、薩摩と戦争が起ころる頃からは、この人は、
亡くなつていたそつだがね。この人を殺した人はいな
いが、薩摩から、これは、どうにかして殺して退治し
なければ、沖縄は、自分達では滅ぼすことは出来ない
という事になつてね。

それから、この人の家来で、その昔は、このヒゲの
中剃りなどは、奥さんにさせたり、また、大変お気に
入りの家来に、このヒゲの中剃りは、昔は、させたそ

うだ。

すると、この家来に、そのう、このチヨーフグン親
方といふ人は、全身が鉄なので、どこも開き間がない
と思つたが、「喉口が少し開いています」と。

「とー、あんしえー、いやー、うりるん殺ち来るん
さー、ちやつさ賄賂わろくいーしが、殺ひちくーんなー。」で
いちやくとう、自分ぬ國くにぬ滅めぶしえー分わらん、錢せんん
かい目まくららーに、鬚中ひげなか剃そんさがちー、カンスイ刺さし
込みりーやーに、くぬ世終やまとたんでいるばーてー。

あんし、うぬ人ひとぬうる間まあ……。

うりから、うぬ人ひとお家來けらんかい殺ひさりやーにさくと
う、今度こんどお、薩摩さつま、なー、今から三百年前さんざいぜんがやー。あ
んさーい、鉄てつるやくとう、後生こうせいんじん朽くたんたんでい
るばーてー。なー、内臟うちざいや、内うちえーむる朽くつち。手て、
足あしびかーんどう、銅像どうぞうとー同どうむん、はつぱとーくとう。
あんし、首里城しゅりじょうぬ側わきんかい、うぬ人ひとお門番もんばん、杖あしか
ち、今んチヨーフグン親方おやぢあ生なまちちよーみしえーるむ
ん、ちやーんならんでいち。あんさーに、生なまちちよー
ていん千人せんじん殺ひち、死しじからん千人せんじん殺ひちやんでいる昔物ふるもの
語ごやるばーてー。くぬチヨーフグンぬ親方おやぢあ。

「それでは、君が、その人を殺して来るなら、どれだけ賄賂わろを上げるが、殺してきてくれないか。」と言つた。自分の国が滅めることも知しらず、錢せんに目まがくらんで、ヒゲの中剃そりをしながら、カミソリを刺さし込まれて、この世を去はなったということだ。

そして、この人がいる間は……。

そういうことで、この人は家來に殺された。今度は、薩摩さつまが、それは今から三百年前さんざいぜんだらうか、だが、この人は鉄てつなので、後生こうせいでも朽くちなかつたそうだ。それが、内臟うちざいは全部朽くちて、手や足だけが、銅像のよう突つ立たつっていた。

それで、首里城の側にこの人は門番をして、杖あしをついて、今もチヨーフグン親方は生きておられるので、どうすることも出来ないと言つた。そういうことで、生きていて千人殺して、死んだ後にも千人殺したという昔物語なんだよ。このチヨーフグン親方はね。

注① 尚真王代の人で虞建極（京阿波根家基）ではないかとおもわれる。『球陽』に「虞建極、二次京に赴き、以て剣を磨き並びに討還を為す」とある。チヨーフグン親方の母親は彼を宿しているときに、鉄を煎じて飲んだため鉄人として生まれ武男に秀れてい

た。

注② 薩摩とは、鹿児島県をさし、一六〇九年島津氏が琉球征伐を行なつた。

注③ 那覇市首里当蔵にある。中山王の居城であった。城の創建年代は不明であるが尚巴志三山統一後の築城ではないかといわれる。

今次大戦で壊滅され、僅かに城壁の一部を残すのみとなつた。その跡に一九五〇年、琉球大学が創設され、城の内外に建物が林立し城跡のおもかげをとどめず今日に及んでいる。

82 幸地親方の話

話者 渡嘉敷 兼求 (明治十三年六月十五日生)

翻字 上原ヨシ

一番上兄いちばんじょうきょうあ、ペークータンメー親おやぢなどーるばー。二番のいちばんの一付役いちばんいつぎょく。今ぬ総理大臣付役とうりだいじんつけぎょくやぐとう、真下ましもやぐとう。総理大臣とうりだいじんでいねー、一般ひやんぬ大臣だいじんやさやー。

また二番のいはん一何いつやたんやたんでいがやー。うぬふーじーし、三男までい居ゐしがよー、三男までい付役つけぎょく。国王こうおうぬ下しぬ仕事しきそーたんたんでい。

なーあんまり、込み入こみいつていぬ事ことお分わかれらん、うれーあらあらぬ話はなやー、また、私親わたくしぢんあ、何なにぬ仕事しきそーが

一番上の兄さんは、ペークータンメーの親にあたる。二番目はお付役。今の総理大臣とうりだいじんのお付役つけぎょくで、すぐ下の位おもいに値する。総理大臣とうりだいじんと言えば、一般国民の代表だいひでしよう。

また、二番目は何か他にもしていったようだが……。三男までいたが、三男まで皆みなお付役つけぎょくだった。国王こうおうの下しで仕事をしていたそうだ。

あんまり込み入こみいつた事は分らないが、これは大体の話である。また、私(話者)の親は、どんな仕事を

るんやれー、くぬ仕事えー、あんまり学問の一私親あ
ねーらんてーんてー。

うんなかい、国王ぬウミナイビー注②一んでいしぇー知つ
ちよーらやー。妹、うれー分とーんてーやー。国王
ぬ妹ぬ、夫むつちゆる年頃なたぐどうやー、国王んか
い、うり貰が行ちゆる人お居らんさやー、ちやーぬ人
やていん。

すぐとう、幸地親方んちよー。幸地親方でいぬ字
や分とーんてー幸地親方あ、國ぬ親方やぐとう、
幸地親方でいる人、あぬー、調びらつとーるふーじ。
あんしさくとう、なーうれー國ぬ命令やしんにちーて
ー、んばつんでー言らん、なー「うーうー」んち、
合点そーるぐとーしが、また、今ぬ撰政三司官でいる
人達ぬん、國王ぬ妹やさやー、ウミナイビーでいね
ー、あんやしにちーてー「いーつ」んでー言らん、う
ーふーるそーさやー。

また、幸地親方んでーねー、教てーる、親方どうや
ぐどうやー、親方でーねー國ぬ親方ぬしじやくとう、
士族ねー大てー。あんやいしにちーてー、幸地親方ぬ
妻なする事んかいなていし、うぬ役員達のー。また、

したかというと、この仕事と言つても、私（話者）の
親は学問がくもんがなかつたようで、はつきりしない。

それから、国王のウミナイビーというのは知つて
るでしようね。妹ということは分るでしよう。国王
の妹が結婚できる年頃ときになつていても、国王の所に妹
を貰いに行ける人は、どんな人でも居ないでしよう。

それで、幸地親方と言つてね幸地親方という文字
は見たことがあるでしよう幸地親方は國の親方なの
で、妹の婿として選ばれ調べられたそうだ。調べられ
ても、それは國の命令だから、いやだと断わることは
できないし、もう「はい」と答えて承諾したそうだが、
また、今の撰政三司官である人達でも、國王の妹であ
るゆえに、普通の人のように心氣やすくつき合える間
柄ではなく、いつも「はい、はい」と敬まつていた。

また、幸地親方というのは、教えてーる方の親方で
ある。親方と言えば、國の親方を意味するので士族で
も上役に當る。上役なので、幸地親方の妻（國王の妹
を）にさせる事になつた。ウミナイビには、この役員

か一ま上ぬ役員達ぬん、う一ふ一どうそーしにちー
てー、ウミナイビんかい親方あ、当いめー教とーしる
やんどー。「うー」んでい言やしみらんねー「いーひ
ー」しみでい教らちえーならのーあらにていぬ協議ぬ
あいぎさん上々ぬ。

あんやんでいちさぐとう、「うれーなるふどう妻えー
すしが、あぬー、うれー国王ぬ妹やしんにちーてー、
教てーならんでー」んでい。「『いー』んでいちえーなら
ん、妻んかい『うー』んでい言りわるないんでー」
言ちよーる。幸地親方あ、「あーとー、御断わいでー
びる」んでい。「妻んかいうーふーしえー妻なー、い
かな國ぬうりやでいんないびらん」でい言ちよーるぐ
とーん。

んちや先じ、貴方やさやー。貴方夫ぬ、貴方んかい
うーふーしーねー、夫する人お居らんどー。さぐとう、
んちや、正しーねーあんなていさぐとう、あんやたん
でいぬ話。

達の中でも、ずっと上の役員達でも、敬語を使つてい
るので、親方も当然教える立場であつても「はいはい」
と言わせなければいけない。「イー、ヒー」（年下に
使う言葉）させて教えてはよくないだろうとの協議が
ある。

敬語を使いなさいと言われて、「それは成る程、妻には
するが、この国王の妹であつても、普通の言葉で教え
てはいけない。妻であつても敬語を使わなければい
けない」と言われたので、幸地親方は、「ああ、そう
でしたらお断わりします。妻に敬語を使うようでは、
それが如何に國の命令であつても出来ません」と言つ
たそうだ。

例えば、貴方だとするよ。貴方の夫が、貴方に敬語
を使うようでは、夫になる人は居ないでしよう。だか
らそれは、正して見るとそうなるでしよう。こういう
話だつたそうだ。

注② 王の娘に対する敬称、王女様

注③ 102頁注②参照。

83 殷元良と自了

話者 吉田新太郎 (明治三五年十一月十日生)

翻字 上原ヨシ

殷元良は、唐の名前です。いつべー絵書ち、字書ち
やてーるふーじやたんよー。

それから、虎の絵書ちやーに、さくとう、うりんか
い目ちきてーる虎なたくとう、絵るやしが、出じてい
歩ち、首里、那覇ぬ人ん、町方ぬ人おなー、驚かちな
らんたぐどう。

「くれー誰がさる業やが」 「殷元良がさる業どー」
り言の事んかいなたぐどう、殷元良呼ばーに、「くぬ
虎あ貴方がる持つち来んでいいえーさに」り言ちやぐ
どう、「うー、私が持つち来びたん」でい。「くりえ
一絵るやる、本物おあらんぐどう、ちけーねーびらん
さ」でい言ちよーしが、「あーあつ、人食あ食あし、
答えた。「いいえ、(今にも)人をかみつきそで、

殷元良は唐の名です。(その人は)すぐれた絵書き
であり、また書道にも秀れていたそうだ。

それが(ある時)、虎の絵を書いて、それに目をつけたところ、絵なんだがぬけ出して歩き、首里、那覇の人達、町方の人達を驚かしていた。

「これは誰の仕業か」 「殷元良の仕業だ」という
ことになり、殷元良は呼ばれて行つた。「この虎は君
が持つて來たそうだな」と言うと、「はい、私が持つ
て参りました。(しかし)これは絵であつて、本物で
はないので、驚くことはありません」と(殷元良は)

仕方しかたあならんぐとう、今、うりねーらんなし』でい。

「片付かたじきり」でい言ち、片付かたじきらさつたぐと。

殷元良が虎んかいうち乗のやーに、筆持ふせつちやーに、
墨すみさーに、うぬ目玉書ななまかちえーし、たつ閉したくと、う
ぬ虎こあ無なんなんたんでい。

あんし、うぬ無なんなたし虎こじゅ山さんんでいち、首里しゆりぬ
虎こじゅ山さんんでい。無なんなたる山さんぬ名なや虎こじゅ山さんんでい。
無なんなたる山さんぬ名なや虎こじゅ山さんんでい。汀良町ていらぢょうの上う、石いし
嶺ねとうぬ境さんかい虎こじゅ山さんちあんよー。うぬ山さんうて
い無なんなたんでいやーに、うまうてた虎こが切りたんで
いやーに、虎こじゅ山さんち名付なちやんでい。

うりから、自了じりょうや注う②、うぬ人ひとぬ弟子だいしやしが、くぬ人ひとお
七歳しちさいないたんでい。七歳しちさいないるばーに、字じい書かかちや
ぐとう、唐とうから、唐とうぬ国くにから、「金の屏風びやうに字じを書かい
てくれ」。んでいち、字じい書かかつたくと。唐とうぬ広ひろさ
ぬ国くににん、自了じりょうぐどうし、字じい書かちゅしえー居ゐらん
たくと。『うぬ代だいわい国くにでいる字じい書かちとうらし』
でいち。

書かかちやぐと、天井てんじょうんかい額縁がくぶなえ上あぎとーてい、
男ぬ親ぬ肩馬かたま小そてい、字じい書かかちやぐと。國くにで

仕方がないから、今すぐに絵を持ち去りなさい。』「片付
けなさい」と言われて、片付けさせられてしまった。

(それでもう)、殷元良は、(絵の中の)虎に乗つ
て、筆を持ち、墨をつけ、その(虎の)目玉を塗りつ
ぶしてしまふと、その虎の絵はなくなつたそうだ。

それで、(虎が)無くなつたところが山だつたので、
その山の名は首里の、「虎じゅ山」。汀良町の
上の方、石嶺との境に「虎じゅ山」というのがあるが
ね。その山で無くなつたということで、そこで虎が(一
姿)を消したということで、「虎じゅ山」と、名が付
いたそうだ。

それから、自了はその人(殷元良)の弟子だが、自
了は七歳だつたそうだ。七歳の時に字を書かせられた。
唐の国から、「金の屏風に字を書いてくれ」と頼まれ
字を書かされた。唐のように広い国でも、自了のよう
に字を書ける人は居なかつた。「唐人の代わりに、国
という字を書いて欲しい」と頼まれた。

(国という字を)書くことになり、天井に額縁を上
げておいて、父親に肩車をしてもらつて字を書いた。

いぬ字ぬ、書ちゆしえー書ちよーしが、うぬ中ぬ点小
一ちえー、なーだ打つたんまーるーけー降るさりやー
に。筆え投ぎやーに、墨ちきてい筆投ぎたぐとう、う
ぬ自了が、「國ぬ圓いぬ側んかいたつくわいたん」で
い。あんし、立派んなてーうしが、國ぬ外んかいなた
んでい。

あんさぐとう、「私あ子ああらんさやー」でい。國
ぬ外んかい出じたくとう、「くれー私あ子ああらん
さやー」でい、男ぬ親あ言ちやんでい。あんさぐとう、
女ぬ親ぬまた、「うんぐとーる子ぬ成功するむんどう
んやれー、ちやーる偉い人がないたらーやー」んち。
なー食物ん食まん、なー哀りしならんなくとう。「
哀りんすなけー、あれー私ねー唐からぬ屏風んかい、
字い書かちやる時に、國んでいる字い書かちやくとう、
國ぬ外んかい点ぬんじやんでい。あんさくとう、うん
にんからー、自分ぬ子ああらんでい、私ねー自信持つ
ちよーくとう、君んあんし泣ちゆるさくねー、四十九
日終なしーるんさー、あぬ墓開きやーに、棺箱見して
いんーじゅんどー。本当に死体ぬありんかい入つちよ
ーるむんやれー、自分達あ子やんどー。死体や無らん

国という字を書くには書いたが、その中の点を打ち終
わらないうちに（肩から）降ろされてしまった。（そ
れで）筆に墨をつけて、（天井に）自了が投げると、
国という字の外側に（筆は）くつついたそうだ。それ
は（点としては）立派だつたが、国という字の外側に
なつてしまつた。

すると、（父親は）「私の子ではないな」と思つた。
(点が) 国の外側に出たので、「これは私の子どもで
はないな」と、父親は言つたそうだ。それに、母親も
また、「こんな子が成功するとすれば、どんなに偉い
人になつていたことでしようね」と悩み、食事もしな
いくらいに哀れそうだつた。それで、（父親は）「哀
れむな、私が自了に唐から來た屏風に字を書かせた時
に、国という字を書かせると、國の字の外側に点がつ
いてしまつた。それでその時から、自分の子どもでは
ないと、私は自信を持つてゐるから、君もそんなに泣
いてゐるより、四十九日が終われば、あの墓を開けて
棺箱を見せてあげるよ。ほんとうに死体が、あれ（棺
箱）に入つてゐるのであれば、私達の子どもである。
死体がなかつたら、私達の子どもではないということ

むんやれー、自分達あ子ああらんたんでいち、君や諦
んじーらやー』んでいやーに、うぬ妻んかい言い聞か
ちゃんでい。

あぬー、四十九日終なし、墓開けて見ちやくとう、
ゆずり葉注④でいし、（大和ぬ正月ねー、かりーな物でい
ち、ゆずり葉でいしがあんてー。くぬ下葉しんで一枯
りやーに、綠やちやー残てい、たつたたつた固でい
ゆーしんでー、下葉ぬ枯りていいちゅんでー）うぬ木
ぬ葉ばかりじどう棺箱んかい入つちよーる、自了ぬ死
じえーる形え無らんでいるばー。

あんさぐとう、「ちやーがくれー、ゆずり葉ぬる入
つちよーるやー、自了ぬ人ぬ死じえーる形ああらのー
あらに。」でい言ちやぐとう。「自分達あ子ああらん。
くれー、神ぬ子るやぐとう泣ちゆる必要ねーらん。」で
いち、やくとう、うにんからーあんし泣かんたんでい。
あんし、うぬ肩馬小そーてい書ちえーる字や、国ぬ
外んかい点小や出じやち、あんし、「うれー書ちやん
てしぐとう、なーちやーすが。」でい言ちやぐとう、「
書ちやんてーしるゆく上等やぐとう。」うれーうぬあた
いぬ、肩馬小そーてい書ちえーる、童が書ちえーる、

で、君も諦めきれるでしよう。」と、妻に言い聞かせた
そうである。

そして、四十九日が終わり、墓を開けてみると、（
棺箱には）ゆずり葉という（大和の正月には縁起の良
い物として、ゆずり葉というのがあるがね。これは下
葉の方から次第に枯れてしまい、（伸び芽の）緑はい
つも残つて、その木が伸びるにつれて下葉は枯れてい
くそうだ。）木の葉だけが、棺箱に入つていて、自了
が死んで（入れられた）形跡は（そこには）なかつた。
そんなことで、「どうだ！ここにはゆずり葉が入つ
ているだけで、自了が死んだ形はないでしよう。（や
っぱり、自分達の子どもではない。神の子なのだから
泣く必要はない。」と（父親は）言つた。その時から（
母親は）あまり泣かなかつたそうだ。

それから、肩車にして書いた字は、國の外に点は出
ていたので、「これは書き損ミねたが、もうどうしよう
か」と言つた。そうしたら、「かえつて、書き損ミねた
のが上等だ。」と言われた。肩車で、子どもがそれだけ
字が書けるという事を、世の中に伝えるひとつの遺書

くぬ字い書ちえーんどーでいぬ事お、世ぬ中んかいぬ
うりん一つぬ遺書でいぬくとうないしえー。「上等や
さ」んち、書ち直さんぐどう持つち行ぢやんでいぬ話。

になるからである。(それで)「上等である」と、書
き直さずに持つて行つたという話である。

採集 S 53・6・17 読谷ゆうがおの会(山内源徳、島袋喜美子)

注① (一七一八~一七六七) 絵師、座間味庸昌、唐名殷元良。彼は山口保房(吳師虎)に師事した。作品に「神猫」があり、一線一抹もおろそかにしていない。

注② 『球陽』読み下し編、一七六頁に詳しく述べる。それによると、欽氏、諱は可聖一童名は真竈、首里の人、父、欽徳墓(城間親雲上清吉)母は、馬氏思乙金。啞で、武芸、学問、芸術に長じ、とくに画に秀じて、尚豊王に使え「自了」の号を賜う。この物語にもあるように『球陽』にも「年十八、病無くして逝く。葬して二日の後、塚開き戸脱して、唯、空棺に衣履を余すのみ。異香繚繞して散ぜず」とある。その他、佐喜真興英『南島説話』(八五頁)『画家米須の次郎』や、『伊良皆の民話』(一五六頁)「自了の絵」を参照するとよい。

注③ 死後七日ごとにナンカ祭を行う。最後のナンカ祭でシンジュ

写真④ 自了筆の絵

(沖縄県立博物館「絵画」シリーズ2より)

ークニチと称す。仏前や墓前において供物を供え、焼香の儀礼を行なう。親戚や隣近所の人々が参加し盛大である。

注④ たかとうだい科の常緑高木。四五月ごろ緑、黄色の花をひらき、だえん形の果実をつける。正月のかさり用。葉や木の皮は薬用。



ウンタマギルーと アンダクエーボージャー

著者 松田ミヨ（明治四一年二月一日生）

翻字 玉城洋美

アンダクエーボージャー やうまんかい置ちよーてい、
注①
 馬ぬ クーラグー 切らち、自分や床下んかいち、ありと
 う相手そーてい、床あがーサラ、ガーサラ切ねー、あ
 まー、クーラグー 切らちよーんでいる思いさやー。

馬ぬ クーラグー、あぬー、後んかいする、あぬー、
 マータク竹注② くぬあれー、今あ、ぬーが、いつたー
 や、見ちえー見だんがあらー、馬んかいや、あぬー、
 昔えーマータク切つちえーるクーラグー、歩かしーね
 ー、ジャラ、ジャラジヤラし鳴いたんよー

うり、アンダクエーボージャー や切らち、自分や床
 下切しえーやー、ガーサ、ガーサ。あまる切ちよーる、
 家族おあまる見ちよーる、ぬー、うんぐとうしん盜ろ
 ーないがやーんち、あまる見ちよーる、床下んかい入
 つち切ちよーしえー分らんしえー。

アンダクエーボージャーは、表に置いて、馬の鞍に
 使う竹の筒を切らせ、自分（運玉義留）は床下に入り
 彼と相手をしながら、床をガサガサ切つていると、他
 の人は、竹鞍の筒を切つているものだと思うでしょう。

馬のクーラグーとは、馬に乗せる鞍の筒で、あの、
 後方（馬の）にする、マータク竹製の。（この、あれ
 は、現在では、君たちは見たことがないだろう
 ね、馬には、あの、昔は、大きな竹を輪切りしたクー
 ラグーと称する鞍の筒が、馬を歩かせると、ジャラジ
 ャラという音がしたんだがね）

大きな竹を、アンダクエーボージャーには切らせ、
 自分は（ウンタマギルー）床下に入り、床板を取り、
 床下をガサガサ切つてているのに家族は、そこ（竹の方）
 を切つてているものだと見ていて。そんなにしても盜み
 ができるかと、そこだけ見ていて、床下に入つて切つ
 ていることも知らなかつた。

あんしきち取てい盜人オウンタマギルや。あんす
かぬ知惠持ちやい、あぬー、名いるーやたんでいちぬ
話るやてーんむー。うり、ぬーんくいありやしが、ぬ
ーがなー。

そういう中で、切り取つたそだ盜人は。ウンタマ
ギルー（盜人）は、それくらい知恵持ちで、その名高
い者だつたとの話だつたよ。こんな話は他にもいろい
ろあるがね。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第二班 〔宮里光雄、大本敬子〕

注①③アンダクエーボージャー（油喰坊主）とウンタマギルー（運玉義留）の伝説は、時代は、はつきりしないが尚貞王の一七〇九年のうし年の大ききんの時ではないかと言われている。封建社会下において特權階級を恼まし、貧民を援けた義盜として名高い。とくに、運玉義留の最期を遂げたリングムイ（蓮池）の話は有名である。また彼等が隠れていたという、運玉森が首里の東方にある。

注② 竹の一種。だいさんちく、りょくちく、高さ十メートル近くにもなる最も普通の竹、たけのこは食用、幹は竿、建築用材などにする。

吉屋チルー

話者 謝花良仁（明治三七年一月五日生）

翻字 島袋フジエ

吉屋チルー

話者 謝花良仁（明治三七年一月五日生）

翻字 島袋フジエ

恩納村の瀬良垣に生まれたと聞いているよ。

それがいちばん辻に売られた時に、〈仲島だなあ。そ

（チルーは）恩納村瀬良垣に生まれたと聞いている
よ。チルーが初めに辻に売られた時、〈その時は仲島

の時は、売られた時十四そこそこだつただろうなあ。

だね。十四歳そこそこだつたでしようね。

十四に売られて、その丁度比謝橋を通る時にね、あ

のチルーが詩つたのが（あぬ、何んたがや。）

恨む比謝橋や、誰がかきていうちやが

私渡さとうむてい、かきていうちえさ

と言つて、詩つたそうだ。

それから、中島辻の有名な詩人になつてね。あぬ、

一生美人で過ごして世の中も終つたそうだ。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第四班（山城悦子、又吉初子、田場春美、当真久美子、島尻博光、湧川汎子）

注①
154頁注④参照。

注②
154頁注⑤参照。

注③ 読谷村と嘉手納町との境をなしている比謝川にかけられた橋。当初は板橋で、一七二六年に石橋に改修され、その後一九五三年に車用道路拡張、改修に伴ない、現在の鉄橋に變つた。

注④ 吉屋チルー、吉屋思鶴は一六〇五年、読谷間切久良波村（現恩納村）で生まれた。十三歳（または八歳）のとき、仲島遊郭（泉崎）に身売りされ、何十百かの琉歌を残して十九歳で死んだ。貧農の家に生まれたために遊女に売られ、生まれ故郷の読谷山と別れる所にある比謝橋に来たとき、嘆き悲しみながら、この歌を詠んだであろうと伝えられている。

十四歳に売られて行く途中、比謝橋を通る時に、あのう、チルーが詩つたのが、（あのう、何だつたか。）

恨めしい比謝橋は、誰がかけておいたのであろう

私を渡そうと思つて、かけておいたのだろうか

と詩つたそうだ。

それから、中島、辻の有名な詩人になつてね。美人

で一生を過ごし、世を去つたそうだ。

坊主御主の国めぐり

話者 松田栄清（明治二八年二月二〇日生）

翻字 島袋喜美子

坊主御主注①
坊主御主ぬ、くぬ人おの名前のえ尚瀬王よしでいるばーてー
坊主御主や。あんさーに、ちよーる今度こんどぬような、あ
ぬ水飢饉がきんでいしとうゆぬむん、食物ほんぶつぬちりてい、餓死年がしそうねん
やたんでいるばーてー。うりから、なー、物ものお食くえー
ちきーかんていーし、なー栄養不良えいようりょうりょくなでー、病人びじんぬ多
くない始はじみとーんでいる意味いみやるばー。

坊主御主といいう方ほうじゅぎしで、この人の名前なまえは尚瀬王よしと言いつ
たそたそうだ。ちようどその頃頃は、現在げんざいのあの水飢饉がきんと同
じようじように、食糧じきりょうがなくなつて餓死年がしそうねんだつたようだね。
それから、食糧じきりょうに困こまり、栄養不良えいようりょうりょくになり病人びじんが多く
出でるようになつたということさ。

うりから、「百姓ひやくしぬ居りわる、あぬー國くにえたたりー
ぐどう、今うてい栄養不良えいようりょうりょく、死死なんまーる、うぬ倉くらん
かいある米倉べいわら開あいてい、んな百姓ひやくし達たかい分わけてい食くま
し」。んでい、くぬ尚瀬王よしぬ言いちさくとう、「あんしえ
ーならん。政治家せじかぬうりわる國くにえたつちゆる」。んでい
政治家せじかあ言いるばーてー。あんし、何度どいちん聞きかんだ
うあくとうなーくぬ坊主御主ぼうじゅぎしや、うりから「人ひとぬ死死じ
からー何んゆーちらーねーらんくとう、死死なんまーる
うぬ米こめえ分わけいていくり、うぬ米こめんでいしえー、自分自分達たが
作つくてーせーあらん、百姓ひやくし達たがうまんかい上納じょうのうでいち納な。

それから、「百姓ひやくしがいるから、あのう國くには立たてるの
だから、今で栄養不良えいようりょうりょくになつて死死なないうちに、その
倉くらにある米倉べいわらを開あいて、その百姓ひやくし達たに分わけけて食べさせ
てあげなさい」と、この尚瀬王よしが言いつた。すると「そ
うはできない。政治家せじかがいるから國くには立たつ」と政治家せじか
は言いつた。そこで、何度どいつても聞きかなかつたので、
この坊主御主ぼうじゅぎしは、しまいには「人が死死んでからでは、
何の意味いみもないから、死死なないうちにその米こめを分わけけて
あげなさい。その米こめというものは自分自分達たが作つくったもので
はない、百姓ひやくし達たがここに上納じょうのうとして納なめてある物ものだつ

みてーしる物やくとうやー。

うりから、田舎んかい通いるんしえー、錢ぬたまし
米むつち行いんとうか、芋むつち行いんとうか、なー
田舎あ餓死なやーに、米んねーらん、買おてい食まん
でいしえ錢のーねーらんあい。私が貸らちえーたる錢
の一けー死なんまーる今とうりわるやる。んち、なー
百姓達かんし、問答ぬ始まとーるばー。

「とー、あんしみてーならんくとう、うぬ米分きて
いくりり」 「うー」 んでいしが、むる分きてーくいら
ん、「んー！ かんそーてー私がくまんかいいういねー、
じやーふえーるやくとう」 んち、王や子んかいしみや
ーに、自分なー外なーしー、うぬ世ぬ中ぬ暮しえ、ち
やんぐどうなどーがやー。また、政治えちやんぐどう
などーがやーんち。〈くぬ坊主御主や、なー現在いー
ねー、ぬーんちやらーましが、内地うてー大官でいる
ばーてー。くまうてー、沖縄語しえ、何が当ていはま
いがやー、沖縄語しえ殿内ぬ子ん国ぬ政治うさみーし、
ちょーる、うぬ元ぬ、あぬ学校ぬ〉

たから。」

それから、田舎を通る時は、錢の代わりに米を持つ
て行くとか、芋をもつて行くとか、田舎は餓死になつ
て、米もなく、買つて食べようと思つても錢もなかつ
た。私が貸した錢も、（相手が）死なないうちに今と
らなくては、といつて百姓達の（間では）こんな問答
が始まつたそうだ。

うりから、なー、 「んーくれー私が王すしやかー、

それから、「うーん、これは私が王につくよりも國
うど（それは）以前の学校の（職員）に当たると思うが

でいくとう確みーしょーまし。」んち。なー王やみやーに、「あんしょー、なみそーらん、是非貴殿がくまんかいめんそーりわるやる。」んち言しが、なーうりからし、ぼーちりてい役員達が言いし聞かんどうあぐと。

又、この尚瀬王ぬ言いしん聞かんしょー。「死なんまーる分きていくりわる命え生ちちゆる、死じからーぬーん、ゆーちらーねーんどーんでい。百姓んなーむる死じよーんどー」んでい言ちん、「うぬ米え百姓達ぬ集みてーしる米どうやくとう分きていくりり。」「あんしそーうりが無んないねーちやーすが。」んでい。

百姓ん、自分なーん皆枕かきて一縉死じしむさ。」んでい。くぬ坊主御主やいみそーちやんでい。「あんしそーならん。」んち、なー言るくとー聞かんどうあくとう。

うりから田舎んかいうりてい、くぬ百姓しみそーち、あんし、なーくぬ城間んかい初まいやー百姓しうりみそーやーに、だー身分ある人やぐとう、うぬ地人達使ていシブイからチブルんかい、なー、はてい出来し、町んかい出じやち売たぐとう、自分や村入口に立つち

の今の政治や地頭達がどのような暮らをしているかを確かめなければ。」と思つた。王位を退めてね。「それではいけません。是非、貴殿がここにおられるべきです」と言つても（坊主御主は）それからは、断固として役人達が言うのも聞き入れなかつた。又、（役人達は）この尚瀬王（坊主御主）の言う事も聞かなかつたし、「死なない前に分けて上げれば命も助かる（だが）死んでからでは、もう何も必要としない、百姓ももう殆んど死んでしまつたよ。」と言つても（また）、

「その米は、百姓達が集めた米だから分けて上げなさい」と、「それでは（もし）それが無くなつたらどうするか」と言つた。「百姓も自分達も皆枕を並べて一緒に死んでもいいさ」と、この坊主御主が言つたそうだ。【それはできない】と（坊主御主の願い）を聞いてくれなかつた。

その後田舎におりて、（坊主御主は）あの百姓になられたそうだ。そして最初に城間で百姓になつて（野菜づくり）を始めた。身分のある人だから、その土地の人達を使って、シブイ（冬瓜）やチブル（夕顔）が豊作になり、（それ等を）町に出して売つた。（その

よーてい「今日ぬ町まちえちやーやたが。」んでいちゃぐと
う「んー、坊主御主チブルぬだてーん出でじやーに、売
らりーびらんたん」でいやぐとう。だーうぬ人ひとお短
氣きむちどうやぐとう、「あーとー、人民ぬんかい叱のめー
つてーならん。」んち、うつさぬ、うぬシブイ烟、チブ
ル烟、馬むつち行ゆきぢやーに全部踏ふくらかしみていよー、
島ぬ人達じんかん出でじてー「とー、踏ふくらかち、残のことーる分
のー、いつたーむてい食めー。」んち。

(時)自分は村入口に立ち止まって、「今日の町の(様子)はどうだつたか」と(村人に)聞いたら、「そうだね、坊主御主のチブルがたくさん出されて売れませんでした」と言つた。(すると)その人(坊主御主)は短氣者だから「ああ、人民に怒られてはいけない」と、こんなに多くのそのシブイ烟、チブル烟に馬を連れて行つて全部踏ふくらかしみさせてね、そして島の人達が出て行くと、「さあ、踏ふくらかちして残のこつた物は、あなた達がとつて食べなさい」と言つた。

あんさーにうぬ人ひとお国くにぬさまざま歩あるみしえー
ぐとう、あい、ありから読谷山んかい、しぐ読谷山ん
かいがめんそーちやら。あんさー、読谷山かい、うま
ー喜名ぬ西にしんかい、めんそーやーい、現在いまんうまんか
い、觀音堂ぬ側わざんかい坊主井戸ぼうしゆどんちあんよー。井戸ぬ
飲料水おんりょうすいでー。

あんし、くまつちぬ話はなぬ、くぬイシンニーんち、う
ぬ村東むらひがんかい、なー、木めーなち、子育こぶわーちょーる
母めちやんがめんしえーたんでい。あんし、うぬ人ひとお家いえ
から現在いまぬあぬ喜名きなぬ、ウガドンかいトウサシントウサシンがートウサシンがートウサシン
ちょーる、トウーサシンが歩あるちーに、うぬ門もん通とおいねー、

ここでの話が、この石嶺とこの村(喜名)の東の方に木をして建つてある家があり、そこに子供を育てている母親がいたそうだ。そして、その人が家で、現在のあの喜名のウガドンにトウサシンが歩く時にその家の門を通る時に、その長男が、やんちやをして(叱

うぬ長男ぬ、やんちや坊なでい泣ちゆんでい。さぐと
う「うねひや一坊主御主が通いみしぇーんどー、泣ち
虫しつから」んちさぐとう、坊主御主や、しぐ内んか
い入りんち、めんそーちょー。「いえーさい、ばーさ
ん」んちやぐとう、「うー」んでい、「ぬーが、坊主
御主ぬ歩ちねー、ぬーがら罪どうやるい、いやーや坊
主御主ぬ歩ちみしぇーんどーんでいいやぎーが、何や
が」んち、うぬお母たー、叱ーつたんでい。「くぬひ
やー、どうくやんちや坊なでい坊主ぬ歩ちみしぇーん
どーんで言いるんしぇー、とうまいがすらでいち、う
ぬぼーじやー止みーんでいるやいびーんでー」でいち
やぐとう。「えー、あんどうやるい。とー、あんねー
言なよー。御主でいるむー、皆が代表るやぐとう、
子供達んかいうとーるさしみてーならん、子供達ん、
良いむん教ーしるすんどー」んちやぐとう、「悪さい
びーたん」んち。うりから茶んでー沸ち出じやち。な
ー話ぬでいきとーるばーでー、うぬ人ん、話しかきた
る人ん居らんどうあぐとう。うつペーぬ琉球王んち。
あんしさくとう、なーうぬ人ぬ、なーうまー客ぬ取引
先ぬ戻やー、憩休所やぐとう。

られ)泣こうとすると、「ほらっ! 坊主御主が通るよ、
泣いたりすると」と言つたら、坊主御主は、すぐ家の
中へ入つて来られてね、「ちよつと、ばあさん」と言
つた。(おばあさんは)「はい」(と答えた)「どう
して坊主御主が歩くと、何か罪になるのか、あなたは、
坊主御主がやつて来るよ、と言つてはいるようだが、ど
うしてなのか」とそのお母さんは叱られたそうだ。「
この子がひどくやんちや者なので、坊主がやつて来る
よと言えば、とまるのではないかと思い、この子供を
おとなしくさせるためなんです」と言うと「ああ、そ
ういうわけか、でも、そういう風には言わないでくれ。
御主といるのは皆の代表だから子供達にこわがらせて
はいけない。子供達には良い教え方をして下さい」と
言つた。(おばあさんは)「どうもすみませんでした。」
と(謝まつた)。それから、お茶を沸かして出した。
その時から話がはずんだようだ。この人(坊主御主)
に話かけた人は(誰も)いなかつたので。(坊主御主
は)偉大な琉球王で(誰も近づかなかつた)この人の
(家の周辺は)客が取引き先から戻る途中になつてい
た。

あんさーい、くぬ、御拌領んち。田舎んかいくぬ、
仮壇ぬ上んかい、ミジヒチんでいるむんぬ、ひかつと
る家ねーんたんよー。あんし、うまー、うぬ人ぬ、
七月なたぐとう、うぬミジヒチ、うぬ人ぬ褒美くいみ
そーちよー。「どー、くれー、そー七月にかきりよー。」
んち。あんしきるむんぬ、うぬ田舎うてー、うんぐと
る布のー見ちえーんだんどうあくとう、すんちはん
さーに、娘、くぬ、衿花ちきてい着してい。又男子あ
くぬ袖ちきてい着していさぐとう。うぬ人お巧こーい
かんよー。あんさーい、くぬ御拌領着物さーに、鼻だ
いぬぐでいる、うぬ人おあんなでーんてーんち。につ
かから神經衰弱なていよー。うぬ人ぬ神經衰弱などー
しえー、自分達がん覚とーさ。石嶺にうさぎ、うさぎ
し、あんさーに、娘あ衿どうやくとう、うりしえー鼻
だいとういしえなんじゆ居らんしえー。あんし、着物
ぬ袖うぬ男あちきていくいたくとう、あんしる、う罰、
こーむてい、狂乱者なでーるんでいる、くりかーぬ物
語や、うぬ今までい流りていちょーさ。

それから、この御拌領と言つて。田舎には、その仮壇の上に水引き言うものが敷かれている家は（どこにも）なかつたようだね。それで、（御主と語つた人）に、七月（お盆）になつたので、その人に、褒美として、水引きを下さつたそうだ。「さあ、これは祝日や七月（お盆）にかけなさいね」と。そういうことで貰つた水引きを、その田舎では、そのような布を見たことがないので、（その水引きを）ときほどいて、娘には、（着物の）衿につけてやり、又男の子には袖につけて着けさせたら、その人は（物事はすべてに）うまくいかなかつたそうだ。それは、その御拌領着物で鼻をかんだので、その人はあるようになつたんだと。（その人は）ずっとあとで神經衰弱になつたそうだ。この人が神經衰弱になつていては自分達（話者）でも覚えているよ。石嶺（元家）に札拌のため出入りしていたので。娘は衿に（水引きの布）を着けてやつたので、それで鼻をかむ（のは）なかなか居ないでしよう。それが、男の子は着物の袖だったので（それで）鼻をかんだために狂乱者になつたんではないかという物語が、今でもこの辺まで流れ伝わつてゐるようだね。

注① 尚灑王（一七八七～一八三四）のこと。第一尚氏十七代目の王（一八〇四～一八三四）。病氣のため、四歳で長男尚育に政治をまかせ、浦添市城間に隠居する。

注② 領地をもつ地頭職には、間切を支配する王子地頭と按司地頭および総地頭があり、村を支配する脇地頭と地頭持がある。

注③ 御願所（御嶽）のこと。

注④ 鳥刺し人。鳥を狩りする人の意味であるが、「京太郎」の芸能の中で、鳥刺し舞が演じられることから、村々をたずねて供養の念仏歌をうたつた京太郎の一団のことを指しているとも考えられる。

坊主御主と粟

話者 高良政信（明治三九年三月十三日生）

翻字 神谷初子

この粟というものですな。その時は少なかつたそうですよ。それを、その人が、どこからか貰つて、一掴みの粟をですな、畑に蒔いたそうですよ。また、その穂が出てですかね、手でつかまえた穂だけでですな、まあ、その話ですからね、まあ、一斗くらいの粟が出たそうですよ。

蒔いたときから、それから、粟はいちばん作るもんであるということで、奨励したという話である。

坊主御主と タカハンジヤー

話者 比嘉正貞（明治三年九月二五日生）

翻字 安里和子

小湾、浦添小湾へ今の拓南製鐵のある所。浦添小湾に別荘。が、そして那霸の市場。に出して、また民家。も出す。坊主御主。のが上出来。したので、その日は売られなかつたそう。です。それでもう持ち帰る。捨てる。わけにはいかない。それを道なかで話すのを聞いて、「やな坊主御主。がゆんチブルぬ出来。て、な一田舎ぬ物。お賣らん。」それを聞いて、その晚、馬に乗つてその野菜。を踏みつぶした。

それでも、こつちに昔の王は、もう王の勝手。だから、女。も。翁長マジル。という、えらい、もう沖縄優秀。の人が居た。これをどうせ自分の手に入れようとして難かしい。

それから、「アラティチユラナビ。」という人も連れようとしているが、連れられない。で、こつちに壺屋。から、沖縄の壺屋。はこつちから最初。、喜名。から喜。

浦添の小湾という所。今の拓南製鐵のある所。に、（坊主御主。）別荘。があつた。そして（そこで野菜づくりをして）那霸の市場。に出していた。また、百姓も出していたが、坊主御主。の作物。が上出来。だったので、百姓のものは売れなかつた。それで、捨てる。わけにもいかず、それ（作物）を持ち帰る途中で、「あの坊主御主。の夕顔。が上出来。て、田舎の物。お賣れない」と話しているのを坊主御主。が聞いてその晚、馬に乗つて野菜畑。に行き、その野菜。を踏みつぶしてしまつた。

それから、また昔の王は、こつち（喜名）に來た時。も（すべて）王の勝手。だから、沖縄でも名高い美人の翁長マジル。も自分の手に入れようとしたが、それは難かしかつた。

それから、「アラティチユラナビ。」という人も手に入れようとしたが出来なかつた。それでこつち（喜名に）に壺屋。（那霸の）から瓦。を焼く人。を連れて來た。

注①

名焼なやきというて有名だが、もう残つたのはありますかないと。ちよつとあるそうです。喜名焼きなやきといつて、それでもう、アラティチュラナビーも夫婦別れして、もう逃げてしまった。

注②

沖縄の壺屋はこつちが最初で、喜名から「喜名焼」といって有名だが、まだ残つてゐるかな」始まつた。坊主御主が色々なことをして美人たちを惑わしたので、ナビーも夫婦別れして逃げてしまつたそうだ。

注③

このタカハンジヤーという人は、今の水戸黄門ひとこうもん注③らしです。そのう、女に悪いこともしない。だから坊主御主ぼうしゅとは仲良なかよしくして、沖縄には私にかなう人は居らんから、負けるつもりだから、この一、王おうに勝たせて、喜ばせて何でも得なろうという精神だが、この相撲をわざと負けて、私負かした人は居らんがあといつて残念して、それは嘘うそであるが、これを王と相撲をとるというのは、王負かしていかんでしょう。この坊主御主ぼうじゅうすうは、またそれは分らない。それで壺屋も持つてこらしてこれはタカハンジヤーの計画けいかくであつた。それで壺屋もこつちに持つてこらして、こつちから壺屋はまたあのし、那霸なはに行くし、知花ちばなに行くし、知花焼ちばなやきといつて。元祖がんそは、壺屋の元祖がんそは喜名きなにあるが、その坊主御主ぼうじゅうすうは、これではいかないといつて、まあ小湾こわんに帰つて、おしまいは小湾こわんでしようなあ。あの坊主御主ぼうじゅうすうは偉かつたそ

注① 沖縄における古窯の一つで、読谷村喜名四九二番地附近に昔の窯があつたと考えられている。現在、厨子甕に銘の入つたもので、康熙九年（一六七〇年）のものが残つており、その他にも味噌壺や水甕等多くの雑器が残つている。この場所以外にも、別の窯があつたのではないかと言われている。

注② 詳しい姓名、出生等は不明。喜名にあるタカバカという墓に葬られていたが昭和九年頃、松田栄清家の墓へ移動した。今から五、

六代前の人人物のようである。

注③ 德川時代の水戸藩主、徳川光圀（一六一八—一七〇〇のこと）。最近、テレビで放映されているので、その影響による。沖縄では水戸黄門の伝承はない。

注④ 喜名焼とともに、沖縄における古窯の一つで、沖縄市知花五一番地附近に窯跡がある。壺、甕、徳利など多くの雑器を作りその遺品は現在多数存在している。一六八二年に首里王府の命で、那霸市壺屋窯に統合された。

坊主御主と夕顔

話者 吉田新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 大城薰

坊主御主がですな、城間に方に、浦添城間に方にですな、公儀地と、公儀、公儀といふんですな。〈琉球政府のことを公儀といふんです。〉公儀地といふ土地がたくさんあるそうです。その土地にですな。土地にカボチャを作つたらもう非常にできてですよ。カボチャが豊年であつたと、豊作したものだから町に出したらですな。人民の物

が売れなかつたというんですよ。その人民のことばでですな。「坊主ぼうじあチユブルぬ出じやーに、坊主ぬチユブルぬ出じやーに、人民ぬ物お売らんたん」。注①と。こういうような話があつたといふんです。

それから、馬を飛ばしてですな。馬に乗つて、馬を飛ばして、そのカボチャをですか。チブルといふのは。夕顔を踏みつぶしてみんな枯らしたそうですよ。「坊主ぼうじあ夕顔ぬ出じやーに、人民ぬ物お売らんたん」と言うたら人民がかわいそつだといふので、その馬に乗つて全部枯らしたといふんです。

採集 S 55・2・14 読谷ゆうがおの会（大城薰、知花春美）

注① 坊主御主の土地にできたカボチャ（または夕顔か）が豊作で、町に出まわったために、人民の物が売れなかつたといふ意。

坊主御主の話

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知花春美

昔、めんしけーたんでいーしが、あんし、めんしけーたぐとう、うまから、喜名から道歌ちちうた注①あ、昔え道歌でいちあびてい歩ちゆせーや。うぬ道歌うのうたああびーなでいち言ちやぐどう。

旅人ぬ山原からかんし来る、かんし来る坊主御主と一緒道なたぐとう、うぬうりんかい、「とー貴方いわや

（そこで）山原から来る旅人が、ちょうど坊主御主と一緒に旅になつた。それで、坊主御主が、旅人に、

昔、（坊主御主）といふ人がいらしたそうだがね。ここから、喜名から道歌を、昔は道歌といふのを歌つて歩いていた。この道歌は（もう）歌うなということになつた。

歌ぬあらー歌あびてい聞かしえー』でいやぐとう、
くぬ坊主御主やみせーしが。「くぬ喜名ぬうまーや、
歌あびてーないびらん規則ぬあいびーるむん」でいち
言ーたんでいー。「何が」でいやぐとう、「くまー
や、坊主御主がや勤みていめんしえーぐとう、うまか
ら歌やあびてーないびらん」山田からうまぬとうーか
ーし、またうまから喜名あ越るえーまー歌あならんた
んでいーるばーてー。

あんさぐとう坊主御主ぬ「くれーあぬー、聞ちしむ
くとう、私ねー。」「ぬが、くれーくんぐとうーしす
るやー。」でいち。

あんし、うぬ坊主御主が話聞ちみそーちやぐとう、
聞ちやーにさくとう、「来んでい」ち言ちやくとう、
「あいえーあれー私とう話させー坊主御主やるむん、
私ねーちゅーや首ないさやー。」んちやーに、自分しま
いそーみしぇーたんでい、話しみそーる人お。

「貴方が歌を知つていたら歌つて聞かせてくれ」と言
つた。すると、(旅人は)「喜名では歌は歌つていけ
ない規則があります」と答えたようだ。(坊主御主が)
「どうして!」と聞いたら、「ここは坊主御主が勤め
ていらしたので、ここからは歌は歌つてはいけません」
(と答えた。)一山田からここ(喜名の近く)までは歌
い、またここから喜名を越えるまでは歌は歌えなかつ
たということだ。

でも坊主御主は「私は歌は聞いてもいいのだが」と
言うと、旅人は「どうしてこの人はそう言うのだろう。
と(ふしぎに)思つた。そして坊主御主は「あなたは家
はどこか、何という(屋号の)ところか」と尋ねた。

結局、坊主御主は、(この道歌の)話をお聞ききになつた。そして、(坊主御主の家に)「来い」と言わ
れたので、「どうしよう、私と話をしたのは坊主御主
だつたんだね、私はきょうは首になるなあ」と自肅な
さつたということだよ。話をした人(旅人)はね。

91 坊主御主の相撲

話者 吉田ツル（明治三八年十月十日生）

翻字 津波古米子

まし、あのー、觀音堂かんのんどうでよー、青年せうねんを集めてよー。

あのー、相撲あおひきとりしよつたそです。で、御主ごしゅといふ

のは王様おおさまでしょ。やぐと、あのー、「御主ごしゅんで」
下なしーねーう罰ばこうむいくとやー、あぬ、しぐ君きみ
や力ちからあていん、御主ごしゅどう上うえなすんどー」と言つてよー。
そんないしてよー、青年達せいねんたちの相撲あおひきとうえー。「喜名きなぬ若わかな
者じん達たちあ集あつまり、私わたくしと相撲あおひきとうていんら」ちゃくと。

と言つた。

また、親達おやぢがよー、「えー、御主ごしゅどう相撲あおひきとうい
ねーやー、すぐ勝かつつちゅんち上うえんでーなていからやー。
しぐ恐おそれりならんくとやくとやー〈恐れ多いからん
ちよーるばー〉しぐ下くだるないんどーやー。負ふきやーに
すぐ貴方あなたがるさつとうか転ころぶんどーやー」と言つて親おやぢ
達たちは教えて行ゆかしよつたと言つておりました。

また、親達おやぢがね、「ほら、御主ごしゅと相撲あおひきを取とる時はね、
すぐ勝かつとうと思つて上うえになつてはいけないよ。恐れて
いなくてはいけないから。〈恐れ多いといふこと〉す
ぐ下くだになるんだよ。負ふけて君きみの方からさつと転ころぶんだ
よ」と言つて親達おやぢは教えて行ゆかせたと言つておりまし
た。

注① 164頁注①参照。

注② ここでいう御主とは、尚瀬王のことであり、通称ボージ御主とも呼ばれている。沖縄各地を行脚したようで、名地にその伝説が語りつがれている。

92 坊主御主の話

話者 吉田新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 大城 薫

（坊主御主の）名前が尚瀬王です。尚瀬王は喜名とどういうような縁故があつたかは知りませんがね。とにかく、喜名の何といいましたかね。屋号はミーグチ注①、ミーグチといいう所に宿してですな。とにかく喜名を主体によく遊んでおつたようですよ。

そして、その人が遊んだ場合にね、このワタンジヤガーといつて、人民が飲んでおる井戸、井戸があるわけですよ。水は、それをその沖縄の王様も一緒に、その水を人民と一緒にあげては失礼になるからというて一新しく坊主御主の井戸として、あそこに、觀音堂の西に造つたわけですよ。西の側に、そして現在残つておるです。坊主御主の井戸注②というて、その井戸があるし。

そして、またミーグチの子どもにですね。坊主御主と同じ年ごろの人注③がおつたそうですよ。そしてその子どもと角力をとるというと、角力をとつたらですね。「あまぬ人注④お坊主御主やぐとう、ありんどー負かしーねー罰かんじゅんどーやー」と、必ず負けなさいと言うたが、子どもだから意地からも勝つてしまつてですな。死んだそうですよ。子どもは、そしてミーグチはなくなつておるですよ。ミーグチといいう屋号は。

そして、こんどはまた観音堂ですな。現在の観音堂ですよ。観音堂は喜名の与久田ウンマーという人がですな、墓地をするために、そこを屋敷をとつてあつたそうですよ。そして坊主御主がですな、「そこは観音堂を造らなければいけないから、や私に譲ゆつてくれ」というので、現在の観音堂を坊主御主が造つたという話ですな。

採集 S 55・2・14 読谷ゆうがおの会（大城薰、知花春美）

注① 現在喜名にはこの屋号は存在しない。現に、メーチナーのアサギ（はなれ家）を借りていたという。

注② ワンジャガーとも称す。もつとも重要な井戸でウブガードである。出産、死亡、正月の若水を汲む井戸である。

注③ 喜名小運動場西側にある二一ブガード（ひしゃく式の井戸）。戦前までは飲料水用として利用されていた。隣部落の座喜味部落にも「ボージガード」がある。

注④ 喜名部落の北西の小丘に観音堂はある。その中に祀られている観音像は温顔の女神で、人々のいかなる苦惱も救い、又、願いも叶えてくれる慈悲深い仏様で、旧暦九月十八日喜名部落を中心に村民による観音拝みが現在でも続いている。

坊主御主と カンドバーズネー

話者 吉田 新太郎（明治三五年十一月十日生）

翻字 大城 薫

（坊主御主が）長浜兼久のところに遊びに行つたらですな。ちょうどお昼の時間であつたそうですよ。ひもじいものだから、長浜兼久の長浜芋ながはまももという大きな芋がある。白い芋しろいもですよ。その芋ももとカンドバーのスースーねーですな。カンドバースースーとガチュンがちゅんという魚さかながありますがね。〈これ長浜がチュンがちゅんというて、長浜ばかりに寄るよといふ

ですよ。その魚は、そこの魚を入れてカンドバースーネーをやつたら、（それが）おいしくて、これを首里の人にあげたら失礼になるかもしれないからというて、あげないのをですな、「私も少しくれてくれ」と言うて、それでこれを「うきがらりーがやー」と言うて、〈食べられるかなあという意味ですよ。〉そして坊主御主にあげたら非常においしくあがつたそうですよ。「あつたらもう少しぐれんか」というのに（言つて）精神入れて食べたということですよ。

そして、首里の城に帰つてですな。「あのカンドバースーネーが忘れられないから作つてくれ」と言うので城ぬ炊事場の方にですな。いいつけても、何度作つてもおいしくはないという。そしたら最後にはもう、手をあましてですな。兼久の人を呼んだそうですよ。

（兼久の人は心配して）「殺されに行くんだ。御主加那志前の前にだから、もう殺されるのがあたりまえ」と言うので、死ぬ覚悟で行つたらですな。反対にそうではないというのです。「あなたの家であげたカンドバースーネーが忘れられないと言うて、（私が）何度作つてあげても『おいしくはない』と言うので、文句だらけであるからおまえを呼んだのだ。ひとつカンドバースーネーを作つてくれ、御主加那志前にあげるから」と言うので、御主加那志前に作つてあげたそうです。

そしたら、「これもおいしくない」と言うそうですよ。坊主御主は、そしたら兼久のウスメーが、おじいさんが言うにはですな。「『やーさどうまーさどう』という昔からのことばがある。『やーさどうまーさどう』と、貴方達ややーさんでいる事や、知つちえーめんそーらんぐとう、知つていらないから、いつもその、どんなおいしい物をあげてもおいしくないと言うはずです。ひもじい時にはどんなまずいものでもおいしいものだ。だから『やーさどうまーさる』という沖縄のことばがあるが、これをあなたは知らないんだ」と言うたらですな。「ああ、『やーさどうまーさどう』でいるくどうばぬあるばーい」と坊主御主が初めてわかつたというんですな。
それで長浜兼久の東側に田圃があるですかね、これを褒美にくれて兼久地、これ公

儀地と兼久地というんです。

採集 S 55・2・14 読谷ゆうがおの会（大城薰、知花春美）

注① 地名。読谷村字長浜の砂丘地をいう。カニクとは一般に海岸地方の砂地を指し、長浜における砂丘地は、現在の公民館を中心とした一帯と、東方の旧水田地帯がある。

注② 料理名、さつまいもの葉を茹でてみそであえたもの。おかげとして、または三時のおやつ、漬物の代わりにお茶うけとして食する。

注③ 漁名、アジ科、秋に多い魚だが春季に産卵し数cm位の幼魚が初夏の頃まで沿岸付近の岩礁の上を遊泳しており餌料にも利用する。秋季には成長し、群れをなして回遊する。漁期は断続的に初秋から春季まで続く。沖縄ではミンチャー、ミータンゴー、シマガツンもガツンに含めている。塩焼き、煮つけ、フライにしてもおいしい。

坊主御主と城間仲

話者 吉田 新太郎（明治二十五年十一月十日生）

翻字 大城 薫

城間仲（じまなかよし）という屋号（やごう）がありますがね。城間仲は「あるなーかどう城間仲」という昔のことばがあるわけですよ。「あるなーかどう城間仲」、たくさんあるところは城間仲であるという意味ですな。

そして、城間仲というところは、そのおばあさんは目もですが、鼻のところまではげて、ひじょうにミーハガ（ミーハガ）であつたそうです。それが、ことに火をぬくもつている時に火をぬくもつている時に火をぬくもつている時に、

メーチャー^{注③}という沖縄の、男のふんどしみたいなものでしよう、女のメーチャーというものは。

あれだから、すぐ、坊主御^う主^しが水飲みに行つて、そのハーメー^がおつたもんだから押し倒してですな。まあ、関係したそうですよ。そしたら、関係しておばあさんは非常に泣いたというですよ。「もう夫以外の人に行われて、これは非常に失礼だ」というので泣いておつたら、そのおじいさんは門の所で、坊主御^う主^しが出て行くのとすれ違うたそうです。
（シンパン^というて顔隠しがあるでしょう。）シンパンの所で逢うたら、「もうこれケンカさせてたいへんことになつた。たぶんケンカになるはずだ」というので、かがんでおつて聞いておつたらですな。「何んち泣ちゆがひやー」と、（何故泣いておるかという意味ですな）、「何故泣いておるか」と言うて、夫が尋ねたらですな。「今、行いたる首里人に、私、行われた、それで泣いておるのだ。あんた以外に私は関係したことはないから泣いておるのだ」と言うたらですな。
（シタイドー^とほめてやつたそうですよ。）「ああ、これはありがたい事だ。私はおまえみたいな百姓の、一百姓の妻をさわるくらいの坊主御^う主^しだつたらね、あんたは名譽だよ。泣く必要はない。けつして泣くんじやない、笑いなさい」と言うて、そしていさめたそうですよ。夫が。

そしたら、「この人は普通の人間じやないから私の土地は全部くれよう」というので、城間仲の、城間にある公儀地^{じぎち}といふものは全部城間仲にくれたそうですよ。それで城間仲は「あるなーかどうか城間仲」と。

そして、おじいさんはまた、あんまりたくさんの方^おに小作させたら、自分ではやれない。個人に小作させたらですな、個人に小作させたら、その小作料は全部、その時的小作料ですな。上がっても上げない。そしてまた、下がつても安くしない、上がりもしないと、いつも通してこの小作料を安く、持ちやすいように小作人にはさせたそうですよ。それで喜んでね。小作人も、「あるなーかどうか城間仲」と言うて、ほめて百万貫模合までもやつた家庭ですよ。おわり。

注① 浦添市城間にある富豪の屋号。

注② ただれ目の人。不美人をさす。

注③ 農村で女の用いるふんどし。

注④ 「でかしたぞ！」という意味

注⑤ 百万貫の摸合

95 城間仲

話者 比嘉ウト（明治三七年九月十日生）

翻字 山内智子

年ぬ夜によー、城間仲すん所んかい、大変なー、貧乏者ぬよー、あぬー、子供達あ年どらする錢んぬーん、食物ぬんねーらんなたぐとう、城間仲金持人やぐとううまんじ、盗りちやーなかい、あぬ、子供達や物ん食りわるやるんりち、うまんかいなー、昼うとーていうぬ盗人お隠つきたぐとうてー、あぬ天井んかい。隠つたぐどう、うぬ城間仲ぬ主え、うりうみかきていよー、見じみそーやーに。

あんさいなかい、うぬ、年ぬ夜うるつさなし、年と

大晦日に、城間仲（屋号）といふ所に、大変な貧乏者が、あのー、子供達に年越しをさせるお金も何も、食べ物も何もないのに、城間仲は金持ちなので、そこから盗んできて、あの、子供達に、物を食べさせねばと、そこへ（城間仲）、昼のうちから、その盗人は隠れた。あの、天井に（隠れた）。隠れたので、その城間仲の主人は、それに気づき、見つけてしまわれた。

そして、この大晦日は、皆、年越しをして、下男達

ういやー、皆、んじやくわぬちやーん皆くいてから、
「今日ぬたましえー一人分えーやー、じゅんぬとう
い、うちあましよー」。んりち、うまぬ女主んかい、男
主ぬいーちきていさーい、うちあまちやーによー、「
とー、皆なー、うりやぐどうやー、家かい帰りよー」。
りち、あぬ、じにんくわぬちやー家かい帰ちから。

「うるつさ眠り。」りち、家ぬにんじゅん皆眠して
から、「とー、あぬ、天井んかい上とーしんやー、う
りていつち、年とうり」。んりち、さぐとう、あはー、
見らつてーさやー、私ねーりち、うりからなー、うり
ていちやーに、「わっさいびん、実えー、盗るしーが
るちょーびしが」。りちさぐどうやー、「とー、いやー
や、あぬあんかんやらーやー、うぬ、いやーんちゆふ
あーら食り、うぬ肉んうりん持ちやー、錢ん持ち家ん
じ、子供達ん年とうらしよー」。りち、あぬ持たしみそ
ーちやぐとう、うぬ情さーなかい城間仲すん所お、い
つちんいえーきえ栄ーたんでいる話、うつペーうびと
1。

も皆食べさせてから、（男主人が）「今日の（御馳走
の）配分は一人分を皆と同じように入れて余分に並べ
ておきなさい」と、その女主人に、男主人が言いつ
けた。余分に準備しておいてから、（下男たちに）「
もう食事も終わつたし、家に帰りなさいね」と言つて
下男達をみんな家に帰した。

「みんな眠りなさい」と言つて、家族もみんな寝か
せてから、「もう、あの、天井に上つている者よ、降
りて来て、年越しをなさい」と言つた。そうしたら、
「なるほど、見られたのだなあ、私はー」と思つた。そ
れから、降りて来て、「悪うございました。実は盗み
をしに来ているのですが」と言つたので、「どうか、
あなたは、あのそうこうなれば、これをあなたもたつ
ぶり食べて、この肉も持つて行き、お金も持つて家で
子供達に年越しをさせなさい」と言つた。そして、持
たせられたので、この情で城間仲という所は、いつま
でも金持ちで栄えたという話。これだけは覚えていま
す。

坊主御主と翁長真鶴

話者 比嘉正貞（明治三三年九月二五日生）

翻字 安里和子

あのー、小湾の方に別荘があつたつて、（うん、もう最後は小湾で亡くなつてゐる）

小湾の方、それで女はもう昔、昔やれー御主んち。

なー、どーいう女も勝手にやつていー。だから此処んかい、えらいかーぎぬ居ていやーびん。あぬ翁長真鶴

注①

翁長真鶴。

ウスク、ウスク堂のウスク

枝むちぬ美さ、翁長真鶴が涼み所え、涼み所

こういう所であつたそうです。

うりまやーち、坊主御主や、うまんかいめんそーち

うりから壺屋、うまんかい建ていらちい、沖縄ぬ壺屋

うんじゅなーんうまんかい、こつちの方に壺屋、もう、

あれが命令通りだから、ちやーし此処んかい来がどう

しんやれー、あぬ城間クージャー、あぬ小湾の上、城

間クージャーなー、有名な沖縄の上等の土地、うりんかい夕顔作てい、市場んかい出じやちやくとう、くぬ

あのー、小湾の方に（坊主御主の）別荘があつた。
（そして、最後も小湾で亡くなつてゐる）

小湾の方では、昔は女の存在は御主の勝手だつた。
御主といえば、もう、どんな女も勝手にやつていい。
だからここに大変な美人がいたそうです。あの翁長マジル、翁長マジル。

ウスク、ウスク堂のウスク

枝ぶりの美しさ、翁長真鶴の涼み所、涼み所

そういう所であつたそうです。

これを惑わして、坊主御主はここにおいでになつて

それから、壺屋をここに建てさせて、沖縄の壺屋を貴殿の所（喜名）に、ここに、こつちの方に壺屋を建てた。もうあの人の命令どおりだから、どうして（坊主御主が）ここに来たかというと、あの城間クージョー

はあの小湾の上の城間クージョーは有名な沖縄の上等の土地だつた。そこに夕顔を作つて、市場に出すと、

田舎ぬ、また、少な一作人や、「今日やでいきらんたつさー、やな坊主御主ぬゆん夕顔ぬ出来てい、売らんたん」ちなー、戻てい来るふーじ。うぬ坊主御主や、聞ちよーるふーじやーさい。さくとう夜から馬乗やーに、うぬ、自分ぬ作てーせむる踏潰ち、なー農民助きらん、私がうり作ていすんでいーねー、農民殺すくとうんち、ちゅらーく踏潰ち。

なーまた此処んかい来、くりうてーあぬ、壺屋人衆連おてい来に瓦焼ちやーなじきらち。あんし、んまんかい、坊主井戸んちあしえー、うぬ坊主御主が召上てる井戸やるふーじ。坊主御主が召上てる。あんし此処んかい、子産さんばー、うぬ翁長真鶴まやーちるうくとう、だー首里んかい連おてい行けーありが勝手やしが、あねーあらんどうあくとう、あぬー、逃ぎ回いし。

あんしうぬ時分、玉城んかい、私達祖先ぬ、あぬー、ナビーんち、めんしえーたんでいしが、うれー、なー首里かい連おつい行ちゆんでい言ちやくとう、あとー、名や、「アラティ、チラナビー」なさつていあんし二回の一逃ぎてい済まちよーしが、三回目なたくと

この田舎の小作人は、「今日は駄目だつた。あいつ、坊主御主の夕顔が上出来だつたために売れなかつた」といつて戻つて来たそうだ。この坊主御主はこれを聞いたそうだ。それで、夜になると馬に乗つて、その自分で作ったものを全部踏み潰して、もう、農民を助けよう、私がこれを作ると農民を殺すことになるから、と踏み潰した。

そしてまた、ここ（喜名）にやつて来て、今度は壺屋から人々を連れて來た。瓦焼きを名目に。そして、そこに坊主井戸というのがあるが、その坊主御主の召し上つた井戸があつたそうだ。坊主御主が召し上つた。そして、そこでは子供を産まなかつた。その翁長マジルは騙されているのだから、首里へ連れて行けば、その人（坊主御主）の勝手だけど、そうじやないので、逃げ回つていた。

そのころ、玉城家に、私の祖先にナビーという人がいらしたそうだが、それはもう、首里に連れて行くといふと、後は、「アラティ、チラナビー」（洗い髪、美人ナビー）と名づけられた。そして、二回は逃げることができたが、三回目になると、村に命令された。

う、村んかい命令さつとーるふーじ。「汝達あどうめ
いんしゅさーんあらー、死刑どーやー。」んち、うぬ事、
聞ちやーに玉城ぬあのー長男のー、くぬ長浜ぬ撻注⑦そー
いびーたん。あんし私達あ祖先ん相談し、「私ねー首
里かい連らつてい行かやか、私ねーウイキー追ていあ
まんかい行ちゆくとう。」だー昔なら、昔やれーなー
くまから、長浜行ち隠くれー知らんせー。それで夫婦
別りすぐとう、あぬ、「なーや、なー妻探めーていう
りしとうらし。私ねーんちえーとうらすな、私ねーう
り一人養育すくとう。」んち。

あんしから首里んかいまた私達祖先えー行ぢよーる
ふーじ。うぬナビー名どうやしが、「アラティフィ
ラティ」んでい言んよーふー。こつちの言葉は、トウ
メーインでい、探すというのは、アラティ、そして「
アラティ、チュラナビー」と言つて、甕の、甕ぬう
りにん、りつば書かつとーんよーさい。あぬ坊主御主
ぬ、ありんくりんむるしかさんでいさくとう、くりう
て一首里んかい、夫、行ぢやんでい、私達やうぬ、う
ぬわつくいやいびーん。坊主御主が勝手どうやくとう、
むらに、むらくわーやかー、私が逃ぎれーうぬ時分や

「お前達が探せないのであれば死刑だぞ。」と。そのこ
とを聞いて、玉城（屋号）の、長男はこの長浜の撻注⑦を
しておりました。それで、私達の祖先も相談し、「私
は、首里（地名）に連れて行かれるより、私は兄さん
の後を追つてあつち（長浜）へ行くから。」と。昔なら、
長浜へ行つて隠れないと知られることもない。それ
で夫婦別れもするからと。「あなたはもう別の妻を
探してくれ、私のことは構わないでほしい。私はこの
子一人を育てるから。」と。

その後に首里へ私の祖先は行つたそうだ。その、ナ
ビーの別名だが、「アラティ、フィラティ」と言うん
だよね。喜名の方言では「トウメーイン」というのは、
(標準語)の「探す」で(それはさらに古い言葉で)
「アラティ」という。そして「アラティ、チュラナビ
ー」と言つて、厨子甕ヤシガタにもちやんと書かれていますよ。
その坊主御主が、あれもこれも全部なだめようとする
と、今度は首里に、夫は行つてしまつた。私達はその
分かれです。坊主御主の勝手なものだから、村を犠牲
にするよりも、(ここから)私が逃げれば、その時分

れーよーさい。くまから長浜ながはまんぢけー隠かくつくれーなー
探めーららん。二回、三回目(なだめる)ねーなーウチューンでい
しかたみていよー、ウチューンでいさ。籠かごんかい担かた
てい、しぐ、手探てぐさるいどうやたんでい。

あんしがあねー、隠所あらぐとおぬあていよー、洞穴うつぼぬ、あ、
クシマ洞穴くしまうつぼんじ隠かくてい、二回がえーまー済すしまちよーし
が、三回目さんまくめいねー、村むらくりやるぐとーん、なー大事だいじんち
くりうてー夫婦別ふぶきべつりそーん。

は、ここから長浜へ逃げれば、もう探し出せない。二
回、三回目(なだめる)には籠かごをかついでね。籠には
ウチューンというがね。(マジルを) 篠に担かたいで、すぐ
手探りだつたそだ。

ところが、そこには隠れ場所があつてね、洞穴うつぼに、
クシマ洞穴くしまうつぼに隠れて、二回までは済んだが、三回目に
は、村をあげてマジルを探していることが分り、そ
れは大変なことになつた。と思い今度は、夫婦別れを
させられた。

あんし、あまー次男浦添、首里や次男、首里から、
また浦添うらぞえんかい下りとーるばーてー私達や。あんし、
あまー次男、くまー嫡子、あんなとーるばー。
それで、むこうは次男浦添(地名)、首里は次男、
首里からまた浦添に下つたわけですよ、私達は。そし
て、むこうは次男、こちらは長男ということになつて
います。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班(遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵)

注① 父の代に首里から読谷間切喜名に寄留して來た。絶世の美人で、鹿児島出身の吉田兼康の妻。その屋敷跡は旧部落内の屋号メー

チナー(前臺名)で、現在そこは、吉田新太郎氏が管理している。

注② 植物名。和名アコウ、大木になるのでカジュマルとともに、屋敷木として用いられている。

注③ 喜名部落の原名。中原にある。翁長マジルが髪を洗つてかわかした場所であるという伝説の地。別に掛所でもない。その周辺には、上地墓など古い墓がある。

注④

壺屋焼窯のことであるが、読谷村喜名には、喜名觀音堂東側に古窯「喜名燒窯」跡がある。この古窯は、一六七一年頃まで焼かれており、その後は沖縄市知花窯に移つていったという伝承がある。この伝説に出てくる一八〇〇年代頃の窯となると、旧喜名部落北側にある百年前後の窯跡があるので、その類であろう。今後の調査研究が望まれる。

注⑤

地名。浦添市城間にある原名。かつては肥沃な耕作地であったが現在は米軍基地となつていて。

注⑥

220頁注③参照。

注⑦

長浜部落は、喜名部落の西方にある村で、捷は、近世期の間切内の各村または複数の村におかれた役人、現在の区長に相当する。

注⑧

厨子甕のこと。沖縄では死後三年程して骨を洗い清める儀礼があり、その藏骨器として、壺屋産の厨子甕が用いられた。厨子甕には死者の姓名、洗骨年月日等を記載する。

97
美 女 翁 長 マ ジ ル ト
喜 名 親 方

話者 渡嘉敷 兼 求 (明治十三年六月十五日生)

翻字 神 谷 初 子

自分ぬ親やーさい。初みていくぬ読谷ぬんかい来し
えー、えー、来る年からやーさい。はじめ、首里うと
ーていぬ仕事えーかんやでーるぐとーん。

自分の親がですね。初めてこの読谷に来たのは、え
え、来た年から(他所から来ている)すると、はじめ
は、首里での仕事はこうだつたようである。

ウミナイビぬ監視やでーるふーじ。ウミナイビんで
いしえー、ちやぬふーじーなみそーちやがるんやれー、
幸地親方んかいうえんそーちさしが、あぬ、うぬ次に、

ウミナイビの監視だつたようだ。ウミナイビとい
のは、どういう人だつたかというと、幸地親方の、あ
の、今の言い方をすれば妻ですね、妻になられた。幸

政治ぬ違ていよーさい。日本世など一るふーじ。
政治 せじ 處 ち 事 じ

注②

地親方の妻になつて行つたが、その後に、政治が代わり、日本の時世になつたそだ。

あんなたぐどう、なー、首里うとーー、くぬ仕事
ぬねーらん。また、あれー、幸地親方んでいしえー、
何か、政府ぬ婿やしんにちーてーやー、公費多く持つ
ち、支那んかい行ぢ、「助きていくみそーり」。んち
ぬ御願そーるぐとーん。そーしが、やつぱり、国助き
しんでいるくとー、難かささやーさい。うりがとうじ
らんなたぐどう、幸地親方あ支那うてい戦死そーみし
えーるぐとーん。

さぐどう、うりから、ながらく、幸地殿内うでいウ
ミナイビぬ監視とうし、あぬ、うでーるふーじ。私達
あ親。うてーるふーじやしがやーさい。なー、ながら
くなていちやー同むんなたぐどう、ウミナイビーんか
い御願そーるぐとーん。「替わちくいみそーり」。んち。
さぐどう、ウミナイビーん、感心し、「とー、貴方達
ん後ぬ事ぬあいしんちーてー、あんしえー、くりん貴
てい、あぬー、立ちじゆくんないるぐとーしー」。んで
いち、ウミナイビーから、うりしえーみしえーるぐと
ーん。言やつとーみしえーるぐとーん。あんしさぐどう、
訳さ。

それで、長い年月の間を、幸地殿内で、ウミナイビ
の監視としていたそだ。私達(話者)の親は。殿
内にいたようだがね、もう、長い年月が過ぎてもいつ
も同じ状態だったので、ウミナイビにお願いしたそ
だ。「監視役を替えて下さい」と。すると、もう、ウ
ミナイビも感心して、「そうだね、貴方達も後の事も
あることだし、それではこれ(金品)を貰つて立身出
世も出来るようにしなさい」と言つて、ウミナイビが
下さつたそだ。そういうことで読谷山に来たという

読谷山んかい来んでいる訳。

また、翁長マジルんでいしえーやーさい。ちやぬふ

ーじやがるんしえー、かんなとーるばー。私達や、
実際や沖縄人おあらん。あぬー、鹿児島どうやでーる
ふーじ。吉田兼康んでいる人お、沖縄ぬ政治しーがん
でいち、あぬー、沖縄んかいめんそーちやーさい。長
らくなたぐとう、うれーなー、婿ふーじーなてーんて
ーさい。

さぐとー、うりから、あぬー、真壁親方、江洲親方、
喜名親方、うぬ三人産しみそーやーに。また、じひ、
くまんかいや、立ちじゆくとうしえー吉田兼康やめん
そーらん、あぬー、政治どうやしんにちーてー、また、
大和んかい帰らねーならん都合などーん。あぬ、あん
しからるうりやるぐとーん。

さぐとー、くぬ、翁長マジルんでいしえー、ちやぬ
ふーじなたがるんやれー、くぬ吉田兼康や、うぬ三人
が中ねー、えー、はじめー、真壁親方、江洲親方、喜
名親方。親方んでいしえー、うぬ、シマ貰るちむえー
やるぐとーん。喜名親方、うりやんてーさい。くぬ三
ちが中ね、後ぬ人ぬ貰とーみしえーんてー。翁長マジ

また、この翁長マジルという人はですね。どんな人
だつたかというと、こういうことである。私達は、実
際には沖縄の人ではない。あの、鹿児島だつたそーだ。
吉田兼康という人は、沖縄の政治をするために沖縄に
いらしたそうです。長い年月が過ぎたので、沖縄女性
の婿かなにかになつたんでしょうね。

それで、その時から、あの、真壁親方、江洲親方、
喜名親方、この三人を産んだ。また、ぜひここで生活
しようと思つて吉田兼康はいらしたのではなく、政治
のために来たので、再び大和の方に帰らなければなら
ない都合があり、そういう訳で長くは生活できなかつ
た。

すると、この翁長マジルというのは、どうなつたか
というと、この吉田兼康は、その三人の中では、一番
目が真壁親方、江洲親方、喜名親方で、親方というの
は、そのシマ（村）が貰えたということだそうだ。喜
名親方はこうだつたんでしょう。この三人の中の三番
目で、この人が（シマを）貰つた。（それから）翁長

ルんでいしえー、いつペー美人やでーるふーじ。あん
やでーるふーじやしが、シマ貰とーしんにちーてー、
美しん、うぬ人が勝手やさやー。ユーベーしえーるふ
ーじ。さぐとー、あぬー、喜名ぬ子孫生まりとーるばー。

さぐとー、くぬなー、翁長マジルんでいしが、ウス
クぬ話ぬあさやーさい。うまなかいウスク堂でいちあ
ささい。うれー、私達がー、くぬ世ならん先までー
じゅんにあたんよー。うぬウスク堂や。ウスク堂かき
てい言ちえーしえー。

ウスク堂ぬウスク
枝むちぬゆたさ
翁長マジルが定みどうくる
うまうてい涼むる所んちょーるばー。あんし、歌あち
ゆくらつとーるばー。

マジルという人はとつても美人だつたそうだ。美人だ
つたそうだが、親方はシマを貰つたということで、美
人もこの人の勝手であるので、妾にしたそうだ。そこ
で、この喜名の子孫が生まれたそうだ。
それから、この翁長マジルについてのウスク木の話
があるでしょう。喜名にはウスク堂といつてあります
が、これは、私達の時代、戦前までは実際にありまし
たよ。そのウスク堂はね。このウスク堂にちなんで歌
つた歌として、

ウスク堂のウスク木は
枝ぶりがゆたかである
翁長マジルの涼みどころである。
この場所が彼女の涼み場所というわけ。このように歌
が作られている訳です。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査團第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 198頁注②参照。

注② 俗に大和世とも言う。一六〇九年の島津支配をさしている。

注③ 229頁注①参照。

翻字 山内源徳

翁長真鶴う話を、いつペー美人やたんでいせーやー。
 うぬ翁長真鶴とう北谷真牛とうぬ競いぬあたんでいせー。

翁長真鶴は話によると、大変な美人だつたそうだね。
 その翁長真鶴と北谷真牛との（美しさの）競い合いがあつたようだ。

あんさくとう、北谷真牛や音打つち美らはせーや。
 翁長真鶴や、ぬが喜名うてー美人、いつペーぬ美人や
 しが、いちぬ何日あ翁長真鶴とう勝負どーんち、北谷
 真牛が駕籠んかい乗しらつてい来んでい。

それにまた、北谷真牛も音高い美人で、翁長真鶴も
 （それに劣らず）喜名では一番の美女だつた。それで
 何月の何日は翁長真鶴と（北谷真牛の）美しさ比べを
 するということで、北谷真牛が駕籠に乗せられて（喜
 名に）やつて來たらしい。

翁長真鶴でいせー、また今日や北谷真牛美人がめん
 せーんでいるむん拝みわるないさーでいち。うぬ人お
 髪えいつペー長はぬよー、うぬ人が髪洗いねーよー、
 くまぬウスクんじどううつちやつきていふーしみせー
 たんでい、髪ぬどうく長さぬ。

あんし、自分や洗い髪小し、バサージンかつとうわ
 ーし着ち、飛び出じたくとう、あぬ北谷真牛や見じゆ
 る人おうらん、翁長真鶴どう見ちやんでい皆。人ぬあ

それで、（美人比べの日）自分（翁長真鶴）は洗い
 髪にバサージンを簡単に着けて飛び出した。すると北
 谷真牛を見る人はなく、翁長真鶴に人々の目は集まつた。

るうつさ。どうく美らさぬ翁長真鶴や美らさぬ。

注③

うりさくとう、首里ぬあぬ御殿からアツトーメーや
亡ちしみそーちやくとう、自分ぬ本妻や亡しちやくと
う、くぬ翁長真鶴妻するうりんかいなとーてーるふー
じ。

あんし、妻し、首里かい上とーみせーんでいんどー。
うぬ翁長真鶴や、^{注④}上とーみせーんでいしが、うまぬ御
子ぬサードカウマリるせーてーさに、男ぬ親んかい、
「あぬ、お父さん、うぬ人お国元んかい里方んかい帰
ちくいみそーり」。「ぬが、何故んちあん言いが」で
いちさぐとう、「息ぬ短ぢやはみせーん。寝んとーる
息ぬ短ぢやはみせーぐとう、長生命え拝みみそーらん
ぐとう、あぬ国元んかい自分ぬ生まり島んかい帰しみ
てい、うりしんそーり」。りちやくとう、「えーあんや
んなー息えじよーいやんなー」。んちやぐとう、「息ぬ
んどうさみせーぐとうやー、長生命え無みそーらんぐ
とう、帰し」。でいち。帰ちいひ小さぐとう、んちや、
亡しみそーちやんでい。

だーうぬ人お亡ちやーにかい、うぬとうーいさーに
かい、私達あ喜名一門ぬ御墓んかい送らつとーさ、

あまりにも翁長真鶴は美しかつた。

そうしたら、首里のある御殿の奥方がお亡くなりにな
り、本妻を亡くした主人がその翁長真鶴を見て、ぜ
ひ妻にしたいということで、話が整つた。

それで、妻として首里に上ることになった。その翁
長真鶴は（後妻として）上つたそうだが、そこの（先
妻の）御子が靈力高く生まれていて、（その子が）男
の親に、「あのうお父さん、その人は国元へ里方へお
帰し下さい」。（と言つた）「何故、そのようなことを
言うのか」と（父親が）聞きただと、「その人の息
が弱々しく聞こえます。寝ているときの息が弱々しい
ので、命はそう長くはないと思ひます。国元へ帰して、
自分の生まれ島で残りを過ごさせて下さい」。答えた。
「えつ、そうか、そんなに息は弱々しいか」とたずね
ると、「息づかいはとても弱々しく長生きはどうてい
無理だと思えます。帰して下さい」と言つた。（里へ）
帰つてからしばらくして（ほんとうに）亡くなつたらしい。

そして、その人は（首里の御子が）言うとうり、亡
くなつて、私達（話者）の喜名一門の御墓に送られて

ジーファーん、鏡ん、今んあいまま。

いるはずだ。ジーフア（かんざし）とか鏡とかが今もその当時のままにあるらしい。

うぬ人おおねひとお翁長真鶴や、前喜名ぬ娘いつペー美人やたんでい、いつペー美らさぬ、うぬ人ぬ髪え地面うつちきーたんでい、家うてい洗たーにかいやーウスクドーよ、ウスクんかいどう打つちやきていどう髪えちよーん干しみせーたんでい。あんすかぬ、髪持ちやん、いつペー美人はたんでいしがよー。あんし家んかい帰ていち、長ながやもーらんたんでいんどー、すぐ亡まちさーにかい、夫おぐさいん取とらんなー、親ぬ家うてい、うぬままし、親ぬ御墓おはまんかい入いちよーみせーるばー。今ん、まーにん、うぬまま。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第八班（上原利津子、知花千代子、知花俊治、渡ヶ次喜美子、崎浜博子）

注① 北谷モーザーは絶世の美人であり、その歌声は空飛ぶ鳥も思わず止まつて聞き耳をたてるほど、美しかったといわれる。北谷モーザーについてはいろいろな説があり、時代の考証も明らかではなく、美しい伝説の女となっている。

注② 芭蕉の纖維で作った着物。戦前までは代表的な庶民の衣服であった。

注③ 接司の妻の尊称。

注④ 神に司える人は、サーダカウマリをしていて、神人になる前ぶれとして、カミダーリ（神祟り）と称して急に、原因不明の精神異状をきたす。その後、ノロとかコデ、根神、あるいはユタなどとなる。

翻字 津波古米子

廢藩の後(注①)、喜名一門ち言ちよーるばー。喜名一門
ぬ元ぬ、あぬ、廢藩になていさぐとう。首里から、あぬ
い、喜名かい下りていめんそーち。うぬ二百年前に喜
名に寄留していらつしやつて、その家族の娘がとても
美人で、そして、その名前が「翁長マジル」翁長とい
うのは姓、マジルは名、翁長マジルと言つてとつても
美人がおりましてね。

廢藩の後の、喜名一門のことのようだね。喜名一門
の元が、廢藩になつた時のことである。首里から、あ
の、喜名に越していらした。約二百年前に喜名に寄留
していらつしやつた。その家族の娘がとても美人で、
そしてその名前が、「翁長マジル」と言い、翁長とい
うのは姓で、マジルは名前だが、翁長マジルと言つて
美人がおりましてね。

そしてから、首里でも美人ということが評判(注②)にあつ
たんで、若い男の侍がよく馬でこの翁長マジルを見た
い、会いたいと言つて、よくまー首里から喜名間切に
通つたそうですが、なかなかそのマジルーさんが、「
自分は田舎者になつてしまつて、もう全然、あのー、
そんな尊い偉い人の男の方に、顔もないし、それを言
つて、今から首里に嫁ぐわけにもいかないから、もう
自分はもう、そのまでいたい」と言つてですね。で、
逃げ隠れして、そうして、何べんも、何べんもいらし

首里にいた頃から、首里でも美人だと評判になつて
いた。(それで)若い男の侍がよく馬でやつて来て、
この翁長マジルを見たい、会いたいと、よく首里から
喜名間切(部落)に通つたそうですが、なかなかその
マジルーが、「自分は田舎者になつてしまつて、もう
全然、そんな尊い偉い男の方には(会いたくない)顔
も美しくないし。そうだから言つて、今から首里に
嫁ぐわけにもゆかないから、もう自分はこのままでい
たい」と言つて逃げ隠れしていた。そして、何べんも

たそなうだが、そんなして逃げ隠れして、あれでしたそ
うです。

逃げた所が、二間ぐらいの巾の家の後の所の木も生
えないし、草も生えないというあれで、その人が〈シ
ジダカサンと言いますかね方言では、何と言うかね。
またこれは方言でしか分らない〉まー尊い人と言いま
ましようか、シジダカサル人なていどう草ん生らんて
一さにといふ話です。そしてその人は、若いうちにで
すね、亡くなられたそうです。もういっぱい男の方が
馬を乗りかけて見に来たり、会いに来たりするけれど
も逃げるから。

そして、そんな評判が沖縄中に伝わって、北谷モー
シーガ、「沖縄では、私一人どう美人んでい思ひしが
やー」あぬー、なーまた、読谷山間切喜名にん美人が
翁長マジルんち居んでいーくとう、今度お容姿勝負し
行きわるやんち、馬乗てい行ぢやくとう。

あんさぐとう、またマジルぬアヤーが、「えーマジ
ルー、貴女とう容姿勝負すんち、あぬー、北谷モーシ

何べんも通つたそなうだが、その度に逃げ隠れしていた
そなうだ。

逃げていた所は、二間ぐらい離れた家の後で、（そ
こは）木も生えなければ、草も生えない所だつた。（
それは）その人が〈シジダカサン（靈力がある）と方
言では言うが、（共通語では）何と言いますかね。私
は方言しか知らないけれども）まあ尊い人と言いま
ようか、気品の高い人ゆえに（マジルの住む所には）
草も生えなかつたのではないかという話です。そして
その人（マジル）は若い時に亡くなつた。大勢の男た
ちが馬に乗つて見に来たり、会いに来たりしたが、（
マジルは）逃げて姿を見せなかつた。

そして、そんな評判（美人だと）が沖縄中に伝わつ
て、北谷モーシーは「沖縄では、私一人が美人だと思
うのだが？」と。（それで）私の他に、読谷山間切の
喜名にも翁長マジルという美人がいるというから、今
度は（その人と）美人勝負をしてみたいと思い、馬に
乗つて出かけた。

そしたら、マジルの母親が、「ほらマジルー、貴女
と容姿の勝負をするために、北谷モーシーが來て いる

「が来んでいくやー、と一出じて、容姿勝負しく一わ」んちやぐとう、「何が、ある容姿どうやる、美着物ぬん着れー」んでい言ちやぐとう、「んーんー」んち。普段着つけて、芭蕉のウシンチーして、髪は洗つてじきだつたから、もう櫛もけずらないですぐ出行つたそうで。したら、まー遠く見た時には、「あー、あれか、翁長マジルーというのは」と言つてですね。まーあの北谷モーザーも見つめていたそうですが、だんだん、だんだん近くないしんでー、やつぱり自分より上といふことが分つてですね。それで今では、十メートルぐらいからはね、逃げたでいー。「私が勝んむん」ち。

でもあの人はいつペー着飾てい美すがいし来。またマジルや「何が出じて、勝負しえーわ」んちやぐとう「何がある容姿どうやる」と言つて普段着を着て、で、髪も洗つたまで出てやつたら、もう初めは、「あーありどうやるい、翁長マジルーんでいしえー」と見て見つめていたそなだが、だんだん、だんだん近寄つて來ぐとう、「とーとー、私が及ばんむん」と言つて、うまーしぐ後なち逃んぎたんと言つておりました

そうだからね。すぐ出て容姿の勝負をしておいで」というと、（更に母親が）「どうして、貴女は容姿もあるし、綺麗な着物を着けて行きなさい」と言つた。（マジルは）「いやだ」と言つた。（それで）普段着の芭蕉の着物を着けて、髪も洗つたままで櫛も通さずにすぐ出たそうだ。すると、遠くから見た時は、「あああれか、翁長マジルというのはー」と言つて、この北谷モーザーも見つめていたそなだが、だんだん近くなるにつれ、やつぱり自分より上だということが分り、（逆に）十メートル近くまで来ると逃げたそなだ。「私は勝つ自信がない」と。

だけど、あの人（モーザー）は凄く着飾つて美しい装いで来ていた。それにマジルは、「どうして、出て勝負しなさい」と言われて、「何だありのままの容姿じゃないか」と思い、普段着を着て髪も洗つたまで出て行くと、もう初めは、「ああ、あれか、翁長マジルーというのは」と言つて見つめていたそなだが、だんだん近寄つて見ると、「これは私には及ばない」と言つて、そこを後に逃げ去つたという話。

ね。

あの歌は

ウスク堂ぬウスク

枝むちぬ美さ

翁長マジルが涼み所

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第三班（渡ヶ次勲、知花利江子、国場春美、大村久恵、当山勢津子、津波古米子）

歌には

ウスク堂のウスクは

枝ぶりが美しい

翁長マジルが涼む所である

注① 琉球の廢藩置県は、明治十一年（一八七九年）である。

注② 間切は、現在の市町村に相当するので、ここでは喜名村の誤りである。

注③ 236頁注①参照。

トンドンモーシー

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 阿波根初美

かいよー、賭博人が居てーんてー。なー、負けそ
ーぎさないねー、榜けー脱じやーに、かんし前はとー
て、賭博すたんりー。あん、うり見ちやーにかい、
男達や、「あぎじやびよー」んり、見じゅる間ねー、あ

（北谷）にね、賭博人が居たそーだ。もう、負けそ
うになると、榜を脱いで、こうして前をはだけてみせ
て、賭博していたそーだ。そして、それ（前をはだけ
たのを）見て、男達が「あれまあ！」と言つて、見る

りんかい皆るさりーたんりー。

間には、あの（モーシー）に皆なやられたそだ。

注①

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第五班（山入端孝子、上地直子、崎浜盛善、儀間真章、金城清美、金城宏子）

注① 話者は北谷村の出身、トンドンモーザーと言つてゐる。歌人、北谷モーザーとは別人物のようである。

死刑になつた掟 (I)

話者 比嘉正貞（明治二三年九月二十五日生）

翻字 神谷初子

浦添んかい、武士が…。首里から浦添までは半里まで
もないと。綱引ちぬ武士ぬ綱引ち、両方、綱引ちえう
りやくとうくまからん、くぬ人数から藁もらいがち。
また、分らんくとう、また、くぬ、ひと所に二回も
来るから、もうその青年ぐわーたちは、追い漬したそ
うです。

浦添で、武士が…。首里から浦添までは半里もないと言
われてゐる。綱引きの時に武士が綱を引いたが、両方
とも綱を引くには藁が要るので、両方から何人かの人
が藁を貰いに來た。どこから來たのか分らないので、
同じ所に二回も來るので、もうその青年たちはその武
士たちを追つ払つた。

それから、追い漬したら、掟注①んち、昔えー、今の区
長がおつたそうですが、その区長が、「大変なこと
でー。村中ゆばりーしやか、私がはんち来くどうやー、
貴方達や、もし私が、命ぬ無んむんるんやらー、後始
が行つて解決して來るから、貴方達は、もし私の命が

末お貴方達がしー』

そう言つたら、それは、九十年一百年まで未だなりません。〈自分の親は九十九歳だから、見ちえー見だんたしが、現在ぬ話やんどーんち、いつも聞いております〉そして、その捷が引っ張られて行つたら、もうみんな泣きぞ泣いて仕方ない。武士ぬ勝手やくとう、後にカンプー小は包帯で六月太陽んかい上げて、後に手を引っ張つてしたら、もう十時から四時ぐらいまでは、死んでおつたそうです。

それから、死んだら報告したら、その引っ張つた人は大変。またその後が恐ろしい。また、字ぬ協議してくれー、夜ないるんさー、死体やちょーん取つていちやーに。知らん振なーし、くり持ち出じやすせー、あれー大変すしが。また、村あ大変。くれーなー、死体とりに行つてようやく引っ張つて来て、葬式もして、字の協議であつたそうです。

どこでも反対や居せーやーさい。一部分の一内どう反対やいびーん。私達やうさぎらん。スーコー毎年、

なければ、その後始末を貴方達でして欲しい』と頼んだ。

そう言えば、このことがあつてから、九十年か百年にはまだなつてない。〈自分の親は九九歳だが、見たことはないが現在の話だよ。といつも聞いております〉そして、その捷が引っ張られて行つた後は、みんな泣きに泣いて仕方がなかつた。(その頃は) 武士の勝手だから、頭の後方に、カンプーを包帯で上げ、六月の太陽に照りつけられながら、手を後にしたまま、引っ張つて行つたようだが、朝の十時から午後の四時の間に死んだ。

その後に死んだことを報告すると、その死体を引っ張つて来た人は大変なことになるし、その後が恐ろしいので、部落で協議して、これは夜になると死体だけでも取つて来なけれど。知らん振りして死体を持ち出すのは大変なことで、また知られたら村中がひどい目に合うし。ようやく死体を取つて来て部落の協議で葬式もした。

しかし、どこでも反対者はいるでしょう。一部分の人は協議に反対した。私達は抨みをしない。(と言つ

師走二十四日ねー村御願ちあたん。〔うさぎーせーうさぎらんけー〕んちさくとう、「ドウシなめー山羊ホ^{注④}んちるあるやー、大なーぬ事んでー貴方達がうさぎらんでい言ねー、うぬ人^{注⑤}お相知らのーあらに。」んち。
〔村事ど^{注⑥}うやる、本人の一見じゆな〕んでい。「あーそうか」もう一致している。御願うさぎてい、スーコーし、毎年、師走二十四日ねー。

うぬスーコーぬ味見んならん。私達^{注⑦}あ親ぬ、くまから行ぢ、「あんいちゃんあみ」んち、知らん振なーし、餅小かれーるふーじ。なー、腹ぬ痛しさくとう、「確かに貴方や食らやー」んちやくとう、「あんいちゃんあみ」んち食んでい。手うさぎてい治てい。

それが、このスーコーの供物の味見も出来なかつた。私達の親がそこに行つて「そんなことはない」と言つて、こつそり餅を食べたそうである。すると、腹痛を起こしたので「確かに貴方は食べたでしょう」と聞かれ、「そんなことはない」と食べたようである。(それも)手を合わせて拌んだら治つた。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班(遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵)

注① 沖縄近世紀における地方役人で、捷は間切内の各村または、複数の村に各一人あておかれた。現在の字の区長に相当する職。明治十三年調査の読谷山間切の村捷は、座喜味捷、波平捷、渡慶次捷、長浜捷、喜名捷、伊良皆捷、大灣捷、渡具知捷、楚辺捷の以上九捷である。

注② 十歳前後に髪が短くて結えない場合に、折りまげて小さく結うもの。幼年後期から少年期までは、このカンブーと称するいわゆ

ていた)毎年、師走の二十四日にはスーコーをし、村御願があつた。「反対者は御願もしなくてもよい」と言つたので、「友達ならば、やつて上げるのが当然で、こんなに大きな法事に、貴方達が参加しないというのは、犠牲者に對して済まない」と。「村事だと思ひ、本人だけを見るな」と言つた。「ああそうか」とそれからは毎年師走(旧暦十二月)の二十四日には一致協力してスーコーをした。

るマーユーエー（丸結い）で男女とも同型の結髪をし、その後男子は十五歳になると、カタカシラ結をする。

注③ 村落祭祀のことと、おもなものとして、一月のハチウガン、二月、三月、五月、六月のウマチー、十二月二十四日のウグワソブウトウチ等がある。

注④ 謳。原義は「友達なみに山羊の交尾をしなさい」であるが、意味は「眞の友達なら、苦樂を共にするべし」である。

死刑になつた 捉^{うさ} (II)

話者 比嘉正貞 (明治二三年九月二十五日生)

翻字 神谷初子

あんしまだ、なーーちえー、母親とう娘とう、一向宗ぬ仏小信じてい、くぬ、隠げーんかい家やあつい、なー、うぬ母親ぬ作物ぬあるつさ荒ち仕方ならん。誰なん何んでいん言ねー痛むるふーじ。

それから、もう一つの話は、母親と娘が一向宗の仏像を信じ、隠れかげんな場所に家はあつて、ここの中親が（他所の）作物のすべてを荒して仕方がなかつた。誰かが注意すると、その人は痛まされたそうだ。

さくとう、うり娘んかい、「貴女親あかんすんどー やー。」「私達あ親のーあんねーさん。やしが試^そえーす ん。」でい言やーに。ウーバー^ラ、昔^古えあたん。うりんかいウーやはちなじつち、くれー試^そしわるやるんちかちほーてい、かち散やーに自分や天井小んかいぬぶてい、あんし親ぬ心見じゅんでい。

それで娘に「貴女たちの親は、作物を荒し、また人を痛まして困る」と言うと、「私達の親は、そんなことはしない。でも試してはみる」と言った。ウーバーラ（芭蕉糸を入れる籠）といつて昔はあつたが、それに芭蕉の糸をつないで入れた。これは試してやろうとそれを家中に散乱させて、自分は天井にのぼり、親の

心を見ようとしていた。

なー、入つちぢやーに、うりしえーしえー命えねー
らんりちなー、油鍋んかい入つちよーる肉小転ばし返
らしやるふーじ焼ちゅんでい。「私がるさんどーアン
マーよー」さぐとう、「なー一転ばしねーひやー、い
やーや死ぬたるやーひやー」でいるくとうなでい。

あんしだー、作物ぬ荒ちん、村人達ぬ何んでいん言
ねー痛ざりーんち。今度なー、でーー村中集まやーに
家小けー燃ち二人焼ち殺さんあいねーなー、くりんか
い畑荒さつてい大変。

こういうことを決めて焼いたら、うぬ娘あ力あ強さ
ぐとう、家ぬ後方からぶつとうかち逃んぎていねーら
ん。うりが密告さーに、それで、同年うてい、うぬ捷
えー「なー自分なー、村中うりそーるえーかー、自分
命えーねーらん筈やくとう、なー拝でーどうらしよー」
んち、あんしあまかい行ぢやくとう。

なーんちや、人焼ち殺ちえーん親あ。火ちきやーに、
うぬ娘までい焼ち殺しえーちやーんねーんてーしが、
娘あ逃ぎやーに、うぬ母親びけー焼ち殺ち、だーまた
うぬ捷んあまんじまた死刑。

すると（母親が）入つて来るや否や、こんなことを
した者は命はないと怒り、油鍋に入つていた肉を、裏
返し、裏返しして焼いたそうだ。（娘が）「私が
やつたのよおかあさん」と言うと、「もう一転がしで
お前は死ぬところだつたぞ」ということだつた。

どんなに作物を荒しても、村人達が何か言うと、痛
まされるので、今度は村中が集まつて、この母娘の家
を燃やして二人を焼き殺さなければ、この人に畑を荒
されて大変だと…。

焼き殺すことを決め、（二人を）焼いてみると、こ
の娘は力が強く、家の後方から飛び出して逃げてしま
つた。それで、この娘が密告したので、また同じ年に
二人目の捷も（呼び出された）「私も村中の捷である
以上、私の命はない筈だから、その後は拝んでくれ」
と頼みを残して向うに連れて行かれた。

それはもう（家に）火をつけて母親を焼き殺して
しまつたので仕方がないが、この娘も一緒に焼き殺し
ていれば何でもなかつたのに。娘には逃げられ、母親
だけを焼き殺してしまつたので、この捷も向うでまた

死刑になつた。

で、あのー、浦添からくまんかい来、「なーくまんかい来るむん、うさぎらんていんしめーさに」。んちさくとう、「あねーならん」だー何やーかかいひちぬあるばー。あんさくとう、私達あ親ぬ、「私が生ちよーる間うさぎり」んでい言しが、私子達や沢崎人おあらん、くまん人どうやくとう。私がる沢崎人やる。沢崎人ぬ生ちちよーる間、是非うさぎやびーん。おばーさんが死じやくとうるうさぎらんある。本当ぬ沢崎から生まりたる人おどこに来てもうさぎとーん。

あんしうぬー、「山羊ホーどうあたいさやー」。んでい言ちやる言葉あ山羊ホーする人おうらん。うりに對して、あぬ字まとうみりんでい。皆一致なり。一致なつたら何もできる。「友達なめー山羊ホー」。んち。この言葉ありますよ。沖縄は。これから出でいる。考えてみればそうでもあつたなーと思いますなー。

自分の親だから女の親、あれが元気な時までは御願もうさぎてい、もう私もあつちの生まれだが、あつち

その後、浦添からここに（話者の住所）來たが、「もうここに來てるので、拝みはしなくてもいいだろう」と言うと、「そうはできない」あとで何やかんや悪いことが起るから。すると、私達の親が、「私が生きている間は拝みなさい」と言うけど、私（話者）の子供達は沢崎（地名）の人ではなく、ここの人だから。私だけが沢崎の人で、沢崎の人が生きている間は是非拝みます。おばあさんが死んだので（今は）拝みませんが。本当に沢崎で生まれた人はどこへ行つても拝んでおります。

そういうことで、「雌山羊しかあたらない」という言葉は（あるが、實際には）山羊と交尾する人はいない。つまり、皆な一致協力して部落をまとめなさい。そうすれば何でも出来るのだから。「友が山羊と交尾するなら、友達なみにやることだ」と。この言葉は沖縄にありますよ。こういうことから出でいる。考えてみるとそういうこともあつたように思いますね。

自分の親が元気だった頃までは御願もしたが：。私もあつち（沢崎）の生まれだが、あつちで生活してな

の ^{ひと}人 ^{ひと}で ^{ない}か ^ら。あの ^ー、もう ^じ自 ^分の ^か親 ^が長 ^くら ^こく
れを ^{がんば}頑 ^張れ ^て行 ^けない ^{から}打 ^ち切 ^りつ ^てよ ^ー。前 ^{まえ}か ^らそ
ーう ^さぎよ ^つた ^よ。通 ^つて ^いる。

い ^{ので}、自 ^分の ^か母 ^親が ^長く続 ^{けて}い ^けない ^{こと}と
で打 ^ち切 ^りつ ^てしま ^つた ^ね。以 ^前か ^らそ ^うし ^てい ^るが ⁽
御 ^ご願 ^が) ^通つ ^てい ^る。

採集 S51・10・17 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 一向宗 ^{いっこうそう}とい ^うのは ^{きん}鸞上人（一一七二年～一二六一年）の創始した仏教の宗派で、一向一心に阿弥陀仏を念ずることから一向宗

とい ^う、淨土真宗の異称となつたものである。鳥津氏はこの宗教を禁止して ^{いた}ので、琉球王府でも、この禁制に倣つて取締つた。

一、一八三九年尚育王の時に知念仁屋なるもの薩州の同志と信仰上の連絡を取り法難にかかつた。

一、一八五五年六月、仲尾次政隆等十三名法難にあつて、八重山島に流刑处分された。政隆は法名を了覺と言つて熱烈な信仰家で當時説教等をしてひそかに同志に法を伝えたによる。

一、明治初年、備瀬築登え親雲上等の法難

一、明治十一年一月（一八七八）一向宗の法難によつて処分された者が三百七十余名に及びそれぞれ流刑、寺入贖錢の刑罰に処せられた。

多幸山フエーレーと

話者 比嘉正貞（明治三三年九月二十五日生）

多幸山喜名番所、喜名番所、首里から、首里から、

翻字 安里和子

多幸山喜名番所、喜名番所、首里から、首里から、

多幸山の喜名番所、喜名番所、首里（地名）から、

日ぬ暮ねー、〈女でいらむん、番所に泊ゆみ、急じ村から〉

多幸山ぬフエーレーぬ居くとう、是非、喜名番所んかい泊てい、あんし名護んかい行かなやーんでいる計画やしが、無理に通る人が、昔ぬ、首里ぬ侍ぬ、強盜フエーレーと言たしが、うぬフエーレーや、是非、退治らんあれーならんち、喜名タカハンジヤーんかい公儀から命令さくとう、うぬタカハンジヤーが、三味線ぐわー弾ち、歌、多幸山あびてい、ていーちん出じて一来らん。さくとう、タカハンジヤーん、なーわんねー怖りとーさやーんち、物考出じやちい、女んかい砂儀かみらち、フエーレーや岩ぬ上んかい立つちよーくとう、がきじゅーし、引つ掛けーにーしぐ砂儀投ぎたれー、岩から落ていて、頭を打つて死んだ、死じやん、頭打つち、うにーから喜名タカハンジヤーんでいしえーなー、沖縄うてー優秀ぬ力持ち、武士と名乗られている。あんし、へなまー、うぬ歌ぬちむえーやらやー、やんてーーあんしからどう、くぬタカハンジヤーや、また公儀んかい勤みなでい、公儀ぬ勤みなどーんでいる話え先祖から聞ちよーるばーやん。

首里から日が暮れると、〈女だもの、番所に泊るものか、急いで村へ行こう〉

多幸山にはフエーレー（追いはぎ）がいるから、是非、喜名番所に泊つて、それから名護（地名）へ行こうという計画だつたが、無理に通る人が（いた）。昔の首里の侍（の中で、おちぶれた者）が、フエーレーになつていたそつだが、そのフエーレーを是非退治しなければいけないといつて、喜名タカハンジヤーに公儀から命令すると、そのタカハンジヤーが、三味線を弾いて、多幸山の歌を歌つて通つたが（ところが）ちつとも出て來ない。すると、タカハンジヤーは、これは私を怖れているのだなど知恵を出して、女の頭の上に砂儀を載せて（そこを通るように言つた。）フエーレーは岩の上に立つてゐるのだから、鉤で引つ掛けさせて、砂儀を投げ出すと、（フエーレーは）岩から落ちて、頭を打つて死んだ。それから、タカハンジヤーといふものは、もう、沖縄で大変な力持ち、武士といわれている。いまは、その歌の意味なんだな。きっとそうだ。その後、このタカハンジヤーは公儀勤めとなつて、公儀に勤めるようになつたという話を先祖から聞いたよ。

あつちはまた勤みぬ半ばに、ユツクイ岳うていぬフ
エーレーン（今 の 宜野湾 です よ、ユツクイ岳）、追い
付きらつてい、左右んかい、股引つ裂ち投げてーたん
で いる ゲングン話 ぬあしが、うれーなー本當がやら。
そ その ぐら い、うりぐら いぬ力 持ち やし。

また、くまうて い一三五斤、自分、どうなーが 小さ
いねー、シチシーんちあたしが、田うつち戻やー、鍬
んかい掛きて い、二歳たー、腕力強らさーんち、うれ
ーあいびーたん。戦後どうねーんなとーる。うれー喜
名タカハンジヤーが青年ぬ力比びしみーんでい、一三
五斤。四〇キあつたそ うです。あたんでいいしが、自
分らがうりしーねー欠きやーに、一三五斤などーん。

それからまた、勤めの半ばごろ、ユツクイ岳で フエ
ーレーは（今 の 宜野湾 です よ。ユツクイ岳 とい うのは）
追いつめられて、左右に股を引き裂いて投げたとい
う ゲングン話 があるが、それは本當のことか。それくら
い 力 持ち だつたといわれて いる。
また、ここで一三五斤、自分達が幼なかつた頃は、
シチシー（力石）とい うものがあつたが、田を耕やし
て 戻る時、鍬にのせて青年達が、力勝負をした、それ
があつた。戦後になつて無くなつた。これはタカハン
ジヤーが青年達の力比べをさせるために一三五斤（の
ものを置いてあつた）四〇キロあつたそ うです。そ う
だが、自分たちが大きくなつたら、欠けて一三五斤に
なつて いた。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 多幸山は恩納村にある山の名で、読谷村との境界にある。旧道が残つてお り一里塚も存在する。沖縄ではフエーレー（盜賊）の
出没する場所としてはあまりに有名である。他にその話は聞かない。

注② 読谷村喜名の国道五八号線バス停附近に、東西に両断されて番所跡がある。現在の読谷村役場の前進でその設立年代は十五世紀
頃と推定されている。十八世紀初頭には「番所」の名が文献にも見え、その存在が明らかになつて いる。そして、明治十二年の
廢藩置県によつて「番所」を「間切役場」に改称し、さらに一九〇八年に読谷山役場に改められ、今次大戦前まで利用された。

注③ 人名。生没年代不明。タカハンジャーの造ったと伝えられる墓が、喜名アロハゴルフ場近くにあり、彼はそこに葬られていた。

多幸山フエーレーと

話者 比嘉正貞（明治三〇年九月二五日生）

翻字 安里和子

首里の悪いことをした人が、フエーレーといいます。今の追いはぎですね。強盜、あれをやつて、飯を食つて居る人が居るから、あのう、歌にもありますよ。多幸山ぐわーといつて、あれをしのぐために、公儀というた、昔は、こつちに偉い武士が居つて、喜名タカハンジャーといつて、あの人でなければ治めることは出来ないといつて、三味線ぐわーを弾いて、その人はまた偉い人であつたそうです。穩便な人、人を殺そうと思う人ではなかつた。が、この三味線ぐわーを弾いて、多幸山という歌をしゃべつて、歩いておる。出ては来ない。これを喜名タカハンジヤー、これには剣なんかは入用はない。剣を振りまわして、もうこの人には勝わないというて、（フエーレーは）出て来ないそうです。これは、まあ治めることは是非治めんといけないといつて、女に俵をかみさせて（頭に載させて）そして知らんふりで先にして、昔のカキジュー（吊るしカギ）といつてですね。それを引っ掛けたら、すぐその砂俵は落ろしたそうです。その女は。それで（フエーレーは）頭をすぐ石にぶちあてて死んだそうです。それでこのフエーレーを捕えたということです。

また、このフエーレーばかりでない。あのう、名護から来る人は、また夜になつたらこつちを通れんから、久良波首里殿内はさんどえん注①という所に泊る。あつちもまた、その女がお金、昔のお金はもうすぐ分るでしょう。十円でも、目抜めぬきちやー（一厘錢）とか、お金かねを持つておると思つたら殺す、そしてあのう、「入る人や居しが出る人は居らない」い注②

という、その歌もあつたそうです。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 子孫は絶えてその屋敷跡が、元山田ドライブイン敷地内に残つてゐる。そこには戦前まで久良波部落があつた。

注② ここでの歌には欠落部分がある。「入る人や居すぐ出る人やをらぬ久良波のろ殿内不審どころ」が正しい。久良波の祝女殿内には美人の祝女がいると評判であつたが、しかし、その夫が追いはぎであつたので、美人の祝女をねらつてその家に行く男は誰も無事に帰る者はいなかつたという話である。

15 多幸山フエーレーと 喜名番所

話者 松田ナエ（明治二〇年四月二二日生）

翻字 津波古米子

神谷初子

あぬよー、

注①

多幸山フエーレーでいんどー
喜名番所に泊まらなやー

そーいーのはねー。近いから……。

多幸山にはフエーレー（盜賊）がいるよ。
喜名番所に泊まつて行こうかな

そういうのはね、近いから……。

昔ぬ人お歩つちる偉い人達や、山原旅行んしみし
えーくどう。あまーフエーレー出じーくとうる、喜名
番所んかい泊まらんち。

番所に泊まろうと。

昔の偉い人達は歩いて山原（北部地方）旅行もなさ
つたそうよ。多幸山にはフエーレーが出るので、喜名

あんしから、接司達^{あじま}^{達^た}あめんそーち、喜名つち泊まい
ぐとう。そうしてこの歌はある。「あつちは危^ないから、
こつちに泊つて行こう」んち。

また、なー一ち喜名番所ぬ歌ぬあさ。

イチユビぐわに惚りてい

座喜味村通てい

通てい珍らさや喜名番所

これも喜名番所ぬ歌やさ、二つある。

あんすくとう、偉い人達あ泊まいみしぇーねー、て
一げー女ん泊まいたんでいよー。昔のまぎさる人おう
まうてい宿しみそーち、そうして、面白い喜名の役場
言うて、あんし泊まいみそーち。

そしてまた、喜名の昔の、今から二、三百前ぬ美お
ばーたーん、行きよつたと。だから喜名番所は、きれ
ーな女が泊るから、私らも泊まろう言うて泊まつたも
んです。

多幸山あ、また少し下りて行つたら多幸山やくとう。
今んあしえー多幸山あ。あんさーに多幸山かきらつ
たんでい。

そういうことで、接司達もいらして喜名に泊まつた。
それでこの歌は生まれた。「向う（多幸山）は危いか
ら、こつちに泊まつて行こう」ということになつた。

また、もう一つ番所の歌がある。

娘に惚れて

座喜味村に通い

通つて珍しいのは喜名番所

これも喜名番所の歌なのよ、二つある。

それから、偉い人達がお泊りの時は、決まつて女も
泊まつたそうだよ。昔のお偉方はそこを宿にしていた。
(宿泊が出来るので) それで、面白い喜名の役場だと
言つて、こうしてお泊まりになつた。

そしてまた、今から二、三百年前の昔、喜名の綺麗
なお婆さんたちも（若い頃）行つたそうよ。だから、
喜名番所は綺麗な女が泊まるから、私達も泊まらなければ
言つて泊まつたもんです。

多幸山は、（喜名から）少し下りて行つた所にある。
今もあるでしよう多幸山はー。（怖い場所だつたので）
多幸山かけて歌が作られた。

注① 249頁注①参照。

注② 249頁注②参照。

注③ (地名) 沖縄本島北部一帯の呼称で、恩納、金武村以北を指す。本島中南部では山らしい山がなく北部では100~400メートル級の山岳に富むのでそう呼ばれている。

注④ 琉球王朝時代の位階で、王子の次に位する。一ヶ間切を所領する按司地頭で、その領地である読谷山などをくつつけて読谷山按司と称する。尚真王時代、各地に割拠する按司はすべて首里に呼び集められた。

喜名番所と

多幸山 フエーレー

話者 喜友名 正謹 (明治四〇年五月二〇日生)

翻字 安里和子

読谷の喜名に、番所があつた。今から何年か前、番所は、一八二年くらい前ですが、その頃、国頭に通ずる街道はこの道を通つて、山田、久良波へと国頭に連けいしていったわけですが。また道は今と比べても、とても悪い道で険しい所で、乗り物もない所を、こういう要所要所に番所がおかれで旅人を守つていたわけであります。この多幸山が大変険しい山で旅人が難渋する山道であつた。そこに追いはぎ、沖縄の言葉ではフエーレーといつておりますが、そのフエーレーが時々出て、道行く人に危害を与えていた。それで旅人は、喜名の番所まで来たら安心はするけれども、泊まりたいけれども女の身で旅に泊るのも危いというので、今の、「喜名番所に泊まらなやー」という歌が出来たんではないかと思います。で、そういうような要所になつていった。

次に、その多幸山には、今話すフエーレーが出ていたので、いまさき、比嘉さんが話されたフエーレーの話の退

治というようなことも、まあ（誰かが）どうにかして、何（何時）のと聞いたか分りませんけれども、頭に残つてゐるわけであります。まあ喜名にも、そういうような、いわゆる侍が、武士が力の強い人が生まれていたといふことでござります。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治、仲間博恵、安里和子、島袋守成、神谷初子）

多幸山フエーレー

話者 松田ナエ（明治三十年四月二日生）

翻字 津波古米子（方言）

神谷初子（共通語）

昔えよー、鉄砲んちん無んどあくとう、いつペー
頑丈さる女んかい砂かみらさーに、わざつとうんまか
ら通りよーやーんちやくとう。

んまから通たくとう、上からヘージャーさーにぬち
やくとう、ぬちやーに投つていかちやくとう、あんさ
ーに落ていてい死じやんでい。

上から）落ちて死んでしまったそうだ。

昔はね、鉄砲なんてなかつたので、（フエーレー退
治のために）とつても頑丈な女の頭に砂俵をのせて、
わざと（フエーレー岩）そこから通るように教えた。

（そして）そこから通ると（岩の）上からヘージャ
ー（つるしかぎ）で引っかけたので、（女が）ひつか
けられた（砂俵を）投げ捨てた。すると（盜賊は岩の

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第二班（渡ヶ次勲、当山勢津子、津波古米子、知花利江子、大村久恵、国場春美）

注 一六〇九年の薩摩軍との戦いで、「棒の先から火ぬ出じてい、私腹やびりぶがち」という諺が残つてゐる。

久良波首里殿内

話者 比嘉正貞（明治三年九月二五日生）

翻字 安里和子

屋敷は今もありますが、人を殺して、人殺ちお金を奪いんでいしえし、はつきりそてーるふーじでーん。はつきりそーしが現在捕むことが出来ない。

もー、人お見ちる殺ちえーくとう、穴掘いさーち、家ぬ後んかい、あんさーに、娘。うぬ武士ぬ、「あーくれーかんしえーならん。」むんち、どうーん、道具おー持つち、〈女どうやくとう、女んでーぬんち〉なー眠んだふーなーし、むるうりそーしが、娘どうとう、娘ぬ眠んたくとう、とういちがーてい、娘ぬ座敷んかい、うぬ武士えー眠んていもー、なー眠んらんばーてー、うぬ武士えー。もー計画しておるから、さくとう、包丁持つち来、娘そーるふーじ。うんにんねー、捕みやーに、うぬ、首里殿内えー、治またんでいる話やん。

十ヶ年前掘り出して、あぬ、電柱立てるとき、掘り出したら、もうこつちには出来ないといつて止めた。

十年前に（そこを）掘り出したら、あの、電柱を立てる為に、掘り出したら、もうここには（電柱を立て

屋敷は今もありますが、人を殺して、人殺しお金を奪うということは、はつきりしているそうだ。はつきりしているのだが現在捕えることは出来ない。

もう、来客を待つて殺したので、家の裏側に、（来客があると、その日のうちに）穴を掘つておいたようだ、その娘は。その武士は、「ああこれは、こうしてはいけない。」と、自分も道具（武器）を持って、〈女だもの、女だからと〉もう寝た振りをしていた。娘も寝入つたので、とりかえて、娘の座敷に、その武士は寝ることにした。（ところが）なかなか眠れなかつた。その武士は計画しているのだから、すると、娘が包丁を持つて入つて來た。そこで捕えた。それでその首里殿内はおさまつたという話です。

ることは）出来ないと言つて止めた。

人の骨は今も、あのう、砂ですから今も変りはあんまりないそうです。あのう、遺骨の、土なら腐れるが砂だから腐れん。堀や今も屋敷は自分らもわかる。久良波スン殿内。骨が出て、電柱立てるにも立てなかつたそうです。

採集 S51・10・17 読谷村民話調査團第一班（遠藤庄治、神谷初子、安里和子、島袋守成、仲間博恵）

注① 久良波首里殿のこと。

久 良 波 首 里 殿 内

話者 松 田 ミ ヨ（明治四一年二月一日生）

翻字 島 袋 オツル

宿や、うまんじ、泊いびたんでいやー。おばあさんうまんじ泊てい、うまぬおばあさの一えでいん、鬼どうやてーは。

あんし、泊らさーにかい、なー、遅か夜中ないねー

包丁研じ澄ますたんでいしえー。包丁研じ澄まち、うぬ、

宿は、そこで（山田ヌン殿内）に泊つていたそうですね。ここで泊つて、ここのおばあさんは、たぶん鬼だつたのでしよう。

それで、泊らせておいて、ずっと夜中になると、包丁を研ぎ澄ませていたようである。包丁を研ぎ澄ませ、

泊とまたる人ひとおうまぬ娘むすめ、本当ほんとうぬわたぬ娘むすめやてーんてー。

自分の本当の娘と客は泊まらせていた。

そこで、娘にこういう計画けいかくだから逃げるようによると言いつけた。そして泊り客は（娘が逃げ出したのを）見てないので、そのまま寝ているわけです。（おばあさんが）包丁で夜中に殺し、この人が持つているお金や品物は全部うばい取つて殺したのである。そしてその死体を、自分の屋敷内の畠に埋めていたそうである。

多くの客を屋敷内の畠に埋めていたので、（死体が肥料となつて）冬瓜とうがが大変よくできていたそうである。冬瓜が豊作になり、それを町に出して、この冬瓜を切つてみると、全部、血が流れ出たそうである。

そういうことで、山田ヌン殿内だいえうまつちえー、むる行方不明なとーしょーやー、ヌン殿内だいえ。くぬ、首里くびりんけーぬ使つかんうらんしぇー。

あんしうりさぐどう、うぬシブイから悟さとい出でじやちやぐどう、血ぬそーどうーしるやたんでいどーやー。

こんなことだつたので、この冬瓜から悟さとい出でじやちやぐどう、血ぬそーるない出でじてい、あんし、くまぬしぇーんでいるくとー、分わとーたんでいどーやー子こぬちやーんでい言いみ

シブイ切きつち町まちんかい出でじやちやぐどう、血ぬそー

冬瓜を切つて町に出した時に、血がどつと流れ出来たので、ここがやつたということが分つてしまつたと、（お年寄りが、私たち）子どもに、お話をし

しえーでーるむん。

ておりました。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第八班 〈上原利津子、知花千代子、知花俊治、渡ヶ次喜美子、崎浜盛善〉

注① 屋敷内または屋敷近くにある菜園のこと。面積は二〇~三〇坪ぐらいで、野菜類を栽培している。

注② これは、久良波首里殿内の語り違いである。旧久良波部落跡で、元山田ドライブインの一角にその屋敷跡が遺っている。山田又ノ殿内は、現在でもあり、山田ノロの出た家の屋号で、山田ではこの話が間違つて伝えられているのを至極迷惑千万だとしている。

比屋根岬のマジムン

話者 花城景孝（大正二年九月十四日生）

翻字 神谷初子

僕なんかが六つ七つの頃でしたがね。首里の人で名前は忘れたけれども、鍛冶屋がおつたんですがね、昔はね。兄は奥さん子供もとめて、弟は奥さん子供いないで。それで一生懸命やつて。弟はまた海に行きよつたそうです。親父の側に坐つてよく聞きよつたけどね。これ（弟）がもう時々夜明けになつても帰つて来ないといつて（心配して）僕等の隣りだつたんで起こされてね。兄によ。一緒に探しに行つてくれんかと言われたりしたことが一、二回あるんだよ。勿論僕は行かんけれども、うちの親父さんが行つて、多幸山にこの子（弟）の前に。しかし（探しに行つた）全員に（その弟は）つかまらなかつた。

あの頃からはフェーレー（盜賊）はいないですよね。どうしたんかなあと言つておるとね、夜明け頃に帰つて着

物も破れて来ているんだよなあ。一回ほどあるんだよ。どうしたのかというと、比屋根岬ヒヤガニ^{注①}といつてアダン葉アダンハが生えてそこにマジムン（化物）がおるというてね、喧嘩けんかしてどうしても帰かえられん。その翌日あさじの朝、家いえに戻もどつて行くんですよ。

どんなマジムンかというと、「チラーマジムン、ウシーマジムン（牛マジムン）」^{注②}が。またいつの間にか牛うしみた
いに大きくなつて、道みちをさえぎつて歩けなかつた。男おとこは棒ぼうもつてゐるからね。（商人は）売れ残りもあるでしよう。
(そこを通る商人は) ヒーラ（農具）とかイラナ（鎌）とか持つていて、それで（相手を）叩たたいてどうのこうのと
喧嘩けんかして、しまいには着物など破はいてきたりした。僕等の親父なんかもそんなマジムン見たことないと、最初は怖
がつたけれども、(続けてマジムンを) 打うちつたら「一重じゆうにも二重みゆうにもなつて前に進めなかつた。(そして) いつの間
にか石になつたりしてね。またえらい大きな壁かべになつたりしてね。（そのために）道みちが見えなくなつて通とおれなかつ
たですね。（こんなことが）二回ぐらゐあつたですな。比屋根岬ヒヤガニのマジムンといつてね。

採集 S51・10・17 読谷村民話調査団第七班 〈長嶺洋子、比嘉フジエ、知花健一、新里益子、玉寄春美〉

注①

現在、そこは比屋根ヒヤガニとして知られ、明治時代に造られた。石畳道が残つており、その北東崖下には岩屋がありそこは石垣圍
いの洞穴圓い込み墓があつたが、仲泊遺跡として発掘調査したため完全に破壊されてしまつた。その下層に古代の住居跡があり、
それを展示保存している。その一帯は一~三百年の古い洞穴圓い込み墓が多い。

注②

マジムンは幽靈や妖怪のことで、動物もマジムンになつて人間をまどわすと信じられている。動物のマジムンとしては、アヒラ
ーマジムン（アヒル）、ウワーマジムン（豚）、ウシマジムン（牛）等がよく知られている。この動物に出ている「チラーマジ
ムン」についてはよく分らない。

三 煙草の歌

話者 松田ウト（明治三四年七月二〇日生）

翻字 知念妙子

煙草^{たばこ}およー。「千貫^{せんくわん}注^{すゝみ}買い、千人にふかし」んち
昔人^{きせきじん}ぬ言葉^{ごんば}あるばーてー。

煙草^{たばこ}というものはね。「千貫で買つて、千人に吸わ
しなさい」と言う昔の人の言葉がある。

煙草^{たばこ}ている草や、苦草^{くるくさ}るやしが、

うり吸^ふちゆる里^{まち}やいんぬすらーさ

思^{おも}くとうぬありば いちる晴りみしぇる
吸^くち捨^すて^ひいる煙草^{たばこ} 錢^{じん}やあらんに

思うことがあるならば すべて吐き出して晴れよ
吸き捨てる煙草（何度も）もお金じやないか

採集 S 52 · 6 · 19

読谷村民話調査團第二班（伊波百合子、知花利江子、松元久幸）

注 明治時代の二十円。現在の五〇〇万円ぐらいに相当する。

新築祝の歌

話者 小橋川恭甫（明治三四年九月二〇日生）

翻字 名嘉真宜勝

此ぬ殿内ぬ、四ちぬ角柱^{じょうしゆ}、八ちぬ金柱^{かなばし}、植^うてい

この家庭の、新築中の四本の角柱と、八本の金

とうどうみでい、くんとうどうみでい。

うりが下うてい、遊びタナゲー、遊ばちい、

踊いタナゲー、踊らちい。

北ぬ海ぬ、鯨、ワニ、サバ、鬼えー外、徳おー

内。ナウチャウー。

柱を見事に据えました。

この柱の下で、生き生きした川エビを踊りはねさせて（果報を祝います）。

北の海にいる鯨やワニ、サバ（フカ）よ（わが村（家）に寄つて豊漁にさせて下さい）。鬼は外、徳は内。ナウチャウー。

採集 S 51・10・17 読谷村民話調査団第九班 〈山内源徳、上地久美、知花啓子、大宜味光一、屋宜美佐子〉

III 新築祝の歌

話者 吉田新太郎 (明治三五年十一月十日生)

翻字 名嘉真 宜勝

シビランカン注①についてのセリフを、ちょっと話してみたいと思います。

紫微鑾駕しづらんかについてのセリフを、ちょっと話してみたいと思います。

シビランカンについてのセリフを、ちょっと話してみたいと思います。

此ぬ殿内ぬ、四ちぬ角柱よんばくじゆ、八ちぬ角柱はんばくじゆ、植はなていと
うどうみて、くんとうどうみて、

柱を見事に据えました。

この家庭の、新築中の四本の角柱と、八本の角柱を見事に据えました。

その見事な柱のもとで、家も半ば出来上がつて、ヤナカのお祝いをしましよう。その見事な柱の下で、生き生きした川エビを踊らせ、遊ばせましよう。

うりが下うてい、ヤナカ達③葺上のぎてい、ヤナカぬ御祝えー。うりが下うてい、踊いタナガー、
踊らちい、遊びタナガー、遊びばちい。

北ぬ海ぬ、鯨、ワニ、サバ、泡どう吹ちゆる、潮
どう吹ちゆる。

アーウーネー、ヒージエー。徳おー、寄てい来は、
アートウトウートウトウ。

北の海の鯨やワニ、サバ（フカ）、泡を吹き上
げます。潮を吹き上げます。

アーウーネー、ヒージエー、徳は寄つて来て下
さい。アートウトウートウトウ。

採集 S 51・10・17 読谷村民語調査団第九班（山内源徳、上地久美、知花啓子、大宜味光一、屋宜美佐子）

注① 紫微鑾駕。これは中国から入ってきたもので、紫微は天帝の住まい、鑾駕は輿のことで、天子の車駕を意味する。棟上げ式の時、板切れの表面に「紫微鑾駕」の四字を横書きし、その裏に「霜柱氷軒雪栱棟露之草草」の十二文字、または「福如東海廣」の五文字を横書きして棟に釘付けし、昆布、木炭、塩を包んで吊るす。

注② 一般的には「八ちぬ金柱」として語られている。

注③ 家が三分の一程度葺き上がった頃に「ヤナカ」のお粥の儀がある。

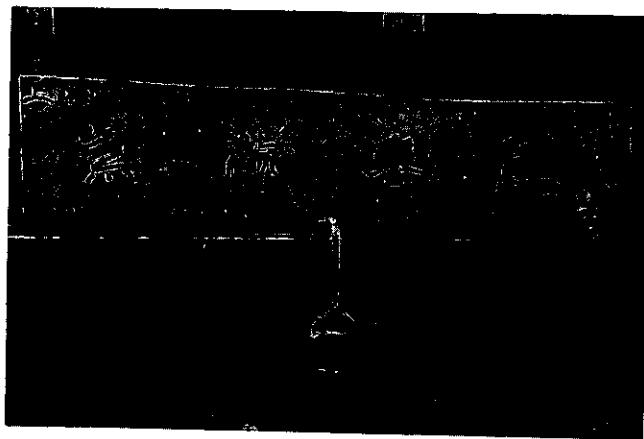


写真16 紫微鑾駕（山里銀造氏提供）

**第二編 解說
· 資料**



話者別一覧表

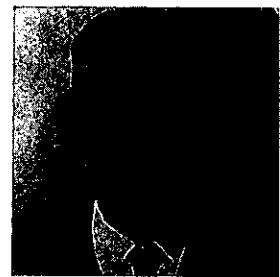
凡例

- 一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したのもある。
- 二、話者欄には、話者の氏名を示し写真を載せた。
- 三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。
- 四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。
- 五、話型名欄の○はモチーフ名を表わす。話は調査月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。
- 六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△は方言共通語混じりの語りを表わす。
- 七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。
- 八、調査欄には調査年月日を示した。

	1	話者番号
	宇根良誘	話者名
M 39 · 6 14	喜名二三〇六	住所 生年月日
⑩ ⑨ ⑧ ⑦ 6 ⑤ 4 3 2 1		番号 話型
菊酒由来 米寿由来 菊酒由来 米寿由来 お盆由来 大歳の客 打かび由来 夫婦の赤い糸 菊酒由来 米寿由来		話型名
32 41 36 71 37		番号 翻字
62 85 75 140 78		頁掲載
○ ○ ○ ○ × × × ○ × ×		語り
11 11 10 10 10 10 10 10 5 5 A A B B A A A A B B 2 1 5 2 4 3 2 1 10 4		テープ
S 55 · 2 · 14	S 53 · 6 · 17	S 51 · 10 · 17
		調査

2

渡嘉敷 兼 求



3

比 嘉 正 貞

喜名一九六
M 13 · 6 · 19

喜名番所と女

翁長マジルと喜名親方

蛇鑿入〈芋環型〉

昔の刑罰について

渡嘉敷ペーク〈幼少の頃〉

渡嘉敷ペーク〈遺言〉

幸地親方の話

狼と女

死んだ男〈死んだ娘〉

念佛者の始まり

喜名四七八
M 39 · 9 · 25

⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
喜名と風水見
武士の話
死刑になつた捉Ⅰ
死刑になつた捉Ⅱ
唐船迎え多幸山フェーレーと久良波スン殿内〈タカ
ハンジャーの話〉
久良波首里殿内〈寝所交換〉
坊主御主の物売り〈喜名焼の始まり〉
坊主御主とタカハンジャーの相撲
喜名觀音堂とノロ60 102 101 88 96 108 103
104

30 72 28 82 49 48 47 24 97

122 244 241 213 226 255 247
250

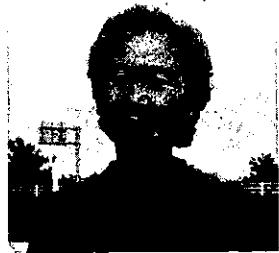
59 143 54 195 102 99 96 46 230

○ ○ ○ △ ○ ○ ○ ○ ○ X
○

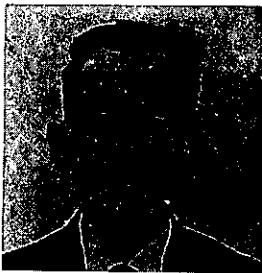
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
B B B B B A A A A A
7 6 5 4 1 12 6 5 4 17 7 7 7 7 7 7 7 1 1 1
A A A A A 4 3 2 B A A
8 7 6 5 4 3 2 1 2 8 2S 51
10
17S 52
6
19S 51
10
17

		5		4
				喜友名 正謹
	松田栄清			
	喜名二〇九 M 28 · 2 · 20		喜名四七三 M 40 · 5 · 20	
⑯ ⑰ ⑯ ⑮ ⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①				2 ①
キジムナー〈魚取り〉 キジムナー〈世間話〉 雀孝行十雀酒屋 赤犬子 鳥の物語 多幸山フェーレー〈釣り〉 尚巴志〈馬競争と牛かつぎ〉 尚巴志〈馬競争と牛かつぎ〉 歌問答〈吉屋チルー〉 赤マタ録入〈浜下り由来〉 美女に化けた豚 サングワナーの言葉の始まり 天人女房十炭焼き長者 「ワ一」という言葉の使い分け 坊主御主 十一支由来 チヨーフグン親方〈鉄人誕生〉			臺名番所と多幸山フェーレー 蛇録入〈亭環型〉	
57 81 9 86 78 74 17 27 79 76 6 77 8 19				106
118 192 12 206 168 148 25 52 177 161 8 165 10 27				253
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○				× ×
8 8 8 8 8 8 8 8 3 3 2 2 2 2 2 2 2 B B B A A A A A A A A A A A A A A 3 2 1 5 4 3 2 1 2 1 8 7 6 5 4 3 2 1				1 1 B 3 A 3
S 52 · 6 · 19			S 51 · 10 · 17	S 51 · 10 · 17

10		9		8
	金子マツ		謝花良仁	
M 45 · 6 · 24 9	喜名三三一九	M 37 · 2 · 5	喜名四九一	M 33 · 5 · 2
⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ 2 1		①		4 3 2 1
シバサシ由来 満産の話 クスクエー由来 雨蛙不孝 猿長者		吉屋チルー(比謝橋)		雀孝行 多幸山フェーレー
69 70 15 5 43		85		
138 139 22 7 89		204		
× ○ ○ ○ △ × ×		×	△ △ × △	
4 4 4 4 4 4 4 A A A A A A A 12 11 10 9 8 7 6		4 A 5	4 4 4 4 A A A 2 4 3 1	
S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17

14		13		12	
	吉田ツル		翁長ウト		阿嘉ヨシ
T 3 · 3 · 10	喜名三〇七	M 43 · 2 · 19	喜名一九五	T 1 · 9 · 10	喜名三四四
⑤ ④ ③ 2 1		③ ② 1		①	
山原と団亀 大歳の火	坊主井戸 多幸山フェーレー 屋良ムルチ（生けにえ）	男の友情	鬼餅由来 雨蛙不孝	雀孝行	
59 44 67		46 13		2	
121 91 133		94 18		2	
○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○		○	
5 5 5 5 5 A A A A A 12 10 9 7 4		5 5 5 A A A 11 3 2		5 A 1	
S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17	

17		16		15	
	玉城 平助		吉田 ミヨ		小橋川 ウト
M 42 · 11 · 10	喜名二〇四	T 2 · 6 · 24	喜名一四〇	M 36 · 3 · 27	喜名二五八の二
4 3 2 1		3 2 1		1	
多幸山フェーレーの話 鬼餅由来 美女を作つた井戸 キジムナー		坊主御主 爺長マジルの話 屋良ムルチ〈生けにえ〉			喜名タカハンジャー
X X X X		O O O		O	
5 5 5 5 B B B B 8 7 3 1		5 5 5 A A A 8 6 5		4 B 5	
S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17		S 51 · 10 · 17	

20		19		18
吉田正徳		花城景孝		高良政信
M 43 11 15	喜名三〇七	T 2 9 14	喜名二二八	M 39 3 13
1		② 1	④ ③ 2 1	
北谷モーシと翁長マジルの美女比べ		幽靈マジム	フェーレーを退治した女	翁長マジル（髪の長さ） 喜名の始まり 坊主御主と粟 尚巴志と力持ち
		110		87
		258		212
○ ×		× ×	○ ○ ○ ○	
5 B 6		5 B 5	1 A 11	1 A 10
S 51 10 17		5 B 2	1 A 9	1 A 7
		S 51 10 17		S 51 10 17

22		21
	松田マツ	
喜名二七五の一 M 25 · 6 · 1		喜名一四〇 M 35 · 11 · 10
6 ⑤ 4 3 2 1		⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ 5 ④ 3 ② 1
雀孝行 アカマタ聾入 城間仲（盜人） 継子の麦つき 大年の客（若水由来） 山原と団亀		坊主井戸 多幸山フェーレ 紫微鑑駕 坊主御主と長浜カネク 嘉津宇岳の由来 殷元良と自了 坊主御主の話 坊主御主とカンドバースネー 坊主御主と夕顔 坊主御主と城間仲 キジムナー 美人の生まれる井戸
42		65 21 94 89 93 92 83 63 113 23
88		130 30 222 215 220 219 198 127 261 34
○ ○ ○ ○ ○ ○		× × × × × × △ △ × ○ ○ × ○ ○
9 9 9 9 9 9 B A A A A A 1 15 14 13 2 1		11 11 11 11 11 11 10 10 10 6 6 6 5 A A A A A A B B A B 7 3 4 3 4 7 3 7 3 1 8 7 6 5 4 3 4 3 4 7 3 4 3 4 7 3 1 9
S 53 · 6 · 17		S 55 · 2 · 14
		S 53 · 6 · 17
		S 51 · 10 · 17

	26		25		24
	小橋川 恭 莆		宇江城 ヤス		比嘉ウト
M 34 · 9 · 8	喜名二五八の二	M 28 · 3 · 20	喜名三三一	M 37 · 9 · 10	喜名三九の一
(2) 1		2 (1)		(3) (2) (1)	
紫微鑑駕	雀 孝 行		子育て幽靈 久良波首里殿内		城間仲〈盜人〉 暗井戸由来 姥捨山〈難題・灰縄〉
112		29		51 64 95	
260		57		107 129 224	
X X		O O		O X O	
6 B 8	6 B 5	6 B 4	6 B 2	6 A 10	6 A 8
S 51 · 10 · 17		S 51		S 51 · 10 · 17	

29		28		27	
	高山秀憲		玉城ヨシ		波平カマル
M 38 · 2 · 14	喜名一九九	T 1 · 7 · 31	喜名一四〇	M 28 · 11 · 10	喜名一五〇
①		④ ③ 2 1		1	
琉歌		美女を作った井戸 大年の話 化物寺の話	キジムナー(魚取り)	雀孝行	
70		16 45			
139		24 93			
		○ ○ ○ ○		○	
4 A 11		9 9 9 9 B B B B 6 5 4 3		6 B 6	
S 51 · 10 · 17			S 53 · 6 · 17	S 51 · 10 · 17	

話型別梗概一覧

凡例

一、昔話の分類は『日本昔話集成』(関敬吾著)に従つて分類し、動物昔話、本格昔話、笑話の順に並べた。但し、伝説または世間話として語られている話でも、昔話の型で分類できるものについては、昔話の項に入れた。

二、伝説の分類は、遠藤庄治氏の「沖縄の伝説」(『沖縄地方の民間芸芸』所収、三弥井書店)に準じた。

三、番号欄の「通し」は、全話型の通し番号、「話型」は分類項目ごとの話型番号、「類話」は各話型の類話数を示す番号で、話型ごとの採集話数を示すものとする。但し、採集話数が一話の場合は番号を付さなかつた。また、類話間は波線、話型間は実線で分けた。

四、話型名は『日本昔話名葉』(柳田国男監修)、『日本昔話集成』に対応する話は、なるべく、その話型名に従つたが「アカマタ聟入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については、調査者及び編集者が付した話型名を用いた。◇はモチーフ名を示す。

五、生年月日は、M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略記号で示した。

六、梗概欄には調査ノートの梗概を転記し、本文に掲載した翻字資料については、その頁と番号題名を記した。同一話者が同じ話を二度語っている場合は二話として扱い、その梗概を並べて書いたが、二話目の梗概は異なる部分のみ但し書きした。語り・テープ番号欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混じりによる語りを示す。テープ番号の1~6までは昭和五年十月十七日、7~8は昭和五二年六月十九日、9~10は昭和五三年六月十七日、11は昭和五五年一月十四日の調査によるものである。

八、備考欄には呼称や、その他特記すべき点を記した。

一、動物昔話

番号	類話番号	話型名	話者名 (生年月日)	梗概	語り	テープ番号	備考
1 (1) ①	通し番号	雀孝行	(M 28 · 2 20) 松田栄清	梗概	○	2 A 3	10頁8「米喰えークラーの酒発見」参照

2 ②	雀 孝 行								
10 ⑩	9 ⑨	8 ⑧	7 ⑦	6 ⑥	5 ⑤	4 ④	3 ③	2 ②	
									比嘉 増次郎 (M 33・5・2)
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	ハーラハンズイは親不孝者で兄弟おもいでもないので川へ行つて魚を食べる。クラーは親孝行だから米を食べる。だからハーラハンズイは山に行つても食べるのは川の魚である。
松田 (M 34・7・20)	松田 (M 34・7・20)	松田 (M 34・7・20)	阿嘉 (T 1・9・10) ヨシ	2頁2「クラーとカーラカンジュヤー」参照。	1頁1「クラーとカンジュヤー」参照。				
小橋川 (M 34・9・8) 恭甫	波平 (M 28・11・10) カマル			5頁4「クラーとカンジュヤー」参照。					
松田 (M 30・4・22) ナエ	松田 (M 30・4・22) ナエ			雀と川蟬は兄弟であつた。親の死に日のとき雀は着たきりのままでかけつけた。川蟬はおしゃれをしたので親の死に日に会うことができなかつた。それで、雀は親孝行といわれ、倉にいることを許された。					
松田 (M 25・6・1) マツ			雀は親孝行であつたので倉にいてよいと言われたのでクラー小という名で呼ばれるようになつた。						
		3頁3「クラーとカーラピンピナー」参照。							
○	○	○		×	○	○	○	△	△
9A1	9A3	6B6		6B5	6A3	5A1	4B6	4A3	4A1
				いた の頭にさ せ八才	5 は老人か 小さい時				

19 (2)	18 (1) (1)	菖蒲節句由来
（M 30 ・ 4 ・ 22）	松 田 ナ エ （M 34 ・ 7 ・ 20） ト	ウナイとイキーがいる。噂ではイキーは鬼だという。そこでウナイは確 認する為、イキーに五月五日にアマガシを与える。ウナイはイキーが天 井に上つて頭から食べるのを見、驚いて逃げる。菖蒲の中に隠れたので
○	○	15頁11「菖蒲節句由来」参照。
9 A 4	7 B 5	

一、本格昔話

17 (6)	16 (5)	15 (4)	14 (3)	13 (3)	12 (2)	11 (2) (1)	雨蛙不孝
蟻と鳥	猿の赤尻	鳥の物語		翁長ウト	翁長ウト	金子マツ	7頁5「親不孝なアタビチャヤー」参照。
（M 34 ・ 7 ・ 20） ト	（M 34 ・ 7 ・ 20） ト	（M 30 ・ 2 ・ 20） 清	（M 28 ・ 4 ・ 22） エ	（M 28 ・ 2 ・ 20） 清	（M 43 ・ 2 ・ 19）	（M 45 ・ 6 ・ 24）	右に同じ
14頁10「蟻と鳥」参照。	12頁9「猿の赤尻」参照。	9頁7「猿の赤尻」参照。	8頁6「紺屋鳥」参照。	9頁7「猿の赤尻」参照。	12頁9「猿の赤尻」参照。	14頁10「蟻と鳥」参照。	アマガカ一は潮を汲めていえば水を汲み、水を汲めといえは潮を汲んで、いつも親のいうことの反対をしていた。親が病気になつたので川のそばに埋めよといつたら山に埋めるだろうと考えて川のそばに埋めよと言つた。アマガカ一は今度だけは言うことを聞こうと思つて川に埋めた。それで大雨が降つて流されてしまつたのでガーグガーグと泣く。
○	○	○	○	○	○	○	
7 B 2	8 B 1	9 A 9	2 A 5			5 A 2	4 A 7
						夫の父 から	お父さん から

30 ③	29 ②	28 (5) ①	27 ②	26 (4) ①	25 ③	24 ②	23 (3) ①	22 ③	21 ②	20 (2) ①	
ク	ク	キジムナーと魚取り	ク	美女に化けた豚	ク	ク	クスクエー由来	ク	ク	鬼餅由来	
玉城ヨシ	(M 34 松田 7 ウ ト 20)	(M 28 松田 2 栄 20 清)	(M 28 松田 2 栄 20 清)	松田ウト (M 34 7 20)	松田ナエ (M 30 4 22)	金子マツ (M 45 6 24)	松田ミヨ (M 41 2 2)	玉城平助 (M 42 11 10)	翁長ウト (M 43 2 19)	松田ウト (M 34 7 2)	鬼は近づくことができなかつた。それから五月五日には家に菖蒲の葉をさすようになつた。
キジムナーと友達になつて毎夕海に出て、魚をとつてきたが、目玉はキ	29頁20 「キジムナー友達」参照。	27頁19 「キジムナー友達」参照。	25頁17 「美女に化けた豚」参照。	皆が森へ遊びに行くと豚も人に化けて遊びに来た。皆がこれは知らない人だと騒ぐと、グーと言つて逃げた。	命をとる悪者が、私はこここの家の主にくしゃみをさせることができない。くしゃみをしたので、クスクエーといつたら悪者はにげていつた。	22頁15 「クスクエー由来」参照。	20頁14 「クスクエー由来」参照。	ある兄妹がいて、兄は鬼だったので妹が兄を退治するために餅をつくつた。	18頁13 「鬼餅由来」参照。	16頁12 「鬼餅由来」参照。	
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	
9 B 3	7 B 6	2 A 1	8 A 2	7 B 10	9 A 11	4 A 10	6 A 4	5 B 3	5 A 3	4 B 14	
		村の人が きいた									

42 ④	41 ③	40 ②	39 (14) ①	38 (13)	37 (12)	36 (11)	35 (10)	34 (9)	33 (8)	32 (7)	31 (6)			
〃	〃	〃	アカマタ蝶入	ものいう牛	千年蛇	死んだ男 へ死んだ娘	猿と女	天人女房 炭焼長者	天人女房	狸の話	化物寺の話			
(M 28 田 2 栄 20 清)	(M 28 田 2 ミ 20 ヨ)	(M 40 友 5 正 20 謹)	(M 13 渡 敷 6 兼 15 求)	(M 35 吉 12 新 太 郎 10 ヨ)	(M 41 田 2 ミ 2 ヨ)	"	(渡 嘉 数 13 6 兼 15 求)	(M 28 田 2 ミ 20 清)	(M 41 田 2 ミ 2 ヨ)	(M 34 田 7 ウ ト 20)	(玉 城 ヨ 31 シ)	(T 1 7 31)		
52 頁 27 二月二日浜下り由来	50 頁 26 「アカマターにだまされた女」	右の共通語訳。	アカマタとハマウリ	46 頁 24 「ものいう牛」	34 頁 23 「ハブの昇天」	参照。	59 頁 30 「後生戻り」	参照。	54 頁 28 「ショウジョウにさらわれた女」	168 頁 78 「察度王の話」	参照。	24 頁 16 「豚小マジムン」	27 頁 18 「狸の話」	参照。
天に登った天人女房は自分の残してきた子供達に天から食料をカーサの葉に受けさせて育てた。														
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
8 A 1	6 A 1	1 B 3	1 B 2	6 B 1	8 B 5	7 A 8	7 A 6	8 A 4	6 A 14	4 B 13	9 B 6			
ウシ嘉				ん おひさ										

		48 ②	47 (17) ①	46 (16)	45 (15)		44 ⑥	43 (5)
			炭 燒 長 者	子 育 て 幽 靈	鍋蓋 ア カ マ タ			
		松 田 ナ エ (M 30 ・ 4 ・ 22)	松 田 ナ エ (M 30 ・ 4 ・ 22)	宇 江 城 ヤ ス (M 28 ・ 3 ・ 20)	松 田 ウ ト (M 34 ・ 7 ・ 20)			松 田 ミ ヨ (M 41 ・ 2 ・ 2)
				60 頁 31 「炭 燒 長 者」	57 頁 29 「子 育 て 幽 靈」	49 頁 25 「カ マ ン タ と ア カ マ タ ー」		
				新婚の夫婦がいた。二人はどちらが福分を持っているかということできんかをした。大晦日の晩、女が夫に栗を入れ混ぜ御飯を炊いたことに男が文句をつけ女を追いだす。女は親元に戻ることもできず泣いている所へ雀が来て、ついて来なさいと言わんばかりに後ずさりをする。雀の後をついて行くと洞の中に住んでいる炭焼きのおじいさんの所についた。その中は全部黄金だったので一人は大金持ちになつた。その時から雀は宝となつてゐる。先夫は物乞いになつてゐた。ある日、先夫が子供を連れて女の所へ物乞いに行くと女は親身にもてなした。その女が先妻だと知つた男は舌をかんで死ぬ。女は夫に見られないうちに庭に葬り、「ついでおいた待ち茶は捨てよう」といつて、先夫を葬った所に投げる。それから、待ち茶は飲むものではないと言われるようになつた。				
		○	○	○	○		○	○
		9 A 6	2 B 7	6 B 2	4 B 2		8 B 10	9 A 2

60 (24)	59 (23)	58 (3)	57 (2)	56 (22) (1)	55 (2)	54 (21) (1)	53 (3)	52 (2)	51 (20) (1)	50 (19)	49 (18)
お盆由来	男の友情			菊酒由来		火の神報恩			子供の寿命	同年生の見舞はない	産神問答
(字 39 根 6 良 14 誘)	(翁 43 長 2 ウ 19 ト)		"	(字 39 根 6 良 14 誘)	"	(松 41 田 2 ミ 2 ヨ)	"	"	(宇 39 根 6 良 14 誘)	(松 30 田 4 ナ 22 エ)	松田ナエ (M 30 · 4 · 22)
78 頁 37 「お盆由来」 参照。	94 頁 46 「男の友情」 参照。			左に同じ	右に同じ	68 頁 34 「火の神報恩」 参照。		"	62 頁 32 「トーカチ由来」 参照。	65 頁 33 「子供の寿命」 参照。	ふたりの神がおりてきた。ひとりはざるを作る人、ひとりは物乞いになりなさいと話した。そのふたりが夫婦になつたら子どもも生まれて栄えたということである。
X ○	○	×	△	×	○	○	×		○	○	○
10 A 3	5 A 11	10 A 1	10 A 5	5 B 4	8 B 4	6 A 2	10 A 2	5 B 10	10 A 6	9 A 5	2 B 8
	から 炎の父			あり 雑音						か部さ宿若 ら出身一泉頃 く本月仲	断片

71 ④	70 ③	69 ②	68 (30) ①	67 (29)	66 (28)	65 ③	64 ②	63 (27) ①	62 (26)	61 (25)
タ	タ	タ	猿長者	継子話 〈機織り十二葉草〉	継子と二葉草	タ	タ	継子の麦つき	真玉橋由来	夫婦の赤い糸
"	松田ミヨ (M41·2·2)	"	金子マツ (M45·6·24)	松田 (M34·7·20)	松田 (M34·7·20)	松田ミヨ (M41·2·2)	松田マツ (M25·6·1)	松田ウト (M34·7·20)	松田ナエ (M30·4·22)	字根良誘 (M39·6·14)
右に同じ。	火正月をしている貧乏人の家に神様がきてそこに泊めてもらう。そこで、肉がでたり、水で顔を洗うと若くなつた。金持ちの人も神様をよぶが、焼いた石の上に坐つて尻が赤くなり逃げて行つた。	89頁43「猿長者」参照。	左に同じ	83頁39「継子の機織りと二葉草」参照。	82頁40「継子と二葉草」参照。	継親が継子に麦をつかした。いつまでたつてもつけないので涙をおとしたのでつけた。それからは、麦は水を入れてつくようになつた。	継子に麦をつかした。いつでもついてもつききれず手の皮をむいてしまつた。涙を流してその涙で麦はぬれて、つくことができた。それから麦をつくときは水を入れるようになつた。	81頁38「継子の麦搗き」参照。	72頁35「真玉橋の人柱」参照。	75頁36「夫婦の赤い糸」参照。
○	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○
8 B 11	6 A 6	4 A 8	4 A 6	7 B 1	4 B 9	6 A 11	9 A 14	4 B 8	9 A 7	10 B 5
			から お父さん							

79 ②	78 ②	77 (32) ①	76 ⑤	75 ④	74 ③	73 ②	72 (31) ①	大年 の 火
タ	タ	城間仲 〈盜人〉	タ	タ	タ	タ	松田 マツ	吉田 ツル (T3・3・10)
比嘉ウト (M34・9・10)	松田ミヨ (M41・7・20)	松田ウト	松田ウト (M34・7・20)	宇根良誘 (M39・6・14)	大金持ちの老夫婦と貧しい老夫婦がいた。大晦日に貧しい老夫婦のところへ神様がみて老夫婦を若返らせた。それを聞いた金持ちの夫婦もまねをするとおじいさんはサルにおばあさんはカラスになってしまった。	93頁45「トウシトウイタ飯」参照。	玉城ヨシシ (T1・7・31)	88頁42「若水由来」参照。
22頁95「城間仲」参照。	貧乏人は火正月をすることになったが子供達に心苦しくて、金持ちの家に泥棒にはいる。しかしその下男達に見つかるが主人は許して下さりごちそうをあげた。	穴に住んでいる貧乏人がいて、正月だが食べるものも何もないのに、城間仲に盗みに入り天井に隠れていた。城間仲の主人は盜人が天井に隠れているのに気づき、下男、下女を早く帰して盜人に降りてくるように言った。盜人の話を聞き、氣の毒に思い、怒りはせず、金・肉・米を与えた。盜人は城間仲がいつまでも金持ちで栄えるようにと祈った。	×	10A4	○	○	○	吉田ヨシヨ (T3・3・10)
○	○	○	○	4B17	9B5	9A15	5A10	吉田ヨシヨ (T3・3・10) 夫婦から
6A5	4B16	8B14						
兄から								

三、笑い話

80
④

松田マツ
(M25.6.1)

台所に盗人が隠れていた。ここにこないと正月はできないと言つたので
食べ物やお金、着物等を持たした。

○

9A13

87 (7)	86 (6)	85 (5)		84 (4)	83 (3)	82 (2)	81 (1)
くいしんぼの男	親葉山	姥捨山 (難題)		渡嘉敷ペーク (幼少の頃)	渡嘉敷ペーク (遺言)	渡嘉敷ペーク (相撲)	渡嘉敷ペーク (相撲)
(M41.2.2) 松田ミヨ	松田ミヨ (M41.2.2)	(比嘉ウト) (M37.9.10)		"	"	"	(M13.6.15) 渡嘉敷兼求
105頁50「蛸か化物か」参照。	107頁51「姥捨山」参照。			渡嘉敷ペークが死ぬ間際に「生きているうちには武勇・学問にすぐれ、誰も私に勝る者はなかつた。そして人を苦しめたりしたことになかつた。だから私の子孫には罪を犯すような人間は絶対出てこないだろう。」と言ひ残した。(だから自分をも含めた渡嘉敷ペークの子孫には罪を犯した人間は一人もいない。)	99頁48「渡嘉敷ペーク(2)」参照。	102頁49「渡嘉敷ペーク(3)」参照。	96頁47「渡嘉敷ペーク(1)」参照。
○	○	○	○	○	○	○	○
8B9	6A9	6A10	兄から	7A4	7A3	7A3	7A2

99 (17)	98 (3)	97 (2)	96 (16) (1)	95 (15)	94 (14)	93 (13)	92 (12)	91 (11)	90 (10)	89 (9)	88 (8)
唐船迎え			山原と団亀	屁ひり嫁	モーイ親方 (かせかけ着物)	モーイ親方 (石門に棺)	モーイ親方 (煙草)	モーイ親方 (殿様の難題)	ミルクとサーカ (ネコとネズミ)	尚巴志と力持ち	「ウー」という言葉の 使い分け
(M 33 嘉 9 正 25)	(M 30 松 田 4 ナ 22) エ	(M 25 松 田 6 マ 1) ル	(T 3 吉 3 田 ツ 10)	(M 34 松 田 7 ウ 20)	(M 34 松 田 7 ウ 20)	(M 34 松 田 7 ウ 20)	(M 41 松 田 2 ミ 2)	(M 41 松 田 2 ミ 2)	(M 41 松 田 2 ミ 2)	(M 39 高 良 3 政 13)	(M 28 松 田 2 榮 20) 消
122 頁 60	「唐船ドーエ」 参照。	歩いている山亀の上に糞をしたらそれが動いたので「糞ぬ歩ちゅしえー 今度初みてー」と詠んだ。	「山原ぬ旅や幾旅んさしが 糞ぬ歩ちゅしえー 今度初みてー」	121 頁 59 「山原と団亀」 参照。	120 頁 58 「屁ひり嫁」 参照。	112 頁 54 「モーイ親方とかせかけ着物」 参照。	110 頁 53 「モーイ親方と糞」 参照。	109 頁 52 「モーイ親方と煙草」 参照。	116 頁 56 「話に葉なし」 参照。	尚巴志は普段じやま者扱いされていたそうだ。ある日首里から偉い人がきて、部落の田んぼを廻っている時に尚巴志は牛がじやまだということ で手の平に載せて横道にあげたという。	118 頁 57 「ウー」という言葉の使いわけ 参照。
△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1 B 7	9 B 2	9 B 1	5 A 12	4 B 12	7 B 8	7 B 7	8 B 7	8 B 6	8 B 8	1 A 11	8 B 3

四、伝説

107 (6)	106 (5)		105 (2)		104 (4) (1)	103 (3)	102 (2)	101 (2) (1)	100 (1)	
浦添ユードレ	美人の生まれる井戸		ク		美女を作った井戸	嘉津宇岳由来	ク	稻作の始まり	人間の始まり	
(M 30 · 4 · ナ 22 エ)	(吉 35 · 田 11 · 新 太 郎 10)		玉城 ヨシ (T 1 · 7 · 31)	玉城 平助 (M 42 · 11 · 10)	吉田 新太郎 (M 35 · 11 · 10)	松田 ウト (M 34 · 7 · 20)	松田 ナエ (M 30 · 4 · 22)	松田 ウト (M 34 · 7 · 20)	松田 ウト (M 34 · 7 · 20)	
154 頁 75	130 頁 65	「美人の生まれる井戸」	参考。		翁長マジルという喜名一番の美女がいた。北谷モウシという人がその噂をきいて美女くらべをしようと思いつつきてきたが、ワタンジャーガーで洗い髪のマジルの素顔の美しさを見て、たちうちできないとあきらめて帰つたという話。昔、喜名にはワタンジャーガーが上方にあつたので、人がたくさんいて首里の侍に連れていかれた。これではいけないとワタンジャーガーを下方にうつし、人並の容姿でいいと願つたら、喜名からは人が生まれなくなつた。	山の方にあつた井戸から水を飲んでいる頃は、美人ばかり生まれていた。しかし、美人を連れに首里から来たので、その井戸を下の方に降した。すると美女は生まれなくなつた。	127 頁 63 「嘉津宇岳の由来」 参照。	126 頁 62 「稻作の始まり」 参照。	遠いところから鳥が穂をくわえてきて田に落としたら稻ができた。	125 頁 61 「人間の始まり」 参照。
○	×			○	×	○	○	○	○	
2 B 4	11 A 8			9 B 4	5 B 7	10 B 3	4 B 7	9 A 10	4 B 11	

117 ②	116 (13) ①	115 (12)	114 (11)	113 (10)	112 (9)	111 (8)		110 ③	109 ②	108 (7) ①
シバサシ由来	満産の話	シバサシ由来	満産の話	赤犬子〈暗川発見〉	普天間權現由來〈美女〉	シバサシ由来	赤犬子〈暗川発見〉	シバサシ由来	シバサシ由来	屋良漏池〈いけにえ〉
(M 35 田 7 ナ 1) 工	(M 金 45 子 6 マ 24) ツ	(M 金 45 子 6 マ 24) ツ	(M 金 45 子 6 マ 24) ツ	(M 松 28 田 2 栄 20) 清	(M 比 37 嘉 7 ウ 10) ト	(M 松 41 田 7 ミ 2) ト	(M 松 34 田 7 ウ 20) ト	(M 25 7 1) ト	(吉 田 3 3 ツ 10) ル	吉田ミヨ (T 2 6 24)
柴を立てたらもどつていく。	138 頁 69	139 頁 70	165 頁 77	129 頁 64	「普天間權現」 参照。	132 頁 66	「屋良ムルチ〈ウナギ退治〉」 参照。	133 頁 67	「屋良ムルチの生贋」 参照。	漏池から大蛇が出てきて農作物を荒らしていた。生身の人間を大蛇にやらないと、屋良の周辺は農作物を荒らされて大変だった。それで人間が洗い髪をして行つて大蛇を待っていたが助けられた。
○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○
9 A 12	4 A 12	4 A 11	2 A 4	6 A 8	6 A 12	7 B 3		9 A 16	5 A 9	5 A 8

130 (26)	129 (25)	128 (24)	127 (23)	126 (22)	125 (21)	124 (20)	123 (19)	122 (18)	121 (17)	120 (16)	119 (15)	118 (14)
坊主御主と物売り (喜名焼の始まり)	吉屋チル一(出生・身売り)	歌問答(吉屋チル一)	殷元良と自了	尚巴志王の話	幸地親方の話	チヨーフグン親方 (鉄人誕生)	アンダケーボージャー	阿麻和利(網発見)	念佛者の始まり	お茶一杯	サングワナーの言葉の始まり	打ちかび由来
比嘉正貞	(M33.9.25) 謝花良仁	(M28.2.20) 松田栄清	(M35.11.10) 吉田新太郎	(M28.6.20) 松田栄清	(M13.15) 渡嘉敷兼求	(M28.20) 松田栄清	(M41.2.2) 吉田ミヨ	(M38.10) 渡嘉敷兼求	(M13.6) 吉田ミヨ	(M34.17) 松田ウト	(M28.20) 松田栄清	(M39.14) 宇根良誘
226頁96	「坊主御主と翁長マジル」参照。	284頁85	「吉屋チル一」参照。 ちら」	198頁83 「殷元良と自了」参照。	177頁79 「平田・屋比久と尚巴志王」参照。	195頁82 「幸地親方の話」参照。	192頁81 「チヨーフグン親方」参照。	203頁84 「ウンタマギル一とアンダケーボージャー」参照。	186頁80 「阿麻和利の話」参照。	143頁72 「念佛者の始まり」参照。	148頁73 「お茶一杯」参照。	140頁71 「打ち紙由来」参照。
△	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
1 A 5	4 A 5	2 B 2	10 B 4	2 A 1	7 A 5	8 B 2	8 B 12	2 B 6	7 A 7	4 B 1	8 A 3	10 B 2

141 (35) ①	140 (34)	139 (33)	138 (32)	137 (31)	136 ②	135 (30) ①	134 (29)	133 (28)	132 ②	131 (27) ①	坊主御主の相撲	
坊主御主	坊主御主とタ顔 カンドバースネー	坊主御主と城間仲	坊主御主と長浜兼久			坊主井戸	坊主御主と栗		坊主御主と栗		比 M 33 嘉 9 正 25 貞	
吉田ミヨ	吉田 (M 35 田 11 新 太郎 10)	吉田 (M 35 田 11 新 太郎 10)	吉田 (M 35 田 11 新 太郎 10)	吉田 新太郎	吉田 (M 35 田 11 新 太郎 10)	吉田 ツル (T 3 3 10)	吉田 ウ (M 34 田 7 20)	吉田 松 (M 39 良 3 政 信)	吉田 ウ (M 38 田 10 ル)	吉田 ウ (M 38 田 10 ル)	213 頁 88 「坊主御主とタカハンジャ一」 参照。	
						坊主が勤めていた所に、井戸があつてその坊主はいつもそれを利用して いた。偉い坊主が使っていたということは代々までも伝わり、今でも六 月二十四日になると井戸をきれいに掃除して各班ごとにその井戸を囲んで お菓子とかコーラを食べた。	216 頁 90 「坊主御主の話」 参照。	212 頁 87 「坊主御主と栗」 参照。				
						雑音あり、ききとり不可。						
△	×	×	×		×	○		○	×	○	×	
5 A 5	11 A 4	11 A 3	11 A 2		10 A 7	5 B 9		5 A 4	4 B 10	1 A 10	2 B 5	
											1 A 6	

(T 3・6・24)

御主がきて関係をつけてしまった。おじいさんは帰つてきてそれを知つたが坊主御主という偉い人に関係されたということで、おばあさんをほめてあげた。

206頁 86 「坊主御主の国めぐり」 参照。

松田栄清
(M 28・2・20)

219頁 92 「坊主御主の話」 参照。

吉田新太郎
(M 35・11・10)

高良政信
(M 39・3・13)

翁長マジルは髪を洗う時、あまりにも髪が長いのでウスクドーのウスクに髪をかけて涼んでいたようだ。

渡嘉敷兼求
(M 13・6・15)

230頁 97 「美女翁長マジルと喜名親方」 参照。

吉田ミヨル
(M 38・10・10)

237頁 99 「翁長マジルの話」 参照。

吉田ミヨ
(T 2・6・24)

役場での美人コンテストでも翁長マジルには北谷モーシーでもおよばなかつた。しかし、どこにも嫁に行かず偉い人が会いにきても逃げて行きマジルが歩いた跡には草も生えなかつた。洗い髪もウスクの木にかけてかわかした。

234頁 98 「翁長真鶴」 参照。

美女くらべ
〈翁長マジルと
北谷モーシー〉

松田ミヨ
(M 41・2・2)

吉田正徳
(M 43・11・15)

翁長マジルは喜名でも一番の美人で髪は長く、洗つたときはウスクの木にかけてかわかしていた。ある日北谷モーシーが美女比べにきたがマジルをみて、およばれないと帰つていた。

150 (40)	149 (2)	148 (39) (1)	147 (2)	146 (38) (1)	145 (37)	144 (36)	143 (3)	142 (2)	
トンドンモウシ				翁長マジルの話	翁長マジルと喜名親方	翁長マジルの髪の長さ			
松田 (M 34 7 20) ウ ト									

240頁 100 「トンドンモーシー」 参照。

○

○×

○

○

△

○

×

×

×

○

4
B
15

5
B
6

6
A
13

5
A
6

2
B
1

1
A
8

1
A
7

11
A
3

8
A
5

159 (46) ①	158 (45) ②	157 (45) ①	156 (45) ②	155 (44) ①	154 (43) ②	153 (43) ①	152 (42)	151 (41)	死刑になつた挿I	
多幸山フェーレー		多幸山フェーレー (鉤釣り)		喜名のタカハンジャヤー		多幸山フェーレーと タカハンジャヤー	死刑になつた挿II	死刑になつた挿I		
比嘉増次郎		松田栄清 (M 28.2.20)	松田ウト (M 30.4.22)	小橋川ウト (M 36.3.27)	松田ウト (M 28.2.20)	多幸山フェーレーが多幸山から通行人をおそう。それで喜名タカハンジャヤーが女の頭に砂を入れた甕を負わせる。フェーレーは女をおそおうとして鉤で釣ろうとしたが、砂の重さには勝てず木の上から落ちてしまう。	比嘉正貞 (M 33.9.25)	比嘉正貞 (M 33.9.25)	比嘉正貞 (M 33.9.25)	241頁101「死刑になつた挿I」参照。
多幸山フェーレー 出じーんどー 急ぎ急ぎ 喜名番所にかかるなやー				喜名のタカハンジャヤーの妹で、男まさりの女がいた。フェーレーがのさばつていたので、このままではいけないと思つて砂俵を米俵に見せかけ頭の上にのせ、フェーレーが待ちかまえている多幸山を通ると、それをフェーレーがつるし鉤でひつかけて引つぱつたところあまりの重さにひっぱられ落ちて死んでしまつた。	244頁107「多幸山フェーレー」参照。		244頁102「死刑になつた挿II」参照。			
X		○	○	○	○	○	○	○X	△	
4 A 2		2 A 7	2 B 3	4 B 5		4 B 4	2 A 5	1 A 1	1 B 6	
									1 B 5	

166 (49)	165 (48)	164 (47)	163 (5)	162 (4)	161 (3)	160 (2)	
喜名の始まり	フェーレーを退治した女	喜名番所と 多幸山フェーレー					(M 33・5・2) うどうるぐなヤマシタカハンジャーディヤンドー
高良政信 (M 39・3・13)	花城景孝 (T 2・9・14)	喜友名正謹 (M 40・5・20)	吉田新太郎 (M 35・11・10)	吉田ツル (T 3・3・10)	玉城平助 (M 42・11・10)	比嘉増次郎 (M 33・5・2)	多幸山フェーレーは盗みをするので女は鉤釣り、男は力勝負で退治して いた。
ムトウチナ、ニシンダムラ、チミチヌモーの三ヶ所の部落がまとまつて喜名になつた。	ある女がおいはぎを退治するために非常に重たい物を頭にのせて岩の下へ行き、おいはぎが鉤針でひつかれたとたんに、その重みでおいはぎは下に落ちてしまつた。	253頁166「喜名番所と多幸山フェーレー」参照。	ある人が職を求めたが、働くのがいやだったので、多幸山で人斬り商売という追いはぎになつた。それで人は多幸山を通るのが恐いから『タコーヤマフェーレーチンドー、イスジスジスジシマカラーチナーバンジュン、トウマラナヤー』というのがフェーレーの歌になつている。	フェーレーは隠れていて人がくるとお金をとつたりしていたので、女の考えでその道を通る人にふろしき包みをもたせて歩かせた。そしてフェーレーが出てきたら、その包みを渡してそのまま逃げ、その時に平たい石を落としてフェーレーを殺した。	昔、多幸山にはおいはぎがいた。フェーレータカハンザという人がそこを通った時、おいはぎに会い「多幸山の山猪…」と言い追払つた。	X	△
X	X	X	O X	O	5 A 7	5 B 1	4 A 4
1 A 9	5 B 2	1 A 3	6 B 3				

173 ②	172 (55) ①		171 (54)	170 (53)	169 (52)		168 (51)	167 (50)
久良波首里殿内	喜名觀音堂とノロ	觀音堂	松田栄清	比嘉正貞	(M 33.9.25)	比嘉正貞	(M 28.2.20)	161頁 76 「喜名觀音堂の由来」 参照。
宇江城 (M 28.3.20) ヤス	比嘉正貞 (M 33.9.25)	喜名番所と女	喜名番所	渡嘉敷兼求 (M 13.6.15)	松田ナエ (M 30.4.22)	251頁 105 「多幸山フェーレーと喜名番所」 参照。	には、觀音堂を建てなさい。そうすれば読谷村は栄えるから」と言われ、首里から千手觀音、土帝君をもつてきて觀音堂を建てる事になった。 (首里觀音堂はあつたのだが、読谷村にそれが出来ると首里まで行かずとも拝むことができたのだから、祝女殿内が寄附を集めて建てさせた。)	○ 1 A 12
山田殿内では泊った人を寝た時分に殺してお金を取つて生活していた。 しかしそこの娘が、ある人に「あなたはここに寝ると大変だから早く起きて行きなさい」と言って、娘がこの人の替りに眠っていた。そつとは	255頁 108 「久良波首里殿内」 参照。	ニシンドラムラ、ムートウンナー、シミチヌモー、ムトウチナーの四村が一緒になつて屋敷を作ると公事風水師が来て風水を作つた。村の後ろには大きなガジュマルを植え、それを境に村の中には池を掘らせ、両方は鳥のような羽をつくり、さらに村の前には、鳥の口といつてサンゲーシをつくつた。そこへ公事風水師が来て「何故そういうふうにしたのか」と問う。たちまち村は負債を抱えこんで、羽毛一つと鳥の口を売るがそれでも不足だつた。	二二人が喜名番所を通つたので、ひとりが喜名番所に泊まろうと言つたが、「女でいらむぬ番所泊まゆみ急じ島かから」という話があつた。	○	○	○	○	○ 2 A 8
○	△		○	○	○		○	
6 B 4	1 A 4		1 B 1	1 A 2	2 B 2			

181 (3)	180 (2)	179 (1)
武士の話 〈結婚〉		
		比嘉正貞 (M 33.9.25)
松田ウト (M 34.7.20)	松田ウト (M 34.7.20)	吉田恭甫 (M 34.9.8)
ナーシビ歌の説明	犬のおしつこ	昔は親が結婚を決め、結婚するときは、結納金が必要だった。その理由は、妻が悪いと結納金でジュリを買つてもらう為であり、金がなかつたら妻を迎えることはできなかつた。
		カジマヤー、カジマヤーでおしつこをして、その臭いをかいでの家に帰ることができた。
○	○	△
4B18	4B3	1B4

五、その他

178 (2)	177 (59)①	176 (58)	175 (57)	174 (56)	
	シビランカ タ	煙草の起源	幽霊マジムン	山田祝女殿内	タ
吉田 (M 35.11.10) 新太郎	小橋川 (M 34.9.8) 恭甫	松田 (M 34.7.20) ウト	花城景孝 (T 2.9.14)	松田ミヨ (M 41.2.2)	256頁109「久良波首里殿内」参照。
					258頁114「比屋根岬のマジムン」参照。
		260頁112「新築祝の歌」参照。	260頁111「煙草の歌」参照。		
			261頁113「新築祝の歌」参照。		
○	○	○	×	○	
6B7	6B8	7B9	5B5	6A7	

知らぬ親は、自分の娘を殺してしまつた。この屋敷の跡は、床の下は全部骨であった。

187 (8)	186 ②	185 (7) ①	184 (6)	183 (5)	182 (4)	
琉 歌		キジムナーの話	犬の罰があたつた夫婦	石敢當由来	昔の刑罰について	
(M 38 高 山 2 秀 14 憲)		玉 城 平 助	(M 42 28 11 10)	松 田 栄 清	(M 30 2 4 22)	渡嘉敷 兼 求 (M 34 7 ウ ト)
○	×	○	○	○	○	
4 A 11	5 B 8	2 A 2	9 A 8	7 B 4	7 A 1	

喜名の民話

遠藤庄治

(一)

喜名の民話調査は、昭和五一年十月一七日と、五二年六月十九日、五三年六月十七日、五五年二月一四日の四回にわたって行なわれた。この四次にわたる調査は、読谷村全体の民話調査の中で、それぞれ重要な意味をもつていた。第一次の昭和五一年十月一七日の調査は、同年三月から準備が進められた。読谷村二二ヶ字の全体調査の初日であり、しかも、読谷ゆうがおの会の結成は、十月一四日であったので、結成直後の調査でもあつた。調査の中心は、沖縄国際大学口承文芸研究会ではあつたが、結成まもない読谷ゆうがおの会からの大量参加と沖縄民話の会からの参加もあつて、一班あたり五名から、七名の調査員というにぎやかな調査となつた。この調査の成功がその後の沖国大口承研と、ゆうがおの会の二人三脚による調査の方向を決定づけた。また内容的にも、この調査によって読谷村の民話をおおまかながらつかむことができたのである。

喜名を初めの調査地に選んだことには、いくつかの利点があつた。一つは、喜名の地が中部から北部に行く街道の中部最北端に位置し、恩納村に隣接することであつた。恩納村は、前年に調査を終了しており、恩納村で聴取した話型から、喜名の主要な話型を類推することができたからである。さらに、喜名は読谷村の最も北の字でありながら、同時に旧読谷間切の番所の所在地であり、行政の中心を占めていたので、読谷村の主要な話型が伝承される可能性があつた。こうした二つの理由から読谷村の民話の傾向をさぐるには、最もふざわしい字だつたのである。

こうした予測は、決して見当ちがいなものではなかつた。喜名の第一次調査で聴取された最もも多い話型は、恩納村南部に最も多い、「多幸山フェーレー」の話であり、また、「楚辺の暗井戸」など読谷村を代表する主要な話型が聴取した民話の中に含まれていたのである。こうして、喜名の一次調査は読谷村の民話調査を方向づける重要な調査となつた。

昭和五二年六月十九日の二次調査は、ほぼ沖国大口承研の独自調査として行なわれたが、この調査は同年八月一三日から一六日にかけて行なわれた合宿調査の準備もかねたものであつた。昭和五三年六月一七日と五五年二月一四日は、読谷ゆうがおの会独自調査として行なわれた。少数の話者を選んで行なう補足調査として行なわれたが、ゆうがおの会の成長と民話調査に対する熱意と積極的な姿勢を示すものであつた。

こうした四次の調査によつて、字喜名からは一七九話と三編の歌がテープに収録された。民話の内容は、

分類	聴取話数	掲載話数
動物昔話	一七話	一〇話
本格昔話	五七話	三六話
笑話	一九話	一四話
伝説	八四話	五〇話
世間話	二話	〇話

右の話数のうち、『日本昔話集成』と重なる話型は、

となつてゐる。

動物昔話—雀孝行、薦不孝、裏紺屋、十二支由来

本格昔話—もの言う動物、蛇舞入、子育幽靈、子供の寿命

猿長者、大年の火、炭焼長者

笑話—親棄山、殿様の難題、屁ひり嫁、西行と女、鶯言葉

形式譚—話に葉なし

補遺—長良の人柱

右の一八話型である。ただし、このほかに『日本昔話名葉』と重なる話型としては、「雀酒屋」がある。ここにおさめた昔話の話型はやや伝説的なものまで含めれば、五〇話型ほどなので本土と重なる話型は全体の約半程度となる。ところが、話数の方で見ると「雀孝行」十話、「薦不孝」三話、「蛇舞入」六話、「猿長者」「大年の客」合わせて六話など、「集成」にある話の伝承話数が多く、そのため、昔話の聽取話数九三話中、四話が「集成」の話型と重なっている。この点は、先に発刊された『伊良皆の民話』と類似している。すなわち、喜名の民話も宇伊良皆と同じく、主要な伝承話型は本土の話型と重なるのである。

(二)

動物昔話

一番「クラーとカンジュヤー」二番「クラーとカーラカンジュヤー」三番「クラーとカーラピンピナー」は、いずれも「集成」の「雀孝行」である。ただし、二番の「クラーとカーラカンジュヤー」が、雀の姿を蓑笠を着ている姿とそえている点が珍らしく、また三番の「クラーとカーラピンピナー」は、「集成」の「薦不孝」との複合話型になつていて、四番の「クラーとカンジュヤー」が芝居で見た話で、さらに双子譚になつていて、注目される。「雀孝行」の話型は、宮古諸島をのぞけば沖縄のどの島でも最も人気のある話型である。したがって、沖縄本島圏に属する島々と、八重山の

島々では、調査の最初に質問する話型として使われることが多い。宮古諸島をのぞく三二島には伝承されているが、宮古の八島には伝承されていらず、その伝承の最も多いのが、沖縄本島であるこの話型は、動物昔話の中では沖縄への伝播が比較的新しいものと思われる。念仏踊りの流れをくむと思われる盆の芸能で、沖縄本島で行なわれるエイサーの歌詞の中に「雀孝行」に関連するものがあるところからすれば、思想的には、儒教的性格の最も強いこの話型は、沖縄が仏教と接触した後に受容されたのではないかとも思われる。

五番「親不孝なアタビチャヤー」は、「集成」の「薦不孝」「名葉」の「雨蛙不孝」である。この話型もまた「雀孝行」と同じく、宮古諸島には伝えられていないが、他の全島では伝承されている話型である。思想的にも「雀孝行」と重なるのでおそらく、「雀孝行」とほぼ同じ時期に沖縄に入り広がった話型と考えることができる。この話型の主人公である不孝者は、どの島においても雨蛙であり、雨蛙が雨の降る時に鳴く起源譚になつていている。五番の「親不孝なアタビチャヤー」は、親不孝の具体性に欠けるが、全域にわたつてほぼ共通している親不孝の例証は、「親が海の汐を汲めと言えば、水を汲み、水を汲めと言えば、汐を汲んで来た」と言うことである。その意味では、「雀孝行」との複合話型である三番の「クラーとカーラピンピナー」の方が、主人公こそ他の話型とは異なつていても、話の内容は沖縄の一般的な話型に近い。この「雀孝行」と「薦不孝」に属する話型は、お婆さんたちが力をこめ、強い共感をもつて語られることが多く、他の娛樂的な要素の強い動物昔話とは語りの姿勢が異なるつている。

六番「紺屋鳥」は、「集成」「名葉」の「裏紺屋」である。沖縄での「裏紺屋」の伝承は少なく、話型も不安定である。この話は、沖縄の「裏紺屋」の派生話型としては、最も「集成」「名葉」に近

いものである。

七番「猿の赤尻」は、独立した話型として認定されるかどうか疑問の残る話である。各地の調査の中で、時には、二、三話、時には、四、五話こうした話が出て来るが、あとの本格昔話の中に出ている

「猿長者」の結末部分だけが話されたものと思われる。

八番「米喰えークラーの酒発見」は、「雀孝行」と「名彙」の「雀酒屋」の複合話型である。「雀酒屋」は、宮古多良間島などに比較的多く語られるが、全体としてはそう有力な話型ではない。ただし結末は、沖縄の泡盛の由来となる。

九番「十二支由来」は、沖縄全域に片寄りなく分布する話型であるが、沖縄本島、八重山の「雀孝行」「雨蛙不孝」、宮古諸島の「ウズラのユガタイ」ほど強力な伝承力は保持していない。本土のかなりの「雀孝行」が親の死よりも、お釈迦様の死にかけつけ、あるいはまた、十二支をきめるのはお釈迦様が多いのに対し、仏教が一般民衆にまで及ばなかつた沖縄では、「雀孝行」にも「十二支由来」にお釈迦様は登場せず、十二支を決定するのは、神様の役割になつてゐる点が本土の話型と異なつてゐる。

一〇番「蟻と鳥」は、沖縄での聴取例が二、三話程度なので、古くから伝承された話型とは考えにくい。新しい時代に「イソップ物語」の翻訳をもとに伝えられたものと考えられる。

喜名の動物昔話は、一七話が一人の話者によつて伝えられてゐるが、そのうち一二話は女性の話者である。最も幼い聞き手にして女性の話者によつて、動物昔話が語られたことを示してゐる。また、すでに述べたことに重なるが、この一七話中、一三話までが「雀孝行」「雨蛙不孝」である点も注目される。喜名が読谷調査の初めであり、そのため調査員が最も良く知られているこの二話型を調査の初めに置いたことにもよるであろうが、この二話型が、喜名

の動物昔話を代表する話型であることは否定出来ない。喜名が近世において、間切の中心である番所の所在地であり、首里、那覇との交流も多かつたことが背後にあるかも知れない。

(三)

本格昔話

一一番「菖蒲節句由来」から一五番「クスクエー由来」までは「集成」に準じた配列では、「三人間と動物」の「A逃竄譚」に属する話型である。ただし、ここには「集成」と重なる話型はない。

一一番「菖蒲節句由来」は、読谷村の他字では、「食わず女房」または、その派生話型と結びついて、菖蒲節句の由来が述べられ、多くは、鬼などに追われたが菖蒲の中に入つたら命が助かつたので、菖蒲の節句が始まつたとしている。この話では、追いかけるものがハブであり、昔話的な要素に乏しい。読谷村のぞく他の村や島では「菖蒲の節句」という言葉はほとんど聞かれず、したがつて、その由来を述べる話もほとんどない。これは、喜名など読谷の幾つかの字で行なわれる菖蒲の節句を考える上で重要である。この話も、そう古い時期からの伝承とは考えにくい。

一二番と一三番は「鬼餅由来」である。一二番の方に「鬼の家の便所」のモチーフがあり、さらに「上の口、下の口」のモチーフがある点である。「鬼の家の便所」のモチーフのある「鬼餅由来」は、沖縄本島には乏しく、その主流は石か鉄などを入れた餅を鬼に食わせ、自分は普通の餅を食い、さらに「下の口」を見せて「ここは鬼喰つ口」と言って鬼を驚かせ退治する話である。ところが、宮古地区などでは、餅は話の中に出ず、「鬼の家の便所」に力点が置かれて語られる。沖縄の古文献である袋中の「琉球神道記」中の話も、一二番の話や宮古の話と同じく、「鬼の家の便所」のモチーフが中心になつてゐることからすれば、この話型と年中行事の「鬼餅」との

結合は、近世以後のことと、邪氣ばらいなどの餅の大きなものを「鬼餅」といつたことからこの話型とつながったことが考えられる。

一四番、一五番の「クスクエー由来」は、『集成』に見られない沖繩独自の話型である。沖繩には、他界からこの世の人間の命を取りに来たり、あるいは、家を焼くために神や異類がやって来るという話が多い。他界は、この世に恵みをもたらす所であると共に、さまざまな災厄をもたらす所と考えられている。この話型は、ほとんどが沖繩本島圏に伝承され、宮古、八重山の先島圏には例を見ない。この話型の背後には、クシヤミの時にマブイ（魂）を落としやすいとする俗信があり、クシヤミの時には、そのあとで「クスクエー」とか「クスクタッケー」「クスクエヒヤー」とかいう習慣がある。意味は「糞食らえ」であり、マブイを落とさないためのまじないである。この話型は、その由来譚であるが骨組みとしては、ある異類が人間の命を取りに來たので、「クスクエー」と唱えて撃退するといふ点では一致していても、地域や話者によってきわめて変化に富んでおり、安定した話型ではない。魂を取りに來るのは後生の使い、男につれなくされて死んだ遊女の靈、先妻の靈、キジムナー、マジムなど多様であり、クスクエーという撃退の呪いを人間が知るのは魂を取りに來る者の会話を人間が立聽して知ることが多く、そのほかでは、ユタに教えてもらう例などもある。生命を奪われそうになるのは、生まれたばかりの子供が多い。「クスクエー」と言う呪文が何故、命を取りに來るものを見退すことになるのかは不明であるが、「子供の寿命」などの他の話型からすれば、生命を決定するのは、北極星や南極星の神と考えられたり、時には、海神とさえ考えられる話型もある所から、命を取りに來るものは、本来おぞましい異類ではなく、神聖な神であるとする信仰があり、その神のきらう汚れ多いものを口にすることによって撃退するといった考え方、根底には

あつたと思われる。一四番の「クスクエー由来」は、他の話には見られない「儲けて米食え」という呪文が見られる。この背後には、あるいは、命を奪うものが同時に福をもたらしてくれたものだとする信仰があつたことを示していると思われる。

一六番から二一番までは、『集成』にあてはめれば「三人間と動物」の「B愚な動物」にあたる部分であるが、ここにも『集成』と共通する話型はない。

一六番「豚小^{マジムン}」の「小」は、東北弁などの「娘つこ」「馬つこ」など「こ」にあたる意味で、「マジムン」は「まやかしのもの」すなわち「化けもの」にあたる。この話は、変な豚を見つけたので、つかまえて木にくくって置くと、翌日その豚は、しゃもじに變っていたと言うのである。これに類する話は、沖繩本島圏にわざかながら残っている。捨てられたシャモジやシャクシ、茶ワンのかけらなどが化けものになつて夜道の真ん中で宴会を開いたとか、家の人に殺したとかいう話である。人間に使われた道具は、人間の精が移るので捨てられるとマジムンに化け、人間に災いをもたらすから、そのまま捨てずに焼き捨てなければならないと言う話もある。一七番「美女に化けた豚」これは、一六番の話よりも分布が広く、また伝えられている話数も多い。特に沖繩本島では、若い男女の夜の集団での遊びであるモーアシビに出現し、この話では悪い匂いで正体を突きとめようと草履を奪つたら、その草履が朝方には豚の爪となり、豚小屋を見たら爪のない豚がいたので正体がわかつたとか、三貫で身体を売つたが、その金が豚小屋にあつたとか、かなり安定した話型を形成している。ただし、異類婚姻譚とはちがつて、人間との間に子供を産むとか、あるいは、人間を援助するなどの性格はなく、興味の中心は、いかにして正体が知られるかに置かれている。

一八番「猩の話」、沖繩ではこの話のほかに猩が登場する例を知

らない。ただしこの話型は、狐の話としては先島地区まで及んでいた。そのことから、狐と狸を誤って話したとも思われる。話型は「四畳半由来」と言う話型に属するが、通常の話では狐が借金取りに化け、四畳の室の真ん中に座り、尻尾を畠と畠の間にかくしていたが、大に正体を見破られ逃げ出す話である。そのことがあって、狐に尻尾をかくされないように、四畳の室は作らず四畳半の室を作るようにになったというのである。

一九番一二番は、いずれも「キジムナー」の話である。キジムナーは、本土の河童に似た異類で沖縄本島圏で民話に登場する。先島では、キジムナーとは呼ばない。背は小さく赤い髪の毛をオカツバにし、古い木を住み家とし魚とりが上手で、魚の目が好物である。人間には、キジムナーの方から接近することが多く、キジムナーと親しくなれば、魚が多く取れたり山から木を運んでもらつて、家を建てることが出来たとする話も少なくない。縁を切りたがるのは人間の方からで、一九番のようにキジムナーのおかげで金持ちになりながら、キジムナーの家を焼いたり、キジムナーのきらいな蛸、鶏屁などで撃退することになる。キジムナーと親しい間は良いが、キジムナーにいたずらしたり、恨まれたりすると、手ひどい目にあわされることになる。

二二番二三番は「三人間と動物」「D動物報恩」にあたる。ただし、二三番の「もの言う牛」は、「一一葛藤」「C隣人」の二八五番「物いふ動物」にあたるが、話の内容からここに移した。

二二番「ハブの昇天」は、八重山に多く沖縄本島には少ない話型であり、八重山では蛇は千年たつと天に昇ると話されているところから「千年蛇」とも名づけている話型である。蛇が長生きすると言う考え方には、先島に広く分布する「雲雀と生き水」の話型と関連している。雲雀が人間を脱皮させ、若変えらせる為に天から運んで来る。

た水を、人間に届ける前に蛇が浴びてしまい、蛇は脱皮し長生きするようになつたが、人間は死ぬようになつたという話である。読谷の「天に昇る蛇」の話は、昇天出来た御札に宝である童糞を人間に与えるというタイプがある。こちらの方は、八重山との関連が強い。二二番の話は蛇のおかげで裕福になつたが、タブーを破つた為に貧乏になるという話になつてゐるが、他の類話では、タブーを破つたものが死ぬとする話もある。

二三番「もの言う牛」は、この民話集の白眉であり、同時に読谷村の民話を代表する話の一つであろう。「もの言う牛」は、すでに述べたように『集成』では、「隣り爺」タイプの大歳話として位置づけられていた。しかしながらその全容が『集成』の資料では不十分だつたために、「もの言う動物」として、他の動物の話と共に一括されて話型名があたえられていた。しかもこれまで、他府県で得られた「もの言う牛」は、戦前、岩倉一郎が沖永良部でまとまつた話型を一話得た以外は、ほとんどがきわめて断片的なものばかりであった。

私たちが、沖縄で「もの言う牛」に初めて出会つたのは、昭和四年八月一日、沖縄で民話調査が組織的に開始された初日、与勝諸島津堅島、大城蒲太さんからであつた。大城翁の「もの言う牛」は、完全な「話千両」と「もの言う牛」の複合話型であり、見事な語りの話であった。「もの言う牛」と私たちの対面は劇的であり、民話が消滅したのではないかと言われた沖縄の中で、この話を聴取出来たことが、その後の調査を勇気づけることとなつた。以来、沖縄での「もの言う牛」の聴取話数は、二十話をこえている。ところが聴取話数が多くなるにつれ、どの話をもつて典型話とすべきかと言つ疑いが生まれた。冒頭部が「話千両」で始まるものと、「話千両」のモチーフをもたないもの、話の展開部が、牛がものを言うかの賭

けによって富を得るものと、闘牛によつて富を得るものに分れ、また、人間から牛への転生譚が明らかなものと、そうでないものに分れた。結末部においては、シマクサラーやカンカーなど疫病除けの祭りの起源を語るものと、そうでないものに分れていて、これらの様々な組み合せから成立していた。

吉田翁の話は、こうした多くの疑問にこたえるきわめてまとまつた話である。おそらく、吉田翁の語るような完結性と一貫性のある「もの言う牛」は、今後の調査においても期待出来ないであろう。私たちは、吉田翁の「もの言う牛」と出会つたことによって、今後聴取する「もの言う牛」の規準を得ることが可能となつたのである。話の発端部は、大歳の話として始まる。これは奄美の例話にはあるが、沖繩では他に例を見ない。しかし、この要素は吉田翁の話の中では、主人公が下男であり大晦日に家に帰ることを許され、雇い主から他の下男たちとは異なり、錢一五貫のかわりに、「ウシマチガラクイ」と言う謎のよくな言葉をもらい、自分の家に帰る途中「もの言う牛」に出会うのであるから、きわめて自然な設定であり、しかも、大歳の夜は祖靈や、神と出会うと言つ沖繩の一般的な信仰を基盤にして、主人公と主人公の祖靈である牛を再会させているのである。沖繩は、均質、平等な社会と思われやすいが、必ずしも、そうではなかつた。ほとんどの地域が小数のウエーキと呼ばれる金持ちと、借金の為に年限を限つて召使われる階層に分れ、中には、生涯を金持ちの家で暮らすものがいた。シカマとか、イリチリとか、ンジヤックワなどと呼ばれた人達である。この話には、そつした近世から戦前にかけての農民の姿がある。正月が近づけばどの家も、豚を殺し大歳の夜の食べものとした。貧しい家は何軒かで一頭の豚をつぶしたものと云う。そして、他方では大歳の夜の食べものについては、あとにかかる「猿長者」や、子供に食わせる豚肉がなく、

金持ちの「城間ナーカ」の家に盗みに入る貧乏人、九五番の話にもつながる。沖繩全城には、大晦日の晩に、豚肉を食べさせなかつたら、その家の子供はすべて死んだとする話も伝えられている。下男が持たされた二斤の肉は、そつした大年の夜の欠かせない食物だつたのである。

下男は、山田カンジエークの家に飼われ、年老いて野に捨てられた牛と出会う。沖繩において牛は農耕のため飼われたのであって、肉食用ではなかつたと思われる。それは、各地に牛の墓の話などが有ることからも予測される。山田カンジエークは山田の鍛冶屋のことであり、あとの真栄田カンジエークと共に、それぞれの字を代表する金持ちであつた。このことも伝説の世界からすればふさわしい設定である。たとえば、沖繩の王統の始祖伝承は、察度王統、第一尚氏、第二尚氏などが鍛冶伝承と結合しており、島建ての伝承の中にも鍛冶説話と関連するものが多いからである。権力や富を集中するものは沖繩において、鉄文化の支配者だとする思考様式は、現在においても、説話の世界で生きているのである。山田と真栄田は、互いに隣接する字で恩納村の最も南の字であり、読谷村の北端である字喜名とも隣り合つてゐる。すなわち、話者は話者の住む喜名の隣りの字を話の舞台としているのである。このことは、この話の表現とも強く関連する。ここに登場する人物は具体的な地名を舞台として与えられ、年中行事の由来譚として語られることによつて、昔話的性格よりも、伝説的アリティをもつて描かれるのである。

昔話の主人公のように、影絵のようなあるいは、無性格な存在としてではなく、考え、迷い、行為する人間として描かれている。ところで、牛と下男である主人公との出会いは、牛が野原に捨てられて、牛の鼻綱が木にからまつて動けなくなつてゐる時であり、下男はまた、どうして「ウシマチガラクイ」という言葉が一五貫にあ

たるもののか思案している時であつた。主人公は牛を見ながらも通り過ぎ、牛によばれてようやく、牛に水を飲ませ木にからまつた綱をといてやる。そして、牛のすすめるままに、山田カンジエーカの家に泊めてもらう。ここでは主人公よりも牛がより積極的な行為者となつてゐる。しかし、そうであつたとしても牛は主人公に助けられたことで、以後、主人公に幸運をもたらす点では明らかに、動物報恩譚の構造を持つてゐる。

幸運は、牛を中心とする二つの賭けで主人公にもたらされる。一つは、牛がものを言うか言わないかの賭けである。このモチーフは他の類話では、牛からすすめられて賭けをすることになつてゐるが、この話では、山田カンジエーカと主人公の対話の中から、賭けに発展し、カンジエーカは財産を主人公は自分自身を賭ける。賭けた牛が話をしないので負けたと思った時、牛が山田カンジエーカの財産を、主人公が受け取る正当性を話したので、主人公は賭けに勝ち山田カンジエーカの財産を取ることになつた。この話が大歳の日の話として話され、ものと言うか、言わないかで賭けて、主人公が富を得るという点では「大歳の亀」の話型と一致する。しかし現象面では一致する両者の話も、ものと言う動物との出会いまでの過程、動物報恩のモチーフの有無、その後の展開などの諸点で大きく異なつてゐる。

第二の賭けは、闘牛としてなされるが、沖縄、奄美においてすぐれた闘牛用の牛を持っているのは、金持ちの道楽であることを思うと、このモチーフの持つ面白さが明らかになる。持主は、長者である真栄田カンジエーカであり、その牛は主人公の牛が柵と柵を掛けてしまいあらわれると、驚いて逃げてしまつ。吉田翁の話で不明白なのはこの部分だけである。他の類話からすれば真栄田カンジエーカの牛は、前世で主人公の牛から借りがあり、それを返せないま

死んでしまったので、主人公の牛の角にかけられた柵と柵を見て借りを返せと言わされたと思い逃げ出すのである。もつとも、吉田翁の話が再生譚であり、さらに「喧嘩しなくとも勝てる方法」として自信を持つて柵と柵を言うことからすれば、この要素は語り落しとも思われる。類話の中には、音の出るヒヨウタンや、風にあおられてバタバタする儀をつけさせて勝つたとする話などもあるが、それらと、ものを量る柵と柵との間には明らかにちがいがある。

「もの言う牛」によつて富を手に入れた主人公は、牛が主人公の祖先であること、さらに入間から牛への転生の経過について教えられる。特に注目すべきは、転生の経過である。

吉田翁の語りによれば、「親、祖先が亡くなつて後生に行き、極楽した後は天にのぼりその後は、露になつて自分の野菜畑に降り、その野菜の中の雨露の力で子孫が栄えていく。」と言つ。全く何気なく語られているがこれは明らかに、マリノフスキーノによつて報告されたメラネシアの先祖と子孫の循環信仰である。マリノフスキーノによれば、トロブリアンド諸島の人達は先祖の死者の靈は海をただよつて、海の彼方の楽土につき、そこで老いもせず死にもせず樂しく過すが、その樂土にあきると海を漂つて自らの島に帰り、自己の子孫の娘が海で遊んでいる時に、その娘の体の中に入り、やがて子供として生まれるというのである。トロブリアンドで生まれる子孫は、したがつてすべて先祖の生まれかわりであると考えられ、子供は男女の性交によつて生まれるものとは、考えられていなかつたと言つのである。トロブリアンド諸島では、水平の海の彼方に樂土を想定し、吉田翁の「もの言う牛」は天上に樂土を設定する違ひはあるが、思考の構造はきわめて類似するのである。こうしたことからトロブリアンドでは生まれた子供に先祖の名を付けることになるが、日本の生まれた子供への命名法の中にも、先祖の名の中から選ばせ

る民俗があり、その対応関係が注目される。

「もの言う牛」の結末は、牛が悪疫払いのために殺され、村人に共食されるカンカーの由来と、一夜孕み、祖靈の人間への再誕ということで結ばれるが、ここでも驚くべき語りが述べられている。それは牛が主人公に自分を殺して食つようにするすめる中で、「動物は、刃物によつて殺されること、多くの人に食べられることで厄をはなれ、人間の子供に生まれることが出来る」と述べている部分である。

これは、アイヌのオ・マンテの信仰ときわめて類似する。アイヌの主な獵物である熊は、山の神の化身であるが人間の矢を受けて殺され、人間に食われることで、眞の神となると信じられているからである。また、日本上代の記紀に述べられている狩猟は、野獸を食うことよりも、野獸の中にある靈力をとり込み自己の靈力を更新するものであったことが多い。右の語りの中には、アイヌのイ・オマンテや記紀神話に連なるものを含んでいる点で注目される。ところで、多くの民族にとって、古代のバビロン、エジプト、中国と農耕文明のほとんどが、牛を神への最高の供物とし、インドのように牛を神聖視する所もある。日本上代においても牛は、雨乞いなどの祭りの供物であった。シマクサーラーやカンカー、ウシヤキなどと呼ばれる沖縄の牛供犠の祭りも、そうした祭りと関連して考へる必要があろう。

結末部の一夜孕みと、牛の角を印とする子の誕生も考案に極いするが、ここでは簡潔に述べるとどめたい。一夜孕みは、記紀神話のコノハナサクヤ姫のモチーフである。それは、神祭りの時、来福する神と、それをもてなす神女との間の一晩の婚姻に根ざしており、すぐれて神話的モチーフなのである。そうして生まれた子が神の子としての印をもつても神話的な発想であり、神として訪れた異類と人間との間に生まれた子が、異類の子孫としての印を持つとする異

類婚煙譚ともつながる信仰である。

吉田翁の「もの言う牛」は、話の構造からすれば昔話的ではあるが、その表現と結末部は、伝説でありしかも後半部には、日本ではほとんど失なわれた神話的な発想がみごとに織り込まれたすばらしい民話である。

二四番～二八番は『集成』の「異類婚姻」にあたる部分である。

そのうち最後の二八番をのぞく四話は、いずれも『集成』の「蛇錆入」で「芋環型」に属する話型である。「蛇錆入」はその内容によって「芋環型」と「水乞型」に分けられるが、沖縄では、「水乞型」が乏しいのに対し、「芋環型」は沖縄本島北部から西南部の与那国・波照間に至るまで、沖縄県下全域で最も有力な話型で、特に内陸部の字よりは、海に近い村に強く伝承されている。字喜名でも「蛇錆入」の芋環型という話型名は、娘がつんだ芋（カラムシ）を針に通し、通つて来る正体の知れない男にその針を差し、糸をたどることで男の正体が三輪山の神である蛇であることを知つたとする古事記、日本書紀のいわゆる三輪山神話で、あとに残つた芋が三輪だけだったことから名付けられている。本文二四番の「アカマターと浜降り」は、沖縄本島では珍しく、この三輪山神話に近い筋で語られている。この話は、二つの点で沖縄本島圏の他の話と異なつてゐる。一つは沖縄本島圏では娘の許に通うのは、アカマターに限定されており、この話のようには娘の許に通うとするのは、八重山の島々の話である。もう一つは、沖縄本島圏では、孕んだ娘が三月三日に浜降りすれば、アカマターの子が降りることを知つて流産させ、それから三月三日の浜降りの行事が始まつたとするが、この話では、孕んだハブの子を産み落し成長のち父であるハブの所に帰したという点である。この蛇の子を流産させずに産むのは、先にあげた三輪山神話や、宮古の張水御嶽の話、同じく宮古の狩俣の祖

神の話である。おそらくこの話型の方が古く、後に、蛇が忌みきらわれるようになつて三月三日の由来に傾いたと思われる。

二五番「カマンタとアカマタ」は、一六番の「豚小マジムン」と共通する要素をもつ、豚小マジムンは、人間の精が移つたしやもじが捨てられ豚に化けたが、この「カマンタとアカマタ」では、人間の精を受けた、わらで作つた鍋の蓋を地面上に捨てる、その下でかえつたアカマタは人間をだますようになるというのである。後半部は、他の蛇聟入とほぼ同じである。

二六番「アカマタにだまされた女」、二七番「三月三日浜下り由来」は、三月三日に浜降りをして、アカマタの子を流産させる所に力点が置かれ、沖縄本島圏の一般的な話型に属しているが、これらの話は、糸をたどつてアカマタの洞窟に着き、洞窟の中で話しているアカマタ同志の話を聞いて、三月三日に浜降りをすれば、アカマタの子が降りることを知ると言つ立聴きのモチーフが欠落している。三月三日の浜降りは蛇聟入からすれば、後次の接続だと至る。蛇聟入が、三輪型で語られる宮古においても三月三日は、女の祭りとして重視されていることからすれば、もともと蛇を降ろす為ではなく、特別の意味があつたと思われる。これは所によつて、妊婦の浜降りが禁止され、あるいは、その日の雨にもあたることが忌まれたことからすれば、むしろ、吉田翁の「もの言う牛」のような祖靈再生信仰や、トロブリアンド諸島の若い娘が海に出ることで、むしろ積極的に祖靈を受容しようとする人と関連している可能性がある。

二八番「ショウジョウにさらわれた女」は、沖縄でまれに聴取される話型である。この話は『集成』の「猿聟入」とはまったく異なる話型である。本土に多い猿聟入は「蛇聟入」水乞型の派生話型と考えられるものであるが、この話は沖縄の始祖伝承の一つとして多く語られる「犬祖説話」と類似しており、宮古には、人間の始まりは、人間と犬が結ばれて子を産み、さらにその子が猿と結ばれて人間の始祖を生むとする話があること、東南アジアには、犬や猪を部族の祖先とする伝承と共に猿を祖先とする伝承も存在することから、あるいは、猿祖説話と関連する話型の可能性もある。

二九番「子育て幽霊」は『集成』「五異常誕生」の「子育て幽霊」と重なる話型である。沖縄では各地に分布する話型である。ただし、読谷村の「子育て幽霊」は、墓の中でも生まれた子供があの世とこの世を往来できるテーラシカマグチという人になり、話者によつてはこのあとに、テーラシカマグチが主人公となる話をつづけて語る場合がある。本土においても、名僧の誕生として語られることがあるので、本土の話型と沖縄の話型は、かなり一致するものになつている。

三〇番「後生戻い」は、そのテーラシカマグチに関連する話型で、シカマグチは、生身半分、後生半分といわれる男である。この話は、やや世間話的になつてゐる。

三一番「炭焼長者」は『集成』「八運命の期待」「炭焼長者」の再婚型である。「炭焼長者」には、長者の娘が炭焼きと結婚する初婚型とこの話のような再婚型があるが、沖縄の再婚型は「産神問答」と見分けたい。沖縄には「炭焼長者」の初婚型は稀であるが、宮古では、「産神問答」が「寄木の主」の名で呼ばれ、宮古を支配する仲宗根豊見親一族の伝承とされ最も有力な話型である。もつとも、「炭焼長者」の黄金發見のモチーフは、「天人女房」の話型で、察度王の誕生を語る話型や、「えびすと大黒」などと呼ばれる話型にもあり、さまざまな話型に登場する。この話で注目されるのは、ほぼ型通りの炭焼長者ではあるが、大歳の夜の話として語られ、さらに再婚する女を案内するのが雀である点である。大歳の晩は沖縄の昔話が最も好んで語る要素であり、さらに雀の道案内は本部などの

産神問答と、先にあげた宮古の産神問答にも多く見られるからである。

三二番「トーカチ由来」と三三番「子供の寿命」は、同じく「運命の期待」の「子供の寿命」であるが、本土にも分布する話型である。ただし本土の話は「もの言う牛」ほどではないにしても、採集話数も乏しく話型も整っていないものが多い。本土では、一つの県に一話あるかなしかの話で一つの字から、かなり整った話型が二話も出ることは全くめずらしいことである。この話は、中国の古文献「搜神記」に出ている話で中国から日本にもたらされた話と考えられる。その点では、三二番が、この話を「唐話」と呼んでいる点が注目される。「唐話」とは、唐を舞台とし、唐から伝えられた話が本来の意味であろう。この話は、与えられた年齢が八八才であり、寿命をきめる神が子方（北方）の神と午方（南方）の神であるとするところに古い伝承を良く保存している。碁を打っている神に酒食をすすめることで、願い事をかなえてもらう点では、二つの話は一致するが、結末部は三二番が八八才のトーカチの祝（米寿の祝）三三番が神に供える料理の由来を述べて、いる点で異なる。

三四番「火の神報恩」は『集成』にはない話型だが、沖縄本島、特に本島の北部地区に多い話である。この「火の神報恩」は、冒頭部がやや難解である。話の大まかな発端部分の筋は、中山王の王女が、分家した兄弟と共に今帰仁城に行き住むようになるが、後に中城の豪族であり、読谷の座喜味にも城を構えた護佐丸などに攻められ、今帰仁城は焼け王女は焼死する。焼死した王女は、火の神となつて中城護佐丸の一族である話者の祖先の家を焼こうとやつて来る途中、山原に牛を買ひに行つた話者の祖先と一緒になるということであろう。話が話者の家のこととして語られているため時間がやや飛躍している所がある。そのあとは、一般的な「火の神報恩」の話型とほぼ同じである。すなわち、親切にされたことで、火の神は最

初めざした家を焼くことをあきらめ、かわりの家を焼くことになる。国頭地区に多いのはここで、火の神が、家にかわるものを作らせ、火事除けの呪文などを教えて家にかわる小屋を焼かせ、その煙で昇天することになるが、この話にはそうした結果はない。

三五番「真玉橋の人柱」は、「集成」の補遺に収められている、「長良の人柱」と同一話型である。この話は三四番の話者と同じ松田ナエさんの話で、語り出しの部分は、自己の真玉橋に対する見聞を述べた部分である。言い出した者が人柱にされた点や、母の遺言で娘が口を利かなかつた点なども本土の話型と一致している。

三六番「夫婦の赤い糸」は、婚姻譚と運命譚の二つの側面を持つ話である。そして、この話も話者からは「唐話」と呼ばれている。

『集成』にはない話型である。この話型は、人間は生まれた時に神によつてそれぞれ配偶者がきめられ、そのきめられた運命に逆らうこととは出来ないというのである。沖縄には、こうした人間の運命が生まれる以前からか、あるいは生まれた時に決定されるとする話が多い。「産神問答」では生まれると同時に男、女それぞれの福分がきめられ、「子供の寿命」では、寿命が決定され「夫婦の赤い糸」では、配偶者がきめられる。ただし、「夫婦の赤い糸」が伝えられているのは、中国と交流があつた首里、那覇と、その首里、那覇から人々が寄留した土地が、影響を強く受けている土地に限定されているようである。

三七番「後生貧乏」は、昔話よりも、伝説の性格が強い。類似する話型に後生の人の問答を立聴きし、この世での金持ちが後生では、子孫が後生の金である打紙（紙銭）を焼いてくれないために、貧乏になつていることを知り、それから、紙銭がはじまつたとする話型があり、この方が一般的である。この「後生貧乏」は、祖靈のお迎えの時間と送りの時間について、その由来を説く話であるが、聴取

例は少ない。

三八番から四〇番までの三話は、継子話である。ここに出ている三話とも沖縄独自の話型である。

三八番「継子の麦搗き」は、沖縄本島の継子話の中で最も多く伝承されている話型である。おそらく、麦をつく時に水を入れてつけ早くつけることを教える時に子供たちに話したのであろう。

三九番「継子と二葉草」、四〇番「継子の機織りと二葉草」は、ともに継母から継子への難題譚である。二葉草が松であることなどを教えるのが二話とも船に乗っている人である点は、奇妙であるがこれは、他の類話では船に乗った実母の靈として話されることが少なくない。

四一番「菊酒由来」も『集成』にない話型ではあるが、後半部は、『集成』の「首のない影」と一致する。「首のない影」は、沖縄本島でも時に聴取されることもあるが、その伝承の中心地は八重山の与那国島である。この話は、沖縄本島の「菊酒由来」と、与那国の「首のない影」が複合した話型と思われる。

四二番から四五番までの話は、大歳の夜の話である。四二番の「若水由来」は、次の四三番の「猿長者」の一部と思われる。「猿長者」は沖縄全域から聴取される話型で「蛇舞入」に次いで多く伝承されている。沖縄本島では不明確だが、先島地区ではほとんどの話が神に宿をかさなかつた東の家は衰え、神に宿を借した西の家は栄えることになっており、富は東から西に移る話になつてている。このことは先島の隣人譚の多くが同様であり、「産神問答」でも金持ちから貧乏になるのは東の家、貧乏から金持ちになるのは西の家になつてている。「子供の寿命」では、生命の流れが南から北に流れ死に近づく方位觀があるのに対し、富の流れは東から西に流れるところの方位觀があつたようである。先島においては、祭りの時に豊年を

授けるミルクも、東から登場する。綱引きにおいては、東が勝てば凶作、西が勝てば豊作ということで、毎年西が勝つてゐる所もある。

四四番「大年の宝」、四五番「トウシトウイタ飯」は共に『集成』の「大歳の客」や、「大歳の火」に関連する話型である。「猿長者」は、隣人譚であるが、沖縄で大晦日の晩に黄金や宝を得る話には、隣りの爺タイプの隣人譚は少ない。ところが、四四番の「大年の宝」は、まぎれもなく隣人譚として語られ、その発端部は本土の「大歳の客」の話型や、「猿長者」に類似している。「猿長者」と異なるのは、神をもてなすことで、何を得るかのちがいだけになつていて。四五番は、四五番の派生話型と考えられる。大歳の夜が沖縄の人々にどのような意味を持つたかについては、「猿長者」以下の話群のかに、「もの言う牛」や「炭焼長者」など大歳の日の話として語られる昔話、さらに伝説の中の「城間仲」の話も含めて検討する必要がある。喜名の民話の中で大歳の夜の話は、一四話聴取されており多くの人々が大歳の夜を神や祖靈が來訪し、日常では起り得ないさまざまな奇跡が起る日であるとする考え方が知られるのである。

四六番「男の友情」は「隣人譚」としてあつかい、本格昔話の最後に置いた。沖縄では「手の子」などと呼んでいる話型である。旅に出た友人の妻を守るために、友の妻に毎夜手を置いて寝るというモチーフは、ヨーロッパのメルヘンにある親しい者の妻と一つのベッドに寝ることになつた男が、親しい者の妻と自分の間に剣を置いて寝たというモチーフと通い合うものがある。この話の結末は、女が手だけの子を生むことになるが、本土の弘法伝説の中に、旅の途中ある家に立ち寄り茶を飲んだところ、弘法大師を好きになつた娘が、その茶碗に残つた茶の泡を飲み子を孕み、やがて子を生む。またその家に立寄つた弘法大師に、僧侶の身でありながら娘と不義をしたことを責めると、大師は、その子を抱き上げフツと吹いたとこ

ろその子は一粒の茶の泡となつたという話があるが、この弘法伝説の茶の泡の話と類似している。弘法の「茶の子」の話も、最後は誤解が解けて終るのである。

(四)

笑話

沖縄の笑い話には、幾つかの流れがある。その一つは、ほば沖縄全域に広がり、特に先島や離島部に伝承密度の濃い古い層に属する笑い話である。もう一つは、九州南部の影響を強く受けながら、主として、首里、那覇などで新しい時代に形成された笑い話である。そして、この二つがさらに、地域や語りの場のちがいによって幾つかに分れたと考えられる。

四七番～四九番の三話は、渡嘉敷兼求翁による渡嘉敷ペークの話である。渡嘉敷親雲上（ペーチン）は、民話の世界では、渡嘉敷ペーク、時には単にペークと呼ばれる。首里、那覇系笑い話の代表的な主人公であり、本来親雲上は、士族の位階を表現する呼称だが、笑い話においては、ほとんど渡嘉敷親雲上に独占されている。ところが、この百歳に近い渡嘉敷兼求翁の渡嘉敷親雲上兼副についての話は、笑いの要素に乏しく伝説として語られている。それは、兼求翁がこれらの話をわが一門の祖先の話として語っているからである。四七番「渡嘉敷ペーク(1)」は、渡嘉敷ペークが大和の武士と勝負した話であるが、おそらく薩摩の武士と思われる相手は刀で、ペークは空手で戦い、ペークは知恵で相手に勝った話である。

四八番「渡嘉敷ペーク(2)」と四九番「渡嘉敷ペーク(3)」は、二つに分けて語られているが内容的には、一つの話である。渡嘉敷ペークは八歳で国王の守役になつたとあるが、おそらくは、国王の世嗣の相手役をしていたのであろう。あまりなれなれしく身分をわきまえなかつたので、國頭の伊地にあずけられたというのである。四九

番の祝女に関する部分がこの話全体とどうかかわるか不明確なところがあるが、幼い渡嘉敷兼副を伊地まで連れていたのが祝女だったのだろう。しかし、沖縄本島北端の辺土に近い伊地から八歳の兼副は、一人で首里まで帰つて来たというのである。

これらの渡嘉敷ペークの話は、笑話の主人公渡嘉敷ペークを考える上でも、さらにペークに寄せて語られる話型を考える上でもきわめて価値ある話である。「集成」の「褒美の片荷」をはじめとして、王に対するなれなれしさや、時には親しみを表現する話型は、四八番や四九番に根ざすものであろうし、様々な奇策や機知で不正や、欲張り者に対抗するペークは、四七番のような伝承を核として形成された可能性があるからである。

五〇番「タクか化物か」の話型は、話数こそ少ないが、沖縄本島の具志川市、栗国島、多良間島、黒島などかなり広く分布している話である。「集成」でいえば「あわて者」に分類される話であろう。五一番「姥捨山」は、「集成」「和尚と小僧」の「親棄山」にあたる話型である。この話については、読谷村立歴史民俗資料館の館報二号「読谷村民話調査中間報告」の中でややくわしく述べたことがある。全国には広く分布する話型であるが、沖縄では首里、那覇からへだたつた所ほどこの話が多く、首里、那覇の影響を受けた地域では、モーイ親方の話となら、「殿様の難題」すなわち、薩摩から出された三つの難題をモーイ親方が解く話に変化している。

五二番から五五番までは、渡嘉敷ペークと並ぶ笑い話の主人公、モーイ親方の話である。そのうち、五二番「モーイ親方と煙草」は、一般に「一吹き煙草」と呼んでいるが、話によつてはこのあとに火事だと思って集まつて来た人達に、庭の石を片づけさせるというもある。

五三番「モーイ親方と龜」、五四番「モーイ親方とかせかけ着物」

も、モーイ親方の話として良く語られている話型である。モーイ親方の話の中で最も代表的なものは、五五番の「モーイ親方と殿様の難題」の話である。この話では難題が灰繩、雄鶴の卵、七曲りの穴に糸を通す、山運びの四つの難題を父親にかわって薩摩に行き、四つとも解くことになっているが、沖縄本島で最も一般的なのは、七曲りの穴に糸を通すことをのぞく、三つの難題を解くことである。

ただし、七曲り穴も先島などでは「姥捨山」の話型で出ることがある。「姥捨山」の話型とモーイの「殿様の難題」が一つの字に同時に伝えられることは、喜名の文化の古い層と新しい層を表現していると思われる。

五六番「話に葉なし」は、前半が全国に分布する『集成』の「形式譚」「話に葉なし」であり、それが、ミルク（弥勒）に寄せて語られることで、後半部は沖縄全域に分布する「ミルクとサーカ」の話型の一つ「猫と鼠」につながっている。本土では予想もされないことであるが沖縄ではミルクの弥勒は豊穰神であり、サーカの祝詞はそれをさまたげる悪神として登場する。

五七番「ウー」という言葉の使い分けは、沖縄ではきわめて珍らしい話型で『集成』の「愚人譚」「E愚か嫁」の「驚言葉」である。これは全国に分布する話型であるが、沖縄方言で「驚言葉」を成立させている点が注目される。

六二番「稻作の始まり」は、島尻郡玉城村の受水走水という泉と島尻御穂田と呼ばれる田に寄せて語られている稻作起源である。これも沖縄の稻作起源の最も良く語られている話型である。

六三番「嘉津宇岳の由来」は、嘉津宇岳の地名起源説話である。

この話は国頭と中南部との交通が陸路によらず、海路によっていた

ことが背後にあって生まれた話であるが、おそらく国頭様とは、山の神でありこの話は山と海の神の葛藤譚が本来の姿なのであろう。

六四番「楚辺クラガ」は、犬が発見した井戸の話であるが、この話の原型は中国南部の少数民族の始祖伝承と思われるが、沖縄では最も広く分布する伝説である。読谷の中では「赤犬子」の話と結びついて語られることが多い。

六五番「美人の生まれる井戸」これもかなり広域に分布する話で、

の歌を作るという話型であるが、その歌が沖縄では和歌ではなく、琉歌で歌われている。

六〇番「唐船ドーワ」は、久米町の人から聞いた話だという。この話は、話者も言うように那覇で話されている話である。白いカカシを帯の先につけたまま迎えに走ったというのである。これは、事実譚なのかも知れない。

伝説、その他

(五)

ここには初めにさまざまな起源譚、由来譚を置き、あとには歴史、人物に関連する話を置き、最後に歌と唱えごとを配列した。

六一番「人間の始まり」は、兄弟始祖伝承で、沖縄本島を中心にも最も広く見られるタイプである。この話は、天から兄妹の降下と、岩めぐりのあと婚姻し人間の始祖となる話であるが、古事記・日本書紀のイザナギ・イザナミの自凝島の段と同一タイプの話である点が注目される。

六二番「稻作の始まり」は、島尻郡玉城村の受水走水という泉と島尻御穂田と呼ばれる田に寄せて語られている稻作起源である。これが沖縄の稻作起源の最も良く語られている話型である。

六三番「嘉津宇岳の由来」は、嘉津宇岳の地名起源説話である。

この話は国頭と中南部との交通が陸路によらず、海路によっていた

ことが背後にあって生まれた話であるが、おそらく国頭様とは、山の神でありこの話は山と海の神の葛藤譚が本来の姿なのであろう。

六四番「楚辺クラガ」は、犬が発見した井戸の話であるが、この話の原型は中国南部の少数民族の始祖伝承と思われるが、沖縄では最も広く分布する伝説である。読谷の中では「赤犬子」の話と結びついて語られることが多い。

六五番「美人の生まれる井戸」これもかなり広域に分布する話で、

あまり美人が生まれすぎ首里の武士、薩摩、唐などからさらわれたので、井戸に祈願したところ、美人は生まれなくなつたという話である。この話は、後半部が祝女と根神との関係を述べている。ただし、ここで根神といわれているのは、女の役目をさすので草分けの家の主、根人と祝女との関係を語り誤つたとも思われる。

六六番「屋良ムルチ饅退治」と六七番「屋良ムルチの生贋」はともに、読谷村の南に隣接する嘉手納町屋良の屋良漏池と呼ばれる池にまつわる話である。六六番の話は『集成』の「兄弟の仲直り」の話型で語られることが多く、六七番は芝居などで行なわれることが多かつた話である。

六八番「普天間權現」は、一般には首里桃原の美女が、普天間の洞窟に入り神となつた話として知られている。後半部の、大和の人々がその洞窟の中に刀を置き忘れたところ、人が取ろうとすると蛇になつたので無事持主に帰つたとする話は、普天間權現の話としてではあるが、独立して話されることが多い。

六九番「シバサシ由来」は年中行事の由来譚である。年中行事として広い地域で語られている。

七〇番「マンサンスージの話」の話は、人生儀礼の一つ産育の満産祝の話であるが、生まれたばかりの不安定な生命を守るために、産室に火をたき、身寄りの女人が集まり嘶をする。その嘶が終る日が満産祝である。歌が邪靈を払うという考え方とは、本土で言えば古事記や日本書紀に出ている歌、記紀歌謡や万葉の人麻呂などの歌などに対してもあらわされる呪的歌謡であり、きわめて興味深い。この話は「クスクエー由来」と合わせて考える必要がある。

七一番「打ち紙由来」は、沖縄の仏事の時に死者への供養として焼く打ち紙の由来譚である。「打ち紙」は、沖縄の「子育て幽靈」に出るほか、死者に関するさまざまな話型がある。

七二番「念仏者の始まり」は、沖縄における京太郎と並ぶ芸能のない手であり、同時に民間の仏事とも関係した念仏者の由来譚である。たしこにあげられている「扇の舞」の芸能は、本来は、人形芝居を主たる芸能とした京太郎の芸能が、京太郎と交流の強い念仏者によつても行なわれたが、あるいは、沖縄の民衆から、京太郎と念仏者が同一視されたものであるのか不明である。

七三番「お茶一杯」は沖縄全域で広く語られているものであるが、「一杯のお茶は後生のお茶」という考え方があり、死者に供える一杯のお茶を忌むところから生まれた話と思われる。

七四番「サングワナーの始まり」銭三貫＝六錢で身を売った下級女郎の由来である。渡地などの遊女と船員たちの風俗が述べられていて面白い。

七五番「尚巴志と喜名」この話は、尚巴志と伊良皆、喜名の関係を述べ、その第一尚氏の尚巴志とのかかわりで喜名の字が榮えるようになつた由来譚である。

七六番「喜名觀音堂の由来」ヌル殿内の百といわれる爺さんが、墓地にしようとした土地に觀音堂や、道教の神である「土帝君」が祭られるようになった由来譚である。外来の信仰がどのように受容されたかを知る上で重要な話である。

七七番「アカヌクーの話」先に出ている六四番「楚辺クラガー」と同じく、暗泉発見の由来を説く部分を含んでいるが、この話はその赤犬を飼っていた飼主の女と、生まれた子供の「アカインコ」を語ることに主題が置かれている。アカインコの話は、文化英雄としての伝承が多く、中には犬と女が結婚する大聟入から、犬祖伝承に展開するものもある。

七八番以下は、さまざまな人物伝を配列した。七八番「察度王の話」の発端部で、「銘苅子」という言葉があらわされるが、これは沖

繩の芸能である組踊りの中に、天人女房を素材にした「銘苅子」という組踊りがあり、そのため、沖縄の中では、天人女房すなわち銘苅子と言う考え方が強い。この「察度王の話」は、天人女房から生まれた子が沖縄の第三王統の始祖である察度王となる話だが、これは沖縄本島中部で語られている話である。

七九番「平田・屋比久と尚巴志王」この話は第四・第五王統である「尚氏」の姓の由来、沖縄の三山統一、尚巴志の骨を北山、南山の遺臣が粹こうとした話、さらにその骨を尚巴志の甥である屋比久子と平田子が守り、伊良皆の祖となる話である。尚巴志が南山、北山と馬競走するのは、渡嘉敷ベークの馬競争のモチーフと全く同じであり、後半部の牛を持ちあげる話も大力話によく用いられるモチーフである。この話は、七五番の「尚巴志と喜名」とも関連する話である。

八〇番「阿麻和利」の話は、勝連一帯を支配し広く周辺諸地域とも交易した勝連司、阿麻和利の話である。英雄が若い時足が立たなかつたモチーフは、宮古の英雄、日黒盛豊見親のモチーフでもある。阿麻和利の出身地が隣村の屋良であることから、読谷村では、どの字でも聽取される話型である。ただし多く聽取されるのは蜘蛛の巣を見て網を作るところまでである。

八一番「チヨーフグン親方」本土にはほとんど伝承されない鉄人譚である。沖縄では、沖縄本島圏全域でこの話型が聽取されるほか、金武村では同一の話型が「儀部鉄人」の名で伝承されている。この話型の特徴は、身体がすべて鉄でおおわれた鉄人の身体に一ヶ所だけ鉄でない部分があり、そこを切られて死ぬというモチーフである。八二番「幸地親方の話」幸地親方が王女を妻にした話だが、やや完結性を欠いている。おそらく王女の婿にきまつたが自分の妻に敬語を使つことをきらい、婿になることを断つたが、かえつてその気

骨を認められたという話であろう。

八三番「殷元良と自了」前半は殷元良、後半は自了の話である。殷元良と自了は時には同一のモチーフが寄せて語られる場合もある。両者とも沖縄を代表する高名な絵師であるため、類似するモチーフが寄せて語られたと思われる。自了の話で、書き忘れた部分を筆を投げつけて書いたとする話は、本土では弘法大師のモチーフであり、目を入れたら動き出した絵は左甚五郎などのモチーフである。尚、死んだ子供の亡骸が、棺の中で消え衣だけが残つていたとするのは、名護親方の子供の話などで、しばしばあらわれるモチーフである。

八四番「ウンタマギルーとアンダクエーボージャー」沖縄本島中、南部で語られることが多い運玉義留と油喰い坊主の話である。この二人については、二人がいかに巧みに人をあざむいて盗みをしたかを語る話が多い。

八五番「吉屋チルー」伝説的な琉歌の作者として、恩納ナビーと共に有名な「吉屋チルー」の話である。吉屋チルーの話は沖縄芝居として人気があり、さらにこの話の中の比謝橋が読谷村と嘉手納町の境にあることから、読谷村で多く語られており特に比謝橋で琉歌を歌つたとする話は、最も多く伝えられている。

八六番～九四番までと、九六番は坊主御主に関する話である。坊主御主は、第二尚氏一七代の王で四二歳で剃髪し、退位したので坊主御主と呼ばれる。浦添の城間に隠居し、伝説の主人公である城間仲と知り合い、さらに各地をめぐつて多くのエピソードを残している。これらの喜名に残されている坊主御主の話からすれば、喜名にも一時滞在したようである。その話は、時には笑い話風に、時には現実味を帯びて語られ、話型もきわめて多い。一方では水戸黄門的な高貴な身分でありがら庶民的な人物として描かれ、他方では身分の高さから思うがままの振舞いをし、人々に迷惑をかける人物と

して語られている。ここに出でいる話群を整理すると、

1 飢饉の年に、王府の米を百姓に与えるように主張しそれが通

らないので退位した話。八六番

2 隠居地の城間で冬瓜を作り市に出したが、その為百姓の冬瓜

が売れないのを聞き、自分の冬瓜畑を馬で荒らす話。八六

番、八八番、八九番、九六番

3 喜名の坊主井戸の話。八六番、九〇番、九六番

4 泣く子に「坊主御主が来るよ」と言った母親をとがめたが、

後に親しくなり家には水引、娘には衿、息子には袖をやつた

がその着物で鼻をかんだため狂人になつた話。八六番

5 坊主御主が読谷で粟を作ることをすすめた話。八七番

6 喜名の美女翁長マジルーを手に入れようとしたが失敗した話。

7 喜名の「アラティチュラナビー」を手に入れようとしたが、

失敗しアラティチュラナビーも夫婦別れをした話。八八番、

九六番

8 那覇の壺屋から職人を喜名に移し窯を作つて喜名焼を始めた

話。八八番、九六番

9 坊主御主が村の人と相撲を取つたが、相撲に強い喜名のタカ

ハンジャーはわざと負けてやつた話。八八番、九一番

喜名に坊主御主がいたので喜名を通る人は、道歌を歌うこと

が禁じられ、そのことを相手が坊主御主と知らずに話した男

が自害する話。九二番

11 坊主御主との相撲に意地で勝つた、ミーグチ屋の子供が死んだ話。九〇番

12 喜名の与久田ウンマーが墓地にする予定だった所に坊主御主が、觀音堂を作った話。七六番、九〇番

13 長浜兼久でカンドバーズニーを食べたらうまかったので、首

里に帰つて同じものを食べたらまずかつた話。九三番

14 坊主御主が城間仲の妻を犯すが、城間仲のとりなし方を見て

城間仲が気に入り、城間仲に土地を与える。九四番

この喜名の民話集中だけでも、一四のモチーフが伝えられて

るが、沖縄本島中南部に伝えられるモチーフはさらに多いであろう。

ただし、坊主御主と渡嘉敷ペークを比較すると、両者の年代はそう

へだりがないにもかかわらず、ペークは笑い話の主人公になり切

っていることが多いのに對し、坊主御主は、その一部は笑い話化し

ているがここに見られるように、笑い話としては成熟していない話

型の方が多い。これはペークの話が、気軽な逸話として話せる内容

のものが多いいに対し、坊主御主の話は主人公の身分の高さや話の

内容が、現在もそれぞの一門の勢力と関連する所から、あまり気軽に

軽には話せなかつたことにもよるであろう。

九五番「城間仲」の話型はこれまた多いが、この話は「城間仲」

の話型の中でも、沖縄本島全域に分布する最も代表的な話型である。

大晦日の晩に入つた盗人を暖かくもてなしてやつた話なので「大歳の盗人」と呼ばれる話型であるが、この話型の背後には、すでに昔

話の所で述べた大歳の夜に対する信仰があるのは言うまでもない。

九六番～九九番までは、坊主御主との関係ですでに出てゐる翁長

真鶴、洗い髪美人ナビー、北谷真牛などの美女伝承でありこれらの

話が、現在も喜名に住むそれぞの家と関連して伝えられている点

が注目される。さらに沖縄の美女伝承は、琉歌を伴つて伝えられる

ことが多く、美女の条件としては、髪の毛の長さ、靈力の高さなどがあげられる点が多く、これらの点については沖縄内外との比較研究が要求される。

聴取される話型である。

一〇一番と一〇二番はともに「死刑になつた徒」の話である。こうした話は上級の役人には比較的温情的ではあつたが、下級の役人にはかなり過酷な刑が行なわれたことを示している。百姓と武士の間にあつて百姓側の責任を負わされていた徒の位置は、本土の名主や庄屋の位置と類似している。

一〇二番の話は、庶民の間で浄土真宗の信者がどのように見られていたかを知る上で貴重な話である。おそらくこうした浄土真宗に対する姿勢は、王府の宗教統制から生み出されたものであろう。

一〇三番、一一〇番までは、多幸山の追い剥ぎと久良波首里殿内に関する話である。多幸山は、沖縄本島中部と北部の境界にある山で、北部への陸路での往来は、多幸山を通つて行つた。多幸山は、字で言えば、読谷村の喜名と北部の村に属する恩納村山田との間にあり、この間は人家もなくつづら折りの小道を通るので、北部へ行く難所だったのである。久良波首里殿内は、読谷村喜名から多幸山を越え、恩納村の山田に出た所にあつたといわれる。

こうした地理的な関係から、読谷村の北部と恩納村の南部には、多幸山の追い剥ぎ＝フェーレーと久良波首里殿内の話が多く伝えられている。

これらの話型を整理すると

- 1 多幸山フェーレーは、通る人の荷物を崖の上から鉤で引っかけて盗んでいた。坊主御主の話にも登場する喜名のタカハンジャーが、そのフェーレーを退治しようと行くがタカハンジャーを恐れて出て来ないので、タカハンジャーは女の人の頭に俵を乗せて行かせた所、フェーレーはその俵を引つかけたものの重すぎて崖から落ちて死んだ。一〇三番、一〇四番、一〇五番、一〇七番。

2 多幸山を通る者は、フェーレーが出るので安全な喜名番所に急ぎ、また按司たちは、番名の番所に泊れば喜名の美女のもてなしを受けられるので、喜んで喜名の番所に泊つた。一〇三番、一〇四番、一〇五番。

3 久良波首里殿内には、入るものはいるが出るものはなかつた。旅の途中宿を取つたものをもてなし、夜中になるとその人を殺したからである。一〇八番、一〇九番

4 ある武士が久良波首里殿内で夜中に寝たふりをしていると、その家の娘が包丁を持って殺しに來たので、その娘を取り押えた。それから人が殺されることはなくなつた。一〇八番

5 久良波首里殿内で殺した人を埋めた所から生えた冬瓜に、大きな実があり、それを買つた人が切つて見ると中から血が出来たので、久良波首里殿内の悪事が露見した。一〇九番

これらの話のうち、多幸山フェーレーの話は国境いや峠に対する信仰、特に風土記などにしばしばあらわれる。国境いや峠で、人を殺す神の話との関連が予想される。

久良波首里殿内の話は、現在久良波の地名が字名として残つていないため、隣接する山田の話として伝えられることが多く、そのため山田首里殿内とも呼ばれる。地方の村落では、祝女の住む家を、地名を冠して〇〇祝女殿内と呼ぶので、この話はそうした祝女殿内での話と解される。久良波首里殿内の話の中でその家の娘が、旅人を歓待し夜になると、その旅人の生命を取るモチーフは、沖縄でも「話千両」の話型の中に出ることがある。また死体を埋めた所に大きな冬瓜があり、その実を切つたら血が出たとするのは、あきらかに全国に広く分布する「猫と南瓜」の影響である。「猫と南瓜」の話型は、沖縄でも小数ではあるが聴取されている。

一〇〇番「比屋根岬のマジムン」の話は世間話として語られてい

る。幽霊、遺念火、マジムンなどの話は、世間話として語られることが多い。

一一一番～一二三番までは、歌と唱えごとである。一一一番「煙草の歌」の歌は煙草の琉歌だが、煙草そのものは「産神問答」の結末部で、前夫を埋めた所から生えたものが煙草だとするほか、幾つかの話型に寄せて語られる。

一二一番と一二三番の「新築祝の歌」は、棟上げの時の唱えごとである。この唱えごとは、各地のものと比較して見る必要がある。

(六)

話者と伝承

これまで分類別に、この民話集の本文に収められた話を見て来たが、本文にならなかつた話の中にも、喜名の民話を知る上で見て置かなければならない話もあるので、是非話型別梗概一覽表を見て置いていただきたい。特に「喜名と風水見」や「ナーシビ歌の説明」などは、価値ある話でありさらに類話が多かつた為に本文にはならなかつた話の中にも「尚巴志の力持ち」や、宇江城ヤスさんの「久良波首里殿内」松田栄清さんの「多幸山フェーレ」、比嘉増次郎さん、小橋川ウトさんの多幸山フェーレに関する歌などは、いずれも、喜名ならではの話や歌である。

ここには喜名の話者、男一四名、女一五名計二九名から、男一〇名、女一二名の計二三名の方の話が、読谷ゆうがおの会の人々の手によつて翻字され本文として収められている。そのうち最高齢者は、明治一三年生まれの渡嘉敷兼求さんで、最も若い方は大正三年生まれの吉田ツルさんである。すなわちここには、百歳から六〇代までの話者の話が収められていることになる。

そして、その二九名の話者が一八二話を語つてゐるわけであるから、一人平均で約六話を伝えていたことになる。もつとも、これは、

限られた調査期間の限られた時間の中で聴取した話の数なので、おそらくは、それぞれの話者は、もっと多くの話を伝えていると思われる。いずれにしても、豊富な伝承と言わねばならない。これは、一方ではすぐれた記憶力を持った渡嘉敷翁の様な高齢者の存在と、他方では、大正生まれながらなりの数を伝承している話者に喜名の民話が支えられているからであろう。

喜名の民話は、幾つかの特色を持つている。第一に、喜名の成立や歴史とも関係するのか「多幸山フェーレ」に代表される交通に關する話が多いことである。第二に、首里、那覇、さらには周辺地域の話が多く入つてゐることである。第三に、わが字、わが一門を語る話が多く、他地域で昔話として語られているものも、渡嘉敷ペークに代表されるよう伝説として語られ、あるいは「もの言つ牛」のよう伝説的な語られ方をする点である。そうしたこともあってか、他字に比べると昔話よりも伝説が多く伝えられており、それらの中には、尚巴志、坊主御主、翁長真鶴のよう、字喜名とのかかわりで伝承されている話が多いことである。

話数の多い話者をあげると

松田ウト 二七話 松田ミヨ 二〇話 松田栄清 一八話
松田ナエ 一六話 吉田新太郎 一三話 渡嘉敷兼求 一一話
比嘉正貞 一〇話 宇根良誘 一〇話

の八名の方をあげることが出来る。上位四名を松田姓が独占しているが、この四名の方々に共通している点は、いずれも動物昔話、本格昔話、笑話、伝説とほとんどの分類項目についても片寄りなく話を伝えており、さらに喜名独自の伝承はもちろんのこと、村内他字の話、さらに近い市町村などで主として伝えられている話も伝承している点である。

それに対し、松田姓以外の他の四名の男性の話者は、それぞれ

かなり個性的な話型の伝承者である。その中でも、吉田新太郎翁は「もの言う牛」が代表的な話であるが、その他はいずれも伝説であり、しかも本格昔話の「もの言う牛」も先に検討した通りかなり伝説的な話となっていた。

渡嘉敷兼求翁の場合もそうである。表面的には本格昔話の蛇晉入や、猿と女の話を伝えているので、本格昔話の伝承者と言えないこともないが、渡嘉敷翁の蛇晉入は、すでに検討したように沖縄本島には珍しい三輪山神話に最も近いタイプで、しかも話者は、この話を読谷での話として語つており、「ショウジョウにさらわれた女」の方も、始祖伝承的な性格を持つものであった。特に渡嘉敷翁の場合は、その伝承の中心が、わが一門を語る「渡嘉敷ペーク」の話や、「幸地親方」の話であった。

比嘉正貞翁の場合は、字喜名の成り立ちや、坊主御主、多幸山、久良波首里殿内のいわば喜名そのものに関する話と、自分がかつて住んだ浦添、那覇の話に限定されている。

最も話を限定して語ったのは宇根良誘翁であつた。翁の語る話は、いずれも人生儀礼や年中行事に関する由来譚だけであり、それ以外は、一話として語らなかつたのである。

喜名の民話の広がりは、主として松田姓の方々によつてもたらされているが、喜名の民話集の強烈な独自性は、あとの四名の男性の話者に負つところが多い。そしてこれらの人々に共通しているのは、伝説を真実の話として伝承しようとする意識である。

ここに、字と一門、さらには周辺地域の伝承が見事に重なり合つた、すばらしい民話集が読谷村立歴史民俗資料館、読谷ゆうがおの会、読谷村老人会、読谷村教育委員会、沖縄国際大学口承文芸研究会、沖縄民話の会の多くの人々の協力によって誕生したことを祝福したい。

喜名の民俗素描

名嘉真宜勝

概況

喜名部落は、読谷村における古層の村の一つである。位置は村の東端にあって、国道五八号線が南北に走り沖縄本島南部と北部を結ぶ要衝の地にある。そういう要衝の地にあつた関係上、古くから番所が置かれ、戦前まで村役場所在地として村の中心的存在であった。喜名部落は、一六二一年編集された『おもろさうし』には、「きなわ」と表記され、その後の『琉球国高究帳』（一六七三年以前）には「喜那」と見え、『琉球国由来記』（一七一三年）や『中山伝信録』（一七一九年）には、現在使用している「喜名」の漢字が當たるようになつた。

現在、人口二、〇三三人、戸数四二二戸である（昭和五五年二月二九日現在）。人口の推移は、明治十三年（一八八〇年）に七五九人、戸数一四二戸で、明治二九年には人口一一八〇人、戸数二五〇戸、明治三六年には人口一二三三一人、戸数二六七戸と漸次発展して來たが、近年では隣接の嘉手納町からの移住者が目立つて増えて來た。明治期の人口は楚辺、座喜味、波平につき四位にあつたが、現在では楚辺、波平につき三位にある。

部落の發祥については、現在の喜名部落は次の三村から出來あがつたといふ。元喜名、北平、シムチ村の三ヶ村で、元喜名は東方の米軍基地内で、喜名部落の發祥地だと言われている。現在そこには拝所があり村で拝んでいる。北平村は、戦前の部落の東側丘陵で、その近くの谷間にニシングダガードと称する古井戸が残つてゐる。シムチ村は国道五八号線沿の南側で、フカグ原と称する一帯である。シ

ムチ村の宗家はウフヤ（大屋）と称する所だと言われてゐる。「喜名」の語源については、焼畑農耕に由来する言葉から來したものと言われてゐる。

史蹟としては、喜名焼窯跡（十七世紀頃の窯）、喜名観音堂、土帝君、喜名番所等がある。喜名焼窯は三〇〇年前の古窯で、現在でもその窯の伝世品として味噌甕や德利等が多数見つけられる。喜名觀音堂は、部落の北側で一八四年旧暦九月十八日、金武村の金武觀音堂から勧請されたと言われ現在でも旧暦九月十八日と十九日に村民によつて、健康をもたらす神として拝まれてゐる。土帝君は、觀音堂の西側の小祠の中に豊作をもたらす神として祀られてゐる。

喜名番所は、国道五八号線の拡張工事によつて兩断されてしまつた。三〇〇年前に設けられ、往時は南北路の宿駅としても貴重な存在であつた。

生業

戦前は、もっぱら畑作と水田耕作を中心とする農業形態であつたが、戦後は急速に農家戸数が減少し始めた。昭和三九年の統計資料で二三〇戸だったものが、昭和四六年に一四〇戸、昭和五〇年に九一戸と激減した。限られた耕地と、収入の乏しい農業に見切りをつけて、軍作業や他の職業に切りかえたためである。現在、部落内の商業としては、雜貨店八軒、衣料品店一軒、鮮魚・鮮肉店四軒、食堂三軒、民宿一軒、理容・美容店二軒、鐵工所一軒等がある。

戦前の農業の主体をなすものは、換金作物としてのキビ作と、主食としての甘諸作、それに稻作とがあつた。キビ作は、ユンタソジ

ヤー（読谷山種）から、茎の太いタイケース（通称二五と称す。農林二七二五号のこと）に昭和八年頃切り替えられ一般に普及するようになつた。当初は、民間のサーターヤー（製糖所）では茎が太くて処理が困難であつたため敬遠されていたが、比嘉良盛氏の熱心な指導助言によつて普及するよくなつた。

サーターヤー（製糖所）は、喜名に十二軒あつた。そのうち十軒が組で経営し、あと二軒は個人経営であつた。巻頭の「民俗地図」にその所在を記入しておいたが、いま名称だけを挙げると、一番組、二番組、三番組、四番組、五番組、大通組、西原組、東原組、フカブン組（クシ組とも称す）、ケーラ組、池城（個人経営）、ムンナン（個人経営）。サーターヤーを個人経営している池城（現在の比嘉文雄家）は、当時村一番のエーキンチユ（富家）として知られてゐた。その他、喜名部落におけるエーキンチユは、西原ヤードウイのムンナン家、ウシヤマチ、メートウクチナ一家等があつた。サータ組は隣近所で構成されていた。その事例として、四番組の構成員をあげてみると、嘉数、比嘉、吉山小、ヤマ吉山、当間、当間小栗国、安里小、山川小、長浜小、アガリ堂小の十一軒であつた。一番大きい所はフカブン（クシ）組で、反対に一番小さいところはケーラ組で、五・六軒で構成されていた。それらのサーター組は、運営に当つては、さらに三組に分けて、製糖期間中、二日に一日はユクイバン（休み番）が来るようにしていた。一日目はウージカチ（キビ倒し）、二日目はサーターシー（製糖）、三日目はユクイマール（休み日）という仕組になつていて、順番はクミの中でキビの多い家から先にした。そのクミでキビ倒しから製糖まで結でした。話者の国吉清吉氏の実家は、特農家であつたので、馬二頭に牛二頭もいたので、一回の製糖で七・八丁（一丁は一三〇斤）もした。普通は四・五丁しか出来なかつた。製糖は品度やその他のつごうで、

なるだけ早く終わらせなく、もし他人がなにかのつごうで出来ない場合はこの番をもつてやつた。これをワタクシジーと称して、ヤニンジュ（家族）で製糖をした。また、キビの多い家と少ない家があつて、多い家はワリムドウシ（割戻し）をした。しかし、これは金錢でいくらと精算したのではなく、ンムンジ（気持）であげた。たいていは山羊などをつぶしてもてなすことが多かつた。

キビから製糖した黒砂糖は、樽詰めにして全部売つた。その金は貯蓄に回し、土地の購入や家の修理代に當てた。特に、戰前の家は茅葺であったので、五年に一回ぐらい茅の葺き替え等の修理が必要であつた。普段の生活費は豚や牛、山羊等の家畜を売つてやつた。

昭和四年頃、キビ作が盛んになると、これまでのツクイグエー（作肥。カジグエとも称し、厩肥や堆肥のこと）やミジグエー（水肥）の時代から、金肥（硫酸アンモニア、配合肥料）が使われ始めた。

戰前は水田耕作も盛んであった。現在は全く行なわれていない。水田はほとんどヤマダ（山田）で、谷底に設けられていた。ティンシーダ（天水田）もわずかにあつた。イジュン（湧泉）のある田をイジュンダと称し、良田であつた。ウミタとケーラと称する所に胸までつかる深田があり、ユビダと呼ばれていた。一筆の面積が約三〇〇坪ぐらいで、一万坪ぐらいあつた。ユビダは、そう良田でなく稻穂が水につかたりして収穫が十分でなかつた。田植えなどは木の枝を入れて、それを踏んでやつた。

昭和四年頃に台中六五号が入つて來た。在来種ヒジメーより収穫がずつと良くなつた。アカグミ（赤米）は栽培されてなかつた。ムチグミ（粳米）は、田の多い所がわずかに作つていて、ナーシルダ（苗代田）は、ヒジメーの時代はフカグ（地名）が良かつた。台中六五号になつてからはどこでもよく、本田のあるところにナーシルダ（苗代）を作つた。ヒジメーの時代までは、タントウイ（種取り）

の行事もあつたが、台中六五号になるとそういう信仰も薄らいで來た。タントウイは立冬のイリヒにした。種蒔きは朝早く戸主がやつた。種蒔きに行く途中、女に出会いとチガリムン（穢れ）と言つて戻つて來た。種を蒔いた人は、その日は仕事をしないでくつろいだ。立冬の十月に種蒔きをし、四ヶ月間苗床にあり、二月下旬の雨水の節に、ウシグーと称してフナタ（本田）に田植えをした。田植えの際に、イジユン（湧泉）に食事や酒等を供えユガフー（豊作）を祈願した。田植えを、イーマール（結）でやつた。田植えの食事は盛大であった。特に、三時ユクイ（休憩）に出されるターアイザカナと称される御馳走は見事なもので、ターハラガーと称される豚肉の大切り（約一五〇グラム）を筆頭に、トーフ、ターンム（田芋）、ナンムジテンブラ、フンカブ、デークニイリチャ一（大根いため）、等があつた。

稻の刈り入れは、六月下旬のコアツ（小暑）の節にヤーニンジュ（家族）でした。脱穀は、クーダと称する竹を二本結えたものでやつた。カナバ（千歯）は昭和初期頃に、田を多く持つてゐるところが使用していた。昭和八年頃から脱穀期が使用された。話者の国吉清吉氏の時代はなかつたが、「アブシ（畦）に干したウチクブシ（落穂）は全部取るとするな、クーシムン（貧乏人）が拾うから」という話があつた。モミは俵に詰めて、ナカメー（一番座）に積んで置いた。山と積まれたモミ俵や、サーダー樽の間に寝た。そういう状態がその家の誇りとするところであつた。

衣・食・住

食事は一日三回が一般的であつた。五時頃に起きて、父は牛馬の草刈りに、母はンムニヤー（芋焼き）をした。そして、午前七時頃にヒティミティムン（朝食）をとつた。主食はンム（芋）をふかしたもので、それにオーフアヌシル（野菜汁）であつた。次に午前十

一時から十二時の間にアサバン（昼食）をとつた。やはり主食は芋で、それにトーフヌユー（湯豆腐）やトーフンブサー（豆腐煮込み）等であつた。午後八九時頃にユーバン（夕食）をとつた。ゴハンは、シチビ（節日）の時しか炊かず、日常は米を口にすることはまれで、夕食などに、二、三合ぐらい混ぜて、カンダバージューシー（カズラ入り雑炊）にすることぐらいだつた。

戦前の住居は、茅葺が主で瓦葺は從であつたが、戦後になつて漸次赤瓦、セメント瓦葺が増え、十五年前に茅葺の家が消え、それと並行してスラブヤー、いわゆる鉄筋コンクリートの家が増加し、今日では二階建て、百坪ほどの豪壮な家が目立ち始め、やがて瓦屋根の消える日も真近かな感じがする。

衣服については、戦前まで自給品の芭蕉衣が主であつたが、明治になつて本土からの輸入品である木綿衣が出回るよくなつた。喜名では木綿花の栽培については明らかでない。綿地や綿糸を買つて、機で布を織り、それで衣服を作つていた。芭蕉衣は夏着、木綿衣は冬着として用いられた。カイコも少しは飼われ、絹織物も晴着として作られていた。仕事着としてのクルジナ一（芭蕉の外皮で織つた布を、藍染めしたもの）は、戦後急に影を潜めた。機は、大正初期にこれまでのジーバタ（地機）からタカバタ（高機）へと切り替えられた。戦後は、喜名では布は織られなくなつた。すべて移入品に依存している。

門中・屋号・姓

戦前、分家者が屋号をつける時は、部落にヤースナーザキ（家名酒）と称して酒一升を出した。現在でも屋号はある程度使用されてゐる。喜名における主な門中としては、喜名門中、玉城門中、アガリ一門中、高良門中、仲門門中、大屋門中、等である。その他に、門中としては野殿内門中、大里門中等がある。

姓についてみると、一番多いのが比嘉姓で三七軒ある。次に松田姓（三二軒）、玉城姓（十八軒）、翁長姓（十六軒）、波平姓（十二軒）、吉田姓（十一軒）、照屋姓（十軒）、喜名姓（九軒）、知念姓（九軒）、宮平姓（八軒）、神谷姓（八軒）、金城姓（八軒）高良姓（八軒）、宇栄原姓（八軒）、屋良姓（七軒）、阿嘉姓（七軒）、平良姓（七軒）、石嶺姓（六軒）、花城姓（六軒）、安里姓（六軒）、当山姓（六軒）、宇根姓（五軒）、仲村姓（五軒）、仲吉姓（五軒）、新里姓（五軒）、謝花姓（五軒）、長浜姓（五軒）、山城姓（五軒）、村山姓（五軒）、我如古姓（四軒）、山内姓（四軒）、岸本姓（四軒）、国吉姓（三軒）、吉山姓（三軒）、栗国姓（三軒）、新城姓（三軒）、宮里姓（三軒）、島袋姓（三軒）、糸数姓（三軒）、大城姓（三軒）、山川姓（三軒）、小橋川姓（三軒）、新城姓（三軒）、伊波姓（二軒）、渡嘉敷姓（二軒）、喜友名姓（二軒）、平安姓（二軒）、當真姓（二軒）、平安山姓（二軒）、高山姓（二軒）、屋宜姓（二軒）、山田姓（二軒）、知花姓（二軒）、福地姓（二軒）。以下一軒のみの姓が六〇軒もある。

門中は祖先祭祀を通して機能が發揮される。三月の清明祭に古いアジバカ等を拌む。その時、各戸からウサカティと称して、頭割りに供物などの費用が徴収される。墓参りには、各戸の戸主などが参加する。また、五月と六月のウマチーに本家に集まつて、神拌みをする門中もある。その時は、遠くにいる門中の人々も集まる。玉城門中では、五年に一回、アガリウマーリ（東御廻り）と称して、遠く本島南部の拝所を巡礼する風がある。

婚姻

戦前までの婚姻は、親同志が決めた強制婚であつた。それで、中にはお互いの顔も知らないままに結婚式を迎える者もいた。また、他部落から嫁を迎える時はウマディマと称して、その部落の青年に

科料を支払つた。

結婚式当日、ムクイリ（婿入り）と称する儀式があつて、午後の二時頃、花嫁が仲人に伴われて花嫁の家に行く。すると、花嫁の家に入ろうとすると、屈強な若者五、六名が待ち構えていて花嫁を無理矢理に木の馬に跨がらせて、ドウドウとはやし立てながら部落中を引きずり回す。その間、顔にナベズミを塗りたくれたり、さんざんいじめられる。この婿いじめの途中に、観音堂を参拝する。このドウドウウマと称する儀式が済むと、次は花嫁宅の火の神を拌む。その時も、青葉の松を燃やしていくぶす。しかも線香は濡れたものを出し、けむたい中で火をつけるのに苦労する。火の神拌みが済むと、両親との盃を交わす。最後に花嫁に御馳走が出される。すい物に、蛙や唐がらしを入れたり、箸もススキの細い茎で、ぶよぶよのを出したいたずらをする。その光景を見ようとヤジ馬が家の周囲いっぱいに群がる。

夜になつて嫁入りが行なわれる。これをユミジョーイ（嫁連れ）と称して、女人の人達が花嫁を迎えに行く。チヨウチン持ちが二人ついて行く。花嫁の方からも二人のチヨウチン持ちがつき、合計四人のチヨウチン持ちを先頭になつて嫁入りが行なわれる。婚宅では、ミサレーパーパーと称される老女たちが花嫁を迎えた。

葬制・墓制

喜名部落における葬制は、昭和三四年に村営の火葬場が設置され、從来の洗骨葬を伴う風葬から火葬へと転じられた。死の呼称としては、シジャン、ミーウティ（目を閉じた）、マーチヤン、ユーシリタン（世を脱皮した。高齢者が死んだ時に用いる）ヒンギタン（逃げた。幼児が死んだ時に用いる）等がある。臨終の席には身内の者が集まるが、妊婦はできるだけ同席しない。もしどうしても参加する時は、皆より一步後にさがつて座る。

酒で死んだり、海で溺れ死んだ場合はマブイエバワリ（魂呼はわり）をする。喪にあることをクルフジョウ（黒不淨）と称している。喪家では、仏壇や画、神棚には白い紙を張る。女性は鎮銘製のジーファー（かんざし）を取り、ダキジーファー（竹製のカンザシ）をした。これをイミウキ（忌受け）と称し、四十九日までそうした。また、一年忌（ユヌイと称す）までは、祝事にも参加しない。死穢は、家畜や作物まで及び、ウシヌチナゲーイ（牛の綱替え）と称し、牛などを売りかえる。種物もチガリムンゲーイ（穢物替え）と称して、蒔いても芽が出ないので他家のものと交換する。一般的の家で、葬列の通る道の近くの家々では門に木灰を蒔いたり、庭籠を横たえてヤナムン（惡靈）が侵入して来ないようにムンヌキムン（魔除け）をした。

死者は、急いでウビー（湯灌）をさせる。使用する水はワタンジヤガー（ウブガーとも称す）から汲んでくる。湯はサカミジ（逆水）と称して冷水に湯を注いで作る。娘や孫など身近な女性が浴びせる。汚れた体を洗い清め、生まれたままの清らかな体に戻り、ウヤフジ（祖先）を拌みに行くという。

湯灌が済むと盛装させる。着物は五枚とか七枚の奇数にする。仏壇のある二番座に、イリマツクワー（西枕）にして寝かせる。枕元にはカタチヌメー（盛った御飯、箸を十字型に突きさす）と、ダンゴ七個づつの二皿、豚肉七枚の二皿、果物類、重箱二箱（豚肉、揚げ豆腐、こんぶ、ごぼう、コンニャク、テンプラ、カマボコ、餅等七品か九品）を供える。

入棺の時、死者にジングダブル（頭陀袋）をもたせる。それには、タバコ（七個の対）を入れる。死装束の襟に針（七本の対）を刺す。その他、一合德利に酒を入れる場合もある。死者は、クワンチエーバック（棺箱）に納められ、ガン（龕）に乗せられて墓地へ運ばれる。

墓に納める時「誰れ誰れが今日、この世を立つて行きますので、ウヤフジ（祖先）は驚きにならないで、よろしく迎えて下さい」と拌む。葬式の済んだ夕方、ボーフイと称して魔物払いの儀式が行なわれる。龕を担いだ人たちが海からクリジャリ（サンゴ石）を拾つて、家の隅みずみに投げつける。また一人は棒をふります。その時に「メエーヒヤー、ハナヒヤー、ウチクルチトウラサ」と唱える。その意味は「そちらにいる魔物よ、棒で打ち殺してやるぞ」ということである。

墓参りは、翌日から七日まで毎朝続けて行く。その後は七日ごと四十九日まで通う。四十九日に仏前に飾つてあつたシルイヘー（白位牌）と、墓口の上に小屋掛けをしたカイヤー（仮屋）と称するものを取り壊わして焼き払う。シンジュウクニチ（四十九日）の焼香が済んだ夜、死者と家族のマブイワカシ（魂分し）を行なう。死後三年目頃になるとシンクチ（洗骨）をする。門中墓の場合、洗骨をする。墓庭で、遺骨に日光を当てないように龕をさしてやる。親族の婦女子が骨拾いをし、ボロ切れで骨を拭き清める。ジーシガーミ（厨子葬）に足の骨から順々に入れ、一番上に頭蓋骨を置く。厨子葬は再び墓堂の奥の段の上に安置する。年忌供養は、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、三十五年忌、三十三年忌の六回行なう。七歳以下の幼児が死んだ場合は、葬儀は簡略にする。龕に乗せず、叔父などが抱いて野辺送りをする。墓で小さなクワンチエーベク（棺箱）を作つて、アブシヌカダハラ（畦の側）に仮墓を作つて一時葬つておく。後に本墓が開く時に洗骨して移す。クンチャヤー（ライ病患者）が死んだ場合も龕に乗せない。サギガタミ（吊し担ぎ）と称して、棺箱に綱を通して担いで行く。本墓には入れず、仮墓を作つて葬る。溺死して、遺体が上がらない場合、浜からサンゴ

石四十九個を拾つて壺に納める。三月三日に海へ行き、タマシーマネキ（魂招き）をする。死者が年内に続いて出た場合は「タケーンアセー、ミケーンアン」（二度とあることは三度ある）と称して、人形が、または鶴を殺して身代わりとして小箱に入れて野辺送りの時いつしょに持つて行く。「ミケーンタレートーグトウ、ナマカラーアークトウタビミソーリ」（三度に達しましたので、今後は果報事があるように）と祈願する。

喜名部落では、門中墓や兄弟墓もまだ残つてはいるが、漸次家族墓へと移行しつつある。現在使用中の墓は、亀甲墓、破風墓、堀り込み墓、家型墓等がある。戦後になつて、墓は現部落内の西方にも建設されるようになつた。戦前までの墓は、東原に七基、西平一基後間二基、松川六基、前原十基、中地四二基の合計六八基であつた。玉城門中は、カミガユ一（神代時代）の墓として、クシマと仲地の二ヶ所にあり、現在使用している墓は、東玉城チヨデーの墓と、後玉城系統の墓の二基がある。戦後は、個人の住宅が墓より豪華になつたが、戦前までは墓の方に相当な費用をかけていた。

マカヤカヤブチヤ カイヤドウル ャユル

イシヌタマウドゥン ワヤルサダミ

真茅葺家は、仮宿であるよ

石造の玉陵（墓）こそ私の宿としてふさわしい。

右の歌は、当時の人々の墓に対する信仰がよく現われている。亀甲墓が盛んに造られるようになつたのは明治末期からであるが、その頃は莫大な費用と半年余の歳月をかけてつくられた。一方、民家の方は瓦葺は数えるくらいしかなく、ほとんど茅葺の家であった。

信仰

一、拝所

部落の東北、福地原にグシクヌチジと称する所がある。別にそこ

は拝まれていない。部落の北方にウタキ（御嶽）がある。二ヶ所の拝所があり、石の祠がある。東側は男子禁制の拝所。戦前は大きな松が生えていた。ユーフルダキと称する拝所があり、ユーダチヒヌニムイと称する拝所がある。旧事務所の道隣りに、女子禁制の拝所グーフヌニーがある。そこは旧正月のハチウグワンに男子によつて拝まれている。カミアサギは、ヌンドンチの東後方に瓦葺の小祠があつた。ずっと以前は祠などではなく、単なる廻いであつた。戦後は、新部落内にセメントで小祠を作り、そこに火の神を祀つてある。芋の恩人、野国総監を祀つた、ノムウスメーの石碑が戦前まではメーヌマチユにあつた。戦後は中原二六〇番地に移してあり、清明祭に拝んでいる。喜名観音堂の中に觀音像が祀られ、旧暦九月十八日には村長を中心にして役場吏員で村民の健康祈願をし、翌十九日には喜名部落民が家族の健康祈願をしている。また、すぐ隣りにはトウティクン（土帝君）があり、同じ日に五穀豊穣の祈願も行なわれている。

二、神人

現在では神人によるウマチー等の祭祀行事は行なわれてなく、公民館の職員を中心にして行なわれている。旧暦六月のカーウガミ（現在では井戸の清掃）の時は、ムトウヤー（本家）系の戸主が各自の所属する神井戸を拝んでいる。

戦前まで、読谷村には五名のノロが配置されていたが、喜名にもノロがいた。屋号ヌンドンチ（比嘉トミ氏）から代々喜名ノロが出た。現在比嘉トミ氏がノロ職に就くべきであるが、前述の通り神行事には参加していない。根人は、喜名の根所であるアガリ一家（比嘉重吉）から出た。根神は、ウフヤ（絶家）から出た。また、イチムン（一門）には、ウミキ一、ウミナイと称する神人が出

て、一門の祭祀を司つた。玉城イチムンのウミキーは島袋フミ氏で、ウミナイは比嘉カツ氏である。

喜名には專業としてのユタは存在しない。民間巫者としての、ウグワソーやサンリンソーがいる。ウグワソーは女性に多く三人程いる。サンリンソーは一人いて、男性である。時々、部落の人々に頼まれて御願などをあげる。

三、ヒーゲーシ（火返し）の御願

部落内に火事があると、ヒーゲーシ（火返し）の祈願を行なう。ヒーゲーシヤーと称する場所（渡嘉敷兼求氏の東側の坂）があり、そこに小屋を作つて火をつけて燃やし、「ヒードーイ、ヒードーイ」（火事だよ、火事だよ）と言つて叫び、皆んなでバケツに水を汲んで消火にあたる。小屋の中に、家戸から、ンス（味噌）とマース（塩）を木葉に包んで納める。現在でも、一般の家を新築した時、一番最初に持ち運ぶのは味噌と塩である。つい最近ヒーゲーシの御願を行なつたことがある。

年中行事

一月一日 ソーグワチ（正月） 早朝、ウマリガーからワカミシ（若水）を迎える。生芋三個を井戸の神に供える。若水でお茶湯を作つて仮壇に供え、残り水で顔を洗うと若がえるという。ワカマーチ（若松＝門松）も、若水を迎えた後、山から取つて来る。門前にトーナ（菜の花）を松に結えて飾る。仮壇にも松を一对飾る。その他仮壇には、ミハナ（花米）と、タントウクブ（炭と昆布）、黄、赤、色の三色の紙を飾る。朝、家族揃つてアサウグワン（朝御願）と称して今年一年の健康祈願をする。お茶包み等を持つて、ショーガチグリーマーイ（年始回り）をする。女が朝早く他家を訪れると、カリークジリムン（縁起悪

い）として嫌われる。

三日

ハチウグワン（初御願） ハチバル（初原）とか、ハチウクシ（初起し）とも称し、豊作を願う。つき臼に米二合程入れて「サングク、マングク」（三石、万石）と唱えてアン（杵）でつく。男子は、グーフヌニーと称する拝所に集まつて、部落の繁栄及び健康、豊作等を祈願する。

七日

ナンカヌシーケイ（七日の節句） この日に正月の飾りものを片付ける。仮壇に夕食を供える。正月に殺した豚の供養祭であるといふ。

十二日

この年の干支に当る日に、トウシビースージ（年日祝い）がある。十三歳、二十五歳、三七歳、四九歳、六一歳、七三歳、八五歳の年日に当つた人々の祝いをする。

十六日

ジュルクニチ（十六日祭） 戦前まではフルサ（古仏）も全部墓参りをした。現在では、ミーサ（新仏、死んで一年以内の仏）の家だけが墓参りをする。

二〇日

ハチカショーガチ（二〇日正月） 二〇日まで正月で、この日は御馳走のあるだけ作り仮壇に供える。

二月吉日

ヒガン（彼岸） 二月と八月に彼岸祭りをする。入り日に供え、ウチカビ（打紙＝紙錢）をあぶる。墓参りはしない。

十五日

ウマチー ウマチーは門中によつて異なり、玉城イチムンは二月、三月、五月、六月、八月の五回ある。喜名イチムンは五月と六月の二回だけである。各門中の本家に集まり、健康祈願をする。帰る時に、供えたミハナ（御花米）を少しづつもらつて、家族の者にミハナを三粒ぐ

らいカミラスン（頭上に乗せる）。その日の酒や御馳走の経費はチブルワイ（頭割）にして出す。これをウサカ

ティと称する。

三月三日

ハマウリ（浜下り）単にサングワチチャーとも称す。女の節句で、浜遊びをする。昔は百姓と士族は差異があり、士族はウジユウ（御重）を子供一人一人に作つて与えたが、百姓はそういうことはなかつた。喜名部落は海を持たない部落の一つであるが、浜下りは楚辺と都屋の間の海、エーバンタと称する所に行つた。

吉日

シーミー（清明祭）清明の入り日にする。ムラウガミ（村拝み）と称して、区長と役員とでアザバカ（字墓）であるキニンドーの神墓を拝む。アガリ一門中は、神御清明の時は八ヶ所ぐらいの神墓を拝んでいる。①カミグシンジユ、②トングワ墓、③ヌンドンチの墓の東側にある墓、④カーサクの墓、⑤水釜にあるトウグチ・タケ一サ一墓、⑥山田グシクのグサマルの親の墓、⑦山田の久良波大主の墓等で、そして現在では從来ウマチ一や、九月のウビナディーに拝んでいたカータキ（神井戸と嶽）を神御清明の時についでに拝んでいる。山田には九ヶ所のカータキがある。サクガ一、ナカヌカ一、ウサチガ一、アトウヌカ一、カミアサギ等。

四月十五日アブシバレー（畦払い）この日は仕事を休んで隣りの

十六日楚辺部落のスピガニクで、ウマハラシー（馬走らせ）があり家族揃つて見学に行つた。その日は那霸の商人によつて、にわか玩具市が立ち、子供たちはそれを買うのが樂しみであった。十五日は、その年に不幸事のなかつた家庭の子供が行き、翌十六日は、不幸事のあつた家庭の

子供たちが行つた。金持ちは、スピガニクで自分の持ち

馬で、ヌイウマ（乗馬）をして楽しんだ。

五月五日

グングワチャ一 チュウビ一（強日）とも言う。この日は事故等が起つりやすい日で、皆用心をさだ。伝説に、昔、鬼に追われてショウブの茂みに隠れて助かつたといふ話があり、そのことからショウブの葉を頭や腹が痛まないようににかぶつたり、腹に巻いたりする。またその日はアマガシ（麦のせんさい）を作り、ショウブの箸で食べる。余興としてウシオーラセ一（闘牛）が行なわれた。

吉日

ミーマーミドーフ（新大豆の豆腐）収穫したじきの大豆で豆腐を作り、次男、三男の分家者はウフヤ一（本家）を持って行き、祖先（仏壇）に供え、大豆がどれたことを報告した。

六月十四日ウマチ一 門中が本家に集まる。

十五日ミーメー

収穫した米で御飯を炊き仏壇に供える。昭和初期まで綱引きがあつた。部落を二分して行なつた。真剣なあまりけんかざたまで起つた為、十五歳以下の子供たちで引くようになつていて。

二五日

カシチ一ウーユミ 粟、マージン、米などに赤豆を混ぜて赤飯を作る。また、米でウンサク（御酒）を作つた。その日カーサレー（井戸の清掃）が行なわれる。対象となつてゐる井戸は、ウブガ一、イリガ一、ミ一ガ一、ワングガ一、マツガ一、ボージガ一、ムラヤのカ一の七ヶ所である。現在でも、班ごとに割り当てて清掃を行なつてゐる。

戰前は、家族員の分だけ藁でサンを作つて部落に納め、部落では神井戸に供えて、部落の人口が増えることを祈

願した。

この日、隣部落の渡ヶ次では、渡ヶ次ガタノーでウマハラシ（馬競争）があり、喜名から見に行つた。

七月七日 タナバタ（七夕） 各家では墓掃除に行く。夜は仮壇にお茶湯などを供える。着物の虫干しをする。洗骨をする家も多い。

十三日

十三日にソーロー（祖靈）をンケー（迎え）する。門の両側にトゥブシ（松明）をともして祖靈を迎える。ウンケージューシ（迎え雑炊）を炊く。仮壇にはアダンなどの木の実を飾る。

十五日

盆・ウーライ（送り） 仮壇のある親元を拝む。夜になると、一ヶ月前から青年たちが練習し続けて来たエイサーがある。各戸をめぐり歩き酒などをもらう。現在では、主な通りだけをめぐり、公民館広場で盆踊り形式でやっている。戦前は十六日にやっていた。十三日に迎えた祖靈は、十五日の夜十時頃ウーライ（送り）をする。ムートウドウクル（元所＝根所）で太鼓を打つて合図をした。門前で送りをする。

十六日

ハタスガシ（旗清め） 午後二時頃から夕方にかけて、部落の旗頭を先頭に、組踊り「謹佐丸」に出てくる謹佐丸按司、阿麻和利、中山王などの役者が、ヨロイかぶとで盛装して、青年や有志の人々が鉢や太鼓をたたきながら部落中を回る行事である。戦前は、この日の晩には青年による組踊りが演じられた。

八月八日 トーカチスージ（八八歳の祝） たらいに米を盛り、それに青竹で作ったトーカチを三本つきさす。参加した男にはトーカチ、女にはクーダグー（糸をしごく道具）を

一本ずつ祝いのみやげに持たした。

吉日 カンカーン（シマクサラシとも称す） 日は吉日に選定してする。悪疫祓いの行事で、部落の主な出入口（五ヶ所ぐらい）に豚の骨を左繩に吊るした。子供たちに豚肉を一切ずつあげた。

十日

カシチー ウマチーとも称す。シバさしをする。

十五日

ジュークヤー（十五夜） フチヤギと称する餅（アズキをつける）を作り供える。部落では芝居などを催し豊年を祝う。

九月九日

チクザキ（菊酒） 酒に菊の葉を浮けて仮壇に供え、健康祈願をする。

十五日

ミジナリー（水撫で） 祖先の使用した井戸を拝む日で門中ごとに集まって行く。門中によつて拝む井戸は異なつてゐるが、ワタンジャーガーだけはどの門中も拝んでいる。たとえば、アガリ一門中は、①イリガー、②ワタンジャー、③フンシガー、④ヤグンドースカー、⑤ヌールウビー、⑥ナーカヌカー、⑦ニシンダガー、⑧クシマデイラ、⑨イシミクルクと、それに恩納村山田にある、①サクガー、②ナカヌカー、③ワサチガー、④アトウヌカー等を拝んでいる。

十八日

観音堂拝み 村長が中心になつて村役場職員が村の繁昌を祈願する。他字の人々もこの日に来て、家族の健康祈願をする。喜名部落の人々は、十九日に拝む人が多いが、九月中に祈願をする。

十月吉日

タントウイ（種取り祭） イリヒにする。夕食を仮壇に供え、豊作を祈願する。早朝戸主が種を蒔きに行く。

十一月吉日トゥンジージューシー（冬至雑炊） 冬至の日に雑炊

を作り仮壇に供える。

十一月八日ムーチー サンニン（月桃）の葉に包んだ餅を作る。焼香事の餅に対して、これをカーサムーチー（葉餅）と呼んでいる。子供たちの年令の数だけムーチーをひもで吊るす。その一番下には、チカラムーチー（力餅）と称して大きめな餅を入れ、健康を祈願する。また、今年生まれてはじめてムーチーを迎える家庭では、親戚の家々にカリュシを願つて七個ずつムーチーを配る。ムーチーの煮汁を、鬼の足を焼くと言つて庭にばらまく。また、ムーチーの殻で十字形を作り軒先に吊るしておく。

二四日 フトウチウグワン（解御願） ウチャナク（餅）を三つ重ねたものを作つてウミチムン（火の神）と、仮壇に供えて拝む。今年一年中のウサギムノ（供物）は今日で終わりであることを報告し、感謝する。

三〇日 トウシヌユールー（年の夜） 家族そろつて夕食をとる。豚肉のマルチャジシ（ロース）を食べる。ヒル（ニンニク）を飾る。夜外出する時はヒルを持つて出る。

あとがき

これまで述べた喜名の民俗素描は、筆者が読谷高等学校在職中（昭和四二—四七年）までの間に生徒等と調査研究したものが主で、そして最近、喜名の比嘉重吉氏、国吉清吉氏等からも若干の聞書をした。紙数の都合で詳細な報告は控えた。

◆ 参考文献

『沖縄文化史辞典』琉球政府文化財保護委員会監修 昭和四七年三月

『沖縄語辞典』国立国語研究所編 昭和五〇年三月再版

『琉球史辞典』中山盛茂編 昭和五〇年

『南島風土記』東恩納寛惇著 昭和四九年十月五版

『沖縄の伝説・日本の伝説』大城立裕、他 昭和五一年二月

『那覇市史・那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室編 昭和五四年一月

『沖縄県立博物館・館蔵品シリーズ2—絵画』昭和五四年三月

『沖縄の生物』沖縄県生物教育研究会 昭和五一年五月

『新選国語辞典』金田一京助、他編 小学館昭和三九年七月十七版

『読谷村村勢要覧』読谷村役場 一九七九年

『北谷村誌』真栄城兼良編 一九六一年九月

『勝山誌』勝山誌編纂委員会編 一九七八年十一月

『琉歌大観』島袋盛敏著 一九七八年七月二版

『組踊の世界』当真一郎著 昭和四七年十二月

『国・県指定 沖縄の文化財』川平朝申監修 一九七五年十月

『球陽・読み下し編』球陽研究会編 昭和四九年三月

『伊良皆の民話』読谷村立歴史民俗資料館編昭和五四年三月

- ◆ 嘉名の民話翻字者名簿（20名・五十音順）
- | 氏名 | 翻字数 |
|-------|-----------|
| 安里和子 | 2 3 6 6 |
| 大城 薫 | |
| 國吉洋子 | |
| 島袋守成 | |
| 島袋千代 | 3 5 12 10 |
| 島袋オツル | |
| 島袋フジエ | 2 4 5 11 |

- 読谷ゆうがおの会
 ○知花春美・○名嘉真宜勝
 安里和子・池原涼子・上地久美・上地直子・上原ヨシ・大城薰・
 神谷初子・國吉洋子・島袋喜美子・島袋守成・島袋千代・謝花妙子
 知花啓子・知花健一・知花俊治・知花千代子・津波古米子・當山勢
 津子・比嘉フジエ・又吉初子・町田愛子・山内源徳

読谷村立歴史民俗資料館

○知花春美・○名嘉真宜勝

注 ○印は読谷ゆうがおの会会員

玉城洋美	5	知花孝子	8
知念妙子	5	津波古米子	
山内源徳	1	山内智子	5
名嘉真宜勝			

4 13

◆ 嘉名民話調査者名簿（60名・五十音順）

沖縄国際大学口承文芸研究会

○遠藤庄治（顧問教授） 天久節子 ○阿波根初美・石垣みずえ・
 伊波百合子・稻嶺盛和・上原利津子・大宜味光一・大村久恵・大本

敬子・儀間真章・喜友名春子・金城清美・金城宏子・国場春美・崎
 浜盛善・崎浜博子・島尻博光・新里益子・棚原直子・玉寄春美・知

花利江子・手登根政子・当真久美子・渡ヶ次煎・渡ヶ次喜美子・富
 村朝夫・仲間博光・長嶺洋子・仲村渠清美・松元久幸・宮里光雄・

屋宜美佐子・山城悦子・○山入端孝子・湧川汎子

編集後記

『喜名の民話』の発行は、第一集『伊良皆の民話』に次ぐもので、その準備は昭和五四年四月から行ない、二ヶ年の歳月をかけた。この本が出来上がるまでには多くの人々の御協力があった。その経過は次の通りである。

一、民話資料採集は喜名民話調査として昭和五年十月十七日から昭和五五年一月十四日かけて行なわれ、一八七話（90分録音テープ十一本）の資料を採集した。これは沖縄国際大学口承文芸研究会、読谷ゆうがおの会、読谷村立歴史民俗資料館の三者合同調査、及びゆうがおの会の独自調査によるものである。本文中の「読谷村民話調査団」とは三者合同調査のことをいう。

二、翻字作業については、採集総話数一八七話のなかから一一三話を選定し、読谷ゆうがおの会員にひとりあたり四五話ずつ翻字を依頼した。

三、翻字原稿の点検作業は、資料館に於て行われ、非常勤職員の神谷初子、山内智子、館職員の名嘉真、知花の四名で担当した。会員から提出された原稿を再度テープを回し、方言で語られていることばひとつを点検していく。そして段落や対訳についても検討し、原稿の空白部分は直接話者のところへ出向いて埋めるようにした。それらが済むと所定の原稿用紙（24字×20行の上下二段組）に清書した。

四、編集割付作業は第一集を検討した結果、その反省として、前編に翻字資料、後編に解説編を持ってきた。また本文中にできるだけ写真を挿入して読み易いように心掛けた。

注釈はできるだけ地元の民俗で説明したが、その他のものは前述の参考文献による。これらの作業は名嘉真と知花が担当した。

五、校正作業は、三の四人が担当し五校正行なった。装丁は第一集と同じである。

現在、第三集『長浜の民話』刊行の為の翻字作業準備中である。索引や型式分類等は最終的に全字のを一冊にまとめて刊行する予定でいる。

最後に、「喜名の民話」の刊行にあたっては喜名の老人会、公民館長はじめ職員の方々の多大な御協力があつたことを銘記し、感謝申し上げます。

昭和五五年三月二二三日

館長 名嘉真 宜勝

喜名の民話 編集者 (歴史民俗資料館)

館 長 名嘉真 宜 勝
事務主事 知 花 春 美
非常勤 山 内 智 子
" 神 谷 初 子

喜名の民話 読谷村民話資料集 2

印刷年月日 昭和55年3月10日

発行年月日 昭和55年3月31日

編集・発行 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編

編集責任者 名嘉真 宜勝
〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-4
電話 098958-3141

印 刷 赤道印刷
〒904-22 沖縄県具志川市字喜屋武325
電話 098973-3383・6290
〒904-21 沖縄県沖縄市字松本 29
電話 098937-8442

製 本 悅田製本
電話 0988-89-1235(代)
